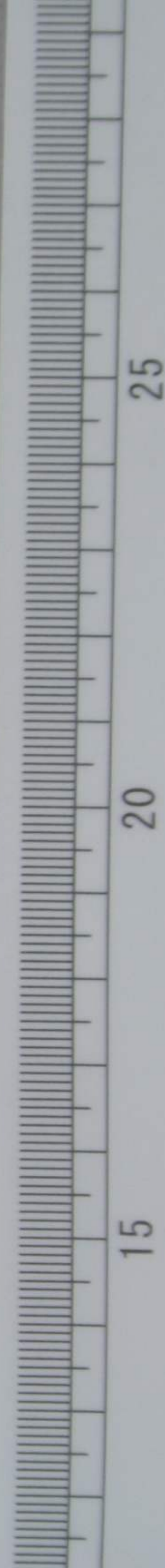


文韻文散
花月雪
著樹建田和六



15

20

25

雪月花

散 文 韻 文
雪 月 花

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく
其歌は優雅流滑、奇想天外より
來りて、句々風を生じ、言々花
月降らるものは、大和田先生の
筆と為す。此編收むるや、今
作數百篇、蓋し落寞振はざる今
日文學界中の旗鼓たるを、此
書を措きて、他に又た何か在る。



花月雪

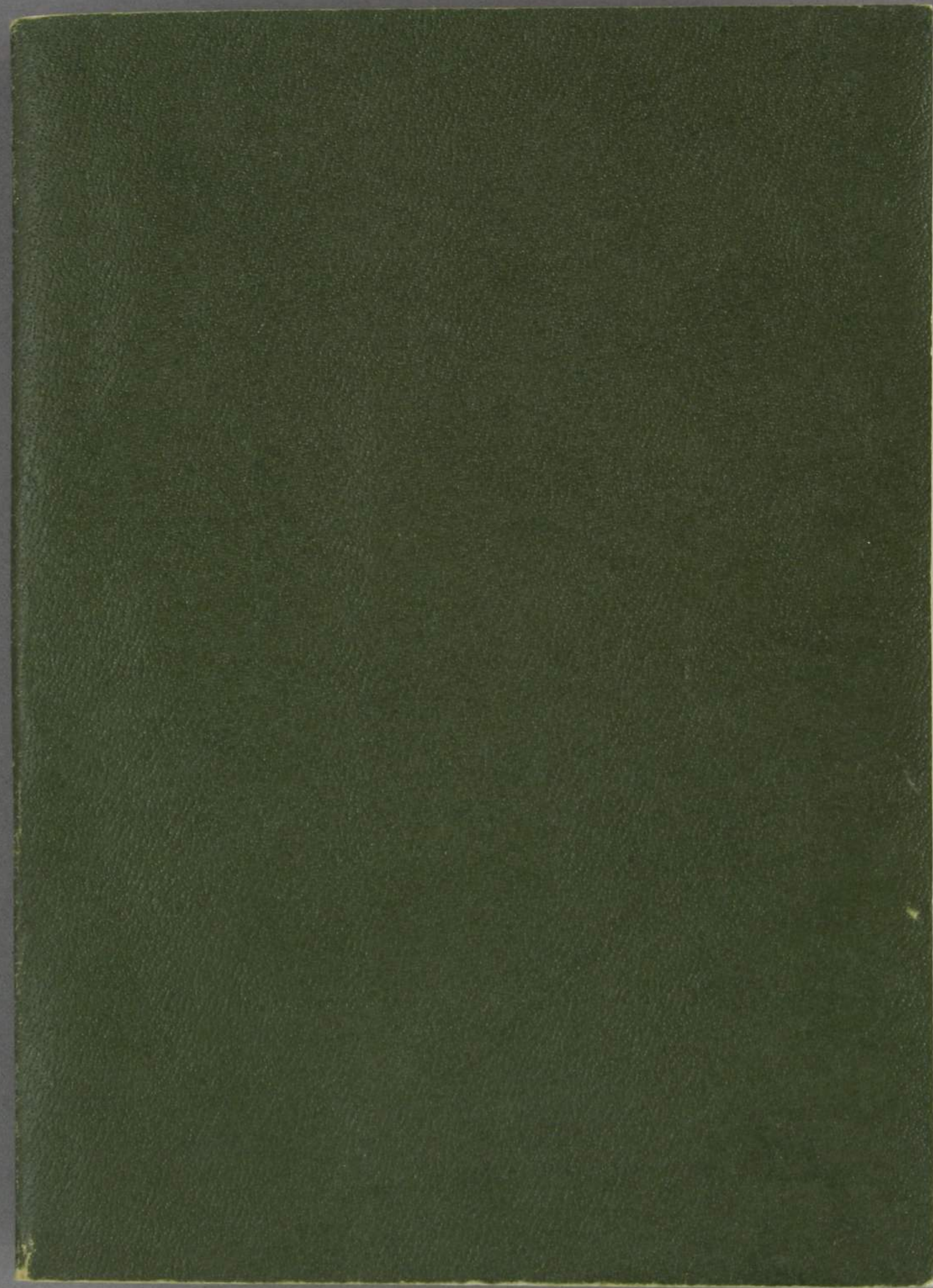
拾 版

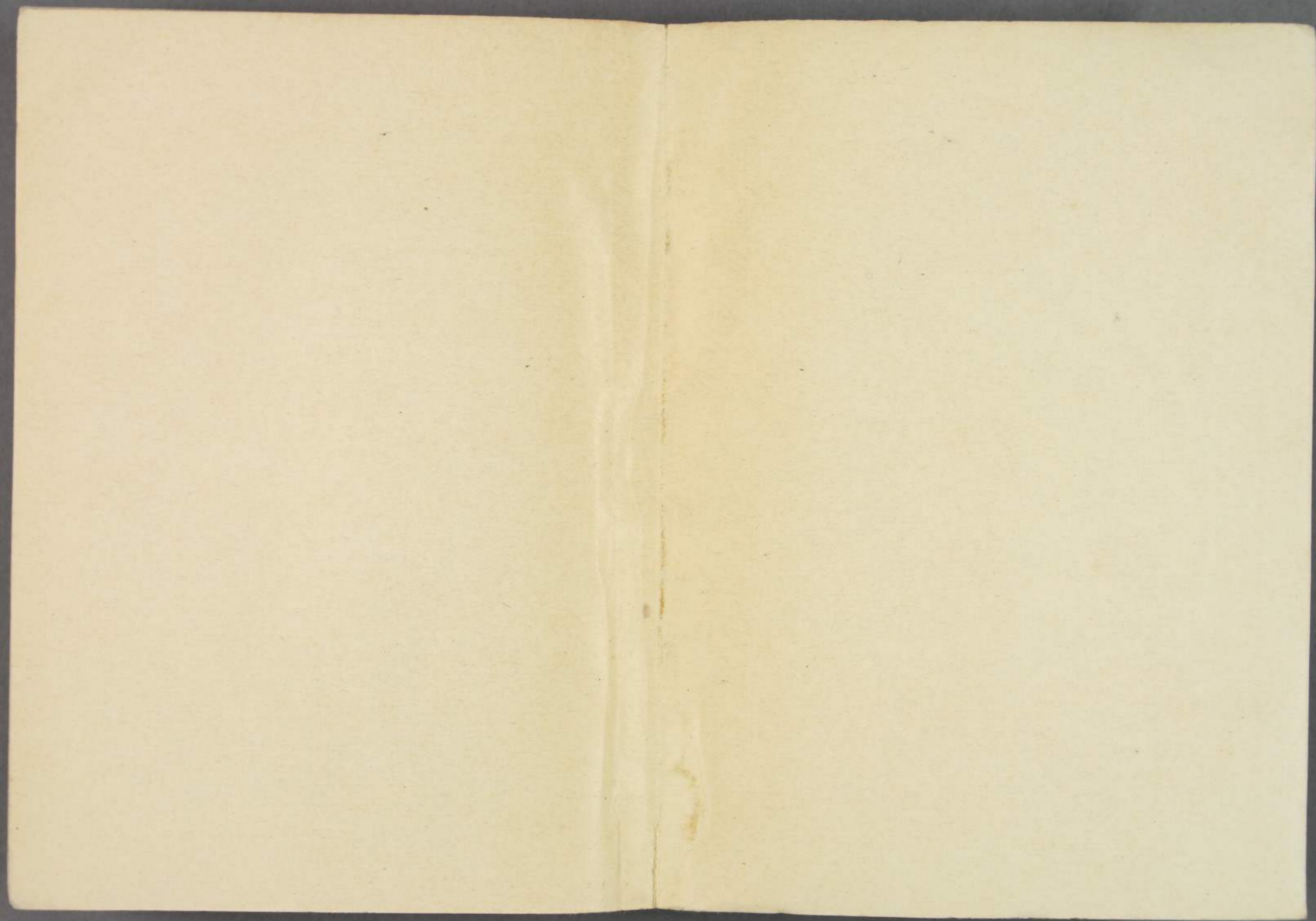
文韻文散
花月雪

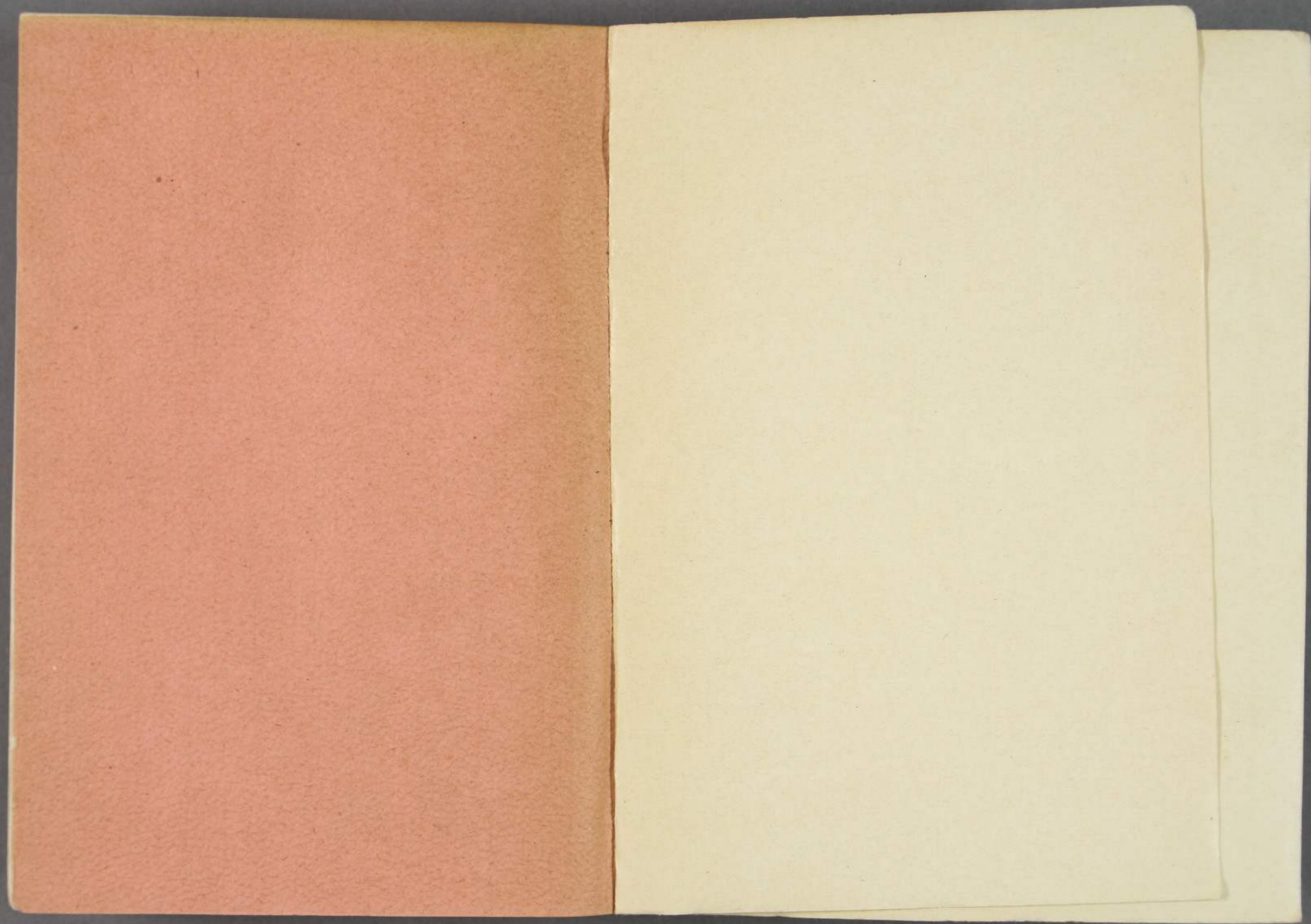
其文は清楚婉麗、趣味綯すべく、其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花枝降らもものは、大和田先生の筆と為す。此編收むるや、近作數百篇、蓋し落葉振はす、今日文學界中の旗鼓たるは、此書を措きて、他に又た何か在る。











自序

此卷はじめより心して撰び集めたるものにはあらずたゞ事にふれ折にふれて書きすさびたるまゝなり。近頃世に出だしてはとすゝむる人のあるにまかせて名をば雪月花とつけつ。月花を詠じ雪霜を記するものゝ多きによるのみ。ろの美雪月花の如しとのこゝろな

序

(一)

らんや、落葉が下の山清水。われから埋もれて
やまんもさすがにてなん。

明治三十年の夏

波の音きく葉山の里にて

たけき

歌文 雪月花 目次

ふるさと日記……………	一	都踊(歌)……………	一二五
故郷の山(歌)……………	八六	昔に似たり……………	一二六
親なくて(歌)……………	八八	中山道……………	一二六
忘れぬ影……………	八九	柳(歌)……………	一二七
朝なぎ(歌)……………	一〇〇	蝶の舞(歌)……………	一二八
父の恩(歌)……………	一〇二	脩善寺(歌)……………	一三〇
短歌十二首……………	一〇二	六阿彌陀……………	一三一
霞める富士……………	一〇五	廢物利用……………	一三二
初鶯(歌)……………	一一一	笛の音(歌)……………	一三三
春の月(歌)……………	一一二	悪戯……………	一三四
雉(歌)……………	一一三	閑窓……………	一三四
千里の春……………	一一四	オルガンの聲……………	一三五
海邊(歌)……………	一二四	春の月(歌)……………	一三五

柳(歌).....	一三六	短歌十一首.....	一五六
短歌十三首.....	一三七	蝶の夢(歌).....	一五八
粕壁の藤.....	一四〇	我庭の夏.....	一六〇
れんげさう(歌).....	一四三	胡粉の鳥.....	一六一
山ふどころ(歌).....	一四四	涼車の道.....	一六一
花賣る翁(歌).....	一四六	若葉の雨(歌).....	一六三
萩の若葉.....	一四七	郭公(歌).....	一六五
春の水.....	一四八	隠れたる骨折.....	一六六
少女十三.....	一四八	床屋の評.....	一六六
松二木(歌).....	一四九	關口.....	一六七
春の御輿(歌).....	一五〇	葉櫻(歌).....	一六八
苔の色.....	一五二	時鳥(歌).....	一六九
フートボール.....	一五三	天を樂しむもの.....	一七〇
春のなごり(歌).....	一五四	夕立.....	一七一
首夏(歌).....	一五五	卒都婆(歌).....	一七二

小鳥(歌).....	一七四	松風日記.....	二八九
戸隠詣.....	一七四	波(歌).....	三一〇
短歌九首.....	一八六	あすはわかれん(歌).....	三一〇
布引山(歌).....	一八七	汐なれごろも.....	三一四
家にある乳兒(歌).....	一八八	砂の山(歌).....	三四〇
サヨソソソ嬢.....	一八九	月と我と(歌).....	三四一
魚飼ふ宿(歌).....	一九一	鎌倉の海.....	三四二
姫百合(歌).....	一九二	短歌二十七首.....	三五〇
大和めぐり.....	一九三	母のめぐみ(歌).....	三五四
つなみの後(歌).....	一九六	氷川公園.....	三六一
友誼(歌).....	二五九	飯田武郷大人還曆の	
短歌十一首.....	二五九	賀に(歌).....	三六四
あるらしの記.....	二六二	兵士の妻(歌).....	三六七
人の朝鮮にゆくに(歌).....	二八五	秩父の雨.....	三六九
波の音(歌).....	二八七	短歌十三首.....	三八六

朝の散歩	三八八	冠山(歌)	四三一
御輿の修覆	三九〇	旅行(歌)	四三七
鼻笛(歌)	三九〇	葬送	四三九
松(歌)	三九二	一輪ざし	四四〇
墓の前(歌)	三九五	夢なれや(歌)	四四〇
自由椅子	三九六	富士の高嶺(歌)	四四二
秋の雨	三九六	公園の晩秋	四四三
短歌十四首	三九八	遠足の歌(歌)	四四五
城趾(歌)	四〇一	みよのめぐみ(歌)	四四六
桃太郎(歌)	四〇三	造り花	四四八
観音境内	四〇四	風呂屋	四四八
誰が家の門ろ	四〇五	ふるつか(歌)	四四九
愛のやど(歌)	四〇六	女学校	四五〇
おとごひ(歌)	四〇七	秋の孤兒	四五一
秋の信濃	四〇九	篋のおと(歌)	四五二

小さきわが身(歌)	四五四	ある人の賀に寄竹祝(歌)	四九九
白薔薇	四五五	秋のなごり(歌)	五〇〇
兄か愛兒か	四五五	氷豆腐	五〇二
佐々木しほ子の像に(歌)	四五六	雪よりは霜	五〇二
橋の上(歌)	四五七	君のめぐみ(歌)	五〇三
木々の影	四五八	洋行する人に(歌)	五〇四
東京の歌人	四九九	冬の野	五〇四
岩根の花(歌)	四六〇	栗の枯葉	五〇五
野菊(歌)	四六〇	妙義山の石門(歌)	五〇六
第二の母	四六二	鶴(歌)	五〇七
畫師の評	四六四	銀色の粉	五〇八
右と左(歌)	四六五	學ぶべく捨つべからず	五〇九
秋の形見(歌)	四六六	久米幹文翁新室の祝	
紅葉日記	四六七	宴に(歌)	五一〇
枯野見んとて	四九五	乳兒の食初の祝に(歌)	五一一

霜こそなほ	五二二	山陽先生の墓	五三五
しづけき水(歌)	五二四	嵐山	五三六
おくつき(歌)	五二五	野宮	五三八
もゆる火	五二六	仁和寺	五三九
機のおと(歌)	五二九	稻荷山	五四〇
初雪(歌)	五三一	名残の御輿(歌)	五四一
八島(歌)	五二三	斧の音(歌)	五四三
雪の朝	五二四	夢の浮橋	五四五
竈の前	五二六	今はの御車(歌)	五五〇
寒梅(歌)	五二七	松の風(歌)	五五二
波の入日(歌)	五二八	冬の京都(歌)	五五四
短歌十五首	五二九	磯づたひ	五五六
京都	五三二	利根川舟	五六〇
下加茂	五三四	待つ舟(歌)	五六九
上加茂	五三四	書(歌)	五七一

安房めぐり	五七二
母上は(歌)	五八〇
雪の雲(歌)	五八一
フルベツキ博士	五八二
聯隊旗の歌(歌)	五八六
一重山(歌)	五九一
冬の信濃	五九三

美人雪月花目次終



散文 散文
雪 月 花

大和田 建樹

ふるさと日記 明治三十年四月

花の春もみぢの秋。まづ思ひ出でらるゝは故郷なり。きのふ出でゝ今日歸るさへあるに。十年を隔てゝ今年あそばんとす。たゞ夢の如し。あはれ歡び待ち給ふ父母のちはさましかば。

四月二日。瀛車は新橋を出でぬ。

天つ雁いざいでたゝん故郷に

いそぐはわれも同じ心を

雨しめやかに降り出でたり。

遠くゆく舟も煙に包まれて

春雨しろし品川の海

藤澤のあたり。桃の花ざかりにあふ。緑なる松。紅なる花。しばく
見るけしきなれど猶めづらし。

駿河路になりて興津の海邊を行くに。櫻こゝかして咲き亂れたり。東
京にてはまだ見ざりしを。浦風のあたゝかきかためなるへし。古寺の
庭の二もと三もと。雪か霰か。木さへ枝さへ面白きに。雨のかゝりて
露の光りそへたるなど。すべて歌おもふ胸を刺さざらんや。

静岡を出でて安倍川を渡る。岸の麥生に菜の花の咲きまじれる。いと
美し。雨傘さして瀛車をながめ居る里人も見ゆたり。

今夜は濱松にやどる。雨なほやまず。月琴の聲。笛のしらべ。ふくる

まで夢ゆるさぬは。是も旅寝の一興ぞかし。

三日。晴れたり。神武天皇祭とて。到る處に國旗のひるがへるを見る。
瀛車一宮に着きぬ。こゝにて下るゝ田舎娘どもの多きは。當地神明の
祭なりといふ。げにも家々に旗を立て提灯を出だしなど。賑はしとも
賑はし。停車場の櫻も半ば唇を開けり。

名古屋よりは乗客充満して。桶に蜜柑を詰めたる如く。身うごきもな
らぬほどなれば。景色も何も見ゆず。されど時々立ち居る人の袖の下
などより僅かに見いだして。山青く水白きをながめつゝゆく。天地も
狭くなりぬるかな。近江路春寒うして瀬田のあたりの菜種。いまだ濃
きくちなし色に至らず。

京都に着きたれども。人多くして東山も見ゆず。西山も見ゆず。窓近

く立てる東寺の塔さへ仰がずして止みぬ。

あらし山花いかならんたをやめの

袖あたふかに春かぜうふく

さはらへ。車を下り上る人々の中には花よりも美しきがまじれり。急

がずは祇園の櫻も見て來ましものを。

鳩の峰も近く仰がれたり。

をどこ山かすむ夕日の影みれば

たゞ何となく春うさびしき

大坂を出で浦江をすぎ神崎川を渡る。菜種多し。さかりは恰もかへ

さ頃ならん。

旅衣なほ袖さむし鈴菜さく

うらねの里の春の夕ぐれ

薄暮神戸につきて吉田屋といふに宿る。

四日。日よし。朝とく目さめてラムプ引き寄せ手帳しるしゐたるに。

下婢あわて來りて大きに寝すこしたりとわびす。さらば切符買ひてよ

とて出だしやれば。又一人膳を運び來りて頻に遅くなりしを謝罪す。

かくて一椀も盡しはてぬに。又椀を奪ひて飯を盛ること二度。あなく

るし一椀は歸りまであづけねかななどいひたはむれつゝ。送られて山

陽鐵道の瀛車に乗る。

窓より見れば今夕朝日花やかにさしのぼる。いと心地よし。忽に須磨

も來りぬ。帆を張りて出でゆく舟。漕ぎつれて浮べる舟。かゝれる舟。

引き上げられたる舟。見るものすべて昔に似たるは。藻鹽たるてふ此

浦の朝げしきなり。淡路島近く松のひまより見ゆ。

世を渡る舟の行へも楽しげに

朝風かすむ須磨のうら波

舞子に着く。所の祭なるへし。舞臺めきたるものありて。杉葉もて屋根を葺き。松の枝もて欄干を渡し。紅色の丸提灯を掛けならへたるが松の木の間立てり。ことにて汐汲や舞ふらんなど思ひやられていとをかし。春風あたゝかに來りて奉納の旗をひらくと吹く。舞子公園より松のあなたに向はるゝは濱手の宿屋なるべし。

あな戀し舞子の松の木のみより

一夜やどりし家もみわけり

明石の城見ゆ。人丸の社を問はんとすれども。今日は乗客少なくして。詞をかはすべき人もなし。寺や社やこゝかしこに見わたるはそれかあ

らぬか。明石の卷の面影身にそふ心地す。

琴のねはいづくの松に残るらん

波に聲する春かぜもなし

大久保などいふを経て。土山に着く頃。平原一面。緑の麥生に黄なる菜種の咲きまじれるも美しきに。一たび別れし海さへ再びかなたにひろくと見わたされたり。藍もてゑがれたる遠山。碁石の如くならびたる白帆。何かは面白き景色ならざらん。春なほ早くして櫻は蒼を解かねど。柳ひとり芽をひろげて我はがほになびき立てり。加古川に着く。高砂の松見る人は此處にて下るなりときけば。

一夜ねてきかましものを高砂の

尾上のまつのはる風の聲

有年をすぎてゆく。川近くながれたり。之をへだて、山のふもとに村あり寺あるを見る。れのづから畫のれもむきあり。堤ゆく人逆さまに走り去る。

岡山の城見ゆ。柳どころくありて春ねもしろく霞みられたり。

心あてにそれかどばかり岡山の

城のあたりをみるく行く

此地には住み居る友のあればがかし。やゆきて畑の中道となる。線路の土手に蒲公英すみれなど咲きあるを見つ、ゆくも樂し。黄なる胡蝶の三つ二つ花にたはむれては。遠く去り又近く來る。

笠岡を出で、海にそひ行くに。何がし丸などいふ旗立てたる大舟の磯近くかゝりをるも見ゆ。間もなく福山につきぬ。此地はしばく遊

びなれたるところなれど。涼車の出來てからは始めてなれば。いづこやらん面影のかはれるこちして。更に方角もわからず。かつて宿りたる築切の家は何くろ。たゞ何よりも。まがはぬ城の高く仰がれたるこそうれしけれ。やよ石垣のもとの菜種よ。なれも昔の春は忘れずやいかに。

なつかしき葦田川を渡るに。童見十四五人。運動會めきたる旗立て。河原の芝生に遊びあるも昔に似たり。なほゆけば小川に釣垂る人。堤に摘草する人。田舎の春はいたるところにのどかなり。我は城の見はずなるまで顧みつゝ行く。

二十年のむかしの夢のあとへば

春風たかし福山のしろ

あるは芝生に。あるは堤に。娘の子ども打ちむれて。草を庭に辨當ひらきををるところく見かくるは。昨日今日舊曆の節句なればなるべし。蜜柑の皮に蒲鉾を盛りて贈れば。又こちらからも小豆飯いれて報ゆる。田舎の雛遊こそたのしげけれ。半面に夕日を受けつゝ餘念なく人形もてあそぶ少女。桃よりも美し。

尾道につきては。いよく雛遊の盛なるを見る。海士の子ども着かざりて。かんざしなど花やかに装ひつゝ。ゆきゝするさま。いとにぎはし。桃の花さきこぼれたるあたりには。芝居の幟もひるがへれり。罪なき浦里の節句のうらやましさよ。

海田市のあたりよりやうく暮れて。遠近の山黒く空いと静なるに。金の鎌なす三日月は高く鋭く光を放てり。明日の日和こそ頼もしけれ。

廣島につきたるは七時なり。此地も二十餘年のむかし。三年の書生々活をなしたるところなりしが。漁車にて始めて来て見るに。あたかも浦島の心地もするかな。吉川支店といふに宿は定めつ。膳にのぼる蛤のあつものも。二十年前の風味よとれもへば。何かは戀しからざるべき。箸を取るく下婢に此地の話聞くも。又たのしからむやは。あはれ書生日曜の樂園なりし饒津の森よ。三篠の流よ。今も健在なりや否や。

五日。けふも晴れたり。宇品より伊豫通ひの漁船に乗らんとて朝とく宿を出で。京橋川を右にし。比治山を左にしつゝ行く。ねもひいづれば書生の昔。牛肉の折詰など携へ登りて。樽を叩き歌ひしも此山なりしよ。

れもふどち短き袴はきつれて

ふみやぶりたる山は此山

無慾無邪氣の境界は又かへらず。共に遊びし友も死にたるが交れるを思へば。世は夢なり。

わすれては今もむかしの心地して

なきよの友を訪はんとぞたもふ

宇品町などいふ處は。二十年前の海中にて。水浅く潮あしく。和船にてゆきかひし頃は。目前に廣島をながめやりながら。一夜を波の上にて明かしたる事もしばしなりき。舟遊するとして押し流されて危き目にあひたる事もありき。れもひきや二十年後の今日にあひては。砥の如き道を挟みつゝ賑はしき家の立ちならべるを見んとは。

乗りたる舟は廣島丸なり。宇品に別れて疊の如き海を走りゆく愉快さよ。右に二の島。遠くは嚴島など見つゝ。能見島にそひゆけば。吉浦吳港など左のかたにやうく近づく。

わが舟のけむりのあとの薄霞

あな心なし島もかくれぬ

吳の前に小島二つありて。舷の左に立てり。一つはうるめじまとして岩もて疊まれたる山。松多く木のさまいと奇なり。一つは三石山として赤土に是も松生ひたる山。海軍の生徒らしきもの多くのぼりあたり。これらの名は。吳港にかへる人の乗りあたるがをしへしにて知りぬ。

室に入りて筆執りあたる間に。音戸の瀬戸を過ぎしこそくちをしけれ。此瀬戸は。わが和船にて行き來せし頃。舟をどめて潮待する事しは

くなりしが。退屈のあまり。漁夫どもの賣りに来る魚を焼かせ糞させ
 などして。飽くまで食ふを常とせしに。今は知らぬまに跡になしつる
 事よ。呼ばんとすれど。魚賣らんとする漁夫も來らず。舟もとまらず。
 大きなる小さき島送り島迎へて。十八里の海上。退屈もしあへず。三
 津が濱につきたるは一時なりけらし。

おもかげにきのふは戀ひしいよの山

みれば中々ゆめかどやおもふ

ゆめならばさめずもあれ。あれに立てるこそ少年の我を慰めたる伊豫
 の小富士よ。

上陸して窪田といふ漁船問屋に休む。こゝより宇和島丸に乗りかへん
 とするなり。もはや伊豫の土をふみたれば。何となく故郷に來つる心

地してうれしきに。酒を命じて小女に酌とらせつゝ土地の話など聞く。
 わが始めて此家に來りしは明治七年なりしよといへば。それは私の生
 れざりし十年も前なるにとて小女笑ふ。げにも數ふれば二十四年の昔
 とはなりにけり。されば此港に二軒ならでは無かりし漁船問屋の。五
 軒にふゆしもことわりよとて。共に笑ひぬ。

小女枕もて來て少し眠れといへば。横になりつゝ屏風の詩など讀みお
 たるをりしも。あなうれし。第三宇和島丸は鳥の如く沖のかたより翼
 を張り來れり。あはれ十一年來の夢を載せて。夢ならぬ楊州に我身を
 導くところの鶴は是よ。

乗り込みて座を中等室の一隅にしめたり。子持あり商人あり書生あり
 娘ありて。大かたは宇和島行の一社會。久しぶりに宇和島詞を聞くも。

既によそならぬ心地す。とかくするほどに。酔後の夢はいつしか我を伴ひ去りて。何事もしらず。さめて見れば時は五時。晚餐前にあり。焼蒲鉾の味はや故郷のものなるが如し。

箸を置きて甲板にのぼれば。夕日はやかくれて海上たゞ青く。陸の山々。近きは藍の色に煙りわたり。遠きは日影の名残もていたゞきを染めのこせるなど。晝もなほ及ばざるべし。此静なる天地の間に。黒き翼をはたらかせつゝ飛び居る水鳥。詩人のためにかゝる材料を與へしは。神か自然か。

六日。くもる。目さめて見れば舟の窓しらみぬ。甲板に上ればいづくならん陸地淡く濃く見えて。波おだやかに明けはてたり。風は我舟を迎へつゝいと寒く吹く。

朝飯の時も来りぬ。ポニー一つづつ膳を運びて丁寧に据ゑわたし。老人出で来りて。いつも御粗末と挨拶してゆくなど。全く故郷の禮儀をおこなふもめづらし。あゝ我すでに二十年來の旅人となりぬ。笑ふ勿れ。故郷の事としいへば見るもの聞くもの。なつかしからぬはなきを。やう／＼に降りいでたる雨。八幡濱に着く頃はますます／＼烈しくなりて。見わたす陸路の山々。いづれも薄墨に隈どられ行く。朝まだ早ければ港の家居いと静なるに。雨傘さしたる人ひとりふたり。まれに行くなど。見るもかへりてつれ／＼ならず。海は波なくして布をのべたる如くなるに。糸の如き雨の降り来りては。小さく大きく輪を廣げつゝう煙りわたる。

八幡濱より宇和島までは海上わづかに十里。心は矢の如くなれど五時

間あまりは待たざるべからず。時計の針牛の足よりも遅く。一分の長さ三春にもまされり。

十二時頃吉田も近づきぬといへば。しひて外套引きかぶりつゝ甲板に出でし見れど。心あての山も見えず。島も見えず。前途たゞ雲漠々たり。

雨くらくけむれる波のをちかたや
むかしすみたる我家のあたり

吉田にもつきぬ。もはや二里あまりの間になりぬ。

故郷の山ちかづきぬはや行かん
その山もとの友やまつらん

かぬては。甲板の上に立ちて。戀しかりつる唯波が鼻をも見ん。童あ

そびに蕨あさりし惠比須山をもながめんなど。思ひし事も皆たがひぬるこそ恨なれ。雨いよ／＼くらし。城山はいづくぞ。鬼が城山はいづくぞ。漁笛一聲。いつしか御上り場の舳先に當れるは夢の如し。そぼぬれつゝハシクに送られて岸に近づけば。數十の人力車夫。百足虫の如き手を出だして。我一にと客の手を引き取らんとするさま。事こそかはれ。一谷落城の曉。平家の一門舟をあらそひて乗らんとせしにも似たりとや云はまし。さらでだに面影かはらぬ山のふもとに。迎ふる人と相見たる心地。たれかは之を想像し得べき。たゞかなしきは。人皆老いて霜をいたゝきたるが多きこれのみ。

車をつらぬて新町を過ぎ。袋町を過ぎ。追手通を行く。店のさまなど。新しくなりたるがまほき中に。旗を立て鈴を振りて出港の漁船を觸れ

あるきあたる。ものさびしかりし堀の岸に柳櫻を植ゑならべたるとは。母衣のひまより先づ目とまりぬ。我か人か旅か故郷か。たどる愛路をうつゝになして。母のます龍華山はかなたに立てり。やどりははじめより約ありて。宇和津彦神社の祠官なる毛山氏に定む。父は正廉。子は正辰とて。斯道に力を入るゝ人。ことにわが親しうするゆゑあればなり。到れば家内中していとねんごろにもてなさるゝうれしさ。忘れては旅より家に着きたる心地をせらるゝ。

十年あまりわかれし友にあひにけり

いざわかざへり昔かたらん

酒肴いでゝあるじを始とし渡邊永三二宮真西村守菊池吉巽成などの諸友と共に久しぶりの圓居をなす。圓居する友。汲みかはす酒。共にこれ

十一年前のもの。快きはまりて涙ぐまるゝを。ねほへども滴りて盃をけがしぬ。羹に浮べる鯛の風味よ。むかし父上と共にせしものならざらんや。巽は妹のむこなりけり。十時頃客去り酔めぐりて枕につく。

こよひ寐て何をか見まし故郷の

ゆめはうつゝとなれる枕に

七日。快く晴れたり。明けはてゝ西の椽側に出て。顔あらひとつ城山を遠く見やりたる心地。たどへんにもものもなし。あの麓こそ我家のありし處よ。あの木陰こそ椿折るとして小鳥捕るとして我少年の半生を送りし處よ。

高き石段を登りて宇和津彦神社に詣づ。社頭の岸に枝垂れたる老木の櫻あり。花は七八分ちりすぎて。早くも葉がちになりぬ。

春毎にをしみなれたる心まで

花のこかげにしのおけふかな

巽毛山と打ちつれて大超寺なる祖先の御墓に詣づ。すべてわがあらぬ間の墓守は。毛山氏にていとぬんごろにもしくるゝ事とて。今日十年めに詣でゝ見れば。おのが此地にありし時の如く。よく掃き清めて櫛あたらしく立てたるなど。誠にゆきとどきたるこそうれしけれ。

前の石垣には覆盆子の花白く咲きたり。

笹町などいふを過ぐるに。片よりたる士族町なれば。家のさまは昔なるが多けれど。門札を讀めば。あるじは大かたかはれり。光國寺蛤山など向に見つゝ神田川原に出で土橋を渡るに。水の流れ。岩の峙ち。是等は更にかはれりとも見えず。櫻こゝかしと盛にて。佛戒寺のは近

くて赤く。朔日天のは遠くて白し。

菜種の風に吹かれつゝ農家の間の細道を行けば。妙典寺の總門は見なれたるまゝにて立てり。こゝにも御墓あれば門に入るに。昔ありつる池は埋まりて若草青やかに生ねわたり。董たんぼなど時得がほなる中には。四五寸のびたる土筆も交れり。

摘みに來る少女もみねぬ古寺の

庭さびしげにすみれさくなり

小さき流一つまたぎこゆれば。御墓は少し小高きところにあり。五つの石碑を封じこめつゝ青き白き苔生ひたれば。剝ぎては裏面の文字を讀みなどす。鶯心あり。一木の桃を尋ね來て絶えず讀經の聲をまねびつゝ鳴く。

又もとの道を跡もどりして龍華山に詣づ。こゝは先祖代々がある處にて。境内もいと廣く母君のは東向にて立ち給へるが。昔半ば鎖して石のおもて神さびわたれるもかなし。今更に葬り奉りし夜のさまなど思ひ出でられて。暫しは顔もあがらず。土の下なる母君。もし心あらば。いかに語らまほしくや思すらん。告ぐべき事のかずくは。はふりおつるは涙のみ。

こゝに數十の石あれど。苔むしたるも。雨に打たれて消れたるもあれば。一つく系圖と引き合せ。生死年月などの系圖に詳ならぬを讀み合せ書入などす。毛山は鉛筆とりて戒名を紙にしるせば。巽は調べのすみたる石碑に小石を載せてしるしとするなど。やうくにして終りば。このあたり藤おほく。墓のうしろなどに生ひ出でたるもめづらし

きに。色こき董は無縁の塚を埋めて咲けるなど。何ものかあはれならざらん。母君が涙ながらに語り給ひし春光華榮童女のしるしの石は。今もさびしげに春風に吹かれつゝあり。

なほ親類の墓を拜みめぐりてこゝを出で。觀音堂のある潮音寺。閻魔堂のある西江寺など右に見つゝ川を下るに。幼かりし頃乳母の肩にかゝりつゝ常に見に來し水車は。昔ながらの響にてことんくどろうちめぐる。知らず人世の浮沈は此幾めぐりの内にか來れる。

親類故舊こゝかしこに訪ひめぐりて歸り來れば。人々あつまりて宇和津彦神社の社務所に待ちあたり。今日よりこゝを滞在所と定めて。起き臥しの世話まで萬事毛山氏のとりまかなひくれんとするなり。

社務所は宇和島町のいと高き處にありて。障子を開けば。北は人家を

隔て、龍華、潮音、選佛の寺山より。西は城山をはじめとし。城下の全景一望の下に集まり。なつかしかりし九島恵比壽山より瓦師、保手のあたりまで。何くとして見わたされぬ處もなく。居ながらにして戀しき故郷一幅の圖を開き見らるゝ處なり。ましてや近くは八重櫻眞盛に開きて欄干を埋め。社地廣く清くして朝夕の散歩場に富みたるをや。廊下を一つ渡れば。いかきの石楠花。今夕紅の唇を開きそめたる。今日も又酒いで、山海の佳肴盤にうづたかし。盃をさせば必ず小皿に肴を盛りて之を贈り。受くる人も贈る人も丁寧に會釋して。少しも亂れぬは宇和島の風俗なるが。東京にては夢にも見られぬ此風俗を共にし。きのふもけふも故郷の人の庖刀にかゝれる料理を味ふ。あるじの心づくしこそうれしけれ。

八日。うすぐもる。曉寐覺めて聞くに。潮音寺山の時の鐘ひびき。間もなく夜あけて遙に和靈神社の朝神樂の聲するなど。何ものか昔の面影ならざらん。訪ひ來る人けふは終日たえず。竹馬あひたづさへて追ひ退はれし友は。半ば白髪を帯びたるもあり。相あうて往事を追懐すれば。恍として生を隔てたる心地もするかな。

夕暮より楸形の灘屋といふに招かれたれば。時刻より少し早く出で、西村氏を訪ふ。此家は半生を送りしわが舊宅なれば。門に入るより一種異様の感情に打たれたり。十一年前かへりし時は。父上かしこの柱のもとにて鼓うたせ給ひ。おのれこのあたりにて謠うたひつるなど思ひ出づるもたゞならず。二階はおのが遊戯室として復習室として二十年間も住みたるどころ。壁に書きし義經の顔は。塗りかへて今はなけ

れど。天神様を祭りたる三尺の床の間は。あるじのかはれるも知らずがほなり。庭には梅、李、栗、柿、蜜柑など大かたの菓物はありたるが。今日来て見れば切られたるが多きこそあはれなれ。秋風老いて栢榴口を開く頃。母君の姉妹みな我家に集まりて。祖母上を見舞ひ給へば。おのれは竹竿の先を割りつゝ。柿や九年母やと採り集め来て。叔母上たちの御前に並べし事もありしを。父君が手植の萩もいづこにか影消にて。若葉のもいいでたるさまもなし。

さても隣境の槿の木はいかゞなりしと問へば。前に住みたる人が切りつけしといふ。そもく此槿の木は二もとありて神さびわたれる梢なりしが。れのが二歳なりける年。火ありて隣まで焼け來りしを防ぎしとて。我家には大切の樹木なれば。その後神酒をそなへて祭りし事などもありしにと。あはれなり。

今のあるじは童の頃よりの隔てぬ中なれば。昔今の物がたりなどしつゝねんごろにもてなさる。そのもとの家は近所なりしかば。常にゆきかひしつゝ見なれたる二枚折の屏風は。かたへに立てり。花の陰に賤の男の馬ひきかへるところを畫がきたるなり。加留多とりさわぐとて之を倒さんとせし事も幾たびなりしぞ。

灘屋は城のふもとの海岸にあり。もとは潮見矢倉とて。唯人の登る事もゆるされざる處なりしに。近頃料理屋を出だせりと聞く。時世の變おもひ知るべし。居ながらに海の上遠くながめわたすも面白きに。窓の外を舟おしつゝ過ぎゆくも見ゆ。今日のあるじは。清水、二宮、西村、渡部、菊地等の諸氏。毛山兩氏もおのれと共に招かれたり。故郷の酒。

故郷の魚。これをすくむるには宇和島言葉の少女あり。いかでか舊友の盃を辭すべき。しめやかにふけゆく雨。これまた閑話をたすくるに似たり。二宮氏歌一つと乞ひしかば。

いにしへの友とあひあふうれしさに
のみやあかささん雨もしづけし

夜も明方なるべし。夢やぶれて蛙の聲を聞く。

九日晴れたり。妹すみ子はるく十里の海上を渡りて。兄にあはんとて来る。

あれもいはんこれもいはんと思ひしに
あへばなか言の葉もなし

母上の御面影を其まゝ見る心地して。うれしとやいはん。かなしとや

いはん。たゞ涙にくるゝのみ。二十五六年のむかし。母君の仰により百人一首をしへたるに。覺はざりしとて喧嘩をなし。共に父上の御叱を蒙りしも此人なりしよ。氣短かりし兄。聲あげて泣きたる妹。まじめに相對して暫くは物もいはれず。

うちつれて語りあひつゝ。大超寺妙典寺などの御墓めぐりし。おのれは別れてもと家僕なりし。中村辰治を元結掛に訪ふ。案内を受けたればなり。家に樓あり。南は古城山より三島神社のあたり一目に見渡さるゝ處にて。打ち晴れたる眺望たぐふべきものなし。遠目鏡もて見れば。菜種の畑に鋏取る男。並松の間を過ぎゆく馬など。唄の聲まで聞くやうなり。盃盤を運び出で。あるじ立ち居つゝもてなすほどに。林治といふ老人はしこを上り來れり。父上の家僕中最も古き男なるが。

辰治に招かれて今日我にあはんと來れるなり。おもへばおのが十一二の頃。父君御上京の御供して歸り來れる時。赤と紫と染分したる扇など持ちて。若やぎ榮はしさまは。なほ見るやうなるに。ことし六十六になれるといふこそ驚かるれ。あるじと共に盃をすゝめ。おのが童立の物語などしつゝ興に入りぬ。辰治に十露盤ならへといはれて。父命もだしがたく。替古するまねしては逃げかくれたりし事もありしよなど。いひて笑へば。あの時はかく肥は給はんとは思はざりきとて。あるじも笑ふ。歡を盡して暇を告ぐれば。林治は門外まで送り出で。土下座を爲し。頭を土に摺り付けて禮するなど。田舎人の質撲さは。純然たる三十年前の舊世界なり。

歸路泰平寺にゆきて堀江叔父上と都築花守翁との墓地を拜まんとせし

かど。遂に見いだす能はずして止みぬる。いとくちをし。鶯あもしろくこゝかしこに山彦かへせり。

神田川原を川づたひするに。柳みどりに水白く。少女の洗濯鹽かゝへつゝ。石の上に立ち居るなど。見し人の心地するもあり。

きぬあらふ少女のかげも神田川

そのかみあひし心地のみして

醉をさまさんとて。散歩しつゝ天祥院殿の御靈屋に詣づ。境内いと廣く。こゝのみは昔にかはりたり。櫻多くして箒目あたらしき庭に。寒からぬ雪ひらりくゝと散る。

夕かたより笹町の宇都宮の家にて親類會あり。皆是れ母上の葬を送りたる人。あひよればまづ昔語つきもせず。おのれ七夜に招かれて其年

別れたる縁見は。島田に結ひて酌に出でたり。人間の生長かくの如くなる長の月日を。成す事もなく。虚しき名のみ負ひ持ちたるは何の面目かある。

鷺になる夢はむかしのふるさとに

かへる雀のはづかしきかな

不意に入り來れる客あり。思ひきや父上が謠の友なりし小梁川塵芥翁ならんとは。曰く途にて君の來られたるを聞き。あまり謠の聞きたさに。明日とは待たれず。こゝまでわざ／＼きつるなり。願はくは近々の内。一日遊びに來て呉れよと。さらば十二日の午後よりと致さん。親類一同おしかけてはいかゞといへば。それこそ望むところなれ。簞の竹の子ほらせてふるまはん。かならず契な違へられそ。さるにても一

聲きかせと強ひられて。鉢木など謠へば。翁も花さかばなど聲はりあげて。興いよ／＼添ひぬ。世の風潮にも打たれずして頭には鬘を戴き。身には武藝と謠とを附けて。心高く月日を送るは獨り此翁こそありけれ。酔いたくめぐりて欄干に凭れば。東の山焼けて。天を焦す焰。花よりも美し。幼時蕨採りに登りし峰やあのあたりならん。十日。美しく晴れたり。我身を寄せたる社の春祭にて。朝より賑はし。參詣かねて來り訪ふ人。終日ひきもきらず。三時頃より神事はじまりて奏樂あり神樂あり。幼時より耳に目になれたる太鼓の音。舞の姿。二十餘年を隔てゝ見聞く事なれば。なつかしなどもれろかなり。

神垣の花ちりたりと吹く笛の

あなおもしろや昔おぼへて

をはりてのち神官の人々と打ちつれ。社頭の石段を下るに。夕陽今夕影をかくして。惠比須山の空くれなる猶消えず。海のおもては波しづかにして。鹽濱の煙のほのく霞みわたるなど。おもしろさとへんものなし。一人が曰く。秋は夕と清少納言はいへれど。春の夕もあはれならずやと。げにも然り。げにくく然り。

毛山氏の宅にて夜ふくるまで饗應あり。おのれは神樂再興論など唱へつゝ。神官の人々と打ちつけて飲む。たゞ遺憾なるは。わが親しうせし人々の。今夜の圓居に入らざるが多き事よ。神樂よく舞ひたる増田氏は死し。歌の批評に巧なる越智氏は障りありて來らず。

十一日。けふも晴れたり。朝は毛山、二宮、鹿村、西村、渡部、菊池の諸氏と共に紀念の寫眞を取り。午後は切思女協會にゆきて講話をな

す。かへりに二宮氏の案内にて尋常小學校を見つるが。日曜なれば中には得入らず。運動場などめぐりみるに。こゝはもと家老家なる櫻田氏の邸なりしかば。庭の隅に立てる大木もさすがに神さびたり。木陰の今も高低あるは。池あり築山ありしあたりならん。花の如き侍女に呼ばれし池の緋鯉は。何くにか去りし。松ひとり若がへりつゝ問へども答へず。

三時よりは社務所を借りて母君の二十年祭を執行す。集まれる人々は親類故舊あはせて三十人ばかり。宴たけなはにして花の夕ばねに向ひつゝ昔を語りあふ心地。何とかいはん。かの六十六の林治といふ老人二十八の年わが父上の御供して京都に上り。その時もとめて歸りたる羽織の紐は。三十七年後の今日まで持ち居るとて。みづから誇り示す

を見れば。げにも古物にて。白茶の如く色も何も分らぬほどなり。さ
 すがは昔の人かなと皆々感じつゝ盃を廻らすに。いよ／＼酔ごちよ
 げに。鼻すとりつゝ我知らぬ昔など大聲に語り出づ。亡き御靈いかに
 おもしろと聞しめすらん。客の去り盡したるは二時にやあらん。鶏を
 聞きて枕に着きたるは四時なりけらし。

けふ神前に手向けたる歌。

ふるさとの春になきゆく雁がねも

母なき身には友とみるかな

袖にちる花こゝろなし故郷の

たのしき春は又かへりこず

二十年のむかしがたりをたらちねの
 嬉しとやきかん悲しとやきかん

十二日。けふも。祖先の御墓を一ところに合葬する事ありて龍華山に
 至る。あと追ひかけて尋ねて來たるは山本いほ子なり。此人はおのれ
 より一つ年下にて。わが家の長屋にて生れしかば。最もふるき童友達
 なりき。今は重孟といふ人の妻なるが。あひ見ぬ事二十五六年にやな
 りぬらん。互に老いたりとして驚くのみ。庭をはだしにて歩くとして栗の
 毬ふみたてゝ泣きたる事などもありしよといへば。よく覺は居給へり
 とて打ち笑ふ。

あちこちの古塚見めぐれば。春草の中に埋もれて。僅に石塔の頭を出
 だしたるもあり。石のねもて縦横十文字に蔦の若葉の這ひかくしたる
 もあり。これらは來り掃ふ子孫のなきにやあらん。しやがの花たんぼ
 の花。墓の前後に咲きほこれり。上の山より躑躅を折り來ておのれ

は我家の花筒に立つ。隣なるは誰がならん。石碑も何も大かた土の下になりて。薺の花白く處得て咲みちたるもあはれなり。

午後より人々打ちつれて小梁川氏にものす。家は祖父が森の半腹にありて。つゞらわりなる道少しのぼれば。二本の豆木は自然の門を成し。門前には山より落つるいさゝ小川の流れありて響清く。垣には山吹今を盛と咲きみだれたり。あるじ歡び迎へて主客座定まれば。先づ窓より見いだすに。北は城山より住吉山のあたり。西南は遠く九島、惠比須山より保手古城三島にいたるまで手に取る如きに。近くは田の中道なる松原を。西國順禮の菅笠白くかぶりつれたるが。十人も二十人も連なり行くなど畫の如し。庭には桃あり櫻あり。殊にめづらしきは軒端を覆ふ山桃の大木なるが。年毎に實のなる事一石あまり。その

時節には近所農家の女子供を呼び集め。心のまゝに落させて食はするが翁の楽しみなりとぞ。麥刈りはてゝ五月雨はるゝ頃。赤玉の如き實を盆に盛りて。歡びさざめく無邪氣の圓居を。にこやかにながめいだすその満足はいかにぞや。是にてもあるじが物ずきの奇なるを知るべし。木のもとには小さき池ありて。大小數十の龜むれあそび。岩の上なる白躑躅は波なき水に影をうつせり。

あるじ曰く。いま宇和島にて。まことの謠きかん事は今日をわきては又とあるまじ。せめて生涯の思出に十分きかせて給はずやと。満面に歡喜をあらはしつゝ請はるゝまゝに。さほどの藝も持たぬぞ千手や弱法師やと獨吟にて謠ひたるに。あるじなほ足らずとして。秘藏の小鼓を取りいだし。打つから謠へと望まれて。輿に乗ずる事十番にもあま

りぬ。妻君この間に立ち走りつゝ酒をすゝめ。客また持參の重箱を出だしつゝ宴を開く。あるじが手づからうしろの山より堀り來れる竹の子は堆く盛られて主位を占めたり。一つにて二貫七百目もありしとぞ。夕日やうく傾きて西の空にかゝり。見るまに形かくれて。紫に霞みわたれる遠近の山影こそ美しけれ。夜に入れば月おもしろく。こゝかしこに見ゆる燈火ほたるよりも細し。

なき父にめぐりあひたる心地して

君がつゞみを聞く今宵かな

九時も過ぎぬ。をしけれど名残をのこして月を踏みつゝ山を下る。かへり見れば火影なほあかく。謠の聲鼓の聲なほ響くに似たり。

十三日。けふも日よし。めづらしく『鰻の鯖』と呼びつゝ門外を

賣りゆく聲を聞く。越智氏よりおくられたる兎を割かせたるに。美味なりしかば。酔のまぎれに。

月のうちのものとねもひし君にさへ

あひたるけふのうれしくもあるか

やがてしるして持たせやりつ。

午後四時より社務所にて文學上の講話を爲す。聴衆五十人ばかり。終りて歌の會を開き。人々歡を盡して散ぜしは十二時なりき。この日の題は夕花。故郷山。

十四日。なほけふも。いとあたゝかなれば明日は雨ならんなど人々いふ。巽夫婦や毛山氏やと打ちつれて散歩しながら妹志津尾の墓を龍光院に訪ふ。此寺は四國順禮の札所なれば。今日も接待ありていと賑は

しく。右のかたには芋の餅を山の如く積み上げて振舞ふあり。左のかたには鮎飯を盆に堆く盛りて與ふるあり。施主にやあらん櫛かけの女四五人もゐて。汗水になりつゝ。盛りては渡し／＼するほど。見る目もめざまし。例の菅笠に。奉納四國八十八箇所など書きたる札を胸に下げたる旅人ども。赤き襦袢一つになりたる娘や何やと。木のもと岩の上などにひまなく圓居して。盆を片手に持ちつゝ樂しげに食ひ居るさま。恰も一幅の名所圖會なり。

墓は東の山際にあり。十一年前に歸り來て詣でし時は。葬られて二かへりも立たぬ頃なりしかば。あはれさやらんかたなくて。

いつしかと待たれし兄は歸りしを

もの言ひたげの石のすがたや

君がため泣かんものとは昨日まで

おもはざりしにあはれ世の中

など手向心に口ずさみしを。夏去り冬歸り。墓前の春草萌は枯れたるいくたびぞ。世にありし日は。本讀む事を何よりも好みて。ひまさへあれば二階の一間に引き籠り。母君遺愛の釋迦八相など讀み耽り。飯時にも下り來ずして父上に叱られし事もありき。天もし壽をして長からしめば。兄が歌文の友ともならましを。躑躅一枝密にさし交へて。立たんとしては又すわりぬ。

もろとも花をりあそぶ世なりせば

いかにうれしき春ならましを

これより天満天神の山づたひして。謂はゆる赤染衛門の墓に詣づ。臥

雲谷といふ處なり。まことは脇谷衛門督義助のなりしを。衛門といふにより。百人一首のと誤り傳へしならんと云ふ。山下水の流に境せられて。岸の上に小さき祠は立てり。晝さへ暗き豆木と楨とは屋根を覆ひて。おのづから神さびわたれる處なり。大きなる小さき旗に『やすらはで寐なましものを』の上の句かきたると。『かたぶくまでの』の下の句かきたるとが神前に多くひらめきたるは。願事のある人。まづ上の句を手向け。その叶ひたる時下の句を奉る事なりとぞ。半金を手附として拂ふに似たりなど。口さがなき京童ならば笑ひもやせん。こゝより見わたすところ菜種いづこもよし。

かへりには潮音寺山に登る。宇和島すべて眼下に見えろさるゝところなり。毛山氏よりは酒辨當など送り來て。花見めきたる圓居は開かれぬ。一人は柴折り集めて庭にかへ。一人は木の枝をもて箆に作るなど。簡易なる風流の一社會。遠目鏡もて里より見る人。いかなる感をかなすらん。城をめぐりて鱗の如く立ち並べる家の軒には。柳櫻どころく見にかくれするも美し。こなたの山には大船の帆柱きりいだすとて。歌聲といろに人さわぐあり。かなたの海には釣船帆船木の葉の如くに行きかふあり。誰か世の中を常なしといふ。今見る景色のみは。依然たる三十年前のものなりけり。

むかしわが母とすみたる家みにて

木だち戀しくかすむ春かな

此山に鐘撞堂ありて一時間ごとに時を報ず。數ふれば早四時なり。

この山のかねしばしまて落つる日の

をしきは花のためばかりかは

黄昏よりは當地の有志者に招かれて公會堂に至る。五十人にも餘りつらん。男兒郷を辭して碌々成すところなく。空しく老を荷ひて歸りしに。かへりて此歡迎にあふ。汗のみ背にしたゝるを如何せん。盃は四方より來りて時ならぬ田毎の月は膝の前に出でたり。夜ふけて堂を辭し。鶴鳴橋をわたる。月ねぼろにて顧みる城山墨畫の如し。

十五日。雨。日吉神社の春祭とて招かれたれば。晝すぎて御濱の石崎氏を訪ふ。近頃あらたに作りたる住居にて。家ひろく庭きよく。築山の躑躅櫻などれもしろく咲きたり。軒端をねほふ若葉のひまより。小指ほどなる梅の實の。赤みを帯びたるが見ゆるも美し。池には海水を引きて魚あまたかひ遊ばせたるなど。人手を入れて心盡したるのみか

は。築山につゞきては。宇和島灣をさへ我物にして。住吉山の松も庭木の如く。入り來り出でゆく瀛車の煙まで。居ながらに翫ばるゝ處なり。あるじの厚きもてなしにて酔もいたくすゝみぬ。今は暇を告げんとするに。やう／＼暮れゆく雨のけしき。あるじと共に歸さといめがほなり。

墨がきにかきけされたる嶋みねて

あめあもしろき夕ぐれのやど

かへさに西村氏による。やがて正座に引きのぼされて。此家にて賓客となるは。生れて今日ぞはじめてなる。あるじはもと日吉神社の神官にて社内に住み。れのれは此屋のあるじとして祭の客を招きたりしに。今は孤城落日の後。あるじが旅客となり。神官が氏子となりて神樂を

よそに聞くなど。今昔の感なきにあらず。

八時頃日吉神社にて神樂の音のひいきいでたれば。參拜せんとてこゝを出で。雨にぬれつゝ幼時競走に馴れたる石段をのぼる。社の前なる楓櫻の木はあれども。梢のさまは夜なれば。老いたる若き。知られざりしこそこのこり多けれ。暗夜この木のうしろに一人づゝ來りてしるしの旗を立て。勇怯を互にためしたる事などもありしが。今日の少年とは遊のさまさへ變りしよと。思ひいづるもいとをかし。

昔のまゝの石の手水鉢にて。手あらひ口すゞぎ。拜殿にのぼりて額づけば。今や神饌のあがる處なりし。神樂は例の式三番といふものにて。神官淨衣を着し。幣扇鈴など持ちて舞ふものなるが。見るにつけて思ひ出づる事こそ多けれ。童なりし頃。この社の祭といへば。家中士

族の少年は。待ちに待ちたる事とて。朝より集まり來り。神樂太鼓を打ち。角力を取り。鬼事をなし。などしつゝ拜殿狭しと遊び狂ひ。いは少年世界の運動會とも懇親會ともいふさまなりしが。今日來て見れば。少年らしきものは參詣中になく。たゞ老人子守女など立ちて神樂を見物しめたるのみなりき。さても世のさまはかくもかはるものか。聞けば神殿は瓦破れ雨漏れども修覆する氏子もなく。産土の神として殊に御崇敬ありし舊藩主よりも。さしたる御保護なきよしなるは。あはれなる事ぞかし。神輿三体賣られてよそのものとなりしといふ。そもく誰がねこたりや。

十六日。はれたり。けふも八幡神社の春祭とて祠官渡部氏に招かれたれば。午後散歩しながら行く。みちに和靈神社に詣づ。隨身門を入れ

ば右の方に神樂殿あり。昔は正五九月にこゝにて念の入りたる伊豫神樂の行はれし事など夢のやうに覚えぬけるが。今は其事も絶え。殿はあれども破れかゝりたるぞ悲しき。そもく此地にて特に何がしの力おほき此社にして。由緒ある建物を修繕もせざるは何事ぞや。世の風潮につれられゆかば。神木の櫻も伐りて薪とすべし。鳥居の臺石も持ちゆきて沓ぬきにすべしなどいふ神官の出で來んも知るべからず。誰か世に佛寺の廢滅をのみ嘆くものぞ。此神國にして此神社を如何せんとすらん。されど獨り當社の神樂殿のみにはあらず。八幡川原をつたひのぼるに。天氣はよし時候はよし。晴着きよそひて袖つらぬゆく娘ども多く。社頭には今ぞねりものどもおひくりに集まり揃ひて。出でゆく處なし。

四つ太鼓とて。四人の童子の美しき衣着たるが。大太鼓をまんなかにし。『よいやつとあこりや』と囃しつゝ。太鼓打ちながら昇かれゆくものあり。牛鬼とて。長さ三四間もあるべき牛の身に鬼の首をつけたるものを作り。すべて赤き布を被せ。其中に多人數入りあて。螺の貝につれ走りゆくものあり。十二三の少年が賤が嶽の七本槍に出で立ちつゝねりゆくは。勇ましくも愛らしくも見えて。ねのれもし書かく事を知らば。寫して東京の人に見せまほしく思はれし。渡部氏の庭には。荒獅子といふもの來りて。笛太鼓につれ。獅子頭かぶりたるもの出で舞ひあたり。舞ふ人。囃す人。かはりたるもあるべけれど。見る人こそ昔にかはらざりけれ。

神輿は今予御旅所に立たせ給はんとて。旗持つ男。辛櫃かく男。猿田

彦神の面つけたる男など。處も狹しと列なりゐたれば。此間に招かれし處まはらんとて。道をあとに取りて。新町あたりこゝかしこ訪ひくらし。日も入りたれば。神輿の還御を拜まんとて。此度は田道の方よりゆく。菜の花ふきあくる夕風いとこゝちよし。

社に着きたるは。暮色すでに山を襲ひ。里を襲ひ。水を襲ふ頃なりしが。前の河原には。三箇所みに篝火を焼き。處の若物ども手にく松明もちつれて神輿を迎へ奉らんとするさまなり。れのれは前の板橋をわたり。かなたの岸がに立ちて見る。

間もなく太鼓きこえて前驅の神官かへり來れり。すはといふほどに。三体の神輿は。鏡の光さやかに松明の焰に圍まれつゝ。やうく近くに見せ給ふ。社にては神樂ねこれり。関の聲めきたる掛聲はねこ

れり。松明は動けり。神輿は走れり。見るく橋を渡り社に着かせ給ふさま。凱旋にやたとへん。勇ましとも勇まし。

家人に見せまほしきはしりくる

みこしをてらす松の火のかけ

かくて人しづまり御靈うつしの式をはりてのち。れのれは新に昔風の神樂を奉納したしといひ入れたるに。神官うべなひて。三四番舞ひたり。其人は見玉何がし。れのれ幼かりし日にしばく見たる手ぶりなれば。ことになつかし。すべて近頃の神樂は手あらく短きに。此人のは手こまやかに長ければ。見がひありて。いかに神慮にも叶ひけんぞればよし。

此上に何かのすまんをりをねて

むかしにかへる神樂みたれば

ねもしろと神もきくらん春のよの

月にすみゆく笛竹のこゑ

八幡山花のさかりにかへり来て

神のまつりにあふぐうれしき

時の立つも知らずもてなされて。毛山氏と打ちつれ歸り來るに。月ねもしろし。

かゝり火の煙はきにて八幡川

月こそかすめ夜やふけぬらん

蛙の聲を聞きつゝ。眠りくかへりつきぬるは。一時なりけらし。

十七日。雨。中原氏に招かる。ねのが八歳の頃なりしか。朝暮あそばせそだてゝもらひし人なれば。なつかしさをのづからことなり。母君もいでゝ三十年餘にてあひ見つる事など喜ばれしを。ねのれ歸りて語

るべき兩親あらばと思ふに胸せまりぬ。宴たけなはにして。短冊いだして歌かきてと望まるれば。やがて筆なめぬらし。筆にや劔にや舊詠二首ばかりしるしめたるに。あるじ見て。その筆の持方こそ。八歳の時のまゝなれとて笑はれたり。あゝ今日こゝに三十一字をものする四十一歳の我は。『いろはにほへど』の手を取りもらひし中原氏と共に。盃を献酬しつゝ語る。そのうれしさいかにや。舊情は。春風に吹かれつゝ立てる鬼が城山の緑よりもこまやかなり。

十八日。降る。二三日の内に立たんとすれば。別を告げ奉らんとて。御墓まうです。

さらに又母にわかるゝ心地して

けふは立ちうき奥つきのもと

母のます此山かげの花の雪

あすかきはらひ誰かつかへん

當地に來りしより。謠を聞きたし舞を見たしなど望む人の多きは。噂のみにて實地にまことのを聞きたる事も見たる事もなき人々なり。ことに小梁川翁主となりて廣く見聞させたしと。日夜奔走しつゝ熱心にすゝめあるかるゝ事なれば。俄に謠曲誓古會を組織せんなどいふ主張者も起れるに至りぬ。おのれは能役者にもあらず謠の師範にもあらずれど。文學としても音曲としても。其榮ゆるは喜ばしければ。いでや奨勵のために。一聲うたひもし一番舞ひても見せばやといふ心の起れるは。二三日前の事なり。よりて毛山氏と計り。今夜宇和津彦神社の拜殿にて素謠仕舞の奉納をなしたり。集まりたる同志者二三十人もやありつらん。絶えて久しき昔にあへりとして。喜び面にあらはれたる老人もありき。雨つよく降りいでたれば。例の小梁川翁は尻からげにて杖をつき。謠うたひつゝ勇みかへられたり。時に潮音寺山の鐘十一時を撞く。

十九日。なほ晴れず。追手の石崎氏に招かれたり。佳肴は皿に堆く美酒は瓶に満つ。况んや舊友と昔語しつゝ盃をめぐらすをや。鼓もて興を助くる小梁川翁も座にあるをや。お濱の石崎氏を始め。芝、中原、清水、元吉、本多、毛山等の諸氏も來りあひたり。酔のすゝみに攝待など謠ひしかば。兩眼に涙うかめて聞きたる人もありしとぞ。

二十日。曇りたるが晝頃より晴れたり。かねては今日出立せんと決しあたるに。昨夜石崎氏にて今一度歌の大會を催したければ。二日ほど

延ばしてよと。本多氏のいはるれば。せんかたなく。誠に我好む道なれば。その意に従ふ事となし。今日一日の暇を得たれば。毛山氏と思ひ起して野山にくらさんと。南をさして家を出でぬ。

先づ來村にもせんとして。元結掛より長堀にかゝらんとしつゝ感ぜし事あり。幼時水練の誓古に夏の日盛り倉淵に通ひつる頃。此あたりに清くつめたき泉ありて。ゆきゝに必ず立ちより。飲みもし顔を洗ひもしたりしが。今おもひいでる見るに。家居のさまなど變りて何くとも知られずなりぬ。母君の手づから黄粉つけて丸め給ひし握飯を腰に附け。脇差に手拭を結び下げつゝ。炎天に照らされ通ひし當時の我を知るもの。數ふれば果していくばくろ。春は昔の春なれども。老いたるは頂元げたる鬼が城と惠比須山のみかは。

三島山の麓に越智氏を訪ふ。去年の水に來村川の土手切れて前の田地を荒されたりとて。それつくるはさんために。人夫あまた使ひ居て忙がはしげなれば。少し嘶して此を出で。山の上なる三嶋神社に詣づ。

鳥居のあたりより奥深く見入れたる松の木立。葉櫻の梢など。いづれも昔おぼえたるに。茸狩の歸さなど。しばし腰うちかけて休みたる『石崖之碑』の臺石は今もあり。十二三の頃なりき。漢學の師中島萬翠翁に従ひて。卯の花の盛に同學生四五人と來り遊びたる事ありしが。その時師は『宮人の袖うちはえし心地して松にかゝれる花の藤波』とよまれたるを見て。神主の袖より藤が生ひいでたる事かといひて笑はれたるは我なりき。

社をうしろに下りてゆけば。來村川左に流れて莖れんげの花多き野道

となる。世になき宍戸伯父君の山莊も川をへだてて向に見たり。月見にゆきて歌の圓居に連なりし秋もありしよなど。思ひ出づる事多し。

橋をわたりて山添の道を惠比須山さしてゆく。このあたり麥生穂に出で、藤躑躅をちこちに咲きにはへり。雪の如く梢より垂れたる花を。何ぞと問へば。四手の花よと毛山氏いふ。

神のます惠比須の山の榊葉に

ゆふどりしでの花さきにけり

惠比須山はもと茂山にて。蕨採り初茸あさるにはよき處なりしが。いづしか伐り開かれて元山となりぬ。

むかし來てわらびをりたる山みれば

麥生ほにいで、春の風ふく

つゝじさく磯山づたひわけくれば

むかし戀しく雲雀なくなり

こだかき處にのぼりて。萱の上に柴折り敷きつゝ二人相向ひ座し。これのは矢立の筆をぬきて。道にてよみたる歌など紙にしるせば。毛山氏は袂より吸筒握飯など取りいだして。いざ一つとすゝめらる。見わたす景色は。宇和嶋灣を中に隔てゝ。城山の天守呼べば應ふる如く。その麓にはれ濱沙入などよりたどりて。住みなれし家もそれぞと見やられ。そのかみ蜆ほりに網打に。遊びなれたる兼助新田は。やまぢかく海に突き出で、物にもまされず。東には大杉山より扇の峰の高く聳ゆるあり。北には泉森の霞まで立てるもなつかしく。和靈神社住吉

山など見るがまに戀しさまさる心地するに。そのふもとには碇泊せる舟。帆かけて渡る舟など。上手のかきたらん書も之にはいかでおぼゆ。

家のあたり見ゆるもかなしゆけばとて

まつらん父も母もなければ

時に麥生のかなたに。雉子の三聲ばかり鳴きたるも興あり。毛山氏うた一つなからずやなどいふをりしも。波を掠めたる春風は來りて。つぎつゝある吸筒の酒を。猪口の外へふきこぼす。

ひかし來てきし聲にも似たるかな

岡べのきくす谷のうぐひす

籠に下りて磯づたひしつゝゆく。此あたり家なき處なりしに。一村な

して立ちつゝけるもめづらし。はじめは人家のはづれまで見て來んとて來つるに。途には惠比須岩までものせばやとて。下駄をぬぎてはだしになり。汐にぬれたる岩をつたひ。蠣殻まじりの石を踏みつゝたどりしに。道盡きて今はせんかたなし。人も我も腰うちかけてながめたる折しも。うれしや小舟一つ前を過ぎんとす。便船かしてくれずやといへば。めされよとて岩のはさまに漕ぎよせたり。身をうつして厚く禮を述べ。さて何くへゆく舟ぞと問へば灘の春祭に招かれたれば。お上り場へ着くべしといふ。舟には家族なるべし。白粉ぬりたる小娘。乳呑子かゝへたる母も乗りあたり。あはれ慈愛ふかき春の風は。この淡泊なる家庭を吹いて。神樂の聲する親類の家に送らんとす。その樂しみ如何ならん。

海より見るけしき更に樂し。ゆくてに迎ふる住吉の松原。うしろに見送る惠比須山の岩むら。汐干に出でく貝ほる女どもは鷺の如く鷗の如し。舟には思はぬ圓居をなして。旅人浦人いとむつましく笑みかはしつゝゆく。櫓の音。波の音。たのしき調べは舟の外にも響けり。

住吉神社に詣で。毛山氏と語り興じつゝ田道づたひして歸り來れば。二宮氏をはじめ離盃を汲まんとて舊友あまた待ち居たる處なりき。千史會と名づけて。おのが昔の門下の人々。このたびを好機會とし。一團結を作りおかんとの相談もどこのひぬ。いでや名残の酒をとすゝめられて。今夜はことに酔ひすごしたれど。あさての別をおもへば。涙なきにしもあらず。

二十一日。はれぬ。こゝかしこ暇乞にあるきて三時よりお濱の石崎氏

にゆく。兼ねて約しつる歌の會に臨まんとてなり。兼題は春月と童にて。集まりつるは男二十二。女三人なりき。春やきく未になりて庭の小手鞠山吹など池にちりかゝりたるも。春の別は我のみならずとあはれふかし。旅人と故郷人と。再會を期するは又いつれの時ぞ。今日るすに小梁川翁訪ひ來りて。梅干二十五粒おくらる。是は翁が五代前の祖より。軍用として漬けおかれしものにて。年を経る事殆んど百五十年に及び。舊藩主春山老侯の御生前には。毎年大晦日に二粒づと獻上し。必ず元日の福茶に召させ給ふを吉例とし給ひしとて。そのよし曲物の蓋に書き添へられたり。かゝる稀代のものを特におのづか別として贈られたるは。豈嬉しからじやは。翁は今夜酒の席にて。こまかにも由緒を述べ。どうぞ國のため郷里のために長いきしてよと。

くれぐれもいはれたるこそ忘れがたけれ。

廿二日。雨ふり風つよかりしが。後に晴れたり。かねて出立と定めねきたるになれば。朝ねくるより見立に来る人引きも切らず。十時頃立たんとせしに。空のけしきあしく。見わたす山々霧ふかくこめて。何とやらん荒れ氣味なれば。舟はよし出だすとも。八幡濱あたりにて必ず留めん。むしろ見合はせて明日にせんこそ安全ならめと。いふ説ねほかりしかば。海路なれざるれのれとて。友の好意を無にせんもいかはしければ。かへさは急げど。遂に又の舟を待つ事に決しぬ。

うなばらは立つ霧ふかしあなうれし

又もこよひをこゝにあかさん

さらば今より我宅にと。強ひて石崎氏の勸むれば。來あはせたる人々

皆うちつれて行く事となりぬ。妹さへ従弟の君子さへ伴ひたれば。家庭の圓居の心地して。ゐながら向ふ九島山も我ものとなりぬ。さるにてもかなしきは明日の空になん。

廿三日。よき日になりぬ。出づべき船を聞きにやれば。今日はなしといふ。さらば今一日にても遊ばんとて。例の毛山氏など伴ひつれて千葉峠の瀧見にゆかんとす。二里あまりもあるべし。渡部氏道しるべとなりて前にあり。天氣はよし。道はねもしろし。愉快たどふべきものこそなけれ。瓢を腰にしたるもあり。餅を袂にしたるもあり。語りつゝ笑ひつゝ打ち興じゆけば。險しき山路も物のかずかは。

左に柿原川ながれたり。此川上こそ目指す瀧よとれもへば。早も着きたる心地す。山路のかたへに茶店あり。床几の塵うちはらひ。豆板生

姜糖などやうの田舎菓子をくひつゝ。澁色の番茶を飲むも興あり。飲けたる茶碗。剥げたる丸盆。いづれか少時なれたる村祭の面影ならざるべき。家のうしろには。虎杖折りきて皮をむき鹽を手にして。さもうまそうに食ひ居る子供も見ゆ。學校は何くぞ。父を助けて麥刈あに出づるやいかに。

山ふかくいるまゝに。蕨多くつゝ又うつくし。

瀧みんと分け入る山の下わらび

をりてやゆかん歸さにやせん

瀧こそ見わたれど。先なる一人がいへば。折りかけたる花もすてゝ後れたるは走り來る。遠くより見れば。二段に落ちて。上なるは糸を掛けたる如く。下なるは布を張りたるに似たり。近づくまゝに上なるが

見はずなるこそくちをしけれ。昔し歌よむ翁たちのあとにつきて。青梅など肴にしつゝ酒のみ興せしも此あたりなりしよ。花開き花落ち。年と人とは歸らぬ世に。瀧ひとり老いずして聲天涯にあり。

瀧の下には岩ねほし。中に平らなるを撰びて。童に持たせたるケツト打ち敷き。瓢箪をすわりよき穴の中に据ゑなどしつゝ。先づ小座敷を造りたり。水は一筋に落ち來ては千筋に分れ。煙となり霧となりて。瀧壺に入り。渦まき流れ。とう／＼と岩切りとほし走りゆくさま。めざましともめざまし。重箱には毛山氏の蒲鉾あり。渡部氏の蕨餅あり。童は岩をつたひて枯枝を集め。火を焼けば。一人は清き流を汲み來りて湯を沸す。かくの如き仙境に笛もたざりしのみ。残り多し。かつて毛山氏と滑床山に遊びし折は。雪輪の瀧にて筆簣吹きたるものを。

渡部氏うたあり。

白糸を誰ひきそめて此山に

いくよろづよかくりかへすらん

毛山氏も。

世に清き瀧のしら玉つゝみねきて

君がみやこの家づとにせよ

れのれ。

顔に散る瀧のさぎりのつめたさも

こゝちよきまでわれ酔ひにけり

此瀧なづけて鮎がへりといふは。さばしりのぼる春の小鮎も。こゝよりははすゝまぬよしの名なりとぞ。

れもしろきけしき見すてゝ瀧の名の

鮎より先に我やかへらん

日は中空より照らしてあまりの暑さに。れのれは辨當包みたる風呂敷をもて頭巾となしたるを百人一首の蟬丸に似たりなど人々のいへば。毛山氏。

れもひきや逢坂山の蟬丸が

瀧のもとにて歌よまんとは

といへるに。あのれは。

人丸と思ひしものをいつのまに

人が蟬とはなりかはりけん

といへば。山とよむまで童も大人も笑ふ。

いざ立たん瀧見る岩はをしけれど

あすの舟出のいそがずもあらず

名残は盡きぬと願みがちにて歸さにかゝる。日影うすく霞みて。何となく身にしむ山ぶみなりけり。雷か鼓か。瀧の響はいつまでもうしろより追ひ來るを覺ゆ。

中間村の渡部氏まで歸りて休み居る程に。小毛山氏も社の務を終りて來りあへり。茶いでと物語するほどに。芝司馬作といふ老人來りぬ。こは歌の道にて心やすくせし人なりしに。近ごろ盲目となりぬると聞くこそかなしけれ。されど昔の御聲を聞きたるうれしさよと。口にはいへど。目に見ぬつらさは。心に幾ばくの涙をか湛ふらん。悴は先生のおかげにてと語るを聞くに。そごろに我も袖をしぼりぬ。

垣の山吹夕風に力なくこぼるゝを見れば。春も名残になりけり。やうく霞みつゝ入日の影に色どらるゝ遠近の山。あはれきたごならずながめらるゝは。明日の別を思へばうかし。

さまぐゝのもてなしを受けて。わかれ出づれば。あるじは提灯ひきさげつゝ前の川橋まで送り來る。なごりをし夜は更けたり。蛙の聲あどさきに響く。

今夜は近道して田圃より行かんと。語るく來つるに。思はず足ふみすべらして川の中にずぶりと落ちぬ。小毛山驚きて自身も飛び込み。怪我はし給はずやと手を取りておこす。深き情こそうれしけれ。怪我はせざれど。半身水びたりとなりぬるを如何せん。落つる時は無雜作なりし川岸も。あがらんとすれば高くして足を懸くるに由なし。辛う

じて上なる人に手を取られ。無事にもとの道に立ちたり。先生の御自
畫賛を承りたしと小毛山がいへば。

盃を取りあげやせんたべゑひて

われおちにきと妻にかたるな

など。はては笑になりたれど。ぬれたる衣のつめたさはせんかたなし。
ふるふく歸りしは十一時にやありけん。風呂も湧かせてあり。直に
入れといはれしうれしさよ。況んやいんぎ直しに一盃のまんどの緊急
動議いでたるをや。

廿四日。晴れぬ。今日こそいよく別になりたれ。十一時までに乗り
込むべしと。汽船問屋より告げ來たれば。十時を聞きて住みなれたる
毛山氏を出づ。來りし日に花と見つる宇和津彦神社の櫻は。若葉の下
風すいしげに旅人を送れり。

た上り場よりハシケに乗るに。送り來れる人々岸に滿ちたり。尙ほ船
までも來れる人かぞへもつくされず。船は第二宇和島丸にて。わが占
めたるは甲板の上の一室なれば。寝ながらにして海山の風景をながめ
ゆかるゝ楽しさよ。毛山渡部の兩氏は八幡濱まで送らんとして同室に
あり。これより東京まで伴ひゆく渡部昇を加へて四人。まづ膝を置く
處を定めたり。室の壁には春山老侯の影駭響震の四字を書かせ給へる
額を掛け。花瓶には葉赤く花白き山櫻をさしたり。

十一時四十分拔錨す。甲板に出でゝ見かへれば。送りて歸るハシケは
猶たゆたひつゝ波間にあり。こなたを見る人。かなたを見る人。もは
やものいはんとすれど聲もといかず。わが船の煙はあとに靡きて。れ

上り場に立ち居る人をさへ塗りかくしぬ。

立てる人ちひさく見わた住吉の

松もわかれになりけるかな

妹はいづこぞ。いとこはいづこぞ。見る／＼岸の人影は。鳥の如く。
蟻の如く。黠の如くになりぬ。あなかなし。城山も鬼が城も。あすよ
りは又みる事あたはず。

船は疊の如き海を進みゆく。波なく風なくたぐひまれなる天氣なり。
恵比須岩。下り松など見るにも。懐舊の涙とゞめがたし。幼時父上に
従ひて舟遊せしに。舟こゝを過ぐる毎に。すなごりの多きを祈るため
の神酒とて。徳利の酒を海にうつし給ひし事などもあり。又藩主の江
戸より下らせ給ふ時。こゝの松が見ゆれば。御座舟の水手は。恵比須
が鼻の下り松とうたふ事ぞと。祖母上など語り給ひしを聞きあたり。
あはれ三十年前の海原。三十年後の旅人にあひて。如何なる感じをか
爲す。

右のかたには。のぞき岩とて見る目危く海中に立てる大岩あり。これ
また亡き人の形見の心地す。

舟うけて母と見にこしのぞき岩

わすれずながら年は経にけり

いつまでもかへりみらるゝは東の空なり。

わが舟路なれもそらにやおくるらん

かすまで立てる鬼が城山

八幡濱もやう／＼見わたるといへば。互に別の近くなるをかなしむ。

渡部氏。

おくり来て今日はしばらく別るとき

又こん春の君をこそまて

毛山氏。

いほへなみ千重波とほくわかるとも

わかれぬものは心なりけり

おのれ。

くる時はうれしかりつる八幡濱

けふは近づく事のかなしさ

港にも入りぬ。二人は別れてハシケにあり。波こころなし。早くもハシケを浮べてかなたに去りぬ。ぬぎのくる帽子を合圖にして影もかくれぬ。

五時八幡濱を出づ。折しも夕飯の膳につきあたるに。鼻に呼ばれて甲板に出づれば。別れし二人は更に松陰に立ちて出づる船を見送らんとす。おのれも遙に會釋して別を告げたり。凧笛一聲。舟はまはれり。人影も松影もあとにはるかなり。

西日になる頃。川の石に着きぬ。紡績所などありて盛なる浦里なり。海は鏡の如く。帆を張りて歸る舟あり。既に繋りて煙なびかせたる舟あり。里には祭の旗も見えて。衣美しき十四五の娘など遊び居たり。暮れわたる頃より。俄に天氣かはり波高くて船ゆれいだせり。これよりは佐田岬にかゝる海上にて。舊藩主の御船こゝを過ぎさせ給ふ時は。山伏御どもにありて祈禱をなすなどの事ある處とぞ聞きし。釣りたるランプは時計の振りの如く左右にゆらめき。ピールの徳利は倒れて誓

しも立ち居らず。戸のあはひより見れば。ほくちを掻きむしりたる如き黒雲一天に飛び亂れ。波は激して甲板を打ち碎けては瀧を流すなど。ものすごき夜のさまなり。

夜なかごろよりは。少し静まりたると見わた。寝入りたる後を知らず。大分につきたるも夢のやうなり。

二十五日。日よし。夢さめて見れば舟うごかず。港は何くぞと問へば。杵築なりといふ。きのふは佐田岬を西に見て來り。これよりは又東にしてゆく處なれば。航海中の難處とて。風のよわるを待つなるべし。明けはてし舟出づ。なほゆけば。右に豊後の地藏崎。鶴の嘴に似て波に横たはり。左には今めぐらんとする佐田岬。鰐の顎なして天に伏せるを望む。風景こゝちよし。中央に茶碗を伏せたるやうなるは。高嶋

なりと地圖は語る。

正午頃窓に入り來る陸地は三机あたりなるべし。ねもひしよりも波平らかにして。水鳥のひらくと飛び居るも見ゆ。

三津濱につきぬ。來る時は節句とて賑はしかりし砂の上も。人影さびしげに春暮れぬ。今より二十一日の前。故郷にかへる希望もちたる旅人の休みしはあの家なりしを。波の音さへ今日はかなしむに似たり。高田貞六といふは。ねのが門人にして今は此船の事務長なり。しばし室を見舞ひ來りて。ビール葡萄酒などねくれり。今治に着きたる頃。扇たづさへ來りて歌一つと乞ひしかば。

うらやまし筆もねよばぬ海山を

あながらに見て世をわたる人

酒のみつゝ故舊と語るも船中の一興なり。夕陽波を染めて日も暮れんとす。霞む八島の山は何くぞ。

二十六日。一天雲なく旭はなやかにのぼれり。阿波はうしろに淡く。淡路島は舷の右にやうく来り立たんとす。帆影白く遠近に浮びたるも心地よきに。釣舟は日影に映じて。赤く光りたるこそ美しけれ。かゝる無類の快晴にあひて。此れもしろき播磨灘をゆく。いかでか飲みさしたる珈琲のさむるを覺ゆん。

あはと見し淡路の島もちかづきぬ

伊豫のゆめぢのさめぬ枕に

朝なぎに出づる釣舟はなほらば

袖につゝみてみやこへもがな

人は皆けしきにかれて舳さきに集まりぬ。岩屋の燈臺右に來り。今ぞ明石海峡に入る。松の木の間にも明石の城も見えたり。海には帆船ひまなくならびて祭の旗の如し。木の葉とうかべる海士の小舟。雪と飛び散る沖の鷗。歌人の心なやますこと幾ばくぞ。紀伊の遠山けむりの如くはのく見ゆ。

舟の上は春風さむしこのみゆる

須磨山ざくら花やちるらん

神戸より上りて瀛車に乗る。菅笠手にしたる娘どもあまた入り來れるは。參宮の同行なるべし。おのれも歸さにはと思ひしに。日數豫定に過ぎたれば直行せざるべからず。

窓より見出だせば。海おもしろく霞みわたれり。寐ながらに見し遠近

の島影。幻となりて今も目の前に浮ぶ。

おくられし人のおもかげ立ちそひて

かすむ海路の末ぞ戀しき

今夜は名古屋に一泊して明日家にゆかんとぞ思ふ。家も戀し。故郷もなつかし。鳥よ胡蝶よ。うらやましきは空ゆく自由の翼のみ。春風のみ。さるにても十年掃はざりし母の御墓を祭りし事こそうれしかりしか。

故郷の山 (船中にて)

ふるさとの山はいづくろ

ふるさとの城はいづくろ

雨げむり四方におほひて

鳥ならば空ゆかましを

海の上はゆくても見えず

風ならば天ゆかましを

雲霧のかなたに立ちて

いにしへの友や待つらん

その友のおもかげばかり

霞まらずは戀しき里の

ほの見せて霞むもつらし

山も見ましを

城も見ましを

親なくて (母の二十年祭に)

夕月夜けむる芝生に

たゞひとり音をなく雲雀

そら高く母やわかれし

草ふかく父やかくれし

かなしげに鳴くなる聲か

ひまなくも親おもふ聲か

あはれそのころは鳥も

人の身もかはらじものを

おやなくて何かたのしき

母なくて何かうれしき

いくかへり春はかへれど

天の原かすみの色も

その世には似ず

忘れぬ影

何につけても古郷ほど戀しきものなし。つれづれの夕べ。寐られぬ夜半。よづ思ひいでらるゝは過ぎにし方ぞかし。いでや心にうかぶまゝにかきつけて見ん。

峯の残雪もわづかになりて。うすはなだに霞みそめたる頃。こゝかしこ梅もほころびたるに。保手といふあたりにうさそはれいづる。一筋の川ありて海にいでんとする所なれば。氣色いとよし。漁夫は此川に網さしたるして白魚とるを。人々みんとて行くなり。川邊づたひに若菜つみつゝ川上の三嶋神社にまうづるもあり。衣かゝげ海の方にたれりたちて青海苔とるもあり。歸りには三日月を惠比須山といふ方に見て。いそがぬもたのし。

初午には。わが家より三里ばかりの所に三間村といふあり。その稻荷の社にわれもくと詣づ。咲きつゝきたる菜の花の中を。歌うたひつれていくむれもぬりゆくは。祭酒に酔へるなるべし。木のまになびく旗。やまもとに響く太鼓。いまも春毎にしかうあらん。

同じ方に少しはなれて。深田村といふに大本の社あり。其あたり櫻ねほくて。清明の頃いつも盛なればとて。此日に春の祭をねこなふ。ねのれ家にありし頃は。年毎のやうにまうでたるが。げに花にねくれさきだちたる事なし。社のかたへには池ありて。花の水にうつれるもよし。ある年の事なりき。前の夜より雨ふりしきりて朝になりてもやまざ。思ひたねたるに。まひる頃よりにはかによき日となりしかば。さらばといさみたちつゝ。二人三人うちつれてゆきぬ。例の花のもとにあくがれあるきて。かへさにむかふ頃は。夕日ひくゝなりにけり。せんばが峠といふ坂道をこゆるに。くれはてゝ月もいでぬ。松原の木のままにみわかくれして霞む夜のさま。身は仙境になどやいはまし。今日にははかに晴れたる事なれば。遠くよりきつる人まれにて。越ねねくれたるはわれらのみなり。大聲あげて『われうたへば月徘徊す』などうたへば。山彦ひとり心地よげに答ふ。あはれ春と月とは其まゝなるを。その世の友は今いづこにかある。

日吉。宇和津彦。和靈などの社々の春祭ねほかた花の頃にて。神樂の聲は今も耳をうねそふ。ことにわがひなぶりの笛太鼓は。みやびたるしらべにて。たぐひなき心地せらるゝは。聞きなれたればなるべし。十四の年にやありけん。わが學校の友だちと。滑床山に遊びたるこそ

ねもしろかりしか。大陰曆の三月すゑの四日。夜中すぎより皆うちつれて山路にかゝる。四十人ばかりなるべし。童なるも中年なるもうちまじれり。ゆくても見ぬ細道を。小笹の露かきわけつゝ。さきなる人の聲をしるべに。あへぎくゝのぼる。立石といふあたりよりかへりみれば。はるかか海づらのこりなし。漁火は星の如く天の川の如く。くらき海を色どりてをちこちにつらなれるさま。童ごゝろにはまだ見しらぬば。漢文にて習ひたる羽化登仙とはかゝる時の心にやなどいふもあり。こゝに一やすみしつゝ琵琶行の詩を吟ずるもあれば。劍舞を學ぶもあり。うちまもる海づら白くなりて漁火の影うすらぎたるは何故ならん。かたちは山のあなたなれど。月こそそのぼりけらし。やゝ山ふかく入るほどに。やうくしらみゆきて。かなたこなたの谷陰に鶯

の聲たけずきこゆるも。たのしき朝ぼらけなり。目の前にきたれるは煙か霧かどみれば。忽にあどになりぬ。身のぬれたるは雨ならんなどいふもねがまし。まだ近くて見し事のなき雲なりけるよ。布が瀧のものとにいづ。見あぐればいく千尋かあるらん。空より白布ひきかけたるやうにますますに落ちきたる。かたへには岩つゝむなど所々に咲きいでたるもめづらし。霧が瀧といふは此瀧のすそにて。しぶきかくる車は近づきがたし。めぐりくゝて木陰くゝりゆくほどに雷の聲す。あれは何ぞといへば。是ぞこの山第一の雪輪瀧なると。しるべの翁いふ。心にはかに狂する如く。手をひきつれてあやふき岩間をつたひ行けば。雲の上より落ちくるものかな。佐保姫は霞のまより雪をたばねてなげれるすにやあらん。奇絶妙絶とさけぶは詩をかながふる先輩なり。ね

のれは詩語碎金をはなれがたき頃なれば何ともいはず。こゝにて二時ばかりも遊びつらん。それより千疊敷といふ所にいでよ。おのゝくたづさへきつるにぎり飯をとりいだし。あるは瓢かたむけつゝ木のきりくひに新作の詩をしるすもあり。巖によぢのぼりて。石楠花をりくるもあり。さては肱を枕にねむるもありて。長き日の西になるまでいそがぬものどけしや。花をふんでは同じくをしむといひけん少年の春も。はや夢なりけり。

せんばが峠の瀧見に五六人うちつれて歌よみがてら行きたる事あり。若葉の枝を手ごとに折りきて敷物とし。あたりの青梅など肴としつゝ酒くみかはすに。鶯もこゝかしこにきこゆ。われは何とかよみけん。

人は何とかよみけん。一つもあはれなれば影は只一寸の天の

川のみ。父上つねに川狩を好み給へば。童の頃はしたがりゆきしこと度々あり。合歡花などのうつくしく咲きたる陰を魚おひのぼりつゝ。いと廣き所に出でたるなど。ほのかにはおぼゆれど。いづこの川なりしとはしらず。祝森村の神主の家にて携へつる辨當ひらきしに。麥刈り入るゝとて手ぬぐひうちかぶりたる女どもの出で入りするを見たるは。此時にやありけん。

住吉神社は。藤江浦といふ海岸に立たせり。夏祭は大陰曆の六月十八日十九日にて暑き盛なるを。十八日の夜は涼みがてら陸より舟より詣づる人あびたゝし。舟より陸を望めば百千のともし火ひるの如く。くだもの餅くわしなど賣る行燈の文字をわづかに残して。ゆきかふ人は山と見ゆるに。花火のこゝかしこにきらめき散るはよそめあやふし。

御社は松原のねくにいと高く仰がれて。提灯のひかり神樂の音ものにもまぎれず。陸にて海を見れば。只星をちりばめたる如く波にゆれてうつくしきに。岸ちかくよりくるは。のりあふ人々のさまもれもしろし。舟ばたに毛氈うちかけぼんぼりといふものあまたもしつゝ。紅なる緑なる袖あまたつらねたるは。まひうたふ少女どものせたるにやあらん。わが學校にても習ふ頃。舟を二つに分ちて互に詩を吟じくらべし事あり。甲となふれば乙和して。つまりたる方を負とす。學生どもかゝるさまにて出づる事なほし。ある年宍戸の伯父君につれられて。歌よむ數に加へられ。絃歌の海中をうめき吟じまはりしは。十三四の頃なりき。中に一人が『ゆきかよふ人のあたまの八百萬ひかるや神のみともしの影』とたはむれしのみ記憶に残れり。されど作者は

すでになく。伯父君もすでになく。夜祭のさまも士族の生活と共にねとろへしと聞く。松風ひとり昔こひしと思ふらん。

同じ月の廿四日は和靈神社の祭なり。神輿はひる過ぎて御旅所に渡り。夜に入りて社に還り給ふを。迎へ奉らんとて町中の若者など。手にくたい松ともしつゝ前の川原に來り集まる。其ほのほは天を焦して暗なれども晝の如く。大地もくづるばかりの聲してなりわたるさま。戦場もかくやとぞ思ふ。女子どもは近よるべくも非ず。拜む人は社内の御供所といふあたりに入りこみて。岸より下に見えろしつゝ御かへりを待つ。太鼓の音ちかく聞えて。神官うちつゝき箱提灯ともさせて。扇づかひなどしつゝ歸りぐるが見ゆる間もなく。高張にとりかこまれて三つの神輿は今や川原につき給ふ。これ待ちつけて數千のたい松は其

あたりに集まりつゝ。廣き川原を三たびうちめぐりて。御社として高き石階を只走りに走りあがる。是を走りこみといふなり。れのれ十ばかりの頃。祖母君の給ふやう。汝來年は殿のねまへにつとむべければ。其後は祭見にゆくも叶ふまじ。今年こそとて。家僕にねほせてつれゆかせ給ひし事あり。今はつとめせぬ身も見ることあたはず。

二里ばかりはなれたる田舎に高申村といふありて。そこの鎮守鷲神社といふは。大むかしわがやの庭の祭神なりしを。いつよりか此村に遷したるといひ傳へし緣故にて。其祭にはわれよりも必ず參拜し。神主もわれをひきて正客となす事なり。九月十九日とぞおぼゆる。時は秋の末にて片山道をうちすぎ田の中などゆくに。菽水引野菊其ほか小草の花あまた咲きたる。堀りても歸らまほし。稲はいづこも黄ばみ赤ら

みて。はや刈りたるも残れるもあり。先づ御社に詣づるに。神主は幣うちふりつゝ。わが家内の武運長久などいひのる。今年づくりの村酒を芋大根など肴にてすゝむるかざりなき馳走にぞ。上なき興味はこもれる。此秋は誰が村の稻こそあれ。わが田のもおとるまじきをなど。だみ聲高くゑみのゝしる村人を一つ圓居にて。豊年を祝ひあふもたのしきためしなるべし。歌よみ文かゝんとするにも。事にふれてかゝる圓居ぞ思ひ出でらるゝ。

此月はすべて祭多き頃にて。至る所に旗うちなびき。さかもりの聲などきこゆるは。農事のをはれる祝をもかぬていとにぎはし。

冬になれば椎の實ひろひに袋などさげつゝ山にいる。落葉をかきわけてはひまなく見つくるもうれし。人ひとり梢にのぼらせてはゆりおと

させつゝあらしひひろふももしろし。夕暮さむく歸りければ。祖母
 上母上など山路のさまを問ひ給ふ。さしもなき事をめづらしがりてか
 たりては笑はる。夜に入れば嵐つよりぬ。今宵ふろしきを山にしきて
 んとていよく笑はる。今は椎よりもよき文こそほしけれ。されどさ
 しもなき事をめづらしがる癖はなほやまず。

朝なぎ (播磨洋にて)

男心をはりまの海の

朝なぎにわがこぎくれば

あはとみしあはぢの嶋は

ふなばたの右に立てる

藻鹽やく須磨の家居は

松原のひまにぞ見ゆる

波の上に木の葉うかべて

みだれいづる千舟百舟

親と子と艚をわしつれて

遠くゆくさまもれもしろ

うれしきは今日の朝和

うすがすむ波ぢの末に

少女子の眉引なして

たてる山いづこと問へば

舟人のこたへかたらく

あれこそは蜜柑のいづる

紀路の遠山

父の恩

われをうみわれをそだてし

母の恩海も及ばじ

われを愛しわれをしへし

父の恩山も及ばじ

何にたどへん

明治二十八年の年の始に寄海祝

あけわたる太平洋のなみの上に

かゝやきいでし日のもどつくに

もろこしの岸うつ波も日のもとの

名によびかへて今日は見るかな

春雪

朝菜つむ少女の袖にちりくなり

花よりかろき春のあはゆき

是もまたねもひはすてむ嵐山

はなまつころの松のあはゆき

春雨

春雨は夕ぐれ寒し初あられ

ふりしばかりに梅もこぼれて

春雨

この夕ふる雨さびし花見して

かへりし寺のかねもきこえて

春田

いづかたに鍬うちいれん紅の

むしろしきたる春の小やま田

沈む日のなごりの雲の面影に

かすむのどけき小田の夕ぐれ

春鳥

山里は霞のおくにふくろふの

聲もきこえて春うさびしき

春月

たきすてし磯の筈屋の夕煙

のこるばかりにかすむ月かな

朝

山かげは雲雀のうたの外にまた

ゆめふゝやぶる朝かぜもなし

仁

民草をうるほす雨は大宮の

軒もる月の夜露なりけり

霞める富士

(明治二十九年四月)

沼津にて漁車をあるれば。日ははや暮れて霞める星影花の如し。牛伏の桃よしときけば。先づ車を走らせて。そこの三島館に草枕を結ぶ。宿帳もて來れるを見れば。小中村關根の二君。これもけふ着きて此家にあり。歌よみておくる。

おもひきや同じなぎさに友寝して

へだてぬ波の音きかんとは

されどはや眠れりといへば。あすの事にしてわれも枕につく。夜しづ

かにして風もおとせず。波もきこえず。花のおもかげ絶えずわたるかき夢路に立てり。

夜はあけぬ。遠く近く入海を圍みて打ち霞む山々のながめ。屏風を引きめぐらしたるにやたとへん。盆石をおきわたしたるにやたとへん。渚には立ちなみたる松原おもしろきに。こなたの海は高き低き巖なつかしくあらはれたるなど。心ゆくかぎりなり。

二君來りてものがたりす。興更にふかし。是より朝の桃みんはいかにといへば。然るべしとて急ぎ打ちつれいづる事となりぬ。小橋あり。わたりてしばらくゆけば。廣やかなる松林にいづ。此あたりより見る富士。いふべくもあらず。霞は雪を包み雪は頂をおほひて。天女の肌こそ世にしらぬにほひもて満たされたれ。關根君いふ。昨日江尻にて

ながめし富士は今なほ眼を離れず。同じくは是よりゆきて見給はずやなど。いふく松原をすぎて。桃ある處に至る。聞きしもしるく。今をさかりと咲きほこる花。天も酔ふらん心地す。小中村君またいふ。三保の松原の桃こそ更に富士につぎての見ものなれど。我心つひに決しぬ。なほかしここし見めぐりて宿りにかへり。欄干に脊中おしつゝ春風を着に盃を擧ぐ。あはれ思はぬ興をて思はぬ望を高めつるは。抑たが情ぞや。

つひに二君は東して逗子に向ひ。我は西して江尻を指す。瀛車の中にはかにさびしくなりぬ。されど桃多き村はづれに。紙漉きてほしたる家などあまた見えて。窓の外春のいろことにぎはし。唯かへりみる雪のたかねの一步々々と雲にかくれゆくのみぞ世の中のさまなる。

江尻を去る一里ばかりの處に龍華寺といふあり。富士見る第一の地と
 きけば。先づ是にとこゝろぞす。車夫ほこらはしげに。羽衣の松の講
 義をなしつゝゆくほどに着きぬ。石段をのぼり案内こひて。寺の椽に
 こしうちかけつゝみれば。思ひ捨てつる雲上の美人も。ほのかに額を
 みせ又かくす。海のかたはいづことなくうすがすみたるに。帆船釣舟
 あまたゆきかふ畫の如し。三保の松原のここかしこうす紅なるは。誰
 か其花の名を問ひて後に知らん。美しとも美し。

目の前に家居むつましく立ちつゝけるは。清水港より江尻のあたり。
 其こなたに今こし道こそうぬりゝて一筋見わたれ。車夫の指をしる
 べにたどれば。倉澤より興津清水港のわたり。たゞ一幅に廣げられて。
 左の一壁にかゝれり。恰もよし瀛車は煙を吐きつゝ來りて。今ぞ薩埵

峠のトンネルに入る。

かくて久能山に至る。千八十二階の石段あへぎつゝのぼれば。のぼる
 まにゝ世低く人遠く。海更に廣し。あはれ四方絶壁削るが如き山を
 ひらきて。城を築き更に社を建てたる古人の心よ。偉大とやいはん壯
 大とやいはん。男兒成す事なくして朽ちはつべしや。思へ城は武田氏
 の手に成り。社は徳川氏の工に成りて。今なほ威名内外に震ひつゝあ
 るを。

社務所に案内すれば。神官内よりいでて鏡を開き。社殿へと誘ひゆく。
 従ひて拜殿をのぼれば。装束せる神官一人着座して神酒すゝむるなど。
 いとねんごろなり。

見あぐる處にかゝれるこそ。かたむけなくも水尾天皇勅筆の三十六歌

仙にて。維新の際浪士抜刀にて踏み込みしかど。是に恐れて亂暴をな
 さざりしと。音にきこゑたるものなるよ。
 櫻は山中にこゝかしこにありて。雪の如く霞の如く。常盤木の中に枝
 かはしたるこそ。浮世の外なれ。春風ゆたかに帆を孕ましつゝ。疊の
 如き海を撫で。あまれる力は時々來りて石段にたゞずむ人の顔の汗を
 吹く。
 夕かたふたゞび瀛車にのりて家路にむかふに。霞いよ／＼深うして。
 海のかなたの伊豆もみぬす。相摸もみぬす。逗子なる人は今宵の火影
 にひるみし桃の品定やなしをる。

初鶯

鶯の初ねめづらし

うめ一木たづねて來なく

鶯の初音めづらし

けふよりはつぎてなかなん

あすよりはなれてなかさん

ちる花のふかさもしらで

残る夜の夢のまくらを

なきさます聲も此聲

月かすむ夕山かげに

柴人のかへさおくりて

なきのこる聲も此聲

けふよりはつぎてなかなん

なれてなかなん

春の月

薄衣に顔をかくして

そら高くわたる少女子

たれにかく世を忍ぶらん

しろがねの衣のそでより

透き徹るひかりうつくし

こぼれ照る笑まひけだかし

霞む夜の花をたづねて

歌ふらん春のしらべは

星ならでたれかは聞かん

雲ならでたれか答へん

君が影うつす方には

風もたは波もなきつゝ

佐保姫は絹蓋さして

見にかくれ君を予送る

行くとしも見はぬ歩みに

おのづから生ひ先こもる

月をとめて

雉

すみれつむをとめの袖に

なれく／＼て来なくきゝすか

つばなぬくうなゐのおとに

おどろかであさるきゝすか

若草の妻あひたづさへ

たらちねの親うちつれて

けさ出でし家路やいづく

こよひゆかん宿りやいづこ

行きくるゝ花の木かげに

床しめて月やみるらん

しらみゆく小松がくれに

おきいでゝ露やすふらん

うた人のさまにも似たり

おもしろの鳥や

おもしろの世や

千里の春

(明治二十八年四月)

春晴千里。山また山。水また水。近き水は澄みて山の緑をうかめ。遠

き山は霞みて水と共に藍をながす。此間に一線を引き行くものは何ぞ。一列の漁車。いまや東京より東海を下りつゝあるなり。海に面して窓に倚る客。鉛筆と紙とを手にして寫しいだせるは。歌か詩か抑も畫か。

七砲臺邊波おだやかにして。高く低く群れ飛ぶ鷗。落花の風に飄るに似たり。帆を半ば張りて出でゆく舟あり。櫓をあやつりて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて探れども見えず。

松青きところ。色どりそふるに桃の紅なるを以てす。自然は此美をおくりて旅客をなぐさめ。詩人は彼美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野。山北の谷。人ごとに唯うつくしと叫ぶ。

三保の松原けむりわたりて春は畫の如し。磯にくだけて折れかへる波。

波路の末にうきたつ雲。何ものか造化の妙筆に漏れん。近き舟はゆけども遠き帆影はうごかんともせず。杳として見とめられたるは伊豆なるべし。富士は水彩色もてつくられたるが如く。窓の右に立ち又左にあらはる。

平原十里。麥は緑に菜種は黄なり。熱田の社を左に見て春風に吹かれゆけば。名古屋の城はまがはぬ影を見せそめたり。田夫は金の鯨を指さして妻と語り。行商は旅宿の可否を評して我好むかたへと人をすゝむ。

彦根去り草津來り。煙は早くも瀬田川に横はりて京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡も今は何れのところぞ。問へども答へず。霞にたゞまらるゝ遠近の山影。或は淡く或は濃く。鴛の浦風波に眠りて粟津の松原ひとり昔に似たり。

東寺の塔は睦ましく我を迎へて立ち。鴨川の水はなつかしく我をむかへて歌ふ。最愛の母にあひ。なつかしき妹と語るに似たるは。いつも京都に着きしときの心地なり。年一年よりも感情其深さを加へゆくを覺ゆ。

山紫に水あきらかなるところ。唯夢の如く現の如く。三條を渡り四條を渡ること日に幾たびぞ。躑躅を柴に折りそへていたゞきつれたる大原女も。いつしか我友となれる如し。如意嶽より吹き來る春風は。軽く我袖を拂ひ又糸長き堤の柳を吹く。

たぐひなき晴天は。花の如き少女をいざなひて。西へ東へと群れゆかしむ。さしつゝけたる日傘は。橋の欄干と共に水に影をおとせり。花

に誘はれて佛にまうで。佛に導かれて花を見る客。けふも清水観音の堂前をみたしぬ。舞臺のうへより見おろす人。舞臺の下より咲きほこる花。あたかも一幅の四條畫なるに。焼は此間に立ちて蕨餅めせなど呼ぶ。暫し休みてながめわたせば。淺黄に藍に霞みわたれる八幡山崎のあたりもおもしろきに。東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力こそたくみなれ。

燈火の影は水にうつりて星の如く花の如し。祇園の夜櫻みんとする人は神山へと向ふ。一もとの老木は枝を垂れて篝火のほのほにまもられ。寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれては顔を打つ。田樂を賣る聲。茶をすすむる聲。この花の前後に山彦をかへし來れり。夜はまだ早し。歸さには祇園町の都踊見にゆく人もあらん。

西山の花みる人は多く先づ御室を指す。松青く樓門赤く。茶煙たねだねにあがりて。花きはめて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳ゆ。鐘樓は昔を説きて香雲の中につまらる。誦經の聲遠くひびきて。鶯の歌どこしなへに高き梢にあり。

重なる岩根をふみしめて生ひたつ松。その間を點綴して咲きほこる花。嵐山の春こそ今たけなはなれ。小舟にのりて漕ぎゆく人あり。岸のこなたにてながむる人あり。一すぢの渡月橋は錦の如き袂をのせて。此大井川を横ぎりゆく。散るとなき花は風にたゞよひて主なき筏に落ち。ものいふ花はかたらぬ花にひかれて此岸にますく。咲き加はる。水清く岩をあらひて玉とくだけ。山白く煙をはなれて空にかゞよふところ。此美は彼美と相映じて自然の彩色をなす。坂をのびりて大悲閣に至れ

ば眼下にひろげらるゝ一幅の圖。柳櫻をこきまぜて恰も西陣を織り出だせる如く。又友禪を染めなせる如し。途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて。春ものさびし。茶店あれども客來らず。少女は落花を風に任せて眠り。兒童は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。暮色は東山をこめ。叡山をめぐり。やうく鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半かくれぬ。大文字の跡も姿をかくしぬ。紫に紅に藍に墨に見るくいろどられゆく山影。うすくこく青く黒く消されゆく人影。詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和。四望たゞ寂寞。かへりみれば西山もなく北山もあらず。和歌山に友あり。來れどすゝむ。和歌山は山のかたち魚の味。なにと

郷た器似にく故るなをもて常にわが好むところ。遂に京都をうしろにして桂川をわたる。菜種いよ／＼黄にして春さらに深し。麥穂をあらはすこと二寸。少女兩三赤き裾をからげて畑の中をあちへこちへどゆくは。花ある社に詣づるならん。春日あたゝかにてらして。隣村に父母の里を見舞ふ新婦も見ゆ。

漁車を下り大坂を経て更に坂堺鐵道に乗る。住吉の鳥居は松の木の間近くに我を送りて立ち。淡路島は霞のひまに遠く我を迎へて浮ぶ。波路の末にねもかげみせたる播州の山々。漁車をねりてもなほはなれず。沖の帆影と共に永く伴なひ來るは。歌よめどすゝむるにやあらん。

堺より和歌山まで行程れよそ十三里。其半なる處に茶店あり。蝸茶屋といふ。缺けたる茶碗。剝けたる膳。旅は却りて物足らぬこそ樂しけ

れ。花はちら／＼と客待つ車夫の背なかを撲つ。

路は登りになりて右に谷川ひく／＼ながれたり。椿紅なる川乎ひの道に鶯をき／＼ゆくたのしさ。此時の心。蝶ならで又誰かは知らん。雄の山の峠にも着きぬ。見ねろせば未來の路は白雲の間にありて春更に新なり。ねりのぼる人馬たゞ畫の如く。花を出で／＼花に入る。

紀の川は近く流れて帯の如し。名草山は遠く霞みて眉に似たり。其間に影を見せたるこそ和歌山城なれ。あななつかし。我しば／＼遊びしはかの麓なりしよ。一路の春風我を迎へて車は早くも地蔵の辻を行く。

紀三井寺は和歌山を距る一里にして遠く。東南のかた名草山の麓にあり。花見をかねて來り賽する人ひきも切らず風なく雲なく日あた／＼かに霞みわたる海原。すべて眼界の無盡藏なり。入江をへだて／＼人豆の如くなるは。和歌の浦の拜殿なるべく。左のかたには。鹽津の人家より大崎の鼻までたゞ／＼とに見ゆ。水あさぎなる波ぢの末に。煙の如く浮雲の如くなるは淡路と人のいふに。猶目をつくれば。それにつゞきて阿波までも面かげ浮ぶ如し。此間に點を打ち線を引きてゆききする舟。そも／＼いかなる詩人をか載せたる。

和歌の浦にわたりては芦邊屋といふ樓にのぼる。見かへす紀三井寺。晚霞の上に立ちて猶わがためにや語るらん。汗に浮べる牡蠣。鱈にもらる／＼鯛。たれか此風景に對して箸を取らしむるものぞ。友は盃を手にして片雄波の名所を説き。我は波間の夕日をながめて畫人ならざりしを憾む。

かへりて再び京都を訪へば。春くれんとして三十六峰煙雨の中にとてり。母衣かけてゆく車。傘さして来る人。三條橋頭また昨日に似ず。

海邊

をとめ子の眉引なして

うちけむる安房の遠山

大魚の汐ふくごとく

うかみたつ伊豆の大島

あらひては又たちかへり

かへりては又うちよする

白波は花かふいきか

磯菜つむ子のゆく方に

旅枕こよひはからん

ゆふ日かくれぬ

都踊 (京都にて)

大井川せいの紅葉か

龜山の岩根の波か

あつまれば散りて亂れて

亂るればまた連なりて

春風に舞ふは蝶

夜嵐に散るは花

花ならばまだ蒼なる

少女子のいづれ色香の

姉かいるとか

花かもみぢか

昔に似たり

月ねぼろなり。残雪をふんで里寺に梅たづねし春。川舟をとめて漁村の梢とひつる夕。昔の空も今宵に似たり。今宵の空も昔に似たり。

中山道

一昨日東海道を歸りたるに。今日また中山道の涼車に乗ることあり。上野は大かた青葉になりたれど。日よく晴れて霞みわたる四方のけし

き。西も東もかはらぬ春なり。あれに淡く畫がゝれたるは淺草の十二階。きのふ我を送りてあとに立ちたる東寺の塔こそ思ひ出でらるれ。至るところ麥生みどりに苗代小田は水肥にたり。されど瀬田の橋を中におきて黄金に染めなしたる平野十里の菜種の盛は。又みる能はず。ステーション毎に戸をおして入り來り又いでゆく人。まれに瓢を手にしたるもあれど。更に清水の花をかたるものなし。

柳

たちつごく岸のやなぎを

かせかけて風ぞいとよる

くりよせて波予そめなす
 佐保姫やこゝにありあて
 春のきる衣あるらん
 天をとめこゝにつどひて
 ほころびし霞ぬふらん
 眉はらふ顔もうつれり
 なびき舞ふ袖もうつれり
 水底に龍の宮ひめ
 ちからそふらし

蝶の舞

(雅樂協會の舞曲として)

ゆくへはてなき春の野に
 いざうちつれて遊ばん

かすみに残る松かげの
 花もこなたのながめにて
 かの岡につくしつむ
 少女のかげも見えたり
 ふけやふけや春の風
 童の花に草の葉に
 遊びつかれてわが眠る
 夢をさまざまで吹けや風
 ふれや〜花の雪
 くさの緑もかへすまで
 遊びつかれし少女子の
 道をのこしてふれや雪
 風も雪も草も花も
 われになるゝうれしき

なごりをし加すむ夕日におくられて
 わが友となるがたのしき
 野邊ゆくをとめわれもまじらん

修善寺

世にひろき伊豆の三島の
 神風も吹きやかへけん
 氏守る八幡のみやの
 宮人もいのりやすてし
 源の同じながれは
 異かたにせかれはてつゝ
 秋寒きかた山寺の
 苔水ときほしはこゝか

ふるづかの若木の桃の
 花の上に朝風わたる

春もある世を

寺の門前市をなして。六あみだまうでする善男善女ひきもきらず。ねもへば彼岸の中日なりけり。歸さ待ちにて道に店ある商人は。孫のみやげを聲々にめせくとすむ。

六阿彌陀

紅梅の如きほゝづきは。小さき籠にもられて念珠のかた手にて提げられたる。家に待つ孫。けふはいかなる幸福ぞ。學校よりかへりて見つけたる心地こそれもひやられる。人はいふ。上野のひがん櫻まだ少し

早しと。さばれ來迎の光の前に。娑婆の春をみるも又たのしかるべし。

廢物利用

れのれ毎月一回埼玉縣の岩槻に臨講する事あり。ゆく毎に六時間あまりも車夫またせれく事なるが。其間あくびうちしつゝ門の闕に腰かけをる氣の毒さ。我等ならばとてもねたふまじとぞれもふ。此頃わがをしふる女學校には。あみものはやりて。教場にも持ちゆき。時間いたれど教師の來るまでは。書物さへねしのけてかせぎをるを見かくるが。まさにかれとは正反對なり。甲は我事のみを固守して廢物利用をしらず。乙は廢物利用を濫用して我つとめをも怠らんとす。

笛の音 (唱歌)

一 梅ちるゆふべの山里に

ひとこに響くは誰が笛ぞ

二 夕月しづかにほの見えて

くれゆく木陰は誰が宿ぞ

三 流にまじりてたけくに

聞こゆる笛の音誰が里ぞ

悪戯

一雨さつとねとし來て。落花霰の如く地をうつ。裾を吹かれてたゞ
む少女。ふいきの山路に迷ふに似たり。春風も時として此悪戯をなす。

閑窓

山吹は半ちり。若楓ひとり暮春の色にほこれり。閑窓人なく。香の煙
のみ空しく机のほとりをめぐる。美人は去つてうしろの野に雲雀やき
くらん。読みさしたる小説は風に吹かれつゝ琴のかたはらにあり。

オルガンの聲

園春中しづかにして。緑煙の如し。老婆小娘こゝかしこに別れて草を
採る。オルガンの聲は絶えず松のあなたに響く。

春の月

紫にうす紅に

霞みつゝ暮れゆく空に

月ひとりわが世をしめつ

わが戀ふる少女のかほか

さほひめの神のねもわか

天地のしづけき聲は

野をねほひ山をねほひて
波もなき水にうらうかぶ
春の夜は松にこたふる
山彦のひときもたはて
更けんとすらん

柳

山もとの一もと柳
朝風になびくを見れば
あな戀し昔のはる
あなこひし別れし人
かの枝にかゝれる月は
もろとも見しかげなるを

梢よりこぼるゝ露は
もろともに見し色なるを
夕風に糸よる見れば
たゞもとの春

柳

我妹子が手染の糸をかけてほす
よせ木の柳にだ垂れにけり

夕花

此山の花ねもしろしいかにせん
ふもとにひよく入相のかね

山吹

鮎子つる子らはかへりし里川の
きしの山吹ちりそめにけり

波をやく夜半のかゝりの面影に
躑躅
川そひつゝ花さきにけり

古寺の名残をとへば散りのこる
すみれ
瓦の上にすみれさくなり

磯近くねりて貝ほるあまの子も
海邊春
鳥かどみねてかすむ春かな

春の歌の中に
月になる道ねもしろし今日もまた

ゆくてのわらび折るとせしまに
大井川を蝶の渡るを見て

春風にふきさそはれて東路の

たびぢやてふも思ひたつらん

濱名湖をわたる

かすむ日の海ねもしろし遠近に

つりする舟も見にかくれして

關原をすぐ

苦むしゝ屍やいづこせきが原

はる日うらゝに山がかすめる

京都にて

人事はかり行く世に東山

花のいろこそむかしなりけれ

何となくものなつかしき夕ぐれに

かも川づゝみはるさめずふる

粕壁の藤

粕壁のわたりに名高き藤あり。此日曜には必ずと里人は文ねこす。浅草より馬車に乗りて千住、草加、越谷など打ち過ぎつゝ。春くれ夏來らんとする村里の景色をながめゆく。いとたのし。田づらはいづくも蓮花草の眞盛にて。唯紅の筵しきわたしたるやうなるに。賤のめども鍬かたぎつれて。二三人など畔道をゆくも畫に似たり。打ちかへさるゝ土こゝろあらば。花のため今しばしとやいふらん。

眺望

はなだもて染め渡したる海の上に
ちりたる墨や沖のつりふね

麥は緑の波うたせつゝ村を圍み森を繞る。ねもはぬ方に日傘のゆくは。父の里見舞ふ花嫁にもあるべし。麥の穂を抜き笛としつゝ。吹き鳴し來る男の童は。魚の群れゆくに目をとめて今う前の土橋をわたる。粕壁の町にて約しつる人々は待ち迎へたり。馬車に別れて右に折れ。鎮守の社を左に見て興じゆけば。古利根川は來りて路を横ざり。葦の若葉を浸しつゝうねりく流れ去る。藤は一つの幹より枝さしひろがり。長さ十八間巾五間の棚にう作られたる。それより幾千幾萬ともなき紫の花房。氷柱の如き瀧波の如くしなひ垂れて。下ゆく少女の顔に映じあひたる。美しさすべていふべくもあらず。櫻は吉野といへど。梅は月瀬といへど。藤の名所はいまだしらぬを。豈れもはんや。帝都を去る十里の地にして。此みものあらんとは。花房の長さは去年に劣れり

といへど。なほ四尺はあるべし。三百年來の木なりといふも遠くはたがはじ。

茶店ありて鮎飯酒などを賣る。いとにぎはし。客は花を二房三房づゝ請ひ取りて。傘に挿しなどしつゝゆく。さながら藤娘のさまよなど笑ふもあり。

夕ぐれまた里人に伴はれて春日部社に遊ぶ。一の鳥居に新方總社と頼打ちたるをみれば。此あたり古の新方庄のなごりなるべし。今もやしろのうしろに新方堤の名ありとぞ。

老木の木立に包まれたる社壇いともすどきに。いづこならん。鳥の二聲三聲なきいでたるなど。深山めきたる春のくれなり。さはいへ風かろらかに若葉をはらひて花にもまさる香のするはたごなるべしや。

遠近の村里くろくかすみたるに。うす紅なる火影見ゆそめたるこそ身にしむなれ。

一夜のやどりは里人のなさけにて。笠屋といふにぞ定められたる。つかれて寝んとすれば。藤の折枝は枕邊にありてもものいはまほしげなり。いざ來れ夢に美人とかたらむ。

れんげさう

沈む日のなごりのいろに

そみわたる田づらうつくし

さほひめがおりてほしたる

紅の花のむしろか

其神のかすみのすそか
むかしわが摘みてつなぎて
おもふどちたすきにかけて
遊びつる花は此花
ともに來てつみたる友の
姉妹いまはいづくぞ
ふるさとの春はかはらぬ
おもかげにして

山ふところ

峰高くふりさけみれば
のぼる日の光もとほし

谷深くながめおろせば
ゆく水のおとも聞えず
うぐひすの聲するかたに
ほととぎす初音かよへり
卯の花のほふ岩根に
山ざくら咲きぞ残れる
かくばかり浮世にとほき
足曳の山ふところを
巖をると迷ひ入らずは
夢にだにありとしらめや
斧の柄を朽たしゝ人の
そのかみもおもひいでつゝ
肱まくらする

花賣る翁

一

佐保姫の春のたくみを

肩に負ひ呼びゆくをぢよ

有明の月ふみしだき

夜をこめて家路いでけん

ものいはぬ花のかずく

藤や姉つゝじや妹

今朝はまだ露にぬれたる

その笑顔あはれ

二

鶯の今朝なく窓に

をぢ呼びて立てる少女子

のこる夜の夢やぶられて

見し花のなごり戀ふらし
ふぢつゝじ取りて予持てる

けさはまだ梳りもあへぬ
こぼれ髪たれはらへどか

春のかぜ吹く

萩の若葉

萩の若葉地をぬくこと六七寸。植木屋來りて今の時刈らざれば花によ
からずといふ。事になれざるものは。ひたすらのばしてこそと思ひし
ものを。子孫の教育もまた然らん。

春の水

山吹こぼれて。春の水あさぎに流れたり。此下をこぎのぼしこぎくだす小舟二三艘。十四五の男兒ははだぎ一つになりて竿を取り櫓をあやつる。日は長し未來は遠し。見る我さへに心ちのづから若やく。

少女十三

高からねどもけはしき岸あり。上はたひらにて春草の中にやさしき花も三つ四つ見ゆ。少女十三。袂だすきしたるが。すでに座をしめてこちへと招けば。妹なるべし二つ三つもをさなきが。両手を引きあげられてやうくのぼりぬ。風はやはらかに來りて。ふさやかなる髪をなで。又手にもちたる花を吹く。

松二木

(大樽三十五年祝典唱歌)

一

五年の春を五たびむかへ來て

緑さかゆく松二木

千代の根ざしをことしより

かためて雪に聳ゆらん

なほちひしげれ枝ごとに

つるのよはひをこむるまで

なほちひしげれもどことに

かめの齡をのぶるまで

二

くもりなき月日のかげを大空に
 ならべてあふぐ國民の
 いはひの聲はふじのねも
 くづるゝまでに響くなり
 うたへやうたへ手を拍ちて
 ちごよ少女よ大丈夫よ
 めぐみあまねき君が代の
 千代のはじめの今日の日を

春の御輿

朝波に寐貌つくるひ
 夕波にゑまひうつして
 さほひめの神の御輿を
 池の上にすゑたゝせれば
 山吹はもすそぬらして
 舞姫と御まへにつかへ
 藤波は袖打ちはへて
 御すだれを装ひ奉れり
 あもしろの神のおましや
 なつかしの神の御輿や
 かくながくどごまりませと
 鶯もこがれこひしを
 雲雀もなげきしものを
 ぬば玉のひとよのあらし

いづかたに御供つかへし

いづかたへ御輿たしせし

舞姫のすがたもきねぬ

御すだれのゆくへもうせぬ

波の上に敷きわたしたる

浮草のみどりのしとね

これやさは夏をまもりの

神のにひどの

苔の色

寝すこして起きいづれば。湯ははや笙をならして枕邊にあり。雀三つ
四つさへづりかはして。朝庭ものしづかなるに。苔のいろのぬれたる

は。雨の名残なるべし。雪とこぼれたるは何ぞと問へば。少女はゑん
じゆの花なりとこたふ。

フートボール

うらくと霞みわたれる空は。暮れんとしてはまだ暮れず。ものより
歸るさに見れば。近きあたりの書生なるべし。五六人ひろやかなる芝
生にあつまりて。フートボール蹴あそぶ處あり。高くあがりては黄昏
月の如くしづかに落ちきたるを。人々あらそひおしたふしつゝ。我さ
きにと両手にうけ。或は蹴そこなひて横に飛ばすを。かたへの童が馳
せゆきて奪ひとるなど。いとにぎはしき見物なりけり。彼等がために

こゝちよげなる春の風は。時々に来りて赤く熱き顔の汗を吹く。

春のなごり

(三條内大臣の御墓にて)

散りつもる花の上ふく

寺山の春風さむし

いざゆきて御はか拜まん

天の下のかためとなりて

大君のまもりとなりて

きのまふでつかへし君が

八千とせのすみかはこゝろ

亡き魂のありかはこゝろ

心なく木づたふ鳥よ

ゆく春のなごりはなれも

をしとてやなく

首夏

わかみどり涼しき色に

そめかへて立てる岡山

きのふこそ土筆つみしを

きのふこそ蕨をりしを

うちわたす畑の青麥

いつしかと赤らみわたり

そら豆の花さへさきぬ

茶林に葉をつむ少女

うたもきこにて

首夏月

桑つみてかへる少女やねくるらん

わか葉にかすむ夕ぐれのつき

山家残鶯

夏もなほあけがた寒き山里の

わか葉のねくにうぐひすのなく

早苗

時をわし雨のめぐみに此里は

うゑれくれたる小山田もなし

早苗

植ゑはてし小田の早苗に五月雨の

めぐみのつゆを見るあしたかな

夏朝

旅人が朝ふむ野邊の草がくれ

今さくゆりのはなも見分けり

橘

さしすてゝねんと思ひし柴の戸に

花たちばなのかをる夜半かな

夏草

旅人をうづめてしげる夏草に

みちしるべせし石もしられず

撫子露

朝日さす庭の撫子一つづゝ
こぼるゝ露のうつくしきかな

ひるがほ

風なびく岡のひるがほ里の子の

鎌にもれたるつぼみなるらん

玉

月よみの神のよそひの眞白玉

みだれて野邊の露となるらん

蝶の夢

菜種の花に晝寝する

こてふは何を夢むらむ

いつか雲雀に身をなして

うたひ舞ひゆく天の原

月さへ友となしはてゝ

あくよあらじと思ひしを

ねもひかけきや姫君に

めされてのぼる殿の上

赤き房もてむすばるゝ

籠に住む身とならんとは

歌聲断たば罪を得ん

故郷したはゝ寵絶はん

あなうれし夢はさめぬ

ふたゝび胡蝶の身を吹くは

ひろき世界の春の風

さめてねもへば我ばかり

樂しき生れは世にあらじ

我庭の夏

いつしかわが庭の夏も來りぬ。つゝじこでまり盛やうくすぎて。櫻の實は乳兒の指ほどにこぼれそめたり。物置の長椅子とりいだして若葉の下風に吹かるれば。子どもは袂をたすきにかけて。金魚池ほると庭の片すみにあつまる。

胡粉の鳥

長雨やうやく晴れんとして。松原を色どりわたす夕日花やかなり。早苗ゆたかに水こぼて。みどりすどしげなる小田また小田。明日は村の鎮守に禮まうでする老人もあるべし。白鷺三つ四つとび去りとび來るは。みどりの紙に胡粉もてゑがきたるやうにて。詩人の眺望まづは富みたり。

瀛車の道

一日上野より瀛車に乗りてものへゆく事あり。六月のはじめなれば。薄縁にそめわたしたる若葉のにはひ。見わたすかぎりなつかしからぬ

はなし。花もあれど紅葉もあれど。しめやかなる野山のけしきは。春
くれて夏なほ幼き頃にしくべくもあらず。

古寺の庭に紅つややかなるは若楓なるべし。ちりのこりたる薔薇の花
も。三つ五つこなたの垣根にみゆ。をぐらき葉櫻のかげには。一人の
老翁箒をとどめてわが車の馳せ來るをながめつゝ立てり。

里すぎて田の中を行く。苗代は水よりいづる事三四寸。ときをわがほ
に榮けたり。牛おひ入れて泥ふかくありたつ賤の男をみれば。農事は
今よりいそがしからんとす。桑つみかへる少女のみちには。咲きこぼ
れる卵の花雪の如し。

麥は刈しほなるべし。天地みどりなる間を色どりて。あからみわたれ
るこそうつくしけれ。鎌とりもちてつかくくと刈りゆくもあれば。東

ねて家に運ぶもあり。あはれすみなれたる麥生の雲雀は。ふしどをう
ばゝれて夕ぐれかへるみちや迷はん。瀛車には畫師書生あり。窓に向
ひてかはる景色をうつしつゝゆく。傍に立ちてゐたる田舎娘はめづら
しがほにさしのすきて。筆のゆくかたに目を送れり。我もし畫をしら
ば。是も好き畫題とならましもを。娘はかんざしをねとして身をか
ぐめ。畫師は筆をとどめて鳥の飛ぶかたをみやる。

若葉の雨

花はみなわか葉になりぬ

鳥はみな古巢にゆきぬ

佐保姫の御手もておりし

春の野のにしきもみだれ

かすみの衣もたはて

しろたへの袖とかはりぬ

きのふこそ若葉つみしか

けさこそは茅花ぬきしか

佐保姫の神のみこしは

いつかたをけふはゆくらん

うたおもひたゝずむ庭の

苔のうへに雨うちこぼれ

やなぎ花ちる

郭公

いざきなけ山ほとゝぎす

雨はれて月あもしろし

いざきなけ山ほとゝぎす

卵の花もいま盛なり

松風も琴とるよひず

川水もつゞみうつ夜ぞ

都には忍ぶ初音も

われならで誰かきくべき

古巢いでゝかたれやなけや

山ほとゝぎす

隠れたる骨折

碑文をたのまれて自筆にて書く事あり。書生をして字數を割りつけたる野を引かしむるに。暑き夏の日を半日つひやしてやう／＼出來あがりぬ。書くにもまされる此いたづきを。彫りあがりたる碑文よむ人いかでか知らん。先年徳川家の追善に能のありける時。唐人相撲といふ狂言の替古料をあたへられし話は聞きあたるが。世にはかくれたる處に骨の折るゝ事こそ多けれ。

床屋の評

床屋のあるじ客にむかひて。鎌倉ほどねもしろからぬ處なしとかたる。

いつ遊びしうと問へば。横須賀の歸りに汽車にて通りしのみといふ。かたへに新聞よみあたる書生あり。手を拍ちて曰く。目錄を見て批評を書く記者は。御身のたぐひか。

關口

朝とくねきて近きあたりを散歩する。いとたのし。關口の堤にたてば。早稻田の森は濃淡の筆もてかきわけられつゝ打ちむかはるゝに。いづことなく時つくる鶏の聲もこだまにひゞく。水車を聞きすて、草の中道わけゆけば。薄はまだそれとわかぬぞ。からす瓜の花などまづすいしげにすみいだされたる。かへりみる目白の梢の黄ばみたるは。日の

いづるなるべし。いざや家に至りて今日の新聞をまづ開かん。

葉櫻

吾妹子が桑つみはこび

こがひする宿の軒端を

れのが世とれほふ葉櫻

その花を雪とちらして

いでたちし春のゆくへの

車路を留めもあへぬに

若みどりさしそふ枝の

葉かげには玉かあらぬか

紅の實さへむすびて

友すゝめ木づたふまにま

鈴なしてゆらぐも涼し

こぼれくる露もなつかし

いざさらば夏にや馴れん

いにし春なほや慕はん

たらちねに捨てゝいなれし

みなしごの人手にかゝる

心地のみして

時鳥 (唱歌)

一

へだてぬ谷間にそだちし時鳥

あすより別れんよその野に山に

忘るな今宵まで

住みつる山かげを

二

はねうちかはしてきのふは諸共に

遊びし谷間を今夕立ちいづる

なのれや初聲を

雲井のそらたかく

天を楽しむもの

大宮より岩槻まで往復の車をやとふに。車夫はわがやにより。待つ間
つれづれなりとて。持ちいづるを見れば。「太陽」なり。家のさま八疊

一間なれど。床の間ありたんすありて。遊びある幼児。腹懸などきた
なげならず。庭には萬年青の鉢五つならびて。朝顔こゝちよく青竹に
はひかゝれり。あはれ田舎には。車ひきても天を楽しむかくの如きも
のゝあるにこそ。

夕立

栗の枝を脊にさして焼土の上をあへぎゆく馬。しほむ田面に水引かん
とて日にさらされつゝ車ふむ少女。流るゝ汗をぬぐひもあへぬに。晝
師はすゝしき木陰より之を寫せり。詩人は車上よりながめわたせり。
雲の峰忽にくづれて夕立さどれとし來ぬ。走るものあり叫ぶものあり。

畫師はぬれゆく馬のゆくへに目をとよめ。詩人は歡び歌ふ民の聲に耳をそとぐ。

卒都婆

春山の霞の下に

もはそめてなびきし二葉

ねもひきやかいらんものと

古寺の朽木の卒都婆

秋風をふく

小鳥 (唱歌)

一

飛びわたれ小鳥

ねぐらよきかたに

岡の木は高く

水音はきよし

二

飛び遊べ小鳥

高く又ひく

花の垣に

谷川の岩に

三

飛びうたへ小鳥

わが好む歌を
つかれなばとまれ
わが好む枝に

戸隠詣

(明治二十八年七月)

海面を抜くこと七千餘尺。白雲の上に屹立して信越の境を爲せる山あり。名づけて戸隠といふ。此山に祀られ給ふは。神代のむかし天の岩戸を取りて放ちしといふ天手力雄命にして。平維茂紅葉狩の物語をおこせるも此山なり。おのれ今年長野に旅寝せし序に登り試みんとて。草鞋踏みかためつゝ山路にむかひしは。七月一日の朝なりき。

昨夜の雨なごりなく晴れて。日影やうやく暑くならんとする頃。善光

寺御堂の屋根を右に見つゝ長野町を出ではなれ。湯禰神社の前をすぎてゆくに。道は一步々々と爪さきあがりになりて。遂に急なるつらさをりの坂路にかゝる。流るゝ汗は瀧なして顔をつたひ肌をうるほせども。右も左も今を盛と咲きつゝく卯の花の面白さに。苦しどもればならず。同行は植物學者にて殊に此山路には馴れたる人なれば。花あるごとに折り取りては。是は螢袋なり彼はうつぼぐさなりなど。まだ知らぬ名を教へくるゝもいどうれし。

荒安といふところに茶店二軒あり。長野町よりこゝまで一里とぞいふ。袂時計を探れば巻き忘れしにや針は九時二十分の處にあり。老婆日の影を見て正午なるべしといへば。巻き直しつゝさらば飯をとあつらへて二人膳に向ふ。石の如き麥飯。添ふるに山吹よりも色濃き澤庵を以

てす。亦山中の一美味とぞればほし。况んや老婆がもぎ来てくれたる
ゆすら梅に渴を醫しつゝ。高しと思ひし山上の松の眼下に立てるを見
れろすの快あるをや。

なほゆきくゝて一里ばかりも來にけらし。遠く木の間に見は隠れせし
飯綱山は近くなりて。前にあたり又右に立ちたり。此裾野に沿ひゆく
間を飯綱原といふ。天を浸せる緑のうへに風こゝちよくわたりて。興
つくべからず。蕨は今ぞ一二寸。土を離れて拳やはらかに打ち靡ける
も。さながら暮春のさまなり。花は黄なる。紫なる。赤き。白き。さ
まぐゝありて星の如く玉の如く。草葉の間を粧ふさへあるに。鶯雲雀
ひまなく歌ひかはし。折々は雉の聲もけんくゝと山彦にひく。あは
れ彼里の夏を出で、此山の春に入るの人。われらが外には唯ひとりふ

たり行きあふ參詣の道者のみ。

原やうやく盡きんとして一の鳥居の下に來る。幾雨露にさらされけん。
戸隠神社としるせる金も半はげて。笠木の幣は申のみを殘せり。草の
下に石の柱の横たはり居るは。地震にたふれしなごりなりとぞ。今は
白木なるも中々たふとし。

飯綱山やうく右に開きて。雲間より削り立てたる如くのぞき出でた
るは。我指す戸隠なるべし。あれ見給へといはるゝ方に目を注げば。
ところくゝに雪は見えたり。もはや中社までは五十三町のうちになり
ぬ。

大久保といふ村あり。暫し休みて草鞋しめ直し顔洗ひなどするに。風
は早くも來りて棚なる葡萄の蔓を吹き。畑の麻の葉をわたる。あなす

いし。何か食ふものありやといへば。名物めしあがれとて。砂糖かけたる餅を二盆もちいでたり。汗もかわきつ。腹もよし。いでや勇を鼓して進路に就かん。

日はやと傾きて。山陰すいしく蝸も鳴きいでたり。中社に着きたるは五時過にやあらん。同行の人は今夜の宿を頼まんとて。神官久山氏の家にゆき。我は先づ御社を拜まんとて鳥居に入る。高き石段を挟みて立ち茂る老杉の間より。物舊りたる神殿の見ゆそめたる。身にしむさまなり。社頭人なく山水ひとり神代の歌を調ぶる心地す。

かねては奥社を明日にせんと思ひたれど。朝は大かた霧深きに。足さへ疲れずはと。馴れたる人のいふにまかせて。深山の晩景また興あらんとて。今一勇氣いだす事にさだめ。うちつれて猶わくへくと分け

入るに。空はまだ全く暮れず。躑躅たもしろく咲きみだれて。他の鳥は聲絶にたるに。鶯ひとり右より左より鳴きたつる。仙境の春こそとこしへなれ。今ははや我等が外に人影もなく。星おぼろに見ゆそめて。木の梢岩のかどなど。墨もて隈取られゆくさびしさよ。

鶯もはやきこえず。時計の針も既に見えず。夜色蒼然四邊を圍みて。鳥の聲のみ高き梢にあり。前を望めば。立ちかさなる林は空を隔て。纔に洞の口ばかりの路を見せ。後をふりかへれば。わが來し方は數歩の地をのこして。木々みな暮靄模糊の中に入りぬ。身に降りかゝるは露か夜霧か。思はざりき。かゝる處に郭公の初音を聞かんとは。さかさ川の流れ暗を破りて。餘響なほ水のゆくへにあり。

鳥居をくゞれば。道ますます暗うして森ますますすごし。隨身門のあた

りはや人間界の聲もひゞかず。わが踏む足音を木靈の返すあるのみ。奥社に着きて石段をのぼれば。境やと開けて人の顔なほ辨ずるを得べし。白衣に袴したる老翁の神燈をそなへて社壇を下り來たるが。我等を見て遅き御參詣かなといふ。

本社は山の半腹に片かけて作られたるが。屋根には苔むし草ねひて。たいさながらの舊天地なり。晝ならば委しく見るべき事もありなん。今はたい薄ぐらき燈籠の火影に奥ものすこく拜み入るゝのみ。

少し下りて九頭龍の社といふあり。又御供所といふものあり。こゝにう彼老翁は住み居るといふ。立ちよりて茶一つ振るまはれても行かまほしく思へど。夜の更けんを恐れて疲れたる足ふみはげましつゝ下りに向ふ。ぬれたる如き雲のあなたに月は時々形を見せたり。

かへりには郭公も鳴かず鳥も聞えず。水ねと高く響きて夜は唯しづかになりゆく。霧また雨の如く落ちて。目に觸るゝ花も無く草木も無し。奥社より一里の路を半も來ぬると思ふほどに。かなたより足音たてゝ來るものあり。近くなりて聲かくるを聞けば。うれしくも久山より提灯もたせてたこせつる迎なりしよ。つまづきつる足の痛みも今はものかは。

迎のものは馴れたる道とて。木の根岩かどの分ちなく。日和下駄からくゞと踏み鳴らしつゝ。明日は雨なるべしなど口ずさみゆく。こやつ思まはしき事を言ふものかなと思へど。我はどかく二足三足ねくれがちなれば問ひも返さぬに。同行に語るを聞けば。此山の蕎麥がちきとて。蕎麥の肥しにする草を刈りそむる日は明日なり。其日に降らぬた

めしのなければ。旦那方も大かたぬれ給はんなどいふほどに。中社の鳥居前にも下り來りぬ。神燈の光も霧にしめりてそいろ寒きに。雨もつ雲は杉の梢を掠め山を撫で飛ぶ。宿りさだめて湯あみし座敷に歸れば。九時も過ぎぬ。座敷は數十疊の廣間なれば。寒氣肌を侵して。十一月頃の時侯なり。我はシャツの上にてドテラ二つ重ねても堪へがたく。障子を締め火鉢をかゝへなどして。手帳を披けば。人は摘み來し草を集めて押葉を造る。間もなく膳來り銚子出で。主人袴がけにて盃とりつゝいざと勸む。見れば綿入のきものに同じ羽織を重ねたる。いつまでかくてと問へば。山にて單衣を着るは土用の内十日なるべし。御話申せばまことと思すまじけれども。梅の櫻よりも遅れ咲くこと。雪の十一月に始ま

りて四五月に終ることなど語りいでたり。椀の筍。皿の岩魚。いづれか美味ならざらん。此俗氣なき物語を聞きつゝ。寒氣と空腹とを一時にいやさんとするほどに。いたく酔ひぬ。待ちに待ちたる有名の戸隠蕎麥は最後に來れり。飯櫃なりの筥に盛りて添ふるに山葵葱海苔を以てす。七千尺以下の下界にありて味はふものど如何でか比すべき。酒すでに十二分なるに。腹また神樂太鼓をも奏しつべき勢なれば。此上は枕と夜着を借るの外に希望はあらず。あはれ紅葉の陰ならましかば。夢に鬼とも戦ふべきを。夜は明けたり。庭の梢に鳴く聲を問へば。いかるがなりと友は教ふ。雨になれるを知らするにやあらん。『簀笠きよ』と呼ぶに似たり。いでや降りの強らぬさきにと。食事など果てて暇を告ぐるに。主人は社務

所に出でたりとて。下男やうのもの氷蕎麥など持ち出で、門まで送りきたる。今朝はきのふの路をかへて寶光社に詣で。それより又一の鳥居にいで、同じ原をゆくなり。

雲たちまちに來りて前をねほひ。行き過ぎて顧みれば、又おとを遮る。されど思ひし如くは雨の足早からざりしこそうれしけれ。森の中には郭公いかるが山雀など。口ならしがほにかしましく叫ぶ。

きのふはけだかく緑の肌をあらはしたる飯綱山も。白衣のうちにかくれたり。うしろには戸隠山も見えず。寶光社も見えず。山氣ひやくかに衣を徹して。山下水のねと秋に似たり。

原にかゝれば雲雀の聲きのふにまして湧きいでたり。あまりの面白さに。路の早蕨折りすさびつと吟じゆけば。野薔薇は浮世の外の香を送

りて左右より袖をとくむ。

野末はるかに打ち望めば。四阿あたりの高嶺なるべし。やうく雲と別れて青き空さへほのみなり。多望なる天氣にもなれるかな。遂に雨にもあはずして山も半は下りはてぬ。

さるにても残りをしきは。戸隠の裏山を見ずして止みぬる事よ。神の遊び天狗の歌ふ奇しき岩山とこそ聞きつるものを。されど斷崖を攀ぢ野宿をするなどの危難ありといへば。人も止むるによりて思ひとまりしなり。あはれかの奥社の山も晝なりせば。象窟獅子窟天狗窟などの靈境も見るべかりしに。さはいへ。七月雪ある山を分けて郭公きくしは。これも一夜の夢かあらぬか。

七月の初つかた信濃の戸隠山にのぼりける時

奥山は夏の渡りしあともなし

いづなが原のうぐひすのこゑ

昨日今日土をはなれし早蕨の

なびく末野にきゝすなくなり

雨になる雲のゆくへやしらすらん

簗笠きよと鳥のなくなる

とがくしの山のとかげにさく花は

いつまで春のこゝろなるらん

夏衣袖に風まつさと人に

見せばやみぬの雪のむらぎに

いかるがの山彦かへす聲たにて

杉よりあつる霧のしたつゆ

白雲の幾重の奥になりけり

いでこし山のすぎのむら立

夏草のしげみの露にぬれゆけば

たゞあしもとになくほととぎす

雲雀あがるいづなの原の行末に

はれたる雲の色も見えけり

布引山 (信州北佐久郡)

千曲川ながれにそひて

天ろとる岩山たてり

いつのよに神のけづりし

いつの世に佛の立てし

八千とせの雨にあらしに

みがくられて雪なす肌を

うちおほふ鷺の衣よ

風なびくみどりの袖よ

立田ひめ染むらん秋の

色までもおもひやられて

くしき岩山

あやしき高山

家にある乳兒

病み臥して家にある乳兒

よくやなりしあしくやなりし

いかならん寐てやあるらん

片時もはやくあはんと

いそぎくる車のあゆみ

今日はなど常より遅き

雨ふりぬ道はぬめりぬ

かなたより走せくる人よ

子のやまひあしと告げこし

使にやあらぬ

ジヨソソ嬢

ジヨソソ嬢はあめりかの人。一日觀世能樂會の能見に來りし縁を以て。しばし余の噂するときげば。二月十四日はじめて雪をふみて本郷

西片町の家に訪ふ。齡四十をも越にたるべし。一見故の如く。うちど
 け言葉をかはしつゝ。みづから立ちはたらきて。珈琲をすゝめ菓子
 すゝめ。もてなさるゝさま。中々日本じみたる人なり。嬢いふ。過日
 のお能いとおもしろかりき。實は日本の踊れもしろからずとおもひし
 かば。お能もまた然らんとおもひしに。格別のおもしろさ。今に忘れ
 ずと。謠ことにれもしろく。世界中たぐひのなき音調なりとて。二つ
 三つ猶きゝたしといふ。余は羽衣と笠の段とをうたへり。『春のけし
 き』『れもしろや』の二つ日本語のわかりたるがうれしきとて。嬢いた
 く打ちよろこぶ。

熊野をうたひしに。嬢いふ。上野の花ざかりほど世界中にうつくしき
 ものあらじ。米國の人みな薔薇をあいし。我またあいすれども。櫻は

なほ是よりもあひす。心にうれひありしとき。かしこを散歩して命を
 のばしたる事も。しばしくなりと。

暇を告げていづれば。自らラムプを持ちて玄關まで送り來れり。カム
 エゲンの聲いまだきぬ。梅ふく風いづくより來る。

魚飼ふ宿

鹽なす池を我世と

黄金色の鱗ふりつれて

むれあそぶ小魚うつくし

藤の花こぼるゝ風に

輪をなして波は立てども

投げてやる麩をば沈めず

浮びくる魚は隠さず

日は長し夕ぐれおそし

物學びかへるうなわか

手ずさびに魚かふ宿を

あすも来て見ん

姫百合

夏草のしげみの中に

忍みそめて立てる姫百合

一花を折りてかへりて

瓶にさし机に立てよ

たらちねに見せましものを

あなにくの川の流や

かの岸をよそにへだてよ

わが心しらず顔にも

歌うたひゆく

大和めぐり (明治二十二年七月)

ふみの上にては明暮親しうすれど。足いまだ其地をふまねば。我ながらはづかしく物足らぬ心地せしを。今年は夏に暇をいたれば。思ひたちて大和めぐりをせんとするなり。をりよく道づれもあれば。まづ大坂より和歌山に遊び。それより大和に入らんとて。七月廿三日の朝。

新橋より瀛車にていでたつ。雨をやみなくてうるさき物から。いと涼し。たゞものさびしくて幾どころもすぎぬ。舞坂を出でく入海の中道を走りゆくに。暮れそめたれば。雨はけむり渡りて一面の白きなかを。黒き鳥の處々に群がり飛ぶなど。あはれ此景色を家なる人にと。思へどかひなし。かくてふけそむる頃名古屋につきぬ。納屋橋といふを渡りて川村屋といふに宿る。とかくして枕につきたるは一時過なり。廿四日。雨やまず。一番瀛車にてたつ。道に岐阜のあたりをすぐる。くみるに。田も畑も水にひたされて。たゞ湖水の上をゆくに似たり。造化の恨は。なごて此地にのみかたよれるやらん。京都につきて。駄屋町の押小路上る處にて。澤文といふにやどる。けふは祇園祭なりといへば。それ見んとて。四條わたりまでゆきたるに。山は既に通りぬ

とて。たゞ御旅宿に神輿のみおはす。残りをしけれどせんかたなきに。雨は篠を亂していや降りに降れば。袖もすそもぬれとほりぬ。人々とひくらして夜ふかく宿りにかへる。

廿五日。雨少しやむ。二番瀛車にて大坂につけば。加藤延治氏は早くも停車場にあり。車にて其家につく。酒いでぬんごろに逗留せよとすめらるれど。明日は同行の井上はるね子を和歌山に送らんの約あれば。旅行の終りに。京大坂に又たちかへるべきよしをのぶ。けふは天満祭なるが。降りつく雨に水高ければ。舟ならで陸にて神輿の御あたりあるべしといへば。晝過ぎて難波橋を渡りて。西へくとゆき橋一つわたれば。今夕一むれのぬり物わたる。侍烏帽子に梅の花をかざし。狩衣のいでたちなる女。傘をさくせ車にのりつけて。四五人もゆく。

それのみにてあどは。まてどもくみはず。大路には暇なく篝火焚きたて。黒煙そらを染むるばかりなり。さらでも少し日光のみにてあつきにとて。見さしてかへる。あすの地圖などしらべあひて。物語しつゝ。深更に及びたれば夢路にいる。

廿六日。はれたり。ゆるやかに大坂をたちて。夕方和歌山につく。

はるに子と共に其家に至れば。母人まちむかへていざといはるうち。二人の弟は。姉上のれ歸りよと。其あたりとりかこみつゝ。喜びれもてにあらはれたる。よそめにも心晴れゆく圓居なりけり。今宵は此家にやどる。

廿七日。けふも日よし。はるに子の兄人に案内せられて。一家の人々と紀三井寺にのぼる。寺のさまきらくしからねどさびわたりて。

木立すゞしく。芦邊の浦ちかく見ねろされたる。まづうれし。寺山の麓より舟にのりて。和歌の浦の拜殿といふ處までゆく。こゝより見かへれば。名草山緑ふかくそみたてるに。かの寺の壁白くあふがれたる。又更に尊くなつかし。芦邊のあしべ屋といふにて。物くひなどして久しく涼む。芦邊をさしてとよみけん鳥はと問へば。維新前までは殺生禁断にて。あまたたりふたりしに。今は影みることもとたはてぬ。といふこそあさましけれ。されど見と見る海山。みな古人の如く。半日の身はいつしか代々の撰集にもいりたるこゝちす。玉津島もをがみはてゝ。東照宮などの名所々々をめぐり。濱邊にいづ。此あたり松ねほし。

またもこんかた葉の蘆の浦風に

聲うちそふるまつの下かげ

かの芦邊のあたりにねふるをば。かた葉のあしとぞいふなる。漁夫あまた軒をつらぬて。けふのねもの賣りかふにや。かしがましくつどひのゝしる中をぬけて。潮あむまうけせる家につきぬ。前は海にて。淡路島したしく影をかはし。芦なく松なく。けしき又あらたなれば。盃のかずもいつしか重なりぬ。幾度となく波とすまひ戯れて。歸り來ぬれば夜はさきがけして家にあり。

廿八日。けふも日よし。渥美氏をとひて。ともに白檜氏にゆく。けふより此家にやどらんとするなり。あるじの翁は。まづ和歌山城にのぼるべしといはくるに。随ひゆく。

まだそめぬ鶯の色さへあはれにて

夏も身にしむ城のまつかせ

あはれ此地に入りけるをとつひ。青田のすゑにほのみはつと。はるに子のゑがほをむかへつる白壁は。是なりけるよ。天守のいち高き樓にのぼりはつれば。和歌山城下をはじめ近きあたりの村々山々まで。一幅の畫圖に集まる。白檜氏にかへりて晝過ぐれば。また和歌の浦に汐あみにともなはれゆく。

へだてなき遊びがたきとなりけり

きのふはよその和歌の浦波

廿九日。けふも。朝涼しきほどにとて。日前國懸の二宮にまうづ。人氣にしまぬ宮居れくぶかし。

鶯のこゑそらにきこえて日の影も

神さびわたる森の竹むら

夕方は。城の麓なる岡東館といふに。この地の人々よりまぬかれてゆく。集まれるは八九人にて。うちとけたるまどみに。夏さへ旅さへわすれはてつ。

三十日。けふも。渥美氏の案内にて。主客三人うちつれて。加太浦といふにゆく。町を離れて西の方三里ばかりの海邊なり。粟島神社もここにたしせり。いでいる船のさまなどみつゝ。近くは苦が島。遠くは淡路島に向ひゐて。心しづかに物語しつゝすゝむ。例のくせとて潮もあみつ。夕日やうく横になりて。波に黄金の龍をえがくなど。なごりをしからぬものもなきを。あはれ釣人の生涯ならましかば。

こよひは渥美氏に宿りて。語りふかす。あすは高野にのぼらんとすれば。夢まづ白雲のうちに入りて。まだきにすゞしき假寐なりけり。

卅一日。けふも。夜をこめていで行く道すがら。白樫氏より途中の用意にとて。暑氣拂やラムネやと恵まれたること。井上氏の草鞋など心つけて贈られしこと。渥美氏の夜もねずて今朝の飯など取りまうけ。心盡してめぐまれしことを思へば。なにゝかたとへん。

けふわけん高野のおくの雲よりも

ふかきは人のなさけなりけり

わすれじよ友のなさけにおくられて

旅だつけさのあけぼのゝみち

わたし一つ渡りて。紀の川をひをのぼる。晝に近き頃。又川を渡りかへして。九度山村につく。こゝより四里ばかりの山道を。駕籠にて不動坂といふをさしつゝ。けはしき道をつられゆく。其苦しみを慰めん

とや。水音松風。さては秋の花の處々にほころびたるありて。絶えず山路に送り迎ふる神の惠のいと深さよ。坂やうくはてし。女人堂の前に駕とまる。此あたりの谷間には。いく尋いく丈ともしられぬ杉榎など。ふかくと立ちなみて。いと物すごく。始めて心は高野めきぬ。

渥美氏の紹介にて。東根院といふ寺にやどりは借る。こゝに名刺を通じ置きて。案内する小童こひて處々みめぐるに。立ちならべる寺々は皆檜皮ぶきにて。清らかなること浮世の物ならず。されど。先年の火にてなから焼けうせぬとて。今猶その名残の枯木石ずゑなどの残れるかれこれみゆ。あたらし靈地をといとくちをし。玉川と教へらるゝ小川を渡りて。奥へくといれば。右も左も五輪やうの石碑。大きなる小

き。さまざまに市をなして立てり。これなん昔より貴賤尊卑の別なく。かたみの骨を埋めて冥福をとぶらふ墓なりける。此あたりすべて女人堂のあたりの如く。木立物ふりて夕日梢にうすし。

雲にいる杉より上にひゞくなり

たかのくたくの目ぐらしの聲

墓を過ぐれば骨堂といふあり。六角のさゝやかなる堂を戸のひまよりうちのすげば。ほの暗きに白骨るあゝたり。あはれ老少不定の世の習と。觀ぜらるゝも此あたりなるべし。奥の院の前には燈籠堂とて。數萬のともしびを佛にたむくる所あり。こゝかしこ見はてゝ。もとの道にいで彼寺に歸れば。僧出で迎へて懇にもてなすも。友の惠がかし。更けゆくまゝに。『あらしやのりを』と謠はまほしき夜のさまなるに。

窓をひらけば。影青き星の木のまにきらめくなど。
八月一日。朝霧ふかし。

名もしらぬ花をちこちにみねそめて
あさぎりはるゝ寺のなかみち

僧きて別れをつげつゝ。けふはみづからがと思ひつるを。にはかに宗
務いできたればとて。昨日の童つけて案内せさす。青巖寺の幽寂なる。
金堂の壯嚴なる。みめぐりて。丹生明神の社にまうづ。檜皮の軒ばを
まばらに見せて。楓の青葉しげりあひたり。

さながらのぬさやたむけん心あらば
露にさきだて森のもみぢ葉

をどこべしのみあまた。寺のかきねをめぐりて咲きたるも。どころか
らをかし。

をみなべしにほはぬ山の秋風に
ところねがほの花のいろかな

これは三鉢の松。かれは西行櫻など。さししめすをきゝさしつゝ。又
もとの女人堂にいづ。こゝより昨日の駕籠にてかゝれゆくに。露まだ
乾かぬ草葉の上に。日影美しうこぼれかゝるなど。いと面白ければ。
山路の苦しさもまだればいず。

妹とわがうゑし垣根のをどこべし
つぼみを乳子や今朝見つくらん

くだるにつれて。木陰すくなく日高くなりて。寺にてねきいでし今朝
の心地は。いづくへかうせつらん。あなくるし此駕籠の小さゝよ。頭

は上につかへてゆるしまゝに打たれ。膝は折りたるまゝにすゑなほす
 こともかなはず。うちみじろけば底もぬくべき心地するはと言へば。
 そは駕籠の罪ならず。旦那のふとりすぎ給へる故ぞとて。かむかきつ
 ぶやく。九度山に下りつきたるは眞晝なりき。昨日の道を川づたひし
 て。火ともし頃和歌山に歸りぬ。白樫氏にてかの山の物語するほどに。
 火影もぬむげになりぬるは。夜のふけたるにか。

二日。けふも日よし。白樫翁は常に網もて魚とる事をたしまるゝが。
 今日其のまゝあらせん。あとより來ませとて。いでゆかれぬ。晝
 をあひづに。息女など、打ちつれだち。荒濱といふをさして陸地をゆ
 く。紀の川の海にいづる所なり。道に吹上寺によりて。本居大平翁の
 墓に詣づ。昔はさはなかりしときけど。かれゝの草どもたひこりて

蜘蛛の糸の處得顔なるは。はらひに來べきかたみのをしへ子たちも。
 のこりずくなくなりぬるならんと。あはれなり。

春ならばふきあげでらの庭の草

貝ひろふ子も來てふまゝしを

翁は。舟に鮮らかなる魚と。ぬれたる網とをのせて。酒菓物と共に待
 ちあたり。和歌山人の汐あみに多くつどふは。こゝなりときしもし
 るく。沖に向ひたるかたの渚には。老若男女ひまもなし。舟こぎりて
 衣ときすて、海にいる。これを東國にたとふれば。かの和歌の浦は岩
 間にすがりて波と遊ぶ所なれば。大磯に似たるべし。この荒濱は幾町
 も遠淺になりて。砂とすまひ流れゆくさま。鎌倉の海にや似たるべき。
 時の間にあさりやうの貝人々の手に餘れば。さはとて舟より桶とりき

たるに。これにも満ちぬ。あはれ汐干狩の頃にあひて。家人子どもな
 ど携へこば。いかに楽しき遊びならまし。歸りは舟にて。涼みの火影
 を漕ぎ分けつ。和歌川を來て。何がし橋のもとにつきぬ。
 三日。けふも晴れぬ。井上はるは子の案内にて。四五人伴ひつれて鳴
 瀧といふに遊ぶ。紀の川を渡りて。やゝ山にいる所に寺あり。こゝを
 少し奥にいれば。其瀧なり。流れ潔くほどはしりて。木陰多く。外に
 訪ひ來る人もなければ。岩をむしろに涼みゐて。寺に歸れば。この庭
 にも小瀧ありて面白く糸を繰りかけたり。本堂のはしをかりて。わり
 こなどひらきつ。みやれば。瀧のあたりに楓三もど四もどたてるが。
 色づきそめたり。

たきの音になつてもわすれて山寺の

庭のもみぢ葉まだきそめけん

といへば。六浦ならぬに。こゝにも紅葉を止めてはと笑ふもあり。爲
 相卿ならねばなど戯れて。よきほどに白檉氏に歸る。今宵は歌よみ遊
 ばんとて人々集ふ。題をさぐりなどして。夜中過までうち興ず。其人
 々はあるじの翁を始めとして。七八人もやありつらん。

四日。なほついでけり。近きほどに立たんとすれば。名残にとて。また
 和歌の浦に遊ぶ。ますくつきせず。

わかれても夢路にかよへいにしへの

あとなつかしき和歌の浦波

五日。けふも。わか山をさること東南のかた。五里許の處に加茂とい
 ふあり。このわたりに。不動の瀧また長保寺などの見所あるを。ゆき

て見ずやと人の勸むれば。曉がたより井上渥美白樫などの人々と車に
にて出でたつ。紀三井寺のふもとをすぎ行くに。今日は千日まゐり
とて。市人も田舎人も。黄なる藍なる日傘さしつゝけてゆきかふにあ
ふ。猶今やうならぬこゝちす。心晴れたる海原を右にひかへて。いと
早く塩津といふ港につきぬ。こゝには渥美ちよ子の教へたる生徒あり
て。其父は質朴なる老人なるが。よろこび迎へて懇に案内せんとす。
加茂はこゝより一里許とか。かのさしつる寺は一條天皇の勅願所なる
に。もとの和歌山城主の代々の御墓もあれば。いかめしきなごり見
ていと尊く。物しづかにて世ばなれたり。瀧は裏見とて。岩の上より
幅廣く落つるを。其うらに道ありてぬけとほりつゝ見るなり。日光の
れもかげをうつせる心にやあらん。ゆきゆく道のほとりには蜜柑の木

ずえ。緑を深めて。黄に紅にひかり満つらん秋の色さへ思はせたり。
かへればかの老人きぬの裾まくり上げつゝ。菓子よ飯よと立ち走りつ
ゝもてなしふるまふ。夕風涼しくなれる頃老人に別れて。こゝより和
歌山に通ふ漁船にのる。和歌の浦名草の山。よび答へつゝゑまひたて
る中を。一はしり行けば。馴れつる城は猶顔かくさで。夕雲の外に我
をむかへつ。
六日。なほ晴れわたれり。あすはたゝんとすれば。別れを告げに我も
ゆけば。人も来る。夕方まで。白樫氏にて懇なる別れの盃をうけて。
それより井上氏にゆく。わが旅の具はこの井上氏にあづけてあれば。
こゝより立たんとするなり。白樫氏は廣瀬とて和歌川の西にあたり。
井上氏は新中通とて川より東なれば。橋一つ渡りゆくに。川下近く名

草山見わたさるゝも。明日はよその空になりなんと思へば。たゞならず。井上氏にては酒出だされて。物がたりなどするほどに。猶いとまごひに来る人ありて。嬉しく悲しく夜ふけにけり。
七日。日よし。明けぬうちにと思ひしを。とかく立ちねくるゝは旅のならひぞかし。白檜渥美井上三氏。父子兄弟車を連れねてはるかに送りく。いつかまたとて人々しめりがちなり。吾身は始めて來つる旅人なるを。夜に日に心を盡していつくしみもてなされしさへあるに。かくも別れを惜まるゝよと。胸ふたがりて詞も出でず。車をわたりて立ちたる人は遠くなりぬ。日の影きら〜と城のやぐらにのぼるも残り多し。

すみなれし方はそなたとみかへれば

なみだにかすむ和歌山の城

なほゆく〜。

人々の深きなさを身ひとつに

あつめてしぼる我たもどかな

今日はながく紀の川をひに。さきの日と同じ高野の道をゆく。さるははじめよりかくとさだめなば。高野もついでにすべかりしを。熊野より伊勢路にかゝりて大和に入らんとせしかば。また和歌山に立ち歸りたるなり。しかるに熊野のかたは此旅行には日數足らずなりたれば。ふたゝび此道より吉野をさすこととなりて思へば。ねがましき二度の川づたひなるかな。妙寺村といふより高野道にわかれて。なほ川上へとゆく。橋本を過ぎ落合川といふを渡れば。大和なり。水の音蟬の聲。

聞くもの見るもの。何となくなつかしきは。國の名にひかれたる心なるべし。五條などすぎて六田に出づれば。渡しあり。同じ紀の川ながら吉野川になれるううれしき。かなたより漕ぎ寄する舟に。桔梗女郎花など折り持ちたる老女を乗せくるは。吉野の秋風をまづ見せんとての山姫のしわざかと我ながらものぐるほし。渡りはてし。けはしき坂路をめぐりのぼれば。うちはれたる處に茶屋あり。水こひつゝ問へば。こゝぞ一目千本なりける。見ゆるかぎりほど。八田翁のよまれしも。此あたりならん。すゞしき陰は。いづれもきのふの花なりけり。

なほいかに花の雪ちるねぼろよの

その下かげの旅寝なりせば

吉野町にいらて。さこやといふに宿る。奥深き谷に望める家にて。碧

をたしむ山々の色まどに移り。みねろせば。蚊遣くゆらす賤が屋のなりはひも。一目にあつまる

来てみればまじる浮世の塵もなし

よしのゝやまの夏の夕暮

さらでも山風に親しくなれる夜を。月さへ訪ひ来て。寐ざめの枕なくさむることよ。

八日。日よし。案内者に従ひて仁王門を入り。まづ藏王堂。それより吉水院にまうづ。これは後醍醐天皇のおはしましける所にて。其御靈を祭りたれば。心とめて拜み奉る。勝手の社。水分の社。金峯の社など拜みめぐる。何れも木立ふかく神さびわたれりとは今さらなるべし。金峯の社にて社務所めきたる處にたちより。西行菴の事など問へ

ば。上人自作の像は。春の頃參詣人多きをりは番人つけて菴に安置すれど。其外はこゝにすゑねきて守りまゐらするなりとて。奥の間にしるべす。近くよりて拜すれば。忍辱のうちに柔和のまなざし人を射るこゝちして。生きたる其人に接するおもひあり。またやゝのぼりて。草深き野路を薄高萱かきわけく暫しゆけば。音たてゝ落ち來る水あり。上人の常にむすびつる苔清水はこれなりといふ。

あな戀しこの苔水をむすびあげて

筆ぬらしけん人のおもかげ

少し廣やかなる所に菴ありて。昔のさまなりといへど。近頃たてたる物なれば。寧ろなくもがなとぞ思はるゝ。元の道にいでゝ下りくゝて谷に入り。木ぶかき處をあへぎくゆけば。辛うじて寺のやねみゆ。

如意輪堂はこれぞかし。門をいり堂を右に見て。石の階を昇れば。後醍醐天皇の陵なり。松椎など玉垣のうち暗く枝をかはして。立ち去りがたき御前なりけり。

古寺のかけひの清水音すみて

みさゝきさむし秋の初風

僧に案内乞ひて。寶藏にいり。かへらじとの扉や何やと。古の名残の品々みあさるもなつかし。案内者にいざといはれて。細道づたひしつゝ宿りに歸れば。日もなかばになりぬ。

駕籠にてこゝをたつ。櫻の渡しといふをわたりて。上市村にいで。さかしき山路をゆくに。女郎花撫子。岸の左右にさきほひて。はねかへり袂にふるゝなど。くるしきうちにもおもしろし。弓立峠といふに

かゝる頃。一陣の風をさきにたてし。夕立篠をたばねて来る。假初なる茶店に雨やどりして。あな涼しいふ間もなく。はや日影あかき空となりたれば。道いそがせて多武峯をさす。

あきづ飛ぶみちの撫子露みにて
なごりしづけき夕立の雨

四軒茶屋といふは。眺望いとよき處にて。あすゆか入道のくまぐま目の前に見おろさる。何れの山何れの岡かたろかなるべき。夕ぐれ近くつきて花中屋といふに宿る。夜にいれば冷やかなり。宿のあるじはもと此寺の僧にて。多武峯縁起の畫卷物もちたりときけば。今宵借りにて。ともしびのもとにて心しづかにひらきみる。

九日。けふも。涼しき内にと多武峯神社にまうづ。葉櫻の梢のひまに。

朱の堂塔の朝日に輝くかうくしき。廊を右の方にのぼれば。寶物を置きならべたる室あり。中にも能の面五つ六つなど。心癖とて暫しは足を留めたり。社をいでし長谷の道にかゝる。焼くるが如き山ろひの道を來て。砂にまみれゆくほどにつきぬ。町を左に折るれば下界をはなれて寺の屋根高くあふがる。あはれ世々の文人歌人に導かれて。今日こそこゝに來にけれど。まづうれし。枕の草紙の貝の聲など。世をへだてたるこゝちもせず。御堂にまうでし僧にしるべこひて。本尊を拜みなどす。

わが身さへ佛さびても見ゆるかな
松風かをるはせのふるてら

いつかはとちもひわたりし初瀬山

のぼるもしるべ世々の言葉の

初瀬川はさしやかに麓を流れたり。二本の杉は何れとも人をしへず。晝すぎて明日までの車を雇ひ。この町をたつ。

暫しゆけば左の方に小さき流れあるを佐野とおしふ。三輪近き處なれば袖うち拂ふの舊蹟なるべし。三輪町を過ぎて鳥井の前に出づ。こゝより車を下りて。奥ふかく杉の中道を幾町もいりて。御社に至る。白木に檜皮の御あらかもいとさびたるに。金燈籠を軒のつまにかけ連ねたるなど。昔おぼゆる廣前がかし。參詣の人もおれならではなく。いとしづけし。石の階を下れば。右の方に杉の枯木のうつぼなるに。しめなはめぐらしたるは。是やしるしのと。見るものごとになつかしからぬはなし。

おもがげの夢も今宵はかはらまし

けふぞわけつる三輪の杉村

昨日遙かに。それかこれかと心にかけて三つ山も。ちかくなりぬ。前なるは耳梨。中なるは畝傍。左のは香具山。何れも笠など伏せたらんやうに見ゆる中に。畝傍は峯しげく木々れひたれば。兜などにやたどふべき。いと睦ましげに。昔の怨も淺からざるべし。物しらぬ人も此地にすれば。歴史讀みたうなると聞くに。ましてわれは童の頃より好みたる道とて。親しう心にゆきかひたる土地なれば。うれしさ餘りて夢のやうなり。道を折れくへて畝傍山の麓にいづ。右の方に玉垣いかめしうしわたせる陵は。是ぞ檀原の宮に天の下しろしめし御事のよ。少し入りて拜み奉る。奥は只廣々と木々の緑のみゆるのみ。あゝ

天つ日と畝傍山と。此御はかの土と。二千五百年前の事を語らば答ふべきか。

御とらしにふれししらべか玉だすき

うねびの山のまつかぜの聲

北の方に少し離れて。綏靖天皇のも立たせり。前のよりはめぐりいと小さく。玉垣の中も現はに伺ひ奉らる。松櫻など立ちならべる岡なり。日高く當麻寺につく。こゝは役の行者の開山とて。かの中將姫の蓮の糸もて織りたるまんだらを。本尊とすといへば。いとうるさきまで其姫の事どもときほこれり。さばれ幽寂清淨の地にて。二つの塔の山際にけむり残れるなど。浮世の人に見せまほし。寺の前なる玉屋といふにやどる。夕立して涼しく暮れぬ。

十日。ときくくもる。達磨寺を経て。龍田に九時まへにつく。龍田川といふいさよけき川。村の入口を流れて。楓の木あまた岸に立てり。されど川も御社もまことにはあらで。誠のはなほ五十町も山深く入りたる處にありといふ。けふ詣でつる御社は拜殿とぞ申すべき。楓の木影に鶏むれ居て遊ぶなど。さはいへど神さびたり。來ん月は龍田の能をせんと望あれば。殊に心こめてをがみ奉る。

たゞひと日われにかさなん龍田姫

紅葉がさねの舞のたもとを

少しゆけば法隆寺なり。伽藍の壯嚴。寶物の富麗。天下にならびなしと案内の僧の説きはこりたる。よしやそれまでならずとも遠からざるべし。金堂の壁に曇徴といふ百濟畫師のかけりしなど。眞偽はしらす。

其中の二三にやとぞ思ふ。

郡山をいでと垂仁天皇の陵にまうづ。此岡は木立しげからず高からずして。池水にきよく影をうつせるも。さるかたに尊し。田道間守の墓もこゝにありといふを。あとにて聞きつるこそくやしけれ。菅原村の天満宮また西大寺などめぐりて。晝過ぐる頃奈良の町にいりぬ。猿澤の池にのぞめる魚屋といふにやどりは定めたり。今日の暑さは格別なる上に道いとあしく。ともすれば車かたむきがちにて危き所多く。かれこれの苦しみにて。いつよりも疲れたり。

一ゆあみして案内者を雇ひて見物にゆく。まづ池の岸に立ちて。あれは衣かけ柳とてむかし采女の何々と説き出だしたるが。やがて此地の形『の』文字になりたるをもて『猿澤の。』といふ歌ありといへるにぞ。

かゝる時こそほく笑みあふ友ありせばと。戀しくなりぬる。ゆきく〜て春日明神の一の鳥居に出づ。こゝよりは木陰ひまなく。左の方はやと廣き草村なるに。あれみよといふ方を見やれば。草葉の末より角やうの物みゆ。鹿なるもうれし。すべて暑き頃は隠れゐて日を避くるなりとぞ。道の傍に茶店ありて。鹿にはまする卵の花團子を賣るあたりに。二つ三つもむれゐて客まち顔なり。取りて與ふればなれ〜しくより来て食ふ。あはれ家なるちごにみせましかばと。その喜ぶらん面影さへ思ひやられて。一人見ることのさびしさよ。二の鳥居よりは木かげます〜生ひ増さりて緑涼しきに。宮居あからに立ち續きたる。晝か夢か。はたうつ〜か。神樂殿の奥には。女の童なるべし。白衣に緋の袴なるが。花をかざしたるやうの頭つきして二人すきかげに

みわたるは。昔人の筆すさみにもいりぬべき様なり。手向山も拜みはてゝ三笠山の麓にかゝる頃。俄に神鳴して夕立さつと來たり。

旅衣ぬれてもうれしとりあへぬ

三笠の山のゆふだちのあめ

雨やどりにとて立ちいる家は。三條の小鍛冶とて。刀劍あまた並べて人待ち顔なるは。良將を待たでも賣らんとするべし。是も能にて親しうする中なれば。と笑ひながら小刀一つ求めていづ。世は泰平になりけるや。雨も名残になりぬ。二月堂三月堂などを右にみて東大寺の大佛に至る。昔の人のと今更いふまでもなし。顔の長さ一丈六尺うかす。堂の内に博物館の設けあれば。是もめぐりて。興福寺南圓堂なども残さず。宿りに歸ればたそがれ頃となりけり。暮れはてゝ欄干に

よれば。涼みなるべし。池のかなたは一面のともし火となりぬ。其影水に長く落ちて龍となり流星となるなど。いと興あり。鐘の聲するも面白きに。雲やうく薄らぎて月姿をみす。

もろこしに昔の人のながめけん

これや三笠の山のはのつき

神垣の杉の木かげにふす鹿の

すがたもうつるそらの色かな

十一日。はれたり。やどりを立ちて町を北に出で離れ。西に折れて奈保山の。元明元正二御代の陵にまうづ。

もゝしきにつゞく夢路のあともなし

いな葉をわたるなほの山風

其れより立ち歸りて。東大寺の正倉院に至る。今年は此御庫なる御物拜觀を許されたれば。かならずと思ひしを。今朝は夕立の名残の空にて心にかゝりつるに。さきの陵拜みはつる頃よりやう／＼日出でて。なごりなくはれたるううれしき。大佛の門前に車くるまを乗りすて。院の入口に至れば門はまだひらかず。こゝを守る巡查に問へば。今日は曇りたれば御庫はまだあかねど。既に晴れたれば掛りの人にしか申すべし。こちきませとて。くゞり戸れしあけていりぬ。これにしたがひゆけば。掛りの人いできて給仕に茶などはこばせつゝ。今少し待ち給へといふ。さればあくべきにこそと。天の恵みを思へばいとうれし。かくてこちへといふにつきて御庫の東側の梯子より昇る。掛りの人こゝにまぢめてねんごろに指し示さるゝを。自ら一人なればくはしう拜觀

するも。一つは掛りの人の親切なるに由るなり。そも／＼此正倉院と申すは。聖武天皇の御冥福を祈らせ給はんとて。其御遺愛の御物を此寺にをさめさせ給ふによりて立ちたる御倉なり。其のち絶えず勅封の處となりたれば。昔のまゝに姿かふべき由もなし。されば畏くもその大御手に觸れ奉りたるものなるは申すまでもなく。御冠。御袈裟。さては御杖。御如意。御旗やうの物まで。見奉るまゝに。御口に御念誦となへさせ給ひし御ねも、ちまで。恐れ多くも胸に浮びて。かの大佛殿の綱ひき給ひし時にあの御沓やめされし。三寶の奴とぬかづき給ひし時のはこの御装束なりけん。など忍び奉られて。暫しは今の世人の心地もせず。すべて精巧華美なること驚かるゝといふも愚なり。此處をいで、聖武天皇とその後の宮との佐保山の陵に詣づ。さきには其の

御手に觸れたる御かたみを拜し。今は此土となり給ひし御跡にまうで
ゝ。かへすゝも忍び奉るは千年の昔なりけり。

佐保の山草葉しづけしふる寺の

かぬに千年のこゑを殘して

それより西を指して法華寺といふを過ぎ。平城天皇の陵にまうづ。た
が手向けゝん。蓮の花の枯々なる玉垣の外にたてり。成務孝謙二御代
の陵にまうづ。このみさいきは道一つ隔てゝ。何れも小池の上にとゝ
して似たる様なれば。世には鶴龜の陵など、稱へ奉るとぞ。神功皇后
のは小高き岡をのぼりたる上にあり。玉垣の外には池ありて。村の童
ども泳ぎあたり。外のよりは木だちなどふかくゝとしていとけだかく。
御功にもおのづから通ひたるかと思ひ奉れば。何か歌一つと苦しみた

れど終に得ず。こゝを下りて砂石のいとあしき道をまがりうねりて。
辛うじて一時も下る頃にやありけん。木津町に出づれば山城になりぬ。
龜岡氏によるに。必ず一泊をと留められて。今宵は留まることに定む。
木津川に向ひて遠くは愛宕山も見やられ。又うしろには三笠山も顧み
られたり。酒出でゝ大酔になりぬ。疲れたるべければとて下婢枕持て
きぬ。あはれ一睡のまに何をか見まし。

すぎきつる跡を都になしてみん

夢ふきたくれ木津のかはかせ

十二日。くもる。今日は立たんとしつるに。あるじ舟のまうけしてあ
ればいざといふ。すゝしきうち京までと思ひしをといへど。それは
ひるからにてよしとて。許さんけしきなければ。伴はれ行く。あの山は

なに。そのこなたはいづく。指し示さるゝは名所ならぬもなければ。書のうちを漕ぎ行く心地す。あるじは魚ねらひつゝ網を腕にして舳先にあり。舟人は眼をこらし艫をあやつりつゝ後へにあり。其中央に眠るが如く憂ふるが如きねもうちしたるは。歌ねもひする客なりけり。一水さつとほどはしりくれば。銀の鱗すでに舟に躍る。忽にして桶に遊び。忽にして俎に上り。忽ちにして椀に入れば。酒ははや九分になりぬ。日を望めば。身は遂にあるじの手の内に落ちてけるかな。家に歸りて欄干にせななかせつゝ。うち見やれば。

うちむかふ故郷びとのねもかげを

みそらにゑがく雲のいろかな

あすはわがたもとの露となりぬべし

あたごの山の夕暮のくも

酒冷に物語果てゝ。あるじは階をねりぬ。月は峯をやと離れぬ。

三笠山つきにむかしのあと問へば

あらしにひしく古てらの鐘

十三日。てる。月瀬の梅にはかならず。どの詞をあとにして急ぎ立つ。井手村といふに出づれば。玉水といふ名はあれど。花の露そふとよみけん流も見えず。河づたひを來て伏見の里に渡り。いなり大佛などを右に見つゝ。三條小橋の萬屋といふにつく。十時に少し遅かりけん。まづとりあへず。護王神社の平野氏をとふ。あるじの曰く。猪熊翁は君の此地につかるゝを待ちてあり。それにもしらせん。さるにても物語せんは水邊こそよけれ。いざといはるゝに。あるじをさきに立てゝ。

何某橋のもとなる何某亭に登る。梢茂りて日影遠く。川風よくいるゝ
を肴にて。盃一つふたつ廻らすほどに。猪熊翁來れり。あふより肝膽
を顯はして。文を論じ歌を語り。面白き圓居となりぬ。翁は京都師範
學校の教官がし。

たちよれば夏も残らずなりにけり

れなじながれの加茂川のみづ

と記して見すれば。ねきな。

古いぬともれなじながれの末かけて

そこまできまん鴨川のみづ

と返しするく。身は實盛となりてもとて。大笑となりたればまた。

篠原のむかしのあともかたらはん

あやせの月に小舟ながして

とは。こん年の夏東京に行かんと。翁の契をかたむるなりけり。

見わたせばわが友ならぬ山もなし

こゝもへだてぬ森の下かけ

くれはてゝ。車に送られかへる。わが住む處は三階にて。夜に入れば
川原涼みの燈火空にうつりて。手にとるやうなり。笛鼓の音。氷賣る
聲など。たいこゝもとなるも涼しきに。東山の火影星の如くうちむか
はるゝなど。楽しき旅寝ならぬかは。

十四日。はる。昨日平野氏とやまめぐりの契しつれば。曉方寝ざめ
て聞くに。雨の音するやうなり。くちをしやと戸を押しあけて見れ
ば。空に一點の雲もなし。あな耳にぶ。はやくも川音にてありけるぞ
や。燈火のもとにて朝飯して。柳茶屋といふまで行く。三條の大橋を

渡るに。東山の藍色にて打ち臥したるさま。朝景色は又ことなり。茶屋にて平野氏と出で逢ひ。八瀬を指して行くに。大原木いたゞきつれたる女。あまた出で来るに逢ふ。踏み分け行くほどに八瀬は果てふ。大原村となる。音なしの瀧といふを見て。いく度も道踏み迷ひつゝ。もとの道に下り。小田の中道づたひして。西の山そばにうつりゆけば。臈の清水としるべせる水あれど。實は名にしかず。猶れくふかく入れば。寂光院なり。門は鎖したるやうに竹を横に二つ渡せり。案内云ひ入るれば。四十の坂を上か下かの尼一人出で来て。御堂の方にといふに。わらぢ解き捨てて従ひ行く。本尊は地藏尊にてきらめき立たせる奥の方に。建禮門院の御像を拜み奉る。墨染の御衣の上に。白絹をまどひ給へるやうにあふがるゝは。安徳天皇の御かたみの御衣なりとか

や。御傍には阿波の内侍のも見ゆ。寺のさま磨かねども。世の常のとは清らかにて。昔の姿を失はじと見ゆるは。尼寺のゆゑにもあるべし。庭に出でて見れば。御堂の前に池ありて。櫻の大本影をうつせるは。波の花こそとよませ給へる跡ぞとをしふ。

みゆきせし臈のしみづ影たにて

さきちる花の春やいくはる

北にくくと江文峠を越ゆ。是さへあるに。またひとつ静原村過ぎて奴坂にあへることくるしけれ。されど前に鞍馬に出でん望みある身は。猶何かに引かれゆく心地す。川一つ渡りて里にたりぬ。疲れも甚しければ。しづかに休まんとて。酒命じなどするほどに。一夕立あらひ來る。今はとて勇氣を杖にて。八町の坂を上りはつれば鞍馬寺なり。雨

止みて夕日すし。

くらま山谷間のすぎのうらみにて

ゆふだつあとの風のすししさ

猶奥の方に天狗杉を見て。僧正が谷にくだる。此山は麓より緑一面にて。入るにつれて老木枝をかはし。ひる物すびき處なり。かの杉のもどには供物などそなへたれば。神か何かのねはすらんと。おぼはず髪もふとる心地す。

ふきすてゝ花にしはしの夜嵐も

神はこの木のものとなすらん

僧正が谷には大魔王の堂ありて。此あたりはことに暗し。夏もかさなる落葉踏み分けつゝ。やうく漲り落つる川瀬に降りつきぬ。貴船と

ろいふなる。小橋渡りたる右の方に鳥居の立てるは。明神なり。本社は猶六七町も奥と聞けば遙拜して川に沿ひつゝ下る。

上加茂に詣でしは。入りかゝる日のいち高き杉に残れる頃なりけり。神殿のいろ。みたらしの音。例のいさぎよし。馬場などそれと聞きつゝ川瀬に出でし。此所より車に乗り。平野氏とは道より別れて。すゞみの興にいる頃宿りにつきぬ。今日あるきつる道の程は。八里もあるべしとか。

ひがし山ともし火青くまたときて

まくらになるゝ加茂の川風

いざゆめよいざゆめよ。

十五日。けふもよし。東山めぐりやせまし。泉涌寺へや参詣せまし。

など思ひ居たるほどに。客ありて若王寺の瀧にもものせんといふ。うち連れて大橋を渡り。南禪寺永觀堂などに休みつゝ行く。永觀堂には池ありて楓あまた陰を深めたるは。秋ならましかばと見ゆ。御堂の方に人聲かしましくさわぎあひたるは。京の盆とてなるべし。猶ゆけばかの瀧の寺なり。山を後ろに入れば茶屋あまたかけわたして。酒飲み居るもあり。こゝは兩岸高く大木聳れたれば。風なくともいと冷やかなり。瀧は岩間を走り落つるを。あびさせんためにや。笥を受けて中空より真直にかゝるやうにせり。わがわたるむしろは高き所にて。あたり亦人なければ。下界の客を見おろしつゝしめやかに物語す。こゝは二の瀧とかや。山を下れば又もとの焦熱地獄に入りぬ。道より人々に別れて。ひとり知恩院より高臺寺をぬけて清水寺に詣づ。御堂を出

でい。田村堂の前なる茶店に休みつゝ。熊野の謠口ずさびぬたるに。店もる翁。釜の下に柴さしはてゝ。あれは何の山これは何の御寺。今熊野いなりの森などは彼方に隠れて。今は見えかたしなどいふ。歸りには八坂神社にまうで。祇園町より四條の橋を渡り。宿に歸るに。盆なる故か。常より賑はし。くれはつればすゞみ見に行く。數萬の燈火。天を焦し水をやきて夥しきに。氷嚙む客あり。瓜はむ客あり。行く人歸る人。たゞうごめくやうにて。かへりてあつきところへ涼みにゆくも。珍しきは人心ぞかし。

ともし火の影をはなれてやすらへば

ひえのねおろし袖にふくなり

十六日。くもる。あさどく平野氏にさそはれ出づ。今日は嵐山にとて

なり。太秦といふあたりの田つらをすぐるに。ほに出で、うち靡くは。かの清少納言が物見車のすだれに入りたりけしきもかくやど。ながめ行く道のかたへに。太子堂あり。しるべに従ひて草踏み分けつゝ右の方に入るに。堂は六角にて檜皮ぶきなるが。錠さしかためてあり。あたらこゝまで來つる物をとつぶやけど。寺守をらねばせんかたなし。こゝの御像は吉風の御姿なり。

渡月橋を渡りて北に折れ行く。道は川づたひにて嵐山の麓なり。こゝかしてに秋の花のひもときたるも見ゆ。川は潔く玉躍らせて走りゆく。向ひに立てるを龜山といへば。昔の友に迎へらるゝ心地す。とませの瀧といふもしたしくながれて。夏をわがためにとうれし。道さはまゝりて坂路を高くつづらをりて上れば。寺あり。大悲閣といふ。住持出

で迎へて。風よくとほす所に坐をすゝむ。山ごしに東山残らず見ゆ。わが物がほに口とく地理など教ふれど。歌おもひ居たる折なれば。忘れにけり。法輪寺は橋より少し南にあり。これもめぐり果てゝ。川向ひのほとゝぎすといふ茶屋に入りて。高殿より眺め渡す。下行く水のさま見上ぐる山の景色。さらによし。肴はと問へば。桂川の鮎ありといふ。さはとて盃めぐらしつゝ口ずさむも例の唯言なりや。

大井川たけしみゆきのあと問へば

聲せぬ波にまつ風ぞふく

いく人の花にいとひし末ならん

露ふきおとすさがの山かせ

小雨やうくこぼれいで。眺望あたらしくなりぬ。山の緑は薄く濃

く煙の底に沈みて。墨繪の山水にも似たるかな。

あらし山つきぬなごりをおくるとや

雨にすがたをかへて見すらん

今はとて。一時もくだる頃こゝを出でよ。野の宮に詣でんとするに。車夫道を知らず。處の人にきくなどしつゝ。竹むらの中の淋しき道を少し入れば。そこなりけるを嬉しき。小さきほこら三つありて。小柴垣黒木の鳥居のくづれ残れるなど立てり。櫛の卷のあはれさ思ひ出づれば。立ち去り難きも一つは處からなるべし。

われのみとおもひし物を野の宮の

くろ木の鳥居あめもとひけり

上巖峨の釋迦堂を左に見て。廣澤の池の汀にいづ。池には蓮菱などし

つらに縁を深めて。見渡し清し。燕の高く低く一つ飛び居たるのみにて。水鳥も見えず。

おのれは明日出で立たんとすれば。猪熊翁に別を告げんとて共に其家を訪ふ。忽に酒出で、文話盛んなり。翁は愛國の情胸に溢れて教育の志いと深きあまりに。なほ若輩のわが説をも信じうけらるれば。今日訪ひつるをかへすくもよろこばれたり。

かたらへばこゝも浮世の外なれや

さが野のおくのあらしのみかは

など物にしるしおきて。夕暮近くなれば。暇を告げ平野氏にわかれて。急ぎ宿りにかへる。今宵は名高き大文字火などのともるをりなれば。それ見んには。わが宿の三階に及ぶ所なしとの事なれば。急ぎしに。

入々押し合ひつゝ。屋根に出で手すりに上りなどしてあり。恰もよき時に歸り着きぬるかな。雨も晴れぬ。眞向には如意嶽の大文字。北にふれては舟岡山の舟。さては鷹が峯の左大文字など。あざやかなり。木陰に少し隠れたるは松が崎の妙法なりと云ふ。あれよ／＼と云ふ内に。はやかたへより薄らぎ行く。

世の中の姿を見せて山の端に

誰が書き初めし文字の燈火

洛中の少女どもは晴衣着飾りつゝ。これ見んとて橋のあたりなど指して争ひ行く。是も今日歸りくる道にての見物なりき。

十七日。はれたり。向ひ馴れたる東山を顧みつゝ。二番瀛車に乗りて出で立つ。平野氏など停車場まで見送られたり。大坂に着きて加藤氏に宿る。梅田氏をも訪ひつ。

十八日。くもる。朝は當地の博物館など見めぐり。夕方は明石氏を訪ふ。夜に入りて歸るに。風烈しうなりて雨大きく。嵐めきたり。

十九日。風雨荒く吹き降り暮らす。何所へも出で難し。夜に入れば空ます／＼悪し。

二十日。おだやかになりぬ。今日は堺に晝前より加藤氏に伴はれ行く。瀛車より途に下りて。住吉神社に詣づ。此社には是にて三度なれど。松の色燈籠の様いつも新なる心地す。

我ためはぬぎ事もせじ神よたゞ

御庭の松を千代に枯らすな

家人にいつか聞かせん住吉の

松にしらぶる神風のこゑ

堺にては潮あみせんとして。濱の九萬と云ふを指して行く。かくて欄干に
より水瓜など切らせつゝ。あな涼しくと云ひ居たる折こそあれ。ね
うな來て雨戸くらんとて急がしうす。否。さしては暑うてと云へば。
今に一雨來るべしとてくり終るほど。風横さまに吹き荒れて。盆をこ
ぼす様なり。さればこそ違はざりけれといふく。闇の一間に押し籠
められつ。戸の隙より見出だせば。怒れる波の頭振り立て。磯に争
ひ碎くる様。木々の眞白に裏返りて折れ返る様。いと凄し。やうく静
まりて空の一方は藍に返れるもあれば。今はとて大坂に歸らんとす。
大和川は常に水なき所なるを。昨日の雨にて濁れる波岸を浸し。柳の
梢のあまた水の上に顯はれたる。かねて聞き及べる洪水の面かけを見

ることよ。加藤氏に着けば。其あたりの川には水高く。今にも橋ひた
りて落ちやせんとて。區役所警察署の提灯足をそらにて行きかふに。橋
の中程には篝火を焚きて。水のふかさを測り居たり。響は雷の如く嵐
の如く聞こえて。膽を冷やす。されど我住む陸に及ばん憂はあらじと云
へば。やと心落ち居たれど。想ひやらるゝよその空は如何ならん。
廿一日。はれたり。晝前より高津の社より天王寺に詣づ。今日は月な
みの大師めぐりとて。いづこもく老若男女集ひ居て。黄なる袋を胸
にしたるが。涼しき陰に施行の水茶など受くるもあり。此袋には米を
入れて。四十いくつとかの大師々々に供へ行くなりとぞ。

佛をがむ人こそ集へ靡きけん

けむりの末のさかおしられて

高津にて詠みけるなり。歸りには茶臼山の雲水といふ寺にて。物食ひ酒飲みなどしつゝ涼む。こゝは精進料理ふるまふ處にて。童法師のみ給仕しつゝ。經机やうの物に芋豆腐などの置置き並べて。持ち出づるが面白ければとて物したるに。今は女の交れる寺となりぬることあさましけれ。厨屋の方をかいまみれば。今日はかの大師參りにて物よく賣るゝとにや。ゑましげなる老僧の鍋の中に箸さし入れつゝ手つだひ居るも見えたり。

歸れば明石まつ子より文來れり。櫻の宮の夕景色に必ずとあり。やがて其妹も同道して。夕日の水を染むる頃。宮の前なる何がし樓に着きぬ。東の方には生駒山隔つる雲もなく。うち晴れたる青田の面に假庵のかりそめなるが所々に見ゆるなど。物靜かなり。西は夕日大方隠れ

て。残れる雲のまん／＼たる淀川の水をやくも。また更なり。ひぐらしの聲を聞きつゝ。蓮の飯調せさてもてなさるゝに。立ち去り難きはあゝるじも客も同じ心ならざらんやは。

蓮かをる櫻の宮の夕風を

明日は雲井のよそに忍ばん

とて。日もくれかゝればあるじを勸めて。かへさにつく。

今宵はかねて堀江の伯母君を訪ひ參らせん心構へあれば。其由をのべて。難波橋より別れて衣笠町の其家に行く。知らせも置かざりし事なれば。驚かるゝ事限りなし。あはれ我母上には九人の姉妹ねはしつるに。今は皆失せて。たゞこのをば君のみになり給へるを。十一年も逢ひ奉らねば。夢の様なり。あるじの従兄もをりよく物へ行きたるが歸

り來て。昔語り興そひぬ。逢ひて語れば十一年の心地もせず。昨日今日
日のやうなるも怪し。夜も更けぬれば今はとて。

十年へて君に逢ひぬる嬉しさを

歸りて告げん母のいまさば

廿二日。けふもはる。加藤氏に別を告げて岐阜行の二番瀛車に乗る。
高槻より山崎にかゝるあたりは。十九日の雨に淀川の水溢れて。目も
あてられぬ様なり。家は水の面に空しく立てる中に。旅人休まする所
にや。膳椀飯櫃など取り散らせるまゝに残れるを。主はと問へば。答
へぬ波のみ今もどう〜と音することあはれなれ。此さまに向ひては
瀛車の暑さなど云ふべきものとも覺わすかし。

夕方岐阜に着きて津の國屋と云ふにやどる。安藤氏來りて鶴飼に案内

せんと云ふ。此水にては如何ならんと危ぶみたるを。今宵始めてと聞
くぞ嬉しき。急ぎ湯あみし夕けも終へて。伴はれ出づ。町を離れて長良
川の橋を渡る頃は。やう〜暮れそめたり。渡り果てゝかなたの岸よ
り小舟に乗らんとす。金華山の黒く影を残す麓には。川舟の燈火波に
きらめきて。先づ景色よし。あれなるが先づ年宿りし家よなど眺め居
たるに。いざ舟にといふ。舟には幕うちめぐらし提灯ともし連ねて。
川風あるじがほに待ち居たり。なつかしき友に迎へられてむかしの景
色を見つゝ行く程に。舟は眞砂多き汀に寄りぬ。猶同じ物見の舟も三
つ四つ集ひぬ。こゝにて酒酌みかはしつゝ、鵜舟の下るを待つなり。自
らは一日瀛車にゆられたる疲の上に。酒めぐりて風に吹かれ居たれば。
何となく眠くなりて。舟ばたに枕しつゝ寐入りやしけん。俄によぶ聲

す。起き上り見れば。今更七つの火影。山のそばより顯はれ出づる。あれよくと云ふほどに。鶉を勵ます聲近く聞こえて篝のほのほ。鶉の羽風。消されては焼き。焼かれては消す。鶉舟は巴をなし輪をなし。て亂れ廻るを。我舟は其間を見つゝ従ひ行く。愉快の極りとや云はん。忽にして天地闇にかへりて。たゞ物見舟の螢なす火影を残すのみ。あはれ兼好法師に見せましかば。

明日までの鮎の命もあはれなり

波にきぬゆくかゝり火のかけ

『名残惜しさをいかにせん』など口ずさみつゝ宿りに來ぬれば。夜も半なりけり。

廿三日。日よし。一番氣車にて静岡にゆく。暑さの外には記すべき事

もなし。

廿四日。なほ晴れたり。くだりしをりは雨雲八重におほひて。富士の姿も見にざりしに。今日は隔てぬ影を窓の前近く見せたるこそうれしけれ。塵ばかりの雲なくて。雪ひとむらも見えず。十四五年の昔。わが始めて東京に上りつる道にて。此山に向ひつるをりは。

うき旅の夢なぐさめし富士の嶺に

むかへば今はふるさとの空

今日の心地は。高根も空に思ひ知るらんかし。磯洗ふ波。絶えず眺めに入る。

昔人いかにながめしわがためは

いとうれしくもかへる波かな

あな樂し。家人の前に旅寐の夢を語るも。三時よどきの内になりぬ。
馴れし垣根の秋風も。今宵は枕の物とならん。富士の嶺はあとに遠ざ
かりぬ。箱根の雲は見えずなりぬ。あはれ戀しかりつる武藏の海よ。

つなみの後

一

あら波に引きのこされて

磯にたつみなし子あはれ
きのふまで父もありしを

わたの原ゆくへをなみに
けさまでは母もありしを

かへるべき家こそなけれ
たよるべき人こそなけれ

けふも又夕日かくれて

風さむくふく

二

日に千たび波はかへれど

一たびも父はかへらず

夜に千たびあらしは訪へど

ありどしも母はこたへず

戀しきはわがやの垣根

かなしきは家なき此身

中々に我をのこして

引き去りし波の心の

うらめしきかな

三

夜はふけぬ月はかくれぬ

波くらし鳴影すこし

よせかへる波にまじりて

聞ゆるは父のさけびか

助けよとひくはいづこ

人聲か嵐かなみか

山もとにみゆる光は

なつかしき我屋のあたり

それかあらぬか

友 誼 (唱歌)

學ぶ遊ぶもへだてなく

なれて久しき友だちよ

善あらばすゝめまし

悪あらばこらさまし

もろどもに

夕 立

夕立は磯山ちかく過ぎにけり

日かげを沖のふねにのこして

磯ぎはの松原すぐる夕立を

舟よりみるもすゝしかりけり

川納涼

すゝむ人まばらになりて水鳥の

かもの川橋つきふけになり

夏の歌の中に

夏のなき山をたづねて今日も又

れもはぬ瀧のもとに來にけり

關口わたりをそゝろあるきしつる夕

大空をれほふばかりの梢より

夕日こぼれて日ぐらしのなく

のべにいてゝ螢草つむ少女子の

かほに夕日のかげろのこれる

信濃の小諸にありける頃布引山

釋尊寺にあそびて

ありはてゝ仰げば高し八千ひろの

いはほ苔むすぬのびきの山

ぬながらに見るろ涼しき淺間山

夕のけむり朝のしらくも

雨の夕小諸をたちて輕井澤にやどる

淺間山そことも見ぬずかきくれて

雨にくれゆくおひわけのはら

五月雨は雪にやなりし埋火を

かきおこしても寒き夜半かな

目の前にれりある雲をおなじくは

袖につゝみてみやこへもがな

あるらしの記 明治二十三年八月

琵琶湖をへだて、此叡山はるかに見ゆ。長き旅路の眠もさめて。雲のあなたの友やいかになど思ふほどに。涼車は山科につきぬ。けふは宇治にやどらんとするなり。かちにて醍醐木幡などいふ里々うちすぎて。黄檗山をとぶ。こゝを出づれば門前に老翁の茶店をいだせるあり。梅檀の木陰にてあまりに涼しければ。暫くひるねなどして。西日になる頃宇治川をわたる。橋はいたく朽ちはてゝ。落ちかゝる土を夏草の縫ひとめたるなど。見る目あやふし。舟わたりしてかなたの岸なる菊屋といふにやどる。欄干によりて見渡すに。川のあなたにうち向はるゝ青山は朝日山。めてに續くは大日嶽。ゆんではなれたるは喜撰山なりと。女の童をしふ。北の方に遠くけむれるは比叡比良の山々なるべし。

し。末に一峰高きは愛宕の外ならじと見ゆ。あはれ源氏十帖の物語に入りたるも此水よ。琵琶法師に語らるゝも此寺よ。

夕影まちねて平等院までそゝろあるきす。道のかたへに松一木ありて扇の芝の跡を見するは。例の事好みのおぼにもせよ。英雄の末路今更めきていとくちをし。鬼神の如く雷電の如く世に恐れつる平家を討ちて。あつばれ源氏の世に成さばやと。高倉宮をすゝめまゐらせ。張りては引かじと執りつる弓矢も。天なるかな只ひどうちに敗北して。此古寺の土となりぬることほかなけれ。など思ふく、鳳凰堂の前に来ぬ。此堂は千年のまゝにて兵火をもまぬかれ。かの合戦をもしらず顔にて今猶たてるがういみじきや。堤にそひて上り下りするに。入日の名残うつくしく。水の静けき方には橋姫のかへす袂もうつすべく。早き瀬に

は伊勢武者のさまをもまがきつゝ。浮きぬ沈みぬ網代木にかゝりけんもかくやとぞれもはるゝ。

かちまけの恨も消えて宇治川の

なみの音こそむかしなりけれ

ふる寺の色より外にこれもまた

むかしなりけり宇治の柴舟

晩鐘水にちてかなたの岸に燈火一つ二つ見ゆそむるも。をりからなりけり。

あくれば七月十七日なり。朝とく寺にこひて鳳凰堂ひらかせて見る。

定朝の作りし佛。宅摩のかける扉の畫など。千年の古色たどへん物なし。こよひは木津にやどる。川風すいしく。橋行く人影も世ばなれた

り。

十八日。奈良につきて角屋にやどる。大佛春日など逍遙す。くはしき事は去年の日記(大和めぐり)にいひたれば。更にいはず。

十九日。奈良にあり。佐保山の陵にまうづ。こゝよりかへりみれば。

三笠山縁ちかくて物語しつべく立てるに。大佛殿の屋根興福寺の塔など手にとる如し。かしこけれど。土の下には。明暮いかに此氣色をみそなはしおもほすらんとあはれなり。それより法華寺。西大寺。秋篠寺。薬師寺など。古寺あまた見めぐりて。暑さにつかれつゝやどりにかへれば。まだ日は高し。

廿日。けふも東大寺の戒壇院。興福寺の金堂。南圓堂。北圓堂。など見めぐる。近頃世にもてはやさるゝ古佛像なれば見おかんとてなり。

よしあしの品さだめ。ふるしあたらしの鑑定などは。さる人にまかせ
てん。

かくて春日の若宮にまうで、神樂を見ん事を乞へば。神官こちらへと
案内す。暫くして朽木形の帷の内より二人の少女いできたる。髪は後
にさげて紅白の造花をふさやかにかざしたり。藤の花摺れる白地の舞
衣を着。紅の袴をはく。又同じよそほひせる女。琴の前に座し。烏帽
子狩衣の翁其上に座す。歌おこり笏拍子なり琴ひどく。少女は足ふみ
いだし。榊の枝をとりてまふなり。面影は今宵の夢にもはなれじとぞ
思ふ。

廿一日。奈良をたつ。道に八塚あり。歌塚ともいふ。立ちよりて拜
むに人げじみたる社にて見所なし。在原寺のあとあり。いにしへの

村薄はいづこなるらん。只千重に八千重に夏草の生ひしげる奥に。小
さき祠の一つ立てるのみ。名を雲の上に響かし詞を千年に残せる歌人
の跡も。かゝる物かと思へば。世は短きぞかし。

石上布留社にまうづ。山ぎはにて静なるところなり。朝まだ早ければ。
蟬の聲も涼しくたちて風きよし。大和社も拜みて晝前三輪につく。鳥
居前の竹中屋といふにやどる。夕影になりて杉の中道はるく。と御社
にまうづるに。鯛あまた鳴きいで。心地よし。三山はまだくれ残りてな
つかしう見渡さるゝに。弓張月の高くあふがるゝは葛城のあたりなる
べし。われや萬葉集の中を行くらん。萬葉集や我を迎へて遊ばすらん。
廿二日。あけぬに初瀬さして行く。

はつせ川たぐくかくす朝霧は

あはれきのふの夢の面影

御堂より見れろせば。町のさまなど今様ならぬ心地す。多武峯につき
て花中屋にやどる。今日の道々。たちよる所まうづる所。すべて去年
のまくなればはぶきつ。

廿三日。まだあけぬに多武峰をたちて山路を下る。百合撫子など顔う
ちあげて我をむかふる心地するに。しめりたる蓬の香のをりくくさま
じるなど。興ある山ぶみなり。谷水にうちかはす蟬の聲も。にくしと
きくし昨日に似ず。あはれ旅人の心惱ます曙なりけり。下りはつれば
岡村にいでぬ。やう山に入りたる所に岡寺あり。うき世をはなれて昔
戀しき所なるに。池の蓮の半ひらけたるがあまた見ゆるなど。いふべ
きやうなし。こゝは古の岡本の宮の跡なりとて。其宮の樓門のわづか

に朽ち残れるに。何やらん神か佛の御像も其まゝにて堂のかたへにあ
り。寶物とてある物の中には。宮の腰瓦とて天人のもやうある物をを
さめたり。桑田變して海となる世に残れば残るものかなど。猶こそ大
和の古寺は尊けれ。岡續きに飛鳥社あり。いと古き御社にて梢をもるゝ
日の光は千年のまゝの心地して尊し。すべて此あたりは御代々々の都
ありける所にて。萬葉集にもあまたよまれし地名なれば。始めての心
地もせず。里はづれに野中の大佛とて。さゝやかなる堂の鐘樓と共に
畑中に立てるは。飛鳥寺の名残とぞいふ。佛は古き物なるべし。向原寺
をへて橘寺にまうづ。聖徳太子御誕生の地とて。寺は今も榮にたり。
されど寺の榮にたるはあはれてたるほど趣のなき物なり。それより欽
明天皇の檜隈の坂合の陵にまうづ。あはれ此旅路に所々どひきつる寺

々のおこれるすたれるもある。すべて此御代に始まれる跡ぞと思へば。たどならぬ心地するに。松風ひとりしらず顔なりや。

飛鳥寺ゆめの昔となれる世に

神風たかしひのくまの森

今宵は五條にやどる。あすは和歌山の友だちをとほんとするなり。

廿四日。朝とくたちて粉河寺にまうづ。僧の御あかしをとすとむれば。

此寺の法のともし火かゝげても

子を思ふ暗ははれんともせず

父母のめぐみも深きなどうたふをきくにも。家なるちごはいかに遊びをるらん。風ひきはせずやなど思へば。故郷の空戀しうなりぬるも。

佛の御前いとほづかし。去年の道を行きゆけば。和歌山の城はるかに

のぞまれたるうれしさよ。

むつましく我をむかへて和歌山の

城こそあれに見ゆそめにけれ

さるは去年ながくすみたる所にて。したしうする人々もあまたあればぞかし。夕風涼しく簾ふく頃は。友だちと窓によりあて。旅のあつさも物語のたねとなりにけり。

廿五日。きのふの暑さによりはてし。訪ひくる人々と歌がたりなどするのみにて。いづこへも出でず。紀三井寺和歌浦など心にはかよへど。今年にははるかなり。

廿六日。くもりて雨ときくこぼる。今宵は十一日の月なれば。紀三井寺にのぼりて和歌の浦の夜氣色をながめんと楽しみみつるに。やう

く雲かさなりて窓の小篠に車うちあもれば。望みむなしく暮れはてぬ。

廿七日。曉に車いそがせて和歌山をたつ。川ぞひの道雨すしく蛙の聲たけず。草花のぬれつるにほひなど。なれしあたりながら心地よし。いにし日すぎつる坂合の陵のあたりよりはれそめたり。これより道あたらしくなりて見瀬などをすぐ。古の輕の都はいづこならん。八木といふにつきてやどる。今日こし道をかろふれば。十九里なるべしとか。くれにはまだひまあれば。天の香山にのぼる。いたゞきには香山神社とて小さき社あり。こゝは平なる所なれば。春の頃は里人ども菜の花見に酒肴などもつとふといふ。古のみかどの國見し給ひしはこゝなるべしなど思へど。今は木々生ひ茂りてはれやかならねば。登りつるかひなし。されど。

松の上のこる夕日のかげばかり

神代なりけりあまのかぐ山

又思ひおこして。畝傍山こそやうちはれたりと見ゆればとて。いとけはしき坂道を。小松にすがり岩かどにとりつきつゝ。つらさをりに登りはつれば。はたせるかな千年の跡一目の内にあつまり。まぢかくうちむかはるとは耳無なり。右手に青きはかぐ山なり。其うしろに續きたるは三輪山なり。それよりたどりて。初瀬より四軒茶屋のあたり。多武峯まで詞をかはす如し。青田の風につままれて村々のちりくに見ゆるは。ふるき都の面影にやあらん。萬葉集に聲を残せる御井の眞清水は。いづこに流れ去りつらん。泉川より巨勢路よりもちこせる

真木のつまで。いづこの土となりけん。あはれなるは人の世かな。
大御門に影かはしつる三山は昔なる物を。夕日かくれて麓くらくなれ
ば。下りて東南の陵にまうでやどりにかへる。雲やぶれて月すい
し。

廿八日。法隆寺さしてゆく。道に廣瀬の社にまうづ。いと木ぶかき所
を奥へくと入れば御いつ尊く立たせり。童の落葉かきあつめたる。
淨衣きたる神官の立てるなど。まづ晝のやうに遠く見いれらる。法隆
寺は去年見つる所なれど。猶ゆかしき物あまたあれば。夢殿よりはじ
めて柿色の衣したる老僧に案内せられありく。年ごとに見てもつきせ
ぬものは。千年のあとなりけり。

こゝを出で、山道をやく入りて龍田の本宮にまうづ。これも廣瀬とな

らびて古くよしある御社なれば。かうくしきもことわりずかし。

神のます龍田の山は秋風の

夏もこもれるところなりけり

やどりに歸りはつれば。夕立はげしく地をうち來る。たちまちにさか
まく波庭にみちぬ。

たれも皆れなむ木陰をたのむらん

いかるが寺の夕立の雨

やどりは法隆寺門前のかせ屋なり。此あたりに古物うる家ありときよ
て。夕けをへて見にゆくに。目につく物こそありけれ。奈良の御時國
々にわかたせ給へる百萬塔のかけ残れるに。經卷さへきれくくなるつ
きてあり。維新の始め廢寺にもなるべしなどさわざつるをり。さるべ

き寺より出でたる品なりといへば。誠の物にあらん。いにしへ忍ぶ
たよりとなる物なれば。求めて出づ。されど考古家てふ人に見せなば。
頭かたむくるもあるべし。世にはかゝるたぐひこそ多けれ。我は面白
しと信ずるものを。

廿九日。あけはてぬにいでたつ。

神山の松みにそめて朝霧の

たつたの里にかけろしはなく

大和川にそひ下りて。柏原より瀛車にのらんとす。こゝは河内なり。
瀛車まつひまに。道明寺の天満宮にまうづ。鳥居を入れれば梅林なみ立
てるが。大方黄ばみそめたり。本殿のかたへには白太夫の社といふもあ
り。昔は尼寺なりしを。維新の後神官の司れるやうになりけるとぞ。

されば菅公御自作の観世音も今はよその寺にもて行きなどして。謠に
てきしなれたる鐘の聲もとほざかりぬ。何事も昔に復さんとてかへり
て昔を失ふたぐひ。これのみにはあらざるべし。

大坂につけば。まづ天王寺にまうづ。塔に登れば。わがなつかしうす
る人々の住家。しばし遊びつる寺の屋根。宮の森。遠くは少女の面
影なせる山々までも見渡さるゝよ。されどこゝには今日一日のみとい
まるべければ。とても此見ゆる十が一つもとはるまじと思へば。かへ
りて思のたねになん。八軒屋の丹波屋といふにやどる。

心やすうする人々の家とひありきて。たそがれすぐしてやどりに歸る。
道すがらの門々に少女どもうちつどひて輕き袂涼しげにすゝみたる見
るにも。詞のしらべなどわが好む土地なれば。明日たゞん事の名残を

しさよ。

やどりは川づらにて。ねながら涼みのさまを見渡すべし。わかれあひつゝむらがる星の水にひかるは。舟涼みなり。見にかくれつらなる星の川を渡るは。橋涼みなり。流星のかなたをさしていそぐあり。明星のひとり静に岸ちかくよするあり。右は天満。左は天神難波の橋々。いでや今宵の枕をば東にかせん。西にかさだめん。

三十日。京都につきてどかくするほどに。ひるも過ぎぬ。まづ下加茂にまうでんとてゆく。京都は何れともわかぬ中にも。特にわが好めるは此御社なり。木立ふかく風涼しく。かうくしさもなつかしさもすべてあつめたるに似たり。糺のあたりに夕方までも涼まばやとて。男の童の水あみあたるに。したしう物などいひたはひるゝほどに。雷に

はかにとろき渡りて。大つぶの雨洗ふが如くまさりゆく。所から神の御聲を聞く心地して。物すどき氣色さへそひたり。ぬれつゝことをいでゝ。けふも人とひくらしつ。

三十一日。朝はなほ人とふにひまもなし。夜は涼みに四條にゆく。月あかければ。東山のあたりくまなく見わたいてとなつかしきに。風こそなほ外には似ざりけれ。

八月一日。瀛車にて京都を立ち濱松にやどる。

二日。御殿場といふにて瀛車を下る。富士の山ぶみせんと思ひたちたれば。須走といふまで登る。夕ぐれ雨こぼれてはだ寒し。

ふみそめんあすの高嶺やいかならん

山ほとゝぎす雨に鳴くなり

天氣をのみいのりつとふす。やどりは大申とぞいふ。
 三日。起きいでとみれば。雨風はげしくあたりもわきまへがたし。かくてはいかゞとためらふほどに。少し小ぶりになれるやうなれば立つ。時々空青くなりて。日影あつく身をてらせど。馬返しなどいふ所過ぎて。草ふかく花の中道わけいるまゝに。又いみじうこぼれきて風さらにつよりゆく。やゝゆけば晝食と名づけたる所に茶屋あり。須走よりこゝまでは三里なり。ねひくゝに登りきたれば。こゝもはや雲の上なるべし。これより上は天氣あれて一足ものぼらんよしなし。たどひをかして登りたりとも。いづくのむろも雨の爲に人多くつまりたればと。下りくる行者どものいへば。せん方なく。こゝにて晴るゝを待つ事にさだむ。まひる過なるべし。わが強力にもたせきつる毛の上着や

綿入やとうち重ねても。ふるはるゝばかり寒ければ。圍爐裏のほとりに行者どもと膝をならべてぬれたる物乾しなどす。雲はみるゝ前の谷よりれそひ来て。吹き散る霧は身をかこめり。木のきりくひを枕しつゝ空のみうち守るもどかしさよ。麓は夕日の頃なるべし。きれくゝになりておしよせらるゝ雲もあり。風の力につかまれて木々より木々に飛びゆくもあり。虎の蹲まれる龍のわだかまれるなど。忽にあひ忽にわかるゝは。神のめぐみも近きにやあらん。其絶間にひくゝ横はれる翠の黛は。箱根とぞいふなる。それうちこして。ひかれる空に薄墨のあと見ゆるは江の嶋。さきに一筋ひきたるは三浦の三崎。みねみ見はずみ浮べるさまこそ面白けれ。あすの望なからじやは。行者どものふりならず鈴の音物すこくきこえて。夜もふけぬ。

四日。ひしめく音に驚けば。あひやどりの行者ども今ぞたちいづる。ぬぐへる如き月あを白く老松の枝にかゝりて。山風静に雲もなし。急ぎ強力ねこして出で立つ。をぐらき木陰草陰を通りぬけて。一合目といふにいづれば。やけ土となりて天地六合くまもなし。雲は足下にねこりて下界の塵をかくし。月は眼前に近づきて天女の面影をえがく。あな面白の山ぶみや。あな心地よのあかつきや。

わが上に月ならで又ものもなし
麓なりけり足柄の雲

あれにみゆるは海か山か雲か空か。五合目といふに達する頃は。東の山々たゞ雲のふすまうちかぶりてあけそむる。猶ひとしほの興なり。見あぐれば。かの鈴うちならす人々の十人廿人もつらなりて。蟻の如く

鳥の如くけはしき山路をつたひゆくうしろ影。はや霧の内になりぬ。

わがゆくもあれよと思ふくきてみれば。思ひしよりも安かりしは高嶺なりけり。そもく富士の山路には。一合目より九合目までの所々にむろととなへて。石もて圍ひまわしたる小屋あり。こゝにて茶甘酒麥湯などをひさぐなり。されど半は此冬の雪にたふれて。つぶれたるまゝまだ作らずといふ。一合目より六合目までは焼砂の上をつらりをりに登る。七合目までは岩根のさかしきをふみつたひゆくいとあぶなき道なるを。われはからだ重くて苦しめば。強力に手をひかれ腰をれされて。やうく登りはてたり。今ぞ第一の高山の頂にのぼりて。關東八州の山川も残りなき心地す。相模の入海鳴々山々を始めて。安房上総の遠山。伊豆七嶋も只こもどくなり。信濃甲斐もちかきに。甲

府の町など手に取る如し。今みわつと思ひし國々は。忽に雲の底となり。雨かどながめし山々は。ふたゝび日影の内に来たる。あはれわが今ふめる土こそ。明暮のまどに向ひてしたしう影うちかはす富士の高嶺なれ。雪は白く氷りてこゝかしこにあり。

しばしとゞまりて下りにむかふ。下りははしりどて足にまかせて砂の道をすべりれるとなり。少しゆけば空うちかはりて天地は雲の中に入りぬ。かへり見れば高嶺もなく。見おろせば麓もなく。たゞ強力とわれとのみ。雲の外に残れり。衣にかゝる車は氷りて雪とぞなる。

さかさまに吹きあげられて雪となる

さざりや里の夕立の雨

はしりすぎて。きのふの道を秋草の花におくりむかへられつゝ。はや

たそがれは須走のやどりにあり。さてもわが此旅よ。富士にとまでは思ひも上らざりしを。一度は須走までもとさだめ。二度はせめて八合目までもと思ひ。遂にけふの志をばとげつるなり。世の中の事はかくのみぞあるらし。

雲の上のねよばぬものとながめこし

富士の高嶺もけふぞふみつる

やがて力とたのみこし金剛杖にかいつけて。家づとの數にもとて。

人の朝鮮にゆくに

海こそは荒しとら

舟うけて漕ぎわたるべし
虎こそは猛しときけ

拳もて撃ちとりつべし

日の本のやまとをのこが

心もてなしてん事の

成らずとてやまんものかは

遂げずとてひかんものかは

たらしひめ神のみこと

韓國をまつろへしためし

書よみて君はしるらん

豊臣のますら武夫の

韓國をおぢしめし功

世がたりに君はきくらん

日の本の人のこゝろは

昔よりかくあるものを
あらしとて海なおそれそ

たけしとて虎なれそれそ
ますらを吾兄

波の音 (唱歌)

一

父はいづかたそ

母はいづくそ

ひとりみなしごを

こゝにのこして

さしくる夕しほ

すごき波のおと

かなしや我身の
仇かあの聲は

二

かへせ我母を
海のをちより

かへせ我父を
もとのすみかに

こたへぬ蒲風
いはぬ波のおと

戀しき我屋の
あとか此原は

三

父はかへりこず

母は來らず

たよりなき此身

磯にのこして

月影さびしく

けふも又くれぬ

見わたす海原

うらみはてもなし

松風日記 明治二十八年八月

まどろみたるひまに観音崎の燈臺も來りぬ。浦賀には住み居る妹もあ

れど。房州の海に浴せんの望なれば。此度はわよらず。愛宕山の嵐。燈明崎の波。かれらは知るや。よそに過ぐる人のあらんとは。蓋もて畫がゝれたる鋸山は碧の肌をあらはして舳先に立てり。金谷、保田、加知山などの港を経つ、陸近くゆくに。砂遠く家まばらなる磯のさま。巖聳に松みどりなる山のけしき。いづれか有形詩中のものならざるべき。海士の里より高く仰がれたるは那古観音なりと口々にいふ。

わがゆくかたは八幡なれば。北條にて汽船と別る。こゝより西の方に十町あまりもゆけば。暫しの枕さだむべき家は松林の間にありて我を待てり。

八疊二間と日ぐらしの聲とは。我ものとなりぬ。簡易に作り出だされ

たる七人の家庭。黒き麥飯と黄なる南瓜と。我たのしみは足れりといふべし。松風來りて火鉢を扇げば。魚は網より運ばれて庖に躍る。松原を隔て、西は海に面す。波の聲まづ友となれり。海は水清く遠淺にて子供を入るゝにも危からず。右には那古船形の里々より大房岬まで手に取る如く。左には北條館山より洲崎まで呼べば應ふる心地して。島陰二つ浮べつ、館山灣を打ち圍めり。笹の葉ちらして出で入る舟。林を立て、繋れる舟。れのづから見とれて我を忘れしむるは子供のみかは。夕陽波に沈みて名残の色なほ松にあり。

これやかたの武藏の海に少女子の

眉引なし、安房の遠山

あくれば八月二十日。降りみ降らずみ定めなき空なり。朝とく起きて

うしろの八幡神社に詣づ。松の木の間に見入れたる神々しさ。更にいふべくもあらず。頼朝石橋山の戦破れて此地に渡りし時。祈りて冥助を得しも此神とこそ聞きつれ。降りて里見氏の起れる日。殊に信仰せし社なりとも傳へしに。今は虫ばみたる鳥居の外に昔とはんよすがもなし。子供は里人のするを見まねに小石を拾ひては神前に置く。是は毎朝参拜の數取にやあるらし。

日はうすく影見せたり。いざ潮あびてこんどて先に立てば。女も子どもも砂ふみ鳴らしつゝあとより來る。怒れる波も友となりて砂には池一つはや堀り出だされたり。十歳の姉山を築けば。六つの妹道をつくる。

食後の散歩を試みんとて夕ぐれ獨り濱づたひするに。雨またこぼれ

きて。墨うちながす波の上そいろ寒し。螢より小さき燈の三つ五つほのめくは。館山ならん。之をわきては又星も見えず。たゞひろくたる海のほとりに我腰かけんとする岩の見出ださるゝのみ。

すゞしくも松の葉ごしに見ゆるかな

わが住む宿のともし火の影

二十一日。あくるもまたで濱を逍遙す。愉快かぎりなし。べに流しゆく空の色。みどりにあくる海の影。かれもたのもし是もたのもし。人々あと追ひきたりて子供は帆懸舟の數をかぞふ。櫓をおしつれて出づるあり。碇綱くり入れて出でんとするあり。今夕の得物こそ望おほけれ。

朝もあびたり夕もあびたり。波とはいよく親しくなれるかな。つか

るれば乾きたる砂に寐ころびて海士の子を學び。興いたれば波打際を遠くあるきて貝をさがす。花の如きあり紅葉の如きあり。波にぬれ日に映じては玉とかざやくもの籠にも満ちぬ。子供よ歌へ。我も好き歌の種をぞ得たる。

くたびれ歸りて腰うちかくれば。宿の嫗は堀り立てなりとて蒸したる甘藷をねくる。煙あたゝかに盆に満ちぬ。土の香なほ新らし。子供も唱歌しつゝ歸り來りぬ。妻も地引の魚を求めて歸り來りぬ。主人晚酌の肴さへ富みたり。今夕何しか又東京を夢みん。

松風も磯打つ波も世の中の

たのしき數にかろへてぞ聞く

二十二日。観音めぐりせんとて一人車を走らす。那古まで二十町もあ

るべし。車夫は八幡祭禮の立派なるを説きて止まず。風のおと波のおと。早くも身は送られて寺山にあり。ながめおろす一幅の畫圖は。濃淡そのよろしきを得て添ふるに自然の音楽を以てす。何等の風致ぞ。おもへば鎌倉長谷山の眺望にも似たるかな。洲崎は三崎に比すべく。館山は光明寺のあたり。北條八幡の松原は由井ともいふべき位置を占めたり。さはいへ煙噴く船のゆきと二つの島とは。かしこの山にては見ざりしなり。

なほ海に沿ひてしばらくゆけば。船形村なり。こゝの観音は見る目危き山の半腹にありて。巖に片かけて造れる堂。削りなせる崖に臨める欄干。身は白雲の上に立てる心地す。草創は行基にして今を距る千百七十餘年の古にありと。佛前に記せり。見わたせば海ますく廣うし

て世は更に遠く。漁村の人影豆よりも小さし。磯邊の松に太鼓よせかけて打ち鳴らす子あり。之を圍みて見る子あり。よそめにも樂しげなるは。近き祭の替古にやあらん。渚に出でし舟を迎へ。手にく竺籠たづさへて集まり來るは。網せし小魚を分つなるべし。波は岩を囓みて人を打ち。又沖にかへる。

日くれて物書かんとするに蚊の聲雷の如し。例の松原を縫ひつゝ濱に出づれば。歡び迎ふる海原なほ光をのこして笑顔をかはす。謠うたひつゝ歸らんとするに。子供は早きつつけて山彦かへせり。

書を知らばかきても見んと思ふかな

波にくれゆく遠のしまかげ

二十三日。くもりたれどもふらず。朝は潮をあび。晝からは北條町な

ど散歩す。

かへりては稻葉の風に吹かれつゝ媪の沸かしくれたる風呂に入る。たれか此たのしみを都の家にてれもはん。玉蜀黍は紅の毛を垂れて井戸のうしろに笑み。夕顔は棚をつたひて氷柱の如く軒にさがる。

ふるさとの夢なき身には中々に

ふくもうれしき夜半の松風

二十四日。曉はやく目はさめたり。人まだ寝たれば。獨り露をふみつゝ日課の散歩をなす。

あけわたる海づら清しけふも又

地引の魚や磯に待たまし

松黒く里黒く島黒く舟黒し。我と共に早起なるはたゞ波のみ。星の光

やうく眠りて空の色すこしづゝ黄ばみゆく。
 一つの膳をとりまきて家内六人箸を取れば。乳兒は獨言しつゝ傍にあり。互に顔みあはせて色の黒くなりしをう打笑ふ。漁笛の近く聞ゆるは館山の港を出づるなるべし。子供はなれて東京にゆく舟なりとおぼは。大人は之に乗りてかへる日の近きを惜む。
 日は長し。磯にも二たび出でたり。つれづれのまゝ地圖をひらきて見あるくべき處など調べあたるに。漁夫來りて島あそびせずとすしむ。あたかもよし。さらば明日一日の課業をそれにさだめん。
 夕日は光を引ききて半ば海に沈みぬ。富士は薄紫にゑがきいだされて盆石の山にも似たり。三日月をみいだしてよろこぶ子供まで。畫中のも
 のなるかな。

嵐にはわかれし松の遠近に

ゆふべすしき虫の音する

二十五日。約せし船人來りてはや乗れといへば。手ん手に飯櫃德利な
 ど携へつゝ濱へと急ぐ。午前九時頃なるべし。風はよろこび迎へて。
 はや舟にあり。波は樂しき家庭をのせて舷を叩きつゝ歌ふ。時のまに
 八幡の松原も遠くなりぬ。那古舟形をもうしろになしぬ。大房岬は緑
 青もて右に象の鼻をゑがき。洲の崎は藍もて左に一の字を引きたり。
 はるかに見ゆる鷹の島は。はや前に來りぬ。岩の上にはありある鷗
 のかずもよまれぬ。青疊の如き上をゆくもの。我舟も物思なき一つな
 るべし。

陰きよき處に舟をつけて岩かどよりあがる。草の香蟬の聲まで。夏し

らずがほなり。苔の上に王位をしめつゝ見わたせば。砂にありつゝ貝さぐる少女ども。仙界圖中のものなり。舟子は今朝網にせし魚をいだして。半を鱈にし半を鹽焼にす。岩の竈に落葉かきあつめて火をうつせば。汐風は煙を豎に吹き又横にふく。

舟人いふ。是より又一網入るべし。旦那も共にねはさずやと。さらばとて盃をすてゝのりうつれば。艚の音こちよくひききて舟は岸をはなれたり。向には那古の観音よべばこたふる如く。かへりみれば島の人影鳥の如く蟻の如く。一うねりごとに小さくなりゆく。

網は手繰と名づけて海底にくりおろし。久しくありて其繩の端を二人して引きあぐるなり。鯛あり。きすあり。海老あり。烏賊ありて。銀の鱗。金の鱗。船ばたに躍り網を刎ぬ出づ。打ち入るゝ事しばしに

して。得物は富みたり。島には待ちかねやすらん。いざとて舳先をめぐらせば。麥藁笠は向風に奪はれんとす。

島にては海士ども來りて榮螺買へとすむ。妻のためには外國語にやあらん。少しも耳に入らざる如し。舟子來りて通譯をなし。始めて此に交渉談判を開く。又海上の一奇談なりけり。

舟もよし島もたちうしかくながら

海士の子どもとなりなましかば

今夜は家なほ動くやうなりとて。伏す子もあれば。興いまだ盡きずとて磯際とほくあるく親もあり。月もよし。島の方は煙りてさだかに見えず。

二十六日。ながく八幡の社頭にすむ。茶店の女の煮ていだす茶も味

ふかきに。さらへを手にして松原に葉をかく媼さへ能の如し。
赤き青き短冊の竹の葉と共にひるがへるは。大陰曆を用ひて星祭する
家なるべし。松の琴。波の歌。田舎の七夕にあふも忘れがたき一つな
り。

日も入りぬ月ものぼりぬいざや子ら

なぎさにいで、風にふかれん

二十七日。車にたくられて白濱に遊ぶ。撫子の打ち靡く風に送られ行
く山みちまづ心地よし。かの濱にいたれば。大平洋よりよせきては磯
の岩をあらひ。高くあがりつゞくだけちる波。遠くみれば鯨の潮ふく
にも似たり。此間をぬひつゞ出で入る舟。ねよぎをる童。にぎはしき
は浦の夏なり。白帆孕ませて沖につゞふは。鯉つりに出でたるにやあ

らん。鳶は舟をかすめ磯に下りて何やらんつかみ去る。

浦の西南。つきいでたる處に燈臺あり。野島といふ。左の方に辨天の
社ありて。松もて圍まれたる境内。風のみひとり鈴を鳴らす。

里見成義の墓は青田をへだて、北の山もとにあり。天保三年に彫りた
る數行の碑文は。苔ながら猶よみつべし。一木のいてふをわづかの陰に
て。雨に霜に幾年月をか打たれ來にけん。右は粟生。左は稻田にて。
墓前の草は脛よりも高し。

寺の名を福壽院といふ。僧に乞ひて本堂にのぼれば。成義東帶の像は
本尊の左に座をしめたり。位牌には慰月院殿大幢勝公大居士とぞしる
したる。なほ六七町も東すれば。里見四代の菩提所あり。門赤く松青
く不許葦酒入山門の苔むしたる石標。まづ人をして知らぬ古をさへ思

はしむ。義實の法號によりて此寺杖珠院と呼ばれたり。見よや金剝げ
朱ねちたる木像は。字形の半きわたる靈位と共に。曲亭の筆を驅りて
枯骨を千年に呼び起さしめしを。寺山を少しのぼりて義實の墓に謁す。
苔白く石を封じて。こぼれたる松葉の外には手向けたる花もなし。鶯
をはらひて文字をよまんとすれば。聲なき蜘蛛は糸を垂れて顔を撫
づ。

福島屋といふに入りて午飯せしに。窓より打ち向ふ海原。興さらによ
かし。秋風船を吹きてさんまどる舟をつどはしむるも此浦よ。小春の
日影わたゝかに鱗どる舟を集めしむるも此磯よ。婢は頻りに再遊をす
ゝめつゝ酒をつぐ。

來る時は神餘長尾などいふ處をすぎたりしが。歸りには道をかへて七
浦めぐりしつゝ北條に向ふ。此間五里もやあらん。海を右にして歌お
もひ行く磯づたひこそ。暑さおすれておもしろけれ。

二十八日。霧うすくこめて夜はあけたり。田道づたひに露ふみゆけば。
瑠璃色ふかき螢草は笑顔をあげておきかへる。あれ〜中絶にたる
松原の末より見ゆそめたるこそ。那古の山よ。

われも又けしきのうちになりけり

稻の香ぬるゝ霧のなかみち

潮をあびては磯にころぶし。又海に入りてはもぶれたる砂をあらふ。
此れもしろき境界を知るものは。來りて詞をかはす松風のみ。此二三
日ことに波おだやかなれば。小兒はます〜舞臺になれて。母の手を
たよりに踊りあるく。

二十九日。まだ夜をこめてむれゆく老若は。我等をさそひて那古の觀音に詣でしむ。四萬六千日の利益にあはんとてなり。

いざ子ども寺まうでせん道すがら

田舎をとめの花もみかてら

ゆくありかへるあり。道々のにぎはひ見るもつれくならず。堂後の岩をよぢては苔むしたる地藏尊に賽し。堂前に茶を呼びては海にならべる釣舟をかろふ。雑沓中の閑情またおのづからの仙境なりけり。いまだ朝飯の箸をとらねば。山田屋といふにあがりて。海老を煮させ鯉をつくらす。笑ふまじ下婢の給仕しながら舟こぎをるを。昨夜は客の多さに眠らであかしとぞいふなる。

夕かた濱に出づるに。日影は金の鱗を散らして海上いつよりもたもしるきは。あすの別れをといむるに似たり。見わたす山々うちむかふ島々。したしみなれては故郷の心地さへせしものを。漁笛一聲煙をのこして身は雲外に去らざるを得ず。

月はいよく光を加へて中空にあり。三つ四つ見わたほのめくは。きす釣る火とぞいふなる。人なき舟に枕して波とうたふも。今宵こそなごりなれ。磯の岩に腰うちかけて星かろふるも。今夜こそなごりなれ。鈴虫の聲とほく近くきこえて。惜しき此夜は無情にもふけんとす。

來ん年も又來ん年も來てふまん

渚のいさを波よあらすな

あすよりはたがため松にのこるらん

袖になれたる安房のうら風

三十日。波ねだやかにて聲もたてず。早くおきてなごりの磯づたひするに。うすもゝいろをながしたる海は。やうく紅になりて。日は沖の帆かけ舟に影みせたり。

九時北條より房州丸に乗る。鏡の如き海づらに。『し』の字を引き『く』の字を書きて走りゆく煙。くがには心地よしとやながむらん。

舟には遠ざかりゆく松原のみ見やらるゝものを。岩よ波よ舟よ苔屋よ。今こそなごり。さらばさらば。

伊豆はうしろに立ちて送る如く。相摸は左に來りて迎ふるに似たり。あれくといふに夢やぶられてながめ出だせば。鯉舟は近くこぎよせて幾十となく此船につみ居るなり。人に問へば。加知山の沖とぞいふ。きのふけふのなきにて。しけの嘆きも消ゆ失せしならん。

浦賀海峡をすぎゆくに。右も左も藍もて一色に撫でられたる遠山。さながら暮春の眺望なり。かへりみる安房の海はいづくぞ。風南よりふきて舟矢の如し。

家につきては。人々あつまりて舟のすどしさなど語る。かたへに寝入りたる子ども。夢は砂の上にや遊ぶらん。さはいへど。あるじ忘れぬ窓の長椅子。これも戀しかりしものを。

波のちどの聞にぬ里も秋草の

花おもしろくなれる頃かな

一 波

なれはしか何をかまなぶ

雷のくだくる聲か

ねほかみのたゝかふ聲か

矢さけびの名残のひとき

歌うたふ神代のしらべ

荒磯をあらひめぐりて

空の海に山彦かへす

波はたがため

二

なれはしか誰とかあそぶ

つり人のうけつらねたる

小舟さへゆくへかくして

海士の子が砂に習ひし

いろはさへ洗ひかへりて

たゝひどりころよげなる

たはむれにわが世をわらふ

なみはたがため

あすはわかれん (房州にて)

一

もみちなす貝うちよせて

わが友となりしも汝よ

砂につく山をうばひて

わが仇となりしも汝よ

うきしづみよくあしくも

磯の波あすはわかれん
あそばんとおもひしものを

わかるとも又こん夏を

幸さいくてありまて

二

松原のなれつる道に

露ふむも今宵なごり

舟ばたにかり枕して

月みるも今宵なごり

すのさきの山ほのぐらく

影見せて送るか我を

ふなかたの里なつかしく

三つ五つ波に火影の

數かず添そひゆく

三

松風にふかれてうたふ

夕ぐれは調べをそへて

聲々にわれをなぐさめ

家にゆく子をぞおくりし

ちる波は花かふぶきか

うつなみは鼓の聲か

なごりをしあすは千里の

空にしておもかげばかり

身にやそふらん

汐なれごろも

明治二十七年八月

鎌倉の山鎌倉の海。吾一たび汝を知りしより。殆んど來り遊ばざる年
 とてはあらず。然れども夏日三旬の浮生を汝に寄せて。明暮相かたり
 相したしまんとするは。今年こそ始なれ。

同行は妻子に書生下婢を合せて六人。八月一日の五番瀛車に運ばれて
 八幡前の停車場に着きたるは。午後二時なり。是より更に人力車に乗
 りかへて。焼砂の道をうねりくゆくに。由井が濱の松風。はや我た
 めに來り迎へて先導す。

遠くながめし長谷寺の山も來りぬ。車は門前にて楫棒をおろしぬ。黒
 くふすぶりたる表札に前田喜八と讀まれたるは。わが兼て約しおきた
 る假の宿の家主の名なり。樓上は八疊と四疊半。東京の家に比べては

狭けれど。六人の膝を容るゝには餘あり。况んや欄干に凭れば。右に
 は稻村が崎まぢかく立ち。左には三浦三崎の山々まで呼べば應ふるの
 絶景あるをや。况んや前は漁村を隔てゝ烟波萬里の海天を望み。後は
 晚鐘霞を破るの幽趣ある山寺を背おひたるをや。斜陽波を射て吟情ま
 づ孤帆の邊に在り。

木魚の聲枕に落ちて眠はさめたり。蚊屋をくぐりて起きいづれば。日
 ははや靈山崎の松を半ば黄に染めたり。海老賣る男。松魚賣る男など。
 出で入るさわぎも静まりて。朝飯やうやく熟しぬ。一つの廣蓋を中央
 にして。肩をわはせ膝を交へつゝ箸を取る。小兒はめづらしとて喜び。
 下婢は世話なしとて打ち笑む。

海は二町内外の距離にあり。浴客は男女の別なく麥藁笠を深くかぶり。

白き肌着を身にまとひて入るを常とす。われらも朝夕に此制服を着して。農家の庭を縫ひあるきつゝ近道づたひに往來す。鳥追めきたる姿よと女を笑へば。さては床屋を其まゝかなと嘲り返さるゝも隔てぬ中なり。波も日毎になれくゝて。朝には迎へて歌ふが如く。夕には送りて語るが如し。

身を躍らせて折りかへる波を避くるもわれは。足を空にして碎くる波を蹴ゆくもあり。板を前にしてれよぐ人。身をかゝめて貝ほる人。さては砂を塗られ水をかけられて争ふ人など。磯に海に麥藁笠の數を集めて由井が濱こそ賑はしけれ。父は蟹を捕へて持ち來れば。小兒は砂地に池を作りて脇目もふらず。時々潮來りて築きし山を洗ひ去れば。

小兒はあれよ〜と叫ぶ。

夕陽影を地に引きて。汐馴衣は窓毎に風に翻る。寝ころびて新聞の帯を解く頃。むかひの家にて唱歌の聞ゆるは。是も親子づれの旅人なるべし。新聞よみあきて窓によれば。大山参りの一群集は八幡前にや急ぐらん。岩本ゑびすやなどいふ赤き團扇をかざしつれつゝ。今ぞ觀音の石段を下り來る。

明日は江の島につれゆかんといへば。小兒は喜びて早く目のさめざらん事を心配す。夜は明けたり。願ひし空は快晴を見せて。黄なる雲こそ柵引きたれ。運動がてら徒歩にて行かんと。極樂寺切通より七里が濱にかゝるに。雪と碎け霧と散る波。おなじ相模の海とはいへど。興更に深し。小兒は花よ紅葉よと名をつけて。貝を集め。女どもは波に追はれて砂路を遠く逃げくるふ。

見よあれに浮びたるが江の島よといへば。一しほの勇氣を鼓して。いつしか腰越にも着きぬ。片瀬は一昨年わが潮あびし處なれば。小兒なほ覺ゆるて。こゝよかしこよと指さしかたるほどに。小さく見わたる島の鳥居は。目の前にせまりぬ。

岩屋にありんとする處に茶屋あり。人々腰うちかけてラムネを抜かせ。榮螺を焼かせなどす。われらも床几の一方に座を占めたり。見おろす方は岩屋の道にて。もぐりどもの身を逆さまにして飛びこむも。唯目の前なり。遠くは烏帽子岩を中にして。右の方には大磯より箱根のあたり。左には三崎の鼻より大島まで。霞みながらに指ざゝるゝこそ心ゆく限なれ。

長き日を此島に送りて歸らんとすれば。三日月高く岩根の松にかゝれ

り。七里が濱も見えずなりぬ。片瀬の山も黒くなりぬ。いづかたの里を。海士が焼火の闇を焦がして見わたるも。面白き夜のさまなり。海は廣し空は暗し。波の音すこく響きて。七里が濱また晝に似ず。たゞ江の島の火影の長く跡にかへりみらるゝあるのみ。

朝よりもよほしつる雨は。嵐となりて降りあかし又吹きくらす。舟はのこらず引きあげられたり。漁村はいづくもどざとれたり。また一人の磯邊に出づる旅客を見ず。日も暮れんとする頃。ながめしさまこそ物凄けれ。一度にくづるゝ氷の山は。萬雷の聲と爲つて天に震ひ。白煙たてゝ山を呑み巖を奪ひ。勝鬨あぐるも勇ましきに。數千の白蛇は頭をそろへて磯を圍み。去り又來る。見るゝ三崎の山影は海庭に葬られぬ。知らず靈山が崎も陥れらるゝこと今夜の中にやあらん。かへ

りみれば礫の如き雨に顔を打たれて。此晦冥の中に立つもの唯吾と踏
みしめたる松が根とのみ。歌にもよまれず書にもかゝれず。

かねて此旅寝のひまに訪はんと約しつる浦賀の妹をさして。鎌倉の停
車場を出でたるは十二日の朝なり。山の緑。水の藍。すゞしげに送り
迎へて。逗子の停車場も過ぎぬ。小兒の舟よくと喜び叫ぶは。はや
横須賀の來れるなり。こゝよりは皆々衣の裾ひきからげて。暑さも厭
はで興じゆくを。車に居眠りして團扇れとすには優れりと慰めあふも。
負惜みとや人は聞くらん。玉なす汗のたらくと落ちくるも物かは。

帆影れだやかに浮びたる東京灣の朝なきこそ面白けれ。浦賀にも着
きぬ。入海につどふ蒸氣の煙。漁笛の聲。更にものめづらしき女ど
もを喜ばせたり。小兒は頻りに父母の手を引きたてゝ。叔母様の家は

何くぞと急ぐ。我もまだ知らぬものをとて尋ねるほどに。町盡きて千
代崎の砲臺にかゝらんとする。少し前に見出だしたり。小兒は門より
走り入れども。さすがに耻かしきにや物もいはず。先づ何よりの響應
は風と月なりと。主人の誇るも憎からぬ住居なり。余は猶つかれても
あらねば。主人と共に海邊など遊びめぐる。木の葉の如き漁舟の夕日
を乗せて歸りくるも心地よげなるに。かなたには鋸山のまがはぬ影を
煙の外に見つけたるは。盡せぬながめなり。夜に入れば東の窓に月を
入れながら。盃をさしかはす。叔父様おぢさまいつまでもねはせよといふ見も
あれば。叔母様おぢいさまを東京につれかへらんといふ見もあり。

翌日は公園に登り。又主客うちつれて磯邊に貝拾ひに行く。袋を提げ
ておくれたるは。岩にすべるなど注意せられ。草履を捨て、さきだて

るは。牡蠣を踏むなど戒めらる。紅葉の如き貝。櫻の如き貝。あるは薄紫の藤に似たるもあれば。眞白に雪をあざむくもありて。彼も捨てじ是も残さじとするほどに。袋もハンケチも満腹ならぬものなし。されど風こゝちよく汗を拂ひては波をさへ吹き散らすに。猶しばしは歸らんとせす。岩に砂に腰うちかけて沖ゆく漁船を數ふれば。三艘は影を絶やさぬやうなり。あれは神戸通ひならん。いや北海道ならんなど。理屈もなき品定めする傍には。たゞ一心に砂山つくる小兒もあり。大島は見ねど。洲の崎の鼻はあれなりと指し示さるゝステツキの先に眼を移せば。げにも薄墨もて書き流したる一の字の山は現れたり。またの朝名残をのこして歸さに向ふに。送る人々は遠く追ひ來りて影見ねぬまで街に立てり。叔父様さらばとやいふらん。彼の小兒は母の

肩にかゝりて頻りに打ち招く。あはれ浦賀の海とこしへに青く。房總の山ながく緑なり。來ん秋も又來ん春も我は訪ひこん。

鎌倉に歸れば盆の十六日になりぬ。けふは閻魔まゐりをするとして。漁夫の娘も相應に晴着よそほひつゝ。手を引き引かれぬりゆくなり。處はと問へば山の内なりといふに。例の物見ずきなる癖とて。喜ぶ子供を先に立てゝ雪の下へと道を急ぐ。鶴岡の八幡宮を知らぬもあれば。先づ之に詣で。それより繩手めきたる道を田舎娘の群れ行く方にどたどり行けば。蟻の行列は遂に左手の高き處にぞとまりける。寺は圓應寺とかいひけらし。人は新居の閻魔様と呼ぶ。賑は何くも同じ事にて。飴賣る店氷賣る店など。立ち並びつゝ聲々にすゝめたつれば。汐風に吹き黒まされたる美人は。首に掛けたる財布の紐を解きかけつゝ。土

産の品を直切るもあり。堂に入りて見れば。正面の閻魔王をはじめとして有らゆる木像。すべて古色の掬すべきあるを覺ゆしは。運慶の作と人はかたれり。石段を下りて猶人の西へと行くは。ものこそあらめと坂を下りゆくに。建長寺さして又蟻の道はつきたり。門を入れれば。辻占入の菓子に天狗の羽團扇つけたるを賣る店など立ちならぶ。何故けふはかゝるものを賣るぞと問へば。旦那は御存じなきか。半僧様とて東京からさへ參詣し給ふ人もあるをといふ。さてはよき折に來つるなり。今日のみは人まねの效能あやまたざりきと笑ひあひつゝ。本堂を右に見て山道を奥へくゝと入る。道すがら赤く白く竹の筒のふとさに卷きたるものを賣るを。線香にやと問へば。一束百本づこの旗なり。旦那も御心願の叶はせらるゝやうに。立てゝ奉納し給へとすゝめて止

まず。さらば武運長久の御祈禱にもなど戯れつゝ。いざ立てよといへば。小兒は石垣木の根ともいはず。ねもしろがりてこゝにもくゝと突きさしくゝうかれゆく。坂いよくゝ急にして山ますくゝ險しく。遂に同行の中二人は途中に残されたり。此間に休めくゝと呼びたつる茶店處々にありて。鮎飯餅氷水などを出だしたるも。大方は残り少なになるほどの繁昌なり。腕まくり尻はしよりなる娘は。燃れたつ顔を汗にしつゝ。腰うちかけては柄杓に汲みだす釜の茶を吹きくゝ飯む。からうじて奥の院までのぼりはてぬ。堂は大きからぬが極めて險しき坂の上に立てり。祭らるゝは天狗にて半僧大權現とぞよばれたる。堂のうしろには一茶店ありて眺望打開けたり。是に一休みして茶をもてくる老婆に問へば。あれなるは戸塚程谷。右の端の平たきところが

神奈川なりなど。指さし示す。蟬の聲も何となく涼しきに。鶯さへ法華經と鳴き出でたり。下りはいとやすくとはやくも建長寺に來りぬ。こゝにて本堂など見物しありきて雪の下に歸りし頃は。夕陽八幡の森に落ちて風や、涼し。さても閻魔にひかれて半僧まゐりとは今日なるべしと笑へば。小兒は坂のこはかりし事など今も忘れずして語る。

降るにもあらず晴るゝにもあらず空のけしきに抑へられて。濱にも得出でぬ日あり。つれづれのあまり。鎌倉名勝誌やうのもの繰返し見るに。ふと尋ねて見たくなりたるは。十六夜日記にて親しまれたる月影谷なり。極樂寺うしろの山續きなりとあるを。案内にして探りたれど。村人も知らずといへば。推量にこゝかかしこかなと定めあきて歸

りくる折しも。片瀬より訪ひ來れる友あり。共にしばしば此地に遊びたる同士なれど。互に見たる處見ぬ處あればとて。閑窓の興をそなたに轉ずる事になりぬ。

扇谷の壽福寺より車を下りて。實朝の墓を訪ふ。穂のなき薄は道を埋めて。踏み折りたる跡もなきに。山水の音ひとり篋に溢れたるもゝのさびし。されど墓には錠のかゝりあて。外より窺はるべくもあらざるこそ失望なれ。五六年あともまでは。道行く人も自由に花折り手向けつるものをと。打ちつぶやけど誰かは答へん。寺に歸りて僧に請ふまでの事もなければと。友のいふにまかせて。山道をあとへと下る。

次に十六の井戸を見んとす。我は始めてなれば。殊に心すゝみて行くほどに。海藏寺といふ寺に着きぬ。門前に浮草青く鎖したる水のある

は。名の高き底抜の井なるべし。かの『水たまらねば月もやどらず』の歌を。石に彫りて建てたるにて知りぬ。寺にて案内の人やあると尋ねれば。片足みじかき寺男の掃除してゐたるが。箒を置いていざこなたへといふ。岩根づたひに猶のぼりゆけば。岩屋の戸を引きあけて是なりといふ。見れば恰も紺屋の藍壺をならべたるやうに。十二の井戸はならびあたり。されど水なきに非ずやと詰りつゝ。蝙蝠傘のさきをさし入れたれば。ぬれたること道理なれ。水は透きとほる如き清さにて。なみく／＼とたゝへゐたるがかし。奥の壁には観音と大師の立像ありて。薄暗き中に拜まるゝもそぞろ寒し。傳へいふ弘法大師の加治水なりと。眞偽は知らねど。珍らしき見もの、數には洩るべからず。

寺男に別れんとして爲相卿の墓を問へば。綱引地藏というて尋ね給ふ

べし。其石段の上こそ卿の御墓なれと教ふ。猶道すがら村人に問ひつゝたどりゆけば。露ふかき谷ふところに淨光明寺といふ寺あり。其奥る山道を蜘蛛の巣かき拂ひつゝ分け登れば。聞きしにまがはぬ墓こそ立ちたれ。五輪の文字は幾星霜の雨に打たれて形を見せぬと。玉垣に彫れる冷泉家門人の文字は新しくして。の絶にざるを知らせたり。雪の如き苔は燈籠を封じて石いよ／＼白く。簀の如き蔦は松を圍みて風ます／＼緑なるに。斜陽うすくこぼれて人影の塔より長きも。身にしむ山の夕暮なり。遠くは由井が濱より三浦のかたまで。たゞ一望の下に來りて。歸帆の影と夕波の聲と。今も歌人の幽魂を慰むるに似たり。卿の歌はまた聞く能はず。日ぐらしひとり昔の聲に鳴く。

廿四日は昨夜の雨の名残にて曇りがちなれば。後は晴るべきかいかに

と問ひしに。里人こたへて今日は石割開山なれば必ずあがるべしといふ。そは又いかなる事かと問ひかへせば。建長寺の開山忌にて昔より降りたる例なしとて。頻りに參詣せよとすこむ。村角力もあり古代の行装にて開山の御わたりもありと語りつゞくるに。物見ずきなる性質のそれがし。いかでか以て猶豫すべき。日も誠に快く晴れたれば。午後三時過たざひとり車にて出かけたなり。車夫は處の歴史家にて。道すがら名所古跡の物語など得意らしく説き出だすを。聞くく行くも徒然ならず。曰く鎌倉の七處の切通は朝夷三郎が一夜の間に作りしなり。曰く稻村崎は新田義貞の太刀を投げて潮をひかせたる處なりなど。村學教師の黒板の前に立ちたるもかくやとおもはるゝこそをかしけれ。山の内の切通にかゝる頃は。老少男女の喘ぎく登りくるもの數を知らず。兩肌ぬぎて娘に汗をふかする母もあれば。風呂敷を木の枝にか

けて涼み居る若者もあり。黄なる日傘は赤き裳裾と相映じて。田舎の花は山道を装ひたり。建長寺は山門に入るより。賑はしき事かの盆の十六日にも過ぎたる中に。種ものゝ店の多く出でたるは。都に見なれぬことなればいとめづらし。向ひは飴屋酸醬屋の花やかなることなたに。練馬大根天王寺蕪など札を立てたるが並びあたり。本堂の傍に人の集まるを何ぞとかぞへば。四五十人の老若男女ども。何れも鉦と本とを前におきて。御詠歌などいふものにや。鉦にて拍子を取りつゝ皆同音におもしろく歌ふなり。あはれ老後のたのしみは。孫と是との二つにやとおもひやらるゝに。立ち聞く人は評して。何兵衛どのゝかみさまはよき聲よ。誰作さんのねふくろは感心なりなどいふをきけば。是

また一夜づくりにはできぬものなるべし。さはいへ口を開き目を見合せて唱ふる處は。馬鹿げたさまかなと獨言にいへば。同じく口を開き目を見はりて見物するさまこそ猶まさりたれど。彼等は答へんとすらん。さて角力はと問へばなしといひ。おあたりはと問へば或は暮るべしなどいふに。せんかたなく車を歸路にめぐらしたり。藪箆のかけに梨子の皮むく娘づれなど見つゝ歸るも。一幅の名所圖會めきていと樂し。車夫は又講釋をはじめていよ／＼興に入る。

廿五日は。舟にて小坪より逗子のあたりに遊ばんと約したるに。風出でたればせんかたなく。涼車にてする事に議をかへたり。逗子にて休みたる處は。入江を隔てゝ養神亭といふ旅館と相對し。風景や晴れやかなるを肴にして。携へたる瓢箪を傾け握飯の包を打開く。心まづ

うかれたり。それより徒歩にて磯に降りたち。帆立貝の殻をさがすもあれば。歌の種や落ちてあると。波打際を見あるくもあり。子供は傍の松陰に外國婦人が風景を油繪に寫してゐたるに見とれつゝ行かんとせせず。かくて葉山を過ぎ御用邸の前を通りて長者園に着きたるは五時にやありけん。園は眺望最もすぐれたる處に位置を占め。右には葉山の浦里より。逗子の出鼻を隔てゝ鎌倉の山つゞき。七里濱片瀬までも烟の中に姿を見せ。藍一色に書がゝれたる江の島は近く白波の末に立ちたり。左のかた漫々たる海上に。雲の如く霞の如く見ゆ隠れする影を認め得たるは。伊豆なるべし。夕陽漸く落ちて残紅雲を染め。又水を色どるも美しきに。墨繪の富士こそ水か空かの間にあらはれたれ。少女浴衣を持ち來りて風呂にめせといへば。我まづ入りつ。膳を運び

て銚子を向くれば。猪口をも取りつ。海老は皿に盛られて新しく。鯛は椀に浮びてあざやかなり。波いよ／＼高うして。風ます／＼涼しく。少女が捧げ出だせる燈を吹き消すこと。幾度なるを知らず。夜半に目さめて時計を見れば。一時も過ぎぬ。いでや起き出で、月の出を待たんとて。戸を開き庭に出づるに。虫の聲しげく聞えて。星の光に黒く見ゆすく小松原も面白し。海上には一點の漁火もなく。唯目前に碎くる波の白くきらめくあるのみ。夜も鎖さぬ門を出で、露ふみあるくほどに。うしろの山際あからみたるは。月の出でんとするなるべし。松の枝ぶりまでよくわかれて。銀の雲に金の光をこきませつこ。やう／＼舟形の月はさしのぼれり。海か山か岩か島か。見わたすかぎり月の夜霧に包まれて江の島も知ら

れず。鎌倉も知られず。輿に乗じて山道づたひを吟じ來れば。月はます／＼親しみて我と共に遊び我と共に語る。天地六合わが外に又人間の影もなし。紫の霞は潮と空との境を隈どりて夜は明けんとす。江の島は薄墨色に又あらはれたり。葉山の漁村は煙の絶間に見ゆかくれたり。きのふに引きかへて波おだやかなる海の上。箱庭に似たりとて小兒も喜ぶ。群青の上に胡粉もて畫がきしやうなる帆の影は。幾つともなく波に浮びて。日ははや島のあたりを彩色せり。こなたにも小舟のりいだして生簀の魚を捕りにゆくは。我等が今朝の命なるらし。いざ朝飯前に一潮あびてこん。子供よ母の髪むすび終るまで砂に手習して暫し待て。

歸りの道も又徒歩と定めたり。園のあるじは妻と共に門まで送り。下

婢は蝙蝠傘を一つに持ち出で、一々にわたす。是等の愛相は東京に似たれど。似もつかぬものは浦のながめなり。茶店あるごとに必ず休みて。父は山の名を問ひ。子は舟の數をかぞふ。店は富士を窓に入れて作れるもあり。松と岩とを軒にして葺きおろしたるもあり。芦の壁黒木の柱。いたる處に趣味多し。瀛車は煙を噴きて横須賀より逗子に來り。我はトンネルをくぐりて逗子より鎌倉に向ふ。今朝は遠かりし鎌倉山もわがものとなりて。砂踏み遊びし長者園はまた霞の外になりぬ。滑川の景色は妙本寺の門前にありと人のいふに。さらば見にゆかんとて。一日由井が濱より八幡一の鳥居を抜け。材木座の方へと小橋を一つ渡らんとす。橋のたもとに茶店あれば。腰うちかけて見わたす景色まづすぐれたり。芦しげく生ひたる中をうねりゆく水の上には。白鷺

の影を認めざりしを惜む。澁茶を汲み來る老婆に橋の名を問へば。誠は海岸橋なれど。閻魔川にかゝれるをもて人皆閻魔橋と稱ふといふ。あな恐ろし閻魔川の橋守るれ婆々ならば。衣をや剝がれんなど戯むるれば。老婆眞顔になりて説き出でけらく。昔は此地に新居の閻魔様のおはせしが。或年のつなみに川上まで流され給ひしにより。今は山内の新居に祭られて。再び歸り給はず。されば此邊にては昔の儘に閻魔川とこそ稱ふるなれど。うれしくも一章の活風土記にあひたるものかなどて。茶碗を取れば。老婆また茶をさしかへて。あれに松の木の見わたるは誰々の別荘など語る。

我は比企谷の妙本寺に行かんとせしに。人の教へたるは松葉谷の妙法寺なりしにや。遂にまた誤りて其隣なる安國寺にぞたどりつきぬる。

此寺は日蓮上人の立正安國論を草せしところとて。其ために九日籠居せしといふ遺跡もあり。苔むす石ぶみ蔦はふ松など。れのづから古色蒼然たるを覺ゆしむ。本堂の前に立ちてこゝかしのながめたるをりしも。廊下づたひに人の走りくる音して。旦那様にはおはさずやといふ。見れば七八年前我家に居たる下婢なりけり。いざこなたへといふに。先づ堂の傍に座を占めれば。茶菓などすゝめつゝ。其身の變遷を言葉みじかに打ち語り。かへすゝも不思議なるところにて再會せしを喜ぶ。あはれ余をして小説家たらしめば。何かの好き材料ともなるべきに。これより志しつる妙本寺に至れば。谷更に深うして山更に静なり。杉の梢は天をねほひて夕陽影を地に引かず。百日紅の花うつしくこぼれて。僧の簪を怠らしむることもしばしくなり。實に其境

内の清淨なる。其堂殿の壯嚴なる。觀て以て宗祖を欽仰せしむるに足るものあり。豪傑の遺業豈大なりと謂はざるべけんや。あゝ此寺をして壯宏隆盛かくの如くならしめしものは。鼓聲和するの題目に因るか。抑も一篇の立正安國論に在るか。

古跡は未だ探り盡さぬども。我どごまるべき日は盡きたり。三十日には東京に歸らざるを得ず。朝に夕に通りぬけたる權五郎の社は。寫眞にのみ親しき影を留め。夜に晝に聞きなれたる觀音の鐘は。夢ならで又いつかは其聲を數へん。あはれ由井が濱風よ。我は汝に別るゝを哀しむと共に。又汝に顔色を黒くせしを謝す。

砂の山 (幼年唱歌)

一

きたれ我友よ海のそばに

雪とくだけちる波のそばに

すなの池ほりて橋をかけん

砂の山つきて道をつけん

二

來れわが友よ砂の上に

波も來てあそぶ砂の上に

貝の殻をもて『いろは』書けば

波は洗ひつゝ持ちてかへる

三

波よいざ我も友とならん

心へだてなく來り歌へ

高く又低くつゞみ打ちて

遠く又近く拍子ふみて

月と我と (唱歌)

一

さしひく汐は鼓のしらべ

岩こす波は太鼓のひざき

晝見し濱路はせまくなりて

たゞ二人月とわれと

二

鳥かげ黒し波路の末に

月のみ白し汐路の遠に

晝見し釣舟いまは失せて

たゞ波と空とわれど

鎌倉の海

明治二十九年八月

ことしもかまくらに遊ぶ事二十日になりぬ。明暮友となりたる波の聲。山の姿。砂の色。貝の光。あすれんとしてもあすれられず。

宿りとするところは材木座光明寺の前。あながらにして鎌倉の海を一目に望むべく。向には靈山崎につゞきて江の嶋の浮べるあり。少し右

にはなれて雲まに富士の聳ゆるあり。それより長谷の村里。由井の松原。たゞ手にとる如く波をへだて、打ちむかはるゝもあもしろきに。南の方には伊豆の大嶋さへ。晴れたる日には鯨のしほふく心地して向ひたてるよ。左の方に隣してつきいでし浦里は飯嶋とぞよぶなる。

朝とくわきて渚にいづれば。貝は打ちよせられて砂の上にあり。薄紅にて花の如きもの。眞白にして鳥の如きもの。帆立貝めきたるもの。月日貝らしきもの。ぬれたる色のうつくしさよ。子供は走りよりて拾はんとするに。波は來りて拾はせむとすまふ。

磯にひるがへる赤旗は海のあるゝをつげ。青旗はなきたるを知らするなり。今日も青旗なりとてよろこぶ子供は。潮あびんとて勇むなるべし。朝けの煙こゝかしこにのぼりて。日影はやう／＼我もとに來りぬ。

白布の筒袖。麥はらの帽子。ものゝぐはよし。いと波とけふも戦はん。」「
戦ひつかれては。磯にあがりて砂に臥し砂に座す。又たのし。子供は
工兵となりて山を築けば。波また大舉し來りて一打に奪ひ去るもにく
からず。

板を浮べて双の手に持てるは。ねよがんとする人。手を引きつれて舞
踏しつゝあるは。波を飛びこす人。世にものおもひなしとはかゝる境
界にやあらん。見る人も見らるゝ人も。罪なく欲なく又憂なし。

れのが生活は家こづりて六人。みづから炊きみづから煮るをもてたの
しみとす。平生魚のあたひしらざる主人も。濱にいであははさきべら
などいふもの提げかへり。みづから庖刀とりてまないたに向ふ。鱗は
逆にとび鱗は半ばちぎれたり。笑ふなよ是も社會の一進歩なるを。

沖の片帆にのこりたる夕日も。いつしか影ををさめて雲を染めたり。
染められて立てる富士。忽ち紅に。忽ち紫に。忽ち黒く。忽ち薄く。
遂に姿をかくして止みぬ。天女の額か造化の影か。抑も美の神の弄び
けん筆か。

うしろの山は月になりぬ。數へ出ださるゝ松のひまより。黄金の盃は
きらめきのぼりぬ。波どころく、白く光りて。やうく、に銀をちらし。
又黄金をちりばめゆく。

夜もふけぬ。月をふみて遠くあるけば。我かげあざやかに砂にあり。
興に乗じてあくがるゝ人。我と影とのみならず。詩を吟ずる聲はかし
この岩の上にも起れり。

時としては朝霧を分けて山路にあそぶをりもあり。姉なる子は妹の手

を引きて従ひ來りぬ。末の弟は父の肩を輿にしてにこ／＼といさむ。いざ花のあらんかざり集めてみんといへば。姉と妹ははやれくれじと摘みはじめたり。螢草、野菊、蚊屋草などを始とし。名も知らぬ花さへ小さき手にあまりぬ。肩なる子のあれよくと指さすをみれば。岸のひたひに咲きほこる姫百合。のぞみは高けれど。と／＼かぬをいかにせん。

畑にいづれば。赤き毛を垂れたる玉蜀黍あり。緑の弓を掛けたる十六大角豆あり。此中道を急ぐとなしにうぬりゆけば。穂にいでたる粟は頭うちたれて送り迎へす。

けふは叔母さま東京よりをはすとて。子供ら朝はやくより起きてさわぐ。午後の嵐車は待ちつる人をのせて停車場につきぬ。やがてうちつれ鶴が岡にのぼる。今を盛の池の蓮は。かうばしき風を送りて。銀杏のもとにたゞずむ人を吹くもきよし。子供はあるじぶりして。こゝかしこをしへめぐりつゝ口々にいふ。叔母さま明日もねはせ。明後日までもねはせと。

一日小坪より山越して逗子に遊びし事もあり。坂つきて松の間より弓の如き入海を見ねろしたるけしきは。又たぐふべきものをしらず。砂白く波きよき渚に添ひたる家のさまもねもしろきに。之を境として菟の如き青田のうしろに廣がるあり。渚の方には貝ひろふ人蟻の如く。潮あむ人水馬の如し。かなたに山のそがれたるやうなるは鎧摺なるべし。それより右につゞきては葉山の村里より。森戸明神の松林までまがふべくもあらず。子供よあの松の右なるが。をと／＼し休みて茶をの

みたる處なるぞ。

磯にありては。我もまた蟻になりて貝あさりゆくを。山より見る人ありやなしや。後よりさくら見わたりと叫び。帆立貝ひろへりと呼ぶ。辨當はれのく結びつけて腰にあり。あの岩陰やよからん。此木陰はいかにとて。つひに森戸の明神まで來にけり。はじめ江の嶋の右に見つるふじ。今ははるかにわかれて江の嶋の左に立てり。鎌倉の海はわがすむ光明寺のあたりをのこして。親しくわれと相對す。木のもとに茶店あり。田舎娘あて茶をすむ。此磯には酢貝多しとて子供は渚に下りぬ。父は頼朝の遊びしといふ菜嶋ながめつ。茶椀を取りぬ。歌いまだ成らざるに。貝は手にくはこばれて前にあり。あはれ足をいためてかまくらにのこれる母上に。早くこれをみせばやと。かれもこ

れもいふ。

光明寺はものしづかなる大寺なれば。朝飯まつとてもあそび。夕飯をはるとてもまづあそびしところ。山門高く松の木の間を聳ねて。日ぐらしの聲遠く。苔むす石佛の前には風のもてこし落葉かさなりて。夏秋しらぬ世界にも似たり。さはいへど本堂は陸軍幼年學校生徒にかりとられて。今は誦經の聲よりも喇叭の響く處となりぬ。夕日かげれば。いでと相撲取るもあり。擊劔つかふもあり。これを見るとき集まり來る女子供は。撞樓のあたりをみたしぬ。夜に入れば濱涼し。兵士は多く砂ふみに出で、佛前の燈ひとり寺を守る。

鎌倉にてよめる歌ども八月ばかり

前に見し島は後になりけり

はまづたひして貝ひろふまに

たちいでこいざ我かげをくらべみん

あさ日は杉のうへにのぼれり

朝霧にぬれつゝ行くもうれしきは

まめのはなさく畑のなかみち

人ひとりすむとも見ぬ大寺の

松くれそめて日ぐらしのなく

日にいくたひ出でゝ見るらん心なく

よせてはかへる波のけしきを

今日もまた人よりさきにふみにけり

ぬれたる磯の朝月のかげ

にぎはひし濱邊も人の跡たにて

夕立くらしかまくらのうみ

墨筆をなげちらしたる心地して

すこくも雲のちる夕かな

波の上をちぎれくに行く雲の

なでてはみかく月のかげかな

行けば行きとまればとまる我影も

月のさづけし友にうありける

あら波のよせてかへりし砂の上に

くだけぬ月のかげのこれる

鎌倉のはかめぐりして今日もまた

折りくらしけり夏草のはな

浦波はいざとまねけど鶴が岡

とりゐのかげもたちうかりけり

磯寺のせがきの鉦もひゞき来て

夜かぜ身にしむ波のうへかな

日は入りぬ月は登りぬ濱にいでよ

海みつゝ居れば物おもひもなし

名残をば濱にのこしてかへりしを

閨にまちをる月もありけり

ともし火を吹きけされても中々に

うれしかりけり月にとはれて

ちる涙にぬれて沖ゆくわが舟を

けしきのうちに人やみるらん

夕日かげ片帆にうけてくる舟を

いつまでれのがものと見るらん

くれにけりひる遊びつる江の島の

あたりに見ゆるともし火のかげ

別れつゝ人は濱路やたどるらん

あさ月たかしいなむらがさき

いにしへの夕日は今ものこるなり

まつばがやつ松のこずゑに

ひるもなほ虫の聲きく古寺の

きしの秋草さきそめにけり

砂の上に指のさきしてかく歌を

直すとならし波の洗ふは
小壺坂のぼれば涼し松かげに
沖の帆舟も見はかくれして
折り持ちし花はいづくにすてつらん
海見はそむるやまごねのみち
寺山に賤のをとめが刈る草の
にほひすどしき朝風ぞふく

母のめぐみ (母の七年祭に)

一

たれか世に我身を生みし

ふところを夕べにぬらし
衣の裾あしたにぬらし

夏の夜をおきあかしつゝ
冬の夜をひえあかしつゝ
獨して立ち居するまで

獨して物くふまでに

たれか世に我身そだてし

ありがたの母のみぐみや

なつかしのそのおもかげや

二

たれかかく我身そだてし

よにうまさものとしらへば

身づからは箸をもつけず

はしき子にあたへんものと

のこしれきて得させ玉ひつ

病ありて打ち伏す時は

夜も安きいをだにねずて

粥わかし薬あたこめ

床さらずみとり給へり

ありがたの母のめぐみ也

三

たれかかく我身愛せし

朝されば書よみさとし

夕されば文字かきをしへ

あはれよき子にせんものと

よるひるに苦しみませり

おこたりを懲らしと言葉

いまも猶たもへばいたし

わがまゝを嘆きしなみだ

いまもなほたもへば寒し

ありがたの母のめぐみや

四

たれかかく我身をしへし

嵐ふきふどきみだるこ

冬の夜も衾ぬぎつこ

旅にゐて物學ぶ身に

あつきめぐみおほひたまへり

月さにて秋ふけわたる

淺茅生に虫の音きけば

百千里へだゝる空に

子の姿しのびたまへり

なつかしのそのおもかげや

五

かくながら千世ましませと

神かけていのりしものを

あだしの、草葉の露と

きえゆきてかへらぬ事よ

夢で、ち猶うせぬまに

七年のむかしになりぬ

御すがたは石とかはりて

こゝかしこ世をへだてけり

たれかかくわれを見すてし

いづかたに母をさそひし

六

たらちねの母のめぐみは

海山もねよばぬものを

ある時はをしへにそむき

ある時は腹うち立てこ

孝の道などわすれけん

わがまゝをなどかいひけん

いまさらに悔の八千度

くやめどもかひこそなけれ

われをなどひとりのこしと

母をなどひとりさそひし

七

たもしろき事はあれども

告げやらん君こそまされ

うきつらき事はあれども

花折ればさしげんとおもひ
かたらはん君こそまさぬ

よきにつけあしきにつけて
月見れば共にと思ひ

いつまでかはなれざるらむ
おもひいづる君のおもかげ

なつかしのそのねもかげや

八

年ごとに春はかへれど

春毎に鳥はきなげど
まつ君はかへり来まさず

花もなほその世の色香
まつ君の聲はきこえず

月もなほその世の光

天地はかはらぬものを
なつかしのそのおもかげや

なつかしのそのおもかげや
したはしの昔の春や

したはしの昔の春や

したはしの昔の春や

氷川公園

かきかけたるもの昨夜をはれり。幸ひけふは日曜なるに。子どもらつ
れていづこへかゆかんといへば。妻は漁車案内くりかへして。大宮は
いかどとすすむ。

十時卅五分上野を發す。をりしも降り來れる雨は。礫の如く瀧の如く。
一時は晴るべくも見にざりしかど。王子赤羽とすぎゆくまゝに。力を

減じて薄く日光をもらせるもうれし。母の膝なる小兒は生れてわづかに四箇月。たゞめづらしげに乗合の顔をながめては足をもがきつゝ喜ぶ。姉なる子は停車場の札を讀みつゝ大宮はもういくつめと數へ。妹は小田の案山子に目を注ぎて。兵隊に似たり朝鮮人に似たりなど評す。妻よ子供よ。今わたる橋こそ墨田川の上流よ。

空は全く晴れたり。大宮公園は我等一行を迎へてよろこびたり。松ふく風。遠ふく風。萩ふく風。すこきふく風。氷川神社をめぐりて賓客の袖に親しむ。

萩の中道おくふかく入れば。温泉宿あり。萬松樓といふ。なめらかなる苔の上には女下駄のすべりたるあとをのこせり。子供はあぶなし。姉よ妹の手を引ききてきたれ。

南に面する二階の間は我ものとなれり。日ぐらしの聲に枕しながら。東隣の碁をもきくべく。西隣の詩吟をもきくべし。浴し來つてはゆかたのまゝにて膳に向ひ。欄干にもたれては小説めきたる浴客の出入をながめおろす。あはれ月下一夜の夢をここに結ばましかば。

櫻のうしろに田を隔てゝ岡あり。天神山といふ。草深く花多く。糸の如き路は末絶わて人を迷はさんとす。母は乳兒に添寝するどて残りたれば。子供は持ちゆきて見せんとて。花の採集にかゝりたり。蒸せる粟の如き女郎花あり。霜よりも白き男郎花あり。萩を折らんとしては蜘蛛の糸に顔を撫でられ。薄を抜かんとしては手を切るなどいましめらる。名のある花。名のなき花。兩手にたばねて立てる少女。額の汗玉の如し。

五時四十四分の瀛車にて歸らんとす。夕日すでにかくれて。紅の雲は波の如く鱗の如く。金を鏤めつゝ窓の硝子にかざやき。客の額に反射す。子供が寶の如く見出でたる富士の。紫になり薄墨になり消ゆくもなごりをし。

初更家にかへりて燈のもとに半日の樂しみをくりかへす。妹はステーションの名を覺て稱へ。姉は今日の花なりとて鉛筆もて寫し出だせり。あはれ今宵大宮に寝て虫きく人や誰なる。

飯田武郷大人還曆の賀に

めかぞやくこがねしろがね

八千庫につめるをこそ

世の人は富めりといへ

馬車いでいりしつゝ

おほやけにつかふるをこそ

世の人は貴しといへ

かざりなき寶ならねば

その金もつひには盡きん

われのみ位ならねば

いつまでか保ちはつべき

かゝる世の富を見すて

かゝる世の位のがれて

雷里にかへり住むきみ

朝されば髯かきなで

神の代のあとをたづね

夕されば盃あけて

言の葉の道あげつらふ

天地ろこの庫

海山ろ古いせぬ友

とれどくつくる時なく

おこれどもたれかうばはん

あなたのおし千代のもどめと

御子うまご膝とりかこみ

うたげしてほぎまつらく

おきふしに手ならず窓の

八千書は齡のかず

あけくれにつちかふ園の

八千草はさかほのしるし

鶴龜もまゐきつかへて

ためしなき富をゆづらん

君はこのきみ

兵士の妻

一

月くらく風さむし

かゝる夜頃をいかにして

野營の床にあかすらん

ねむれども夢もみず

あはれわがせはいづくまで

敵地に深くすゝみけん

二

月おちて夜はあけぬ

とる手ねそしと開きよむ

新聞紙上の從軍記

武勇の名ほまれの身
いつ此筆にのせられて

軍歌のなかにうたはれん

三

山くづれ天ふるふ

北京は遠し雪ふかし

看病婦とも身をなして
九連城奉天府

かなはば我もゆくべきを

四

冬の日の一時も

年よりながき窓の内

手にとる針もたがためろ

たちまちにひざきくる

號外賣の鈴の聲

わがせの戦死は見にざるか

秩父の雨

明治二十八年九月

芋肥に柿あからむ頃。秩父見にゆかずやとすむるは深谷の里人内田氏なり。時は九月末の日曜。例日かの地に開く講筵の翌日を期して。朝とく深谷町を出で。鐵道を横ざり。臺坂をのぼり。人見山といふ小高き岡を左にしつゝ行く。一時はあかるく見にし空も。又くらくなりて。雨まことに降りいだせり。是より二里が間は。名も武藏野とて家

まれに人とほく。唯茫々たる原の中道をわけゆく事なれば。木陰の外には笠やどりゆるす軒もなし。唯打ち伏し起き返る萩薄の上に。玉をつらぬて置きわたす露の日光よりも美しきを見るのみ。ぬれて女郎花を折る人われらが外に今朝まだあらず。

内田氏は秩父博士なり。歌こそは我門下なれ。地理は彼を以て先生とせざるべからず。曰く藤澤。曰く花園。曰く櫻澤。村の名を聞く毎にカクシの手帳とりいだせば。先生はかうもり傘のさきもて土の上にかきて示す。武藏野は花園村の大字にして。先に休みたるは小字ザルガイトといふ處。文字にては筑食土と書くなり。

鶉橋といふをわたるに。岸高く木々おひしげりて。水の流いと遠し。向ひは寄居町にて深谷につぎての小都會。傘さしてゆきかふ人々。雨

中ながらもさびしからず。山やうやく近く。雲いよ／＼深うして。北條氏邦の據りしといふ鉢形城墟も前に立てり。

町をはなれてゆけば。荒川の岸に出づ。此あたりを末野といふは。武野藏のをはりたる心にやあらん。川の岸にかけづくりしたる茶店ありて。すしなど賣る。危き丸木の欄干によりてながむれば。水は西より來りて大なる巖を突き。折れて南にめぐりゆくさま。おもしろさ限なし。此巖を象が鼻といふ。もとは名の如く長くつきいでたるが。いつの頃にか欠けうせたりとぞきこし。今は猿の鼻などいふべきが。巖の上は小高き岡になりて。赤松もて圍まれたる中に。聖天の祠あり。川には鏡こす波の色雪よりも白く。水車の音こと／＼と足下に響く。ここを出づる頃より。空うれしくも晴れそめたり。時は一時も過ぎに

けん。下破崩は猶川ぞひにて新道つけたる處なり。見おろす水の上には削れる如く挽きたる如き岩。かさなりく列をなして立ちたり。少しゆけば榛澤郡つきて秩父郡となる。

梁瀬村は寄居より二里にして近し。八幡神社のたてる前に一つの茶店あり。午飯せんとて腰うちかくれば。やゝありて十一二の少女。父をたすけて膳を運び給仕をなす。飾なき田舎の行儀いと愛らしければ。學校へゆくやと問ふに。寄居まで二里の道を日々往復すといふ。何級なりやと問へば。高等三年なり。女子にて此村より通ふもの。たゞ一人なれば。道のほどいとさびしなどかたる。風はうしろの山より來りて。庭の野菊おのづから香ばし。

家ごとの壁に軒にほしならべたるは煙草の葉なり。山の如く堤の如く

窓の内せましとうち積みたるは玉蜀黍なり。蕪蕪る娘糸くる母もひまなきに。父は鳴子を風にまかせおきて田よりかへる。田舎の秋こそたのもしくなりぬれ。ことしは農事すべて豊かなれば。祭の準備いたる處にいと忙はし。甲の村は芝居を受けんとの原案可決せりといへば。乙の村は玉垣造營の議會開設中なりと傳ふ。野上をすぎ藤谷淵にかゝるに。寶登神社の額うちたる鳥居は右のかたに立てり。それより桑畑の中を五六町も入れば。神さびたる社は秋風蕭條の中にたてり。地理先生は苦もなく石段をのぼりはて。神前の鈴を鳴らしをる羨ましさよ。我は段の數をかぞへつ。やうく二十五まで來つるものを。まだこれより八つのぼらねばならず。

夕日は杉の梢を色どりて蟬の聲そごろさむく。半垂れたるすだれの内

にきらめきわたる神鏡の光。なにとなくものすごし。欄干人なく。秋ふけて老蝶ひとり飛び去り飛び來りては。擬寶珠の上にとまる。金崎すぎて。荒川の堤に出づ。日ははや半ばかくれて。遠近の山影ひだをとり皺をよせつゝ。やう／＼に暮れんとす。向に祭の旗の三つ四つなびくは皆野村。そのうしろなるが箕山にて。右のかたなる雲の中こそ武甲山よと。例の先生さし示す。からうじて野卷村は來れり。然れどもわがゆく家は來らず。足の重き事石碓の如し。まだか／＼と聲をかくれば。もすこし／＼といひつゝ。二三間さきにたちて先生いそぐ。あなうれし。わがゆく家は來りぬ。あるじは門にいでゝ迎へぬ。妻君の汲みいだすすすぎの湯に。八里の道のつかれを洗ひて。のぼらんとすれば。二尺の椽さき箱根より高し。

あるじ姓は小杉。三嶺と號す。書畫と劍道とを以て世をおもしろく送る人。もと地理先生と相知りたるがため。我をよろこびむかへしなり。山の木の實。川の鮎。あつきもてなしの盃を手にして。此地の近世史をきく。又たのしみの一つぞかし。

さても秩父暴動のおこりしは。去る十七年の秋なりしが。先づ何がし村に集まりし四五十名の博徒ども。舊曆の九月十三夜期して金崎村の金貸會社に打入りしをはじめにて。つゞいて下吉田村の棕神社に會合せしは。五百名とぞ聞ゆし。かゝる處に警部巡查説諭を試みんと來りしかば。此に於て開戦となりぬ。巡查に一名の即死。一名の捕縛。暴徒に三名の即死あり。暴徒は荒波のおしよするがごとく。早くも大宮にいでゝ高利貸の家を焼き拂ひ。又豪農豪商を脅迫して數千金を得。

郡役所を奪ひて其本部とし。皆野村に本陣をかまへて。吉田、小鹿野、大宮に後詰をおき。物見の兵を金崎、金澤の方面に分ち遣はすなど。手くばり至らざるなし。

あやばのといふ處にて一千の憲兵と暴徒との血戦あり。おの／＼負傷一二名にすぎず。時に十月三日。憲兵は中仙道へ引上げ。暴徒は見玉町を距る十町の處へくりだしたるが。竹橋鎮臺の小隊來りむかひて大に戦ひしかば。官兵即死一名なるにも拘はらず。暴徒の即死二十三名に満ちぬ。さすがは烏合の民兵。目前の膺懲にやおそれけん。やう／＼秩父へと引きかへし。よの村の小學校を本營とせしが。既に此地は官軍に屬せしかば。今は是までと山中をこねて信州にのがれ。遂に鎮定に歸したるなり。此時暴徒の掠奪せし金圓は一萬五千に登り。郡

中の附和隨行者は三萬に超たり。それがし又その一人にてこそ候ひつれど。語りさして盃をすゝむ。さて其脅迫せられし時のさまはいかにと問へば。或日の事なりき。五十名ほどつと入り來りて余を取り圍み。中の二人は火繩筒の火口を左右の脇におしつけて。否といはざ放さんずるさまにて。味方に出でよといふ。竹槍拔身のものゝは戸口にあり。飛ぶ鳥なりとものがれいづべきやうもなければ。心を決して伴はれ出でしが。途にて人のひまをうかぞひ藤かづらにつたはりくだりて。谷底に身をひそめ。飲食せざる事三晝夜。かくて奪はれしもの刀劔のみにてすら二十八腰に及びたりと。

聞きふける客。かたりふけるあるじ。之を外にしてともし火のもとに歌しるしをるは地理先生なり。少女枕もちきたりて父と共に盃盤をか

たづけ。蚊屋を釣りなどす。ふけゆくまゝに虫の聲ひとり耳に近し。あけゆくそらに音たつるは雨なり。あるじははやくも紙筆もてきて歌をといふ。童子はや硯に墨すりためてかたへにおけり。

春風のなたぬふくころ又とはん

かすむ秩父の山もみがてら

請はるゝまゝに。聯や額やとなすりがきして。暇をつげたるは十時頃なり。あるじ道まで送り來る。雲ますくちかうして四壁の青山一つもみぬず。つひに別れて車にのり。郷平橋をわたるに。赤平川の荒川に落ち合ふところ。波白く雨白く。鮎つる人の簑までも霧にぬれたり。村また村。山また山。秩父橋のけしきも見まほしければ。我車には母衣かくるを許さず。

大宮郷まで三里の道なり。井上茂十郎の家にやどる。是より三峰山上まで六里。ゆきかへりにて二日路なるべし。地理先生は頻に其勝を説けども。雨はくらし足はつかれぬ。あさてはかへらでかなはぬ用事をさへにひかへたるを如何せん。秩父の山靈もし心あらば。春風三月ふたゝび我を導きて白雲ふかき處に神歌の聲をきかしめよ。影森村に寺あり。石龍山橋立寺となづけ。里人は單に二十八番とよぶ。寺に窟ありて奇觀をきはめたる事は。地理先生のつとにかたりしところ。先生は大宮より二里半もあらんといへり。昨夜のやどりにて問へば。一里半にして近かるべしとの事なりしかば。井上につくと直に下婢にとふに。八町なるよしを答ふ。近づくとおもひて聞けば遠くなるこそ旅路のならひなるに。是はあまりなりとて下男に質せば。一里に

少し遠しといふなり。草鞋ふみしめ町うちすぎて。桑の中道をはるばるとゆけば。雲は近き山々を埋めて。そのしたくりは身に散り來れり。山路いよ／＼狭うして。横たはり伏す薄水引ゆくてをふさげり。あなつめた。顔にはぬたるは露か霞か。

右のかたは谷川にて。笥にわかれ行く水のすがたも浮世ならず。獨りすみゆく月の夜聲やいかならんと。水車守る翁の心まで。詩人めきてぞおもひやらるゝ。

細道つきて寺きたる。千尋の巖を軒にしたる一字の観音堂あり。垂れかゝる青鳶。巖の半をうづめて雲にぬるゝも。げに無垢清淨の佛地なりけり。岩屋の案内を請へば。僧は寺にあらざ。留守もり出で。軒にかけたる板木をかん／＼と打ちならせば。隣の家より老婆一人はせ

來りて。蠟燭立たづさへつこちへおはせと先に立つ。先生曰ふ。寺に屬する民家四戸ありて。順番をたて岩屋を案内するをつとめとすと。

入口はもと來し山路を少し下りたるところにあり。立ちて入る人。やこもすれば頭つかゆるほどなり。こゝにて火をともし。手ん手に持ちゆけども。案内知らぬ穴の中なれば。上り下りの階子道ことにあぶなし。婆は長き棹のさきに蠟燭さしかへて。この上なるが雲の波。弘誓の舟。かしこなるは下り龍。こゝなるは上り龍。など説き示す。見あげんとして頭を打たるゝ事もいくたびぞ。くゞらんとして肩を撫でらるゝ事もいくたびぞ。引きのばさば一町にもあまるらし。壁の屈起するさま。洞の隠顯するさま。まこと奇といはんの外はあらず。山氣ひや

こかにして肌をおそふ岩のおくには。つるし柿をかけたる如く。蝙蝠の羽ねをつぼめてとまりをるもいとめづらし。火の光にや驚きけん。

見あぐる顔をかすめてはばたくと飛び来る。

口をいづれば寺の庭なり。老婆は別を告げて去り。るすもりは澁茶を二つ汲みていだす。雨少しひま見ゆたり。いざや傘を杖にして山路くだらん。

下りはてたる處に茶店あり。豆腐を肴に酒のむ人。立ちながら煙草の火を借る人。いでいり集まるにぎははしさ。老嫗一人盆を下におきもあへず。あるじぶりして立ちはたらく。又名所圖會中のものなり。我またポンチ繪の役者となりて。つかれし足をひきくわらぢはきかへてゆく。

秩父神社は知々夫彦命を祭りて大宮町の東側にあり。老木のいてふ陰を深めて秋待ちがほなるも。神さびたる宮居のさまなり。参りあひたる今日しも。笛太鼓の聲にぎはしく神樂殿に響きわたり。飴賣る店。柿賣る店。こまかしこに出でし。女子どもこゝて満たされたるは。秋季皇靈祭の日なればなり。祭服つけたる神官も五六人見ゆ。

宿りにかへりては。湯に入り膳にむかひて。隣樓の絃歌を聞くのみ。雨またふり來りて夕ぐれの窓きのふよりも冷かなり。

此町に久保某といふ翁あり。内田氏の紹介によりて。歌こはんとて宿りに來る。秩父の事くはしき人なれば。燈のかげに聞きふかすもつれなくならず。翁いふ。惜しいかな今十日もおそくおはさば。三峰の鹿をも聞かせ申すべきにと。そは何よりの話なり。されど此度は心にま

かせず。せめて鳴く時のさまをだに聞かまほしといへば。語りけらく。昔し菊地容齋も。はるくちこぶをさして來られしが。二日なかず三日なかず。からうじて四日目にきいて歸られしといひつたへたり。これは武甲山のあなた子持山といふ處にて。鹿の少なければにやあらん。今申すところは三峰を少し下りたる谷間にて。いつもその時節には。午後三時より五時頃までの間。夕日の梢にかたむくころになれば。三聲ほどづかならずなくなり。牡鹿牝鹿うちつれて木の實をひろひに出でたるが。つひに行方を失ひて呼びかはず聲なりとぞ。さびしき山べのこだまにかへして。かにいようと打ちひざくは。能笛を遠くにて聞くにも似たるべし。その腸にしみわたるしらべにいたりては。形容すべきものを知らず。あはれ一聲これをきかせまゐらせたまきものをとて。

くりかへし。鳴聲をまねびいでたり。さらでだに吟情ゆきかふ秩父のおくに。秋風薄を吹くの夕。此妻戀の聲を聞かん時の心やいかに。夜あくれば。馬車は約をたがへずして來れり。乗合六人。脛を重ね肩を摩しつゝ。本庄さして行く。けふは雨やみ雲散りて。遠近の山々見わたれり。地理先生は謂はゆる秩父九峰をかろへて。かしこは何。こなたは何など。みゆるかぎりいひきかす。九峰とは釜伏。箕山。笠山。高條。武甲。三峰。兩神。城峰。寶登をさすなり。日かげ時々あらはれて山のいたぎを黄にしては。又藍にかへす。金屋といふところよりは兒玉郡となりて。やうやく山をうしろにし。摺鉢の口よりいづるにも似たり。馬首の向ふところ。八束の穗波天につらなりて。帯の如き一路わづかに通ぜり。亂打する鞭のねど。吹き

なちす喇叭のこゑ。道に露吸ふ胡蝶の夢をしば／＼おどろかして。九里の道を五時間にかけてゆく。本庄につけば。あぶなかりき。東京行の瀛車まさに發せんとして。餘なり人はや改札口にあつまる。

秩父に遊びける時

かへりさくつこじを見れば山寺は

秋の日かげものどけかるらん

武藏野の末の松のひまゝに

さらせるぬのやあら川のみ

柿の實はうみて落つれど寶登の山

ひろひにつどふ里の子もなし

秋寒きちとぶおろしの麓川

やなこす水のねとばかりして

三つ峰の山ぢや雲にたねぬらし

あら川づゝみかぜしぐるなり

秋ふけてたばこつみほす山里の

夕日がくれにこほろぎのなく

釣人のみのきてたてる川上の

いはほの苔に秋のあめふる

ひかれゆく心のこまのむちとりて

雲ちちぶのやまめぐりする

月にすむ秋のしらべや是ならし

くるまのひどきたに川のおと

栗を焼く子もあつまりてあろり火の

あたりにはきはふ夕ぐれのやど

雨にふす萩女郎花かきおこし

かきおこしても行く山ぢかな

神祭る旗の文字にもみゆるかな

をさまる國の秋のさかには

中々に心もすみてうれしきは

雨のおとときく大みやのさと

朝の散歩

鶯に雀の聲するは。夜のあけたるなるべし。此時おきいでて散歩する

を我日々の課業とす。或は關口のあたりにて。或は高田のかたに。

里をすぎ村をゆくに。大かたはまだ起きず。鳴きのこる虫の聲ここか

しと聞えて。朝顔ひとり人まちがほなり。寺は何くぞ。木魚の遠く響

き來るは。

水車をきこすて、田の中をゆけば。道をはさむ稻の香は衣を襲ひて。

こぼるゝ露雨の如し。小さき橋ある處に出づ。流をさきうづめたる蓼

の花は。あのづから涼しきすみかをしめて。小川の歌をわがものどや

すらん。夜は去れり。朝は來れり。されども彼は調べをかへず。

箒を手にして垣の蜘蛛の巢を拂ふ老人あり。青物賣は今ぞ來かゝりて

詞をかはす。曉に月を踏んでや家をいでけん。芋も生姜も露にぬれた

り。下婢は箆を提げて出で。犬は跡おひて裾にたはむる。

御輿の修覆

早稻の穂白くいで露玉の如し。誰をさそひて又こゝに遊ばん。芋肥に柿うむも四五十日の程なるべし。今年はいかに。祭の御輿のしゆふくは出来るか。

鼻笛

南洋に航して歸りし人。二尺五分ばかりの木の枝を持ち來りて見せけるが。其枝には中央をとほして穴あり。口の處には他の木を入れて更に狭く作れる穴あり。之を鼻にあてゝ息をするに。やさしき聲いで。おもしろき事限なし。さても如何なる時に此器を用ふるや

と問へば。男の夜しのびて女を訪ふ時の合圖するを常とす。男これを吹きつゝ女の家近づけば。女また短き竹の笛をふきて。來てもよしとのこたへをなすといふ。あはれ仲國の風流を學ぶもの。蠻民中にもある事よ。あまりのめづらしさに鼻笛の歌をつくる。

男

風清し月おもしろし

いざゆきて妹が家とはん

笛とりていざおとづれん

かのみゆる椰子の林の

葉がくれにまねくはそれか

ともし火のかげ

女

山彦もこたへぬ夜半の

夜あらしにたぐふ調べは

ちぎりつる聲かあらぬか

見し夢に似たる今宵ぞ

あひし夜に似たる月夜ぞ

いつまでか露けき野邊の

をちかたに君を立たせん

わが通ふ心こたへん

妻琴もがな

松

櫻花さきのさかりは

あまざらふ雪かどみねて

たちつとく雲かどみねて

もみぢばの染めし梢は

白妙にほひろわたる

ねりかけし錦とみねて

ぬぎてほす赤裳とみねて

しかはあれど花もみぢも

紅に照りろかどやく

朝雨にうつりこそゆけ

ひとさかりくすぐれば

かくばかりさだめなきよの

夕風にちりこそすぐれ

雪霜にいろもかはらず

雨風にうつりもゆかず

墓の前

草箒手に取りもちて
 墓の前に立てる少女子
 たがために木の葉は拂ふ
 たがために水は手向くる
 もろともに春の野に出で
 すみれつみ胡蝶追ひたる
 その人のあとや吊らふ
 その人のゆくへや戀ふる
 のこる人あはれ
 行きし人あはれ

深みどりふりせぬものは
 ときは木の松こそありけれ
 梢には鶴ぞ友よぶ
 木かげには龜ぞむれある
 羽衣をかけし少女の
 遠き世もなれはしるらん
 汐くみし浦のどまやの
 秋風もなれは聞きけん
 あはれこのかはらぬ陰に
 やどしめて我もきかまし
 八千とせのこゑ
 よろづよのこゑ

自由椅子

烏瓜の花おちて膝を打てば。蜻蛉は読みかけたる新聞紙の端にとまる。書齋あつしとして自由椅子を藪の陰にもちいづるも。夏日の一快なるべし。學校引けて蟬とりあるく子の聲門外に聞ゆ。

秋の雨

秋の雨さむし。琴は壁に立ちたれど。調ぶる人なく。書をも友とし疲れて。獨り窓よりながめいだす。愁はしげに項垂るゝ美人。誇らしげに仰ぎ伏す隠士。媚びて笑ふが如く。嘲りて言はざるが如し。

萩は少しづゝ咲き出でたるが。露に半ば埋もれたるさま。得も言はれず。前なるは紅。後なるは白。相まじりて地に敷かるゝは。今日の後なるべし。

蕾なほ緑なる女郎花は。筆の如き初穂の薄と丈くらべして力なき雨に打ちゆらめく。夕の嵐を知らずがほなるも。望は遠し。苗賣る翁呼びとめて植えて見たる藤豆は。花となりて垣の頂より這ひ下れり。葉鶏頭の獨り抜けいでゝ美しきは。種よきを貰ひたればなるべし。散りもせず萎みもせず。ぬれてはいよく色添ふを覺ゆ。主人は花剪もちて庭にありたり。切らるゝもの萱か紫苑か。垂れかゝる萩は少女の手にて捕へられたり。其下蔭より水引の花は見出だされたり。つめたき車は主人の顔を打ち襟につたふ。

朝顔

秋草のおもはぬかたに朝顔の

花みいだすもたのしかりけり

月草

是もまた折らでや過ぎん玉鉾の

道のゆくての月草のはな

盆祭する家

おくり火のしめる火影におく露は

たがなきたまの涙なるらん

露

かきよする松葉の上に今朝はまだ

嵐のしらぬつゆもありけり

故郷虫

むしの音に昔をとへば故郷の

すゝきの夜露あめとふるなり

野分

尾花ちるすそのと末にまつ一木

ふきのこしても行く野分かな

野分

磯山をはらひ盡してくらき夜の

うなばらとほくゆく野分かな

月

みちかくるものとも知らで宵々に

かはらぬ空を月はゆくらん

山家月

もみぢみて人は歸りし山里に

をしくも月のすめる夜半かな

擣衣

ふきよわる嵐の末の山里に

のこるひゞきや砧なるらん

夕日

古城の松の梢にのこるなり

夕さむけきあきの日のかけ

田家

たばこほすのきばの日影薄らぎて

一むらしぐれ今日も來にけり

何がし童女の墓を吊ふ

心なく悉まひてたてる女郎花

わかれし人に似たる秋かな

たらちねの膝をまくらに眠りたる

人のねもかけいつかわすれん

城趾

神となり雨とくだけて

とびちがふ矢玉の下に

つみあぐる骸はをしまじ

くだかるゝ身はいとはじ

君がためかへり見せじと
たてこもる敵に射むかひ

大丈夫がたゝかひしけん

白川の小峰のしろは

かの岡と人ぞつぐなる

松かげにみゆる麥生は

屍よりむしつる苔か

川水にうつる櫻は

そとぎつる血しほのいろか

火となりし跡みかへれば

夕がすみ今もこがれて

入日さすなり

桃太郎 (渡山人御伽話のはじめに)

學校すましてかへりたる

姉と妹と三郎は

すどしき木陰にまどあして

唱歌のさらひを始めたり

終れば祖母のそばに來て

また熱心にくりかへす

桃太郎こそうれしけれ

黍團子こそたのしけれ

いざ子供等よ兄弟よ

あす學校にゆく時は

鬼が鳴より猶高き

試験の山を打ちこぼて

打出の小槌にまさりたる

譽れの寶を身に着けて

いざよふよるこばせ父母を

いざたのしませ祖父祖母を

観音境内

淺草より鐵道馬車に乗りて近村に行く事あり。夜をこめて家を出でたるに。猶早くして三十分待たざるべからず。暫くの散歩を観音境内に試むるも。思の外のいものなり。

中店は大方戸ざして。一二軒のほかまだ起きて居らず。勸工場の瓦斯燈と。本堂の燈のみ。明の明星の如く。消はんとしては光を放つ。

昨夜花の如き火影に。蟻の如く集まりたる人々は。今いづこにか眠る。

五重の塔ひとり薄墨もて隈どられつゝ。寂莫の中に立てり。群れ立つ鳩の樂しげなるは。今日も餌に飽かんと望ならし。

一めぐりして雷門に出づれば。車夫の提灯は消えて。往來の人やうゝにぎはしからんとす。馬車の笛は千住の方より來り。漁船の煙は東橋のもとに客を待つ。

誰が家の門が

霧ふかくこめたり。木魚はひどげど寺ありともみはず。光なくのぼれる朝日。水のうへの月よりも白し。誰が家の門が。少女十三帯をとめて萩の露を指の先にうけつゝ見る。

愛のやど (愛住女學校五周年祝の唱歌)

一

來りあそべ友よ

愛の住めるこのやどに

たねぬながれの水は

見よやここに五年

二

來りむすべ友よ

ながれたねぬこのみづを

ひろきまなびの海も

見よや苔のつゆより

三

來りいはへ友よ

わすれがたきこの時を

松もしらべをそへて

うたへいはへこの日を

れととひ

一

夕日かげ里をわかれて

松の上になほやすらふ

今日ひとひ小田にありたち

刈りし稲たばにつくりて

負ひもちて家路にはこぶ

賤の女がねとひつれて

かへりゆくかたもしられて

うちまぬく薄のねくに

けむりたなびく

二

沈む日のなごりも消えて

うす墨の夕べの色に

つとまるゝ遠の一むら

ほのみゆる焼火のかげに

ねとひの少女父母

むつましく神のめぐみの

箸とりて夕飯やすらん

圍爐裏火に柴折りくべて

あたゝかに圓居やすらん

刈りのこす稻穂の上に

風さむく吹く

秋の信濃

明治二十九年九月

近頃は碓氷峠を越ゆること年に一度二度。ともすれば三度に及ぶ。いかなる宿縁や。雪は屋代に見たり。花は小諸に見たり。螢は望月に見たり。いかでか月をよそにすべきとて。更級郡の宮原氏は。陰曆の八月十五夜を期して余を招く。之に合せて埴科教育會よりは。其前日の會合に一席の講話を爲さん事の依頼を受けたり。よりて例のカベン

一つ。主人に伴はれて九月十九日上野の停車場を發す。此中にはそも
く何物か入りたる。風引かぬ爲めのシヤツ羽織と。歌書く料の紙筆
とのみ。

稻はやうく色づきて置き餘る露玉の如く。過ぎ行く村里朝風なほ靜
かなり。田の畔には野菊月草彼岸花などこゝかしこ咲きほこりて。白
く青く赤く。ねのがじく自然の色を。下ゆく水にうつすさまの面白さ。
無邪氣なる少女もし車中にあらば。母上よあの花一つ折りてとや叫ぶ
らん。

糸の如き手して招くは薄なるべし。紅の如き唇うごかして語らんとす
るは萩なるべし。瀛車は今や秋たけなはなる碓氷にかゝる。あはれ氷
の下に咽びつゝ我を迎へしもあの水よ。若葉の陰に躍りつゝ我を送り

しもあの水よ。我汝と親しむ事の年に月にますく深きを喜ぶ。

千曲川はかはらぬ歌をうたひつゝ窓の下に來れり。一重山はすこやか
なる姿を見せつゝ窓の外に來れり。それよりも更にうれしかりしは。
屋代停車場に立つ人を見出だしつる時の心こそあれ。岩崎、八木、西
澤、眞木、宮澤、坂田、野村、上原、中島なほ他の諸氏は。余をしる
べして小松屋の樓上に導きたり。宮原氏は坂城より同車し來りて是も
此家に宿らんとす。

窓を開けば。一重山の盡くる處に寺あり鐘撞堂ありて。風情れのづか
ら晝の如く。麓は見わたす限り穂波ゆたかにしなひ榮えて。心ゆく秋
の色なるに。人々今夜の月は何方に出づらん。鐘撞堂の屋根なるべし
といふもあれば。今少し右ならんといふもあり。打ちどけて欄干にも

たれつゝ茶碗を手に取る夕の楽しさよ。

山の端にたゞよひつる雲やうく破れて。月しづかに顔を見せたり。鐘撞堂の屋根を主張せし人は勝ちたりと誇る。今宵は正に十三夜。少し缺けたるが却りて興ありと一人がいへば。あれでも尋常生徒の畫がきたるならば。九十點は興へつべきよと今一人いふ。月もし心あらば。さすがは教員さんの集會かなど。興に入るべしなど。果は大わらひになりぬ。さても九十點の明月は先づ以て今夜の試験に合格せり。祈る處は明後百點の夜の快晴にあり。

暮れはてゝ柏屋といふ樓の小宴會に臨み。人々と共に歸り來りて。孤燈のもとに語り更かす。宮原氏ことさらに蕎麥を打たせて贈りたるは。我好物なるを知ればなるべし。

山そばに住むや狸の腹つぐみ

いざ打ちつれて月に歌はん

余は滿腹になりぬ。諸君と共に題など探りて歌よみ遊ばんはいかに。あくれば二十日。屋代學校にて教育會の開かるゝ日なり。學校の二階は。此一月の講習會に十日の間。日々登りたる處なれば。他人ならぬ心地するに。其頃は雪に包まれたりし冠着姥捨の眺望も。今は景色を變へて。蕎麥の花白く木の葉や黄ばみ初めんとするなど。美人の化粧せしに似て又一入の趣あり。たゞ寒中の友なりし大火鉢の退隱して顔を出ださざるのみぞ。物足らぬ心地せられし。

講話は十一時より始めて彼是四時間。文學史の大要といふ題をもてせり。會員は六十名にも餘りぬらん。ことごとく此地の教育家にて。五

里十里の道を遙々瀛車にて。又は陸行して來りし人も多しと聞く。都にありては汚塵の中に送らるゝ日曜日も。田舎に取りては斯かる熱心家の清潔なる希望を満たさしむる吉日と化す。愛すべく慕ふべしとは豈たぞ無情の山色風光のみを言はんや。

今夕また柏屋にて催さるゝ有志家の懇親會に臨む。宴酣にして誰やらん。『木曾のおん嶽さんはなんじやらほい』など。美しき聲にて謠ふ人あり。余は遠く旅する毎に其地の唱歌を聞くを樂しみとす。天真爛漫の調べと節とは作らず飾らざる處に存すればなり。會散して餘韻なほ耳にあり。夢にも時々『よい〜〜』の反響を聞く。

夜半めさめてきけば。瓦を叩きて軒に落つる聲あり。水かと思へば簀なく。風かと思へば松動かず。如何せん心にかゝりし雲の遂に雨となり來れるを。明朝の登山。明夜の觀月。たれに妬まれてか望み空しく爲り果てんとすらん。

曉には宮原氏まづ起きたり。空はいかにと問へば。晴れたりといふに心勇みて。ラムプの心卷き出だしつゝ仕度する程に。命じ置きたる車來れり。此より上山田村といふまで四里もあるべし。朝飯はかしこにてする豫定なれば。日の出でぬ前に着かざるべからずと。宮原氏に急がされて。同じく宿り居たる八木氏に暇乞もそこ〜に屋代町を立つ。

田に沿ひ流れに沿ひて。明方寒き秋風に吹かれ行くこと三里。露もつ秋草に送り迎へられて千曲川の岸に出でぬ。橋ある處なれど先頃の大水に落ちたりとて。今は杭のみ跡を示して川中に立ちたり。

中洲より向には渡舟あれど。それまでは淺瀬なれば。三十間ばかりの

所を徒渉せざるべからず。洋服にては裾をかゝぐる便あしければ、車夫に負はれて渡らんとす。車夫は小兵の男なるに。肩上の旦那ちとふとりすぎたれば。錦繪にて見る大井川の實地演習いと危し。

此處を筈の渡といふは。昔し村上義清落城の時。夫人來りて此川を渡らんとするに船賃なかりしかば。自ら刺したる筈を價に取らせたるより起れりとぞ。かくて夫人は向の岸に上りて。猶ゆきつゝ坂城のかたを振りかへり見れば。早くも城は火焰の中に立ちたるに力を落し。今は是までとて自害せしところに里人祠を立てし。姫宮と稱へしが今もありなど。宮原氏興じて語るほどに。舟も着きぬ。

是より徒歩にて。桑畑の中道をあちへこちへとうねりく。目ざしつゝる處にも着きぬ。待ち迎へて見性寺といふ禪宗寺へ案内せしは。柴田、

窪田、飛田、山崎の諸氏なり。諸氏は此地の教師にて。寺内の別室を借り受け住み居る人々なりとぞ。

別室すなはち教育書院ともいふべき處は。南に面して前よく開けたる岡の上にある。寺の山門より緑なみ打つ田畑を隔てし。傘山と相對し。居ながらにして白雲と呼應し。寝ながらにして松風と唱和するを得べく。住まひなしたるこそ羨ましけれ。諸氏に面せしは今はじめてなれど。紙筆の上にては常に親しうする人々なれば。忽にして歌論出で。忽にして文話おこり。互に日の昇るも忘れたり。況んや興を媒するに盃を以てし。肴には教育家手植の青菜と手作りの干杏子とあるをや。

諸氏は學校に出づる務あり。我等は冠着登山の任あり。明朝の再會を

約して此を立ちたるは九時頃なりけらし。飛田氏は土地の人なれば。案内のためにとて宮原氏と共に先に立ちて行く。いとたのもし。日影うすく照らして路まだ暑からず。岩陰の流れ鈴の如く響きて歩調を進むる音楽に似たり。

道の右手の方に藁菅の観音堂あり。里人は大御堂とぞ呼ぶなる。なほゆけば観音林。更にのぼれば堂平などいふ名の處あるは。むかし大御堂のありつる土地なるべし。狭き山路を摺れ違ひに下り來る草刈。脊には薄女郎花など負ひつれたり。興はいよ／＼添ひぬ。半日の糧を提げたる飛田氏。一瓢の酒を荷ひたる宮原氏。先なるは地理博士となりて遠近の眺望を説明し。後なるは軍歌の音頭を取りて山中の草木を驚かしつゝ。遂に險しき九十九折にかゝる。

坂いよ／＼急に峰ます／＼高し。前には持たば指を切らんとする薄あり。さはらば肉を刺さんとする茨あり。是等の刃に傷つけられずして進まざるべからず。今や力と頼むべきものは。かよわき萩の小枝と。ちぎれやすき蔦かづらとのみ。

秋なほ半なれば紅葉の見るべきはいまだまじらず。小松のもと岩のかどなどに咲き亂れたる野菊こそ見ごろなれ。此外瑠璃の玉をつらね紅の珊瑚を集めたる草の實は。こゝかしこに見えていと美し。子抱岩の下を過ぎて。左の方へとあへぎ／＼ゆくほどに。先登第一の聲をあげたるは飛田氏なり。飛び立つ勇氣を杖にして登り着きたるは午後一時なりき。

峯に立ちたる松の姿は。麓より仰ぎ見て既に知りぬ。豈思ひきや。斯

かる高山の絶頂に此廣やかなる緑の平地あらんとは。

中央に宮あり。月讀命を祭る。先づ廣前に額突けば。三四人そこに圓居して酒飲み居たるが。御神酒一つ戴き給へとて。三方に盃のせて出だせり。處から辭せんもいかゞとて。受けつゝ腰を掛くれば。中に鬚ある老人進み出で。頻に何處よりおはせしやと問ふ。あまりしばし問はれて。東京よりと宮原氏かたれば。さては大和田先生におはせしか。其御迎に塚田より來りて。今まで御待ち申したり。いでやこなたにとて。神前にケツトを敷き。塵打ち拂ひて我一行を上座にとすゝむ。あはれ此人間界を距る幾千尺の上に。思ひよらぬ里人と盃をかはし。飛田氏を勞しつる深き情の辨當を開きつゝあらんとは。麓に知る人ありやなしや。薄の莖を折りて箸となし。松葉を重ねて皿に代ふ。いつ

しか萬葉時代の旅人となりぬる心地するも。忘れがたき一つなり。

時や、移れば。再び草鞋の緒を締め。四方の景色を見晴らさんとて社を出づ。出づること數歩にして。信州半幅の暗射地圖は廣げられて眼下に横たはれり。飛田宮原の二教師は竹の枝もてあの煙の立つが屋代なり。白壁の見ゆるが上田なりなど。戀に指し示す。ながめはてなき遠近の村里。いづこも豊けき秋の色もて満たされたる中を。一筋白き千曲川は。佐久平より來りて小縣を貫き。埴科更級の間を縫ひつゝ。善光寺平に至りて犀川と打ち連れ北に去る。あはれ身を三百年前の昔に置きて。川中島の合戦を此山上より眺めましかば。如何に面白き見ものなるべきを。秋晴千里。左には戸隠、飯綱、妙高、黒姫の景あり。右には淺間、蓼科、富士、駒嶽の望ありて。呼へば應ふる如く。手を

伸ばさば届きもしつべくぞ思はるる。

一夜寐て見ば如何ならん宮人の

かむりきやまの秋の夜の月

心は峰に残れど。今夜の月は麓の里にて観んの約あり。時計を見れば
午後二時何がし。今は急ぎ下らざるべからず。

日はやうく傾きて。薄の影長く。風いつしか冷やかにて。葛の葉白
くかへり。登りよりも路いと急なれば。足踏みすべらしころぶ事も
たびくになりて。笑ひ笑はれゆくほどに。久露瀧といふ瀧のもとに
出でぬ。仰ぎ見る巖の上より。水晶の簾を捲きてはあろしあろしては捲
くもの。何くの天女ぞ。飛び来る珠は霰と散り雪と碎けて。衣を濡ほ
し顔を打つ。

下りはつれば鞍置きたる馬を牽きて来るものあり。近づけば塚田氏よ
りの迎ふといふ。深情謝すべし。馬とは兼ねて中あしき我身なれば又
はぬあとされて耻やかうと思へど。折角のもてなしなれば。少年の
頃習ひ覺れたるやうに手綱かいくり進ませては見たれど。心の中には
口取の手をゆるめずもがなど祈り行くこそをかしけれ。間もなく村に
着けば。馬は月の都としるせる提灯あまた燈しつゞけて。人の出入
にぎはしき家の門に入りぬ。塚田小右衛門氏は出で迎へて座敷の椽側
にあり。夕陽なほ光を残せど。月に心の急がずしもあらぬば。立ちなが
ら一禮を述べて。先づ観月殿に登らんとす。冠着の峰よりこゝまで五
十丁。こゝより観月殿までは五六丁もあるべきか。

そもく信濃の國にて。古來月の名を得たるは更級なるが。世に云ふ

姥捨山は八幡の里にて。月こそあれ山といふほどの處にあらざれば。姥捨てしなどいふ物語の起るべきやうなし。されば古の姥捨は又の名を更級山ともいひて。冠着山の異名なるべしとの考證説。ちかごろ勢力を得しかば。小右衛門氏は姥捨考を出板し。觀月殿を建て。全力を注ぎて此事を世に普くせんと専らつとめ居る人なり。山靈何ぞ夜な／＼に上界の天女を舞はしめて。此月に忠なる人の勞を慰せざる。觀月殿は村の北に離れて更に小高き岡の上にあり。遠近の里人群集し來りて。岩の上草の原また人を容るゝ地を餘さず。こなたに瓢を中にして年の豊凶を談ずるあれば。かなたに重箱を圍みて發句を短冊に書くもあり。中々の賑ひ里祭の夜宮などにも比すべし。余が一行は案内せられて殿の東面に座を占むれば。塚田氏よりは人かはる／＼に酒肴

など送り來りて厚くもてなさる。月のみにも類ひなき御馳走なるを。

殘照は全くかなたの峰を辭して。見わたす遠近。山も里も田も畑も。夕暮の色もて静におほはれゆく。はや間もあらじと人々のいふに。目を注げば。山際少しあからみて。謂はゆる鏡臺山の位置を示せり。あゝ我年來の望を果すも數秒の中にせまりぬ。唯いかにせん。屋代より長野より來り會せんと約しつる友の。影だに未だ見ゆるを。拍手喝采の聲の中に金盃の如き月は浮び出でたり。然れども下界は未だ之を知らず。夜色天地を襲ひ盡して。始めて霜の如き光を反し。龍の如き影を畫かく。あはれ峰にて晝見し暗射圖。いまは何くぞ。金地一面の紙に薄墨もて隈どらるゝは坂城か埴生か屋代町か。燈火どころ／＼に

霞み残りて螢よりも小さし。

月いで、一時間もしつらん。待たれし友は皆集まれり。眞木、八木、野本の三氏は屋代より與良熊太郎氏は長野より。曰ふ途に入幡の姥捨にて月は見つると。彼等と此岡とは相距る僅に數十丁。隔てぬ影を別にながめて遂に隔てぬ一席に集まる。我は此山にて見たるまゝを語り彼は彼寺にて眺めたる景色を語るも却りて興あり。友は添ひぬ。酒はめぐりぬ。誰かまた夜風と夜露の寒きを思ふ暇あらん。さても此稀なる仲秋の晴天にあひて千古の名月を観る。里人の情もとより深し。天のみめぐみ豈謝せざるべけんや。

かくて月と別れて塚田氏に下りしは十時にも近かりけん。又さまぐの響應を受けて語り興ずるほどに。夜はいたく更けぬ。屋代長野の來客は三更月を踏んで去り。余は宮原飛田の二氏と共に數時間の旅枕す。月いよ／＼白く梢を掠むる夜嵐。雨よりも凄し。

冠山ふもとの里に旅寝して

まれなる秋の月を見しかな

今よりは人にほこらんいにしへの

月のみやこの月を見つれば

やがて物に書きつけて此家へのこし。明方四時主人に別れて出で立つ。日の出までに再び上山田に歸る約あればなり。

同行には小林氏加はりて四人となりぬ。思ひ／＼に跡になり先になり歌ひつゝ語りつゝ露踏み分けて勇みゆく。心地よき朝ぼらけなり。みちに更級神社を過ぐ。神さびたる宮居。ものふりたる神木。歌なか

らめやとすゝめられて。

川音も近くきこえて朝ぎりの

しづく身にしむ更級のもり

昨夜塚田氏にて物語せし豊城老人は此社の神官なりしをど。飛田氏のいふに思ひ出づれば。げにもさなりき。されど急ぐ道なれば此度は得訪はず。

千曲川に沿ひて萬字峠などいふあたりを過ぐ。風景いとよし。夜は疾く明けて田舎少女の脛巾したるが渡舟に乗りあたるなど。昔の繪にて見し心地す。

上山田にては。例の諸氏待ち迎へて心ことにもてなさる。今日は月雪會の人々あつめて講説をなし歌合など催さんの約あれば。はや其設に

忙がはしげなり。

集まりたるは二十人にや超ぬらん。三時にて終りたれば。打ちつれて又こゝを出で。宮原氏の網掛村に向ふ。今夜の月は十六夜の名を得たるかの里にて見んとするなり。夕日花やかに稻の上を照らして夕の空また希望おほからんとす。此間の路は一里に足らざるへし。

月見る處は村のはづれにて。千曲川の岸なる岡の上なり。眺望また昨夜に劣るべくもあらず。前には川水おもしろく流れて。かなたには葛尾の城山あり。右には上田原。左には川中島古戦場の遠景あり。人々萩の小枝を折り敷きて筵とし。携へ來れる酒肴など岩の上にならべて宴を開く。宮原氏此山の主人となり。上山田の諸氏に此里の鹽野入氏も來り加はりたれば。圓居いよゝさびしからず。先生あれ御覽ぜよ

と宮原氏のいふ方を見れば。二三の學齡少年。一冊の『少年世界』を手にして。こなたをながめたり。誰か知らん。彼雜誌に載せたる余が寫眞を披きて。其正物と比べ見つゝ有りしならんとは。文明の餘徳。文人偽物のできぬ世とはなりにけりとして。皆々笑ふ。

月漸く出でんとする頃。あたにくや。綿の如き雲は廣がりて山の端を縁取りたり。心なの風よ嵐よ。いかで我希望の敵を吹き拂はざる。

風心あり。雲少し破れて曇らぬ月は山を出でたり。龍躍り銀河湧く水の景色こそ面白けれ。然れども再び雲は來りて之を隠しぬ。人間萬事意の如くなるにも似たり。ならぬにも似たり。さはいへ山影青く黒く向ひ立ちて。旅人を慰めがほなるも捨てがたき夜のさまなるを。歌よまばやなどいふほどに。雲また綻びて研かれたる月は獨りみそらに澄

みのぼりゆく。

さやけさは昨日に似たる月かげを

欠くるはじめと誰かいふらん

今夜は宮原氏の樓上にて。來會の諸氏と共に更くるまで歌よみつゝ月見る。瓶に美酒あり。皿に佳肴あり。松茸の香。丸芋の味。主人の心づくしは。いつの時にか忘るべき。月は明日の夜も明後日の夜も又出でなん。千曲の水と冠着の雲と。汝は明朝の旅人を都まで送る能はじ。

冠山

其一

碓氷山わがこはくれば

車ぢの道のゆくてに

千曲川中にへだてゝ

天ろゝる高山たてり

里人にその名をとへは

冠着のみねはあのみね

更しなの山はあのみね

をばすてしむかしがたりを

遠き世に言ひつぎ來つゝ

月見にと人こそそのぼれ

いたゞきは平らになりて

月よみの社たゝせり

一たびはのぼりてみませ

杖とりてしるべはせんと

くはしくもかたれるものか

あなちもしろ更科の山

あなちむかしかぶりきの山

白雪のかくすとすれば

みるが内に又あらはれて

はれくもりながめろかはる

はしき此山

其二

薦によりすゝきにすがり

つゞらをりさかしき道を

あへぎつゝわがよぢくれば

名もしらぬ花ろにほへる

よにしらぬ風ろかよへる

かへりみるふもとの里を

其三

ゆく川は糸よりほそく

立つ人は豆にも似たり

久方の雲井のそらに

あふぎつるたかねは是か

羽衣を身にもたぬわれも

いつしかと月みる山の

上に來にけり

冠着の是のたかねは

仰ぎみてかたちよき山

よぢのぼり高ねにたてば

みわたしの更によき山

一筋の布かどみにて

ながれゆく千曲小川を

中にして小田のをちこち

なみたてる百むら千むら

更科はふもどのかたに

埴科は川のかなたに

こゝかしこ煙もみにて

にぎはしき民の里々

むつましくならぶ家々

上田より小諸のあたり

壁白く見にもまがはず

手にとらば取りもしつべく

ものいはごこたへやすらん

千曲川末はひとつに

犀川とながれあひつゝ

うちつれてゆくも見にけり

川中島むかしのあとを

筆とりてたれかゑがきし

たれか此書卷ひらきて

わがために國形みせし

雲かゝる飯綱戸がくし

ほのかすむ淺間あづまや

のこりなくはれたる日には

藝科のひだりのかたに

富士のぬも見ゆとこそいへ

かへりみるそがひ遙に

立山までみゆとこそきけ

みわたしのよきはこの山

そら近く見るは此峰

月よみの神に一夜の

やどかりて名高き影を

ながめふかさん

ながめあかさん

旅行 (唱歌)

一

たのし瀛車の道

走る梢とぶ野山

あれくうしろに

みるくうしろに

ふく風ゆく水

飛ぶとり咲く花

たどまどを

過ぎてそゆく

二

うれし舟の道

うかぶ鷗たつ千鳥

あれく波間に

みよく岩間に

やまくうらく

おきこぐつりふね

あながらに

みつゝそゆく

葬送

音楽れこり天蓋うごき。柩は今ぞ門を出で来る。送の人雲の如く。肅として車をつらぬたり。町より町に。村より村に。途に見る人群集をなせども。笑ひさゝめくもの一人も見えず。日影うちしぐれて旗を吹く風力なし。

寺に着きぬ。柩はかきすすられて本尊に向へり。鉦なり太鼓とどろき。讀經ひいき。香煙あがり。はや人間の榮花は彼方の渚に臨めり。官位爵祿も是よりはいかでか彼を追ふべき。友かへり僧去り。柩さびしげに墓にぞむかふ。夕日をさへぎる一村の雲は。爲めに墓を掩ひて守るに似たり。

一輪ざし

わが硯のそばには。先年京都のもみぢ見に行きたる時。清水にてもと
めかへりし一輪ざしの花瓶を置く。小兒あさゆふ花をさがし來りては。
さしくるゝこそうれしけれ。きのふは雞頭。けふは茶山花。ほたる草
のかれくゝなるも。すすきの穂ばかりなるも。すべて寵にもるべきも
のなし。けふもものよりかへりて先づ机にむかへば。露もつ白薔薇の
にほひ室に満つ。

夢なれや

一

すすきをぬき萩を折り

遊びし秋は夢なれや

霜どけ寒き藪かげに

ねりある鳥のあともなし

春まつ少女いづかたろ

機の響からりころり

二

ほたるをおひ月をまち

むつびし夏は夢なれや

日かげさびしき枯草に

やすむ胡蝶のかげもなし

春まつ歌はいづかたろ

氷の底にちりゝたらり

富士の高嶺

するがなる富士のたかねは

夕みればけしきよき山 朝みればすがたよき山

春の日は霞むもよし

秋の日ははるともうれし 夕づく日沈みしのちの

大そらにたれゑがきけん

くれなるに濃き紫に

うすぐみにかはるもすごし

ふじのぬはくすはしき山

うつくしき山

公園の晩秋

凜車を待つまに散歩せんとて。上野にのぼれば。公園の晩秋は朝風に吹かれつゝ。寂寥の中に立てり。

昨夜の霜はいてふを染めつくして梢にみち。今曉の嵐は半ば之を伴ひて地に落せり。彰義隊の墓前。櫻雲臺の樓後。人は竹箒取りてあちらへこちらへと掻き寄せんとするを。風は又狂し來りて之を弄ぶ。梢を横ぎりては土に立ち。餌を求めかねては屋根に飛びのぼる雀。亦秋色畫中のものなり。

清水の欄干によれば。岸に立ちならぶ紅葉花の如し。參詣の婦女もなければ。見物の書生も見えず。木のまを隔てゝは。池水の朝日にきらめきわたるを見る。

半は黄に。半は紅に。色づく木々の間に立てるは。大佛なり。之を左にして雲に入り天に映ずるは。東照宮の鳥居を護れる梢なり。鳥居を
入れば。立ちならぶ石燈籠の苔もおのづから秋の色を見ず。朝のつと
めは終りしと見ゆ。社頭いとしづかなるに。裏の鳥居へと下りゆく下
駄の音。ひとり木だまにひざく。

白雲深き處に春を賞せしはこゝなりき。紅露散る邊りに涼を追ひしは
かしこなりき。今や水寒く草朽ちて。僅に蓮の莖のみを残せり。鴨は
木の葉の如く亂れて來り。雪の塊の如くに集まりて浮ぶ。

上野の鐘は七時を報ぜり。時間はやうやく來らんとす。山を越えて再
び停車場に向ふに。朝日は今や光をひろげて遠近の森に映じ。寺の塔
にかざやく。白く立つ煙。黒く飛ぶ鳥。見わたせば。秋はまた市の空

にも宿り又遊ぶ。

遠足の歌 (唱歌)

一

ながるゝ水は太鼓の聲

松ふく風は唱歌の聲

旅だつあしたの心の愉快さ

いざ越せあの山

いざ踏み此露

二

ひとむら茂る林のおく

社か寺か道あるかた

日かげは霞めり小鳥はうたへり

進めや我友

古蹟をたづねて

三

みどりの山は過ぎこしあど

はてなき海は今ゆくさき

自然を友なる旅路のたのしさ

いざ呼べあの舟

いざ切れあの波

一
みよのめぐみ (寶田學校開校式の唱歌)

御代のめぐみの春風に

開くる學の窓の梅

雪に氷に閉ぢられて

蒼は是ぞ此枝ぞ

あふげたぞ春の光

友とせよ花のこころ

二

みよのめぐみの春雨に

おひたつ教の庭の松

霜をしのぎて時にあふ

緑は是ぞこの幹ぞ

おもへ雨のいさを

友とせよ松のみさを

造り花

ある女學校の製品なりとて。黄菊の造り花を送りし人あり。瓶にさして
ながむるに。眞のものに少しもかはらず。客に見すれば。めづらしと
て。手に觸れてのち。はじめて其花の絹なるにおどろく事しばしくな
り。これは七八月の事なりしが。秋風搖落の朝。花賣のもて來たるを
さしならべたるに。今はまた一見して眞偽を區別せらるゝに至る。偽
文人の田舎あるきするも遂に此結果にあふべし。

風呂屋

寒き日風呂屋に行くに。ひね來りて始めて入る人は。あつしうめよと

呼び。あたたまりて二度入る人は。ぬるしたけよと叫ぶ。世の中の事
大方これなり。公評を得るのかたきは。ひとり湯のみに限らず。

ふるつか

山かげの一むらすとき

うちなびけわたる秋風

ふるつかの昔やかたる

いにしへの歌やしらぶる

この岡の一木の松を

こだてにて防ぎたゝかひ

君のため露とちりにし

武士の夢はいづこぞ

さびのこる太刀はいづこぞ

みちもなき草かきわけて

佛の名よまんとすれば

はひまとふ蔦の下葉に

こほろぎのなく

女學校

一の女學校あり。れのれ出で講義することになりたれば。はじめて先づ導かれて應接室に入るに。正面には金もて表装せる教育勅語の額を掲げ。一方の壁には机をすゑて白菊と青南天とを瓶にさしたり。校長はまだ來らず。幹事は教授時間として出でゆきぬ。ひとりのこりゐて窓にむかへば。日影は芭蕉を芝生に畫がきて。さぐんくわの露にぐきらめきたる。今鳴る鐘は時間のをはりなるべし。二階をくだる生徒の聲。鶯の如くにひゞく。

秋の孤兒

過ぎにし秋の孤兒として。のこさるゝ花こそあはれなれ。日かげさびしき古寺の垣ねに。輪も小さくなりて一つ二つさきわかれたる朝顔。蔦も枯れたる山里の石垣に身をよせかけたる黄菊。いづれなごりをしからぬはなきに。鉢の薔薇ひとり今はの香を放つ心地して。高くうちほふも唯ならず。霜に唇あぐる茶山花。露に光をわかつ南天。かれ

らは今ぞ來れる冬を慈母として歡び迎へつゝあるに。

笥のれと

一

うしろの山の松がねに

月こそほそくのぼりたれ

稻かりし人はいづこ

しづのめの歌はいづこ

笥の水のれとひとり

今も目さめてかたるなり

二

村の社にとどろきし

まつりの太鼓こゑたにて

旗をふく嵐さむく

木のまもる火かげ青し

かけひの水のおとひとり

うきよの外に歌ふなり

三

木のみあらそふ村鳥

あたもうらみも忘られて

今はたゞ同じにだに

あひむすぶ夢路しづか

ひるも夜中もやすまぬは

かけひの水の音ひとり

小さきわが身 (唱歌)

一

『小さきわが身は岸のかげに

隠れてみまはん苔の床を

めぐみの心人もわれも

へだてはあらじ』と露はいひし

二

『小さきわが身は谷のねくに

育ちてたすけん川の水を

たゆまぬ心我も人も

おどりはすまじ』と露はいひし

白薔薇

音楽會をはりて塲をいづれば。月色地にありて霜よりも白し。ピアノの聲箏のしらべ。玲々瓏々今なほ耳をはなれず。主人のねくりし白薔薇は馥郁として胸にあり。

兄か愛兒か

朝日あたゝかにさす戸口に。母は手紙を手にとりてよみあたり。むすめも顔さしよせて共によめり。もせらる笑まひは何をか意味する。千里遠征の旅にありて。健康を報じ來れるもの。兄か愛兒か。

佐々木しほ子の像に

春風はえまひのどかに

花のなき里もへだてず

月かげはえまひゆたかに

浪あらし海もわかたず

君こそはその春風よ

君こそは其月かげよ

愛とほし天地ひろし

氷る夜も夢あたくかに

父母の枕をまもり

あつき日も身を汗にして

わがせこの業をたすけし

君が世の孝子のかごみ

君が世の貞婦のかごみ

松青し山かげながし

あはれ身は消れても消はぬ

名こそ千代まで

橋の上

一

風わたる橋の上に

たごひとりたてる少女

たがためものをおもふらん

水にながる月をみて

二

遠寺のかねのひどき

かろふれば初夜になりぬ

母なる人はいかならん

此月かげを共にみて

三

ふるさとの同じまどに

月見せし世はかへらず

少女の母はいづかたろ

水はそのよの聲なるを

木々の影

初更會散じて紅葉館を出づ。花はまだつぼみもみねど。いづくとな

く霞みわたりて。電燈の如き月高く空にあり。地にゑがかるもの。

我と車夫との外に。木々の影のみ。春風はそよくと來りてひやかかに酔顔を吹く。

東京の歌人

雁の聲をきけば障子を明け。鐘の音をきけば寺の方角をとふは。誰も皆然り。東京の歌人田舎に至れば。かならず訪ひ來て其顔を見んと望む。亦やむあたはざる人情なるべし。然れども一聲は月がないたかの餘情もほきにしかず。

岩根の花

秋風にれきふしなびく

撫子のつぼみうつくし

くれなゐの蝶のつばさか

れち散りし鳥の上毛か

さかさまにかゝる岩ねを

命にてさきてるにほふ

柴ちひてかへる少女よ

また暫し汝がかざしにと

神やうゑけん

野菊

一

帯の如くにながれ行く

細谷川のみぎひだり

野菊の花をたれうゑて

秋のかたみに残すらん

今は昔の冬がれに

めづべきものは汝れひとり

二

畑よりかへる少女子は

大根の土をあらはんと

籠をみぎはにおろしたり

手をはや水にひたしたり

さびしき花は顔あげて

何を少女にかたるらん

三

あらひし大根たばねもて

をどめは家にいそぎたり

なごりさむけく聞ゆるは

歌かあらしか水音か

こよひさびしき月かげに

花は何をか夢むらん

第二の母

茶山花さびしくこぼるゝゆふべ。堀江の伯母君かくれ給ひぬどの知ら
せ來る。おもへば去年の此月なりき。君を大坂に訪ひまゐらせしは。

叔とたのみし子をうしなひて涙にしづみぬ給ふ頃なりしが。我を見て
いたく喜ばせ給ひ。きのふまではをしともせざりし老が身も。汝をみ
れば又長生がしたくなれりとねほせられし事。今にわすれず。誠や君
は若くして夫にわかれ。老いて子を先だて。孫はあれども長じたるは
嫁し。又は死して。家には幼きものゝみなれば。今はのきはまで心お
ちぬ給ふ日とてはおはさゞりけん。思ひ奉ればいとかなし。おのれ
二十一にして母上にわかれける時。

おやのなき身とこそわれはなりにけれ

今より君に子としつかへん

とよみてまゐらせし事もありつるを。夢かうつつか。子としつかふる
志もとげずして。つひにまた第二のおやにさへわかれけるかな。去年

は一夜をかたりふかして。我ちかごろのありさまをかたり申しつるに。
汝こそ立てたる志をとげおほせたれ。母上おはさばいかによろび給ふ
らんなど。涙ながらにの給ひしが。今やふたゝび御聲をきかんとすれ
どもかなはず。かくとしりせば。此春も京都までゆきたるとき訪ひま
みらすべかりしに。時雨がちなる雲間の月よ。汝はたがためにかぬる
ゝがほなる。

畫師の評

西洋の畫師評して曰ふ。日本人は飛ぶ鳥をゑがくに長じ。歐洲人は棲
む鳥を寫すに長ず。是れ一は寫生を主とし。一は然らざるの差ならん

と。女にも詩にも此事なからずやは。人麿の長處は必しもチヨイサ！
の妙點と相同じからず。

右と左

一

夕日かげのこるいてふの

木のもとに道二つあり

なごりをしさらば別れん

我は右君はひだりの

森のかなたに

二

みかへれば重なる落葉

ふみわけて鳩こそあそべ

なごりをし別れし人は

夕風の寒けき原を

ひとりゆくらん

秋の形見

高砂の尾上のもみぢ

山ひめのみけしとみしを

山つみのかざしと見しを

龍田彦いかにあらびて

この朝けたぐへ來にけん

谷川の清きながれも

ゆく水のいろこそみねね

あたらしの枝のなごりや

ねもしろの秋のかたみや

いざ子どもさでさしねろせ

ゆく秋のかたみながらに

すくひてゆかん

川のもみぢを

紅葉日記

明治二十七年十一月

京都の新聞は曰ふ。高尾の楓は京都の大關にあらで日本の名物。見頃は中旬以後なるべしと。友人も亦書を寄せて曰ふ。此月の第三日曜を

以て高尾に遊ばんとす。來り此一行に加はれど。然れども多忙は勃々たる遊情を制して未だ許可を與へざりしに。俄に大坂に行かねばならぬ用事おこり。あに此機會に乗せざるべけんや。遂に十一月十四日の早天。初霜を踏んで牛込の家を出づ。青白き月は西の空にかゝりて。煙のうちに遠近の森を畫がきいだせり。之をうしろにして神樂坂を下れば。東の方はやうく樺色を流して。黒き屋根紫の雲。あざやかにながめに入る。九段坂の下を行く頃は。燃いたつばかりの紅となりて。ニコライの塔獨り。火焰の中に焼けのこるかと思ゆるも美し。堀端にかゝる頃は。既に明けはなれて。松の色いてふの色。おのく區別を見せ行くに。瘦せたる柳は力なげに水に影をねとせり。六時二十分瀛車新橋を發す。右には打ち霞む愛宕山の南に鏡の如き月

をながめ。左には晴れわたる東京灣の波間より出づる旭を望む。爽快極なき朝ぼらけなるかな。鷗は砲臺を掠めて靜に翔り。舟は波なき海に跡つけて遠く近く出でゆく。稻刈る人稻運ぶ人。こゝにもかしこにも賑ひて。年ある村々のけしき眼に溢れたり。近く過ぐる藁屋の軒には。つるしたる柿の實も數ふべく。庭には莖をしきて切りたる薩摩芋を干しならべたるも。手に取りつべし。線路を挾む畑。ことごとく蜜柑になりて。瀛車は早くも國府津につきぬ。

山北もすぎてトンネル二つ三つくれば河邊にいつ。此あたり紅葉とても美しくて。雌黃。燕脂。黛赭。洋紅。そのいろくは數へもつくされず。是等の間を胡粉に似たる水とほく流れて。さながら一幅の山水をなせり。鳶にからまれて立つ松。岩を圍みて咲く野菊。山中の秋

色は窓の下にも来り又去る。

品川をいづる頃僅に頭を見せ初めつる富士は。やう／＼全身をあらはして。右になり左になり又右になりて。我と相親しみしが。富士川を渡りてより。やう／＼後ろに別れゆく。雪は半をうづめて上は青天に聳ゆ。下は紅葉と映ず。眞に美中の美といふべし。

岩淵につく頃は。同室の客わづか六七人になりぬ。軍歌集を黙吟するもあり。新聞の従軍記を朗讀するもあり。無神経に之を聽問する婆々。赤ゲットにくるまりて日のさす窓に居眠る老爺。誰も皆同じ心に込み合はぬ仕合をよろこびつゝ。ステーション又ステーションを過ぐ。

静岡につけば十二時に三十分過ぎたり。窓の外には。煙草マッチ日本酒ビールなど賣りあるく聲頻におこる。我は辨當の折を開き。箸を拆

きつゝ。今夜の泊りは何くにせんなど考ふるも樂し。人は瀛車を長しじつと。我は常に短しと思ふ。殊に秋晴今日の如きを得て。絶景東海道の如きを行く旅路を然りとす。

既に黒煙の天龍に横たはる頃は。名残をし。夕日低くわちて波に黄金の反射を見せたり。豊橋と御油の間にて遂に光をかくしぬ。うすぐらき田に残さるゝ農夫。煙のうちに奪ひ去らるゝ遠山。何れか旅人の鴈を断たざるべき。

名古屋よりは乗り込む客ねびたしく。俄に尾張詞の喋々を聞くも亦一興なり。中にステーション毎の食物を品評するありて。鮮飯は山北豊橋よし。馬場のあつずしもわるからずなどいふ。

九時十分彦根につきて此に泊る事と定む。岩崎樓に宿を取りて。餘り

の寒さに火を多くもてこよといへば。下婢十能を持ち來りて。昨夜は伊吹山に初雪降りりと語る。飯もすみ床も敷けたり。いざとて横になれば。夜着は氷の如く枕は水の如し。

十五日は五時五十四分に乘らんとして。ステーションに至れば。新聞賣子先づありて一枚買へと勧む。大坂朝日と近江新聞とをもどめて讀まんとするに。賣子は腰掛にのぼり。暗きランプの心をさし出しなどして呉れたり。東京と人情の差をねもふべし。

能登川すぎて琵琶湖右にあらはれ。近き水は青く遠き波は白く。殘月ひとり別れて空に眠るも畫の如し。間もなく日出で、比良のいたゞきを撫で。濱邊の松を染め。稻運ぶ賤が背にねよべり。山も島も木も家も。遠きはすべて紫色の霞に包まれわたる。

七時半馬場にて下り。ステーション前の中村樓に休む。名高き湖水を我ものがほに。朝飯の膳に向ふこそたのしけれ。直に案内の車を雇ひて名所めぐりせんとは。東京をいでし時の餘算外なれども。燃れたつ情は今更制するあたはず。

兼平の墳を右に見つゝ。粟津の松原を行き過ぐれば。石山道は瀬田川の南岸に沿ひてつきたり。右には漕ぎ下し漕ぎのぼす舟の姿。左には染めはじめ染めをはる秋の色。目もいとまあらざるに。寺ははや前に來れり。門を入れれば見上ぐる限り悉く紅葉にて。山を焼き天を焦がすの好時節。唯おもふ。獨り見て獨りかへる事の残りねほさを。身をかゝめて木陰の落葉をひろひあつめ。ポケットにをさめて石段をのぼれば。正面なるが源氏の間なりと車夫教ふ。案内乞ひて。式部が書きし

といふ大般若經や其畫像やと觀をはりて。本堂の欄干にもたれつゝ見
 おろせば。青木にまじる紅また一入なり。めぐりて奥の方に出づれば。
 床几ありて。こゝよりは瀬田川一目に見おろさる。橋は朽ちはて、修
 繕中なれば眺望の數に入らぬぞ。月を眞東に待ち出でん晩景まで想像
 せられて。腰かけずにも居られず。先に客ありて一隅の床几を占め。
 クツト敷かせて獨酌しつゝ居たりしが。我を見つけ卒爾ながらとて盃
 をさす。是も東京の人なりといへば。はや打ち解けて語りあふ程に。
 いたく酔ひぬれば。禮を述べて寺を下り。膳所の町すぎて義仲寺に詣
 づ。旭將軍の墓は二疊ほどの臺石なる五輪にて。鶏頭のしをれたるを
 花筒に残せり。比叡の嶺おろしは今も來りて苔むす石の面を拂へど。
 深田に乗り入れられし駒は主人と共に歸る世あらず。

三井寺より見わたす湖水の景は。聞きしにもまして面白し。名物に辨
 慶の力餅あり。車夫は之をくひつゝあれよこれよと指さし示す。月夜
 ならぬぞ先づ口ずさまるゝは謠の文句なり。鐘樓は奥の院の右手にあ
 りて。此邊にはもみぢまばらに見ゆ。辨慶の引ずりがねなど見物して山
 を下れば。麓に三尾神社あり。古色蒼然。愛すべく敬すべき社殿を圍
 むにいてふかへでを以てす。是も尋ね漏らすべき秋ならんや。
 雨ならずして唐崎を訪ふ。松もし靈あらば心なしとや恨むらん。然れ
 ども東西四十間南北四十八間。一起一伏して天に仰ぎ水に臨めるとこ
 ろ。天下に比なき神木たるは知れり。霜に雪に波に嵐に。千年の緑を
 奪はしめざる名木たるは知れり。何ぞ八景の名目に拘つて雨のみを喜
 ぶに足らん。數十の杖は見あぐる大枝をさへて。それさへ千古の苔

に閉ぢられたり。石垣あらたに築きかふるとて。人夫の石を切り汀に運び居たるは。來年の博覽會待つためと云いふ。

石の大鳥居と立ちつゞける石燈籠とをわきて。黄と紅とに世を譲りたるは日吉神社の境内なり。花か錦か。花ならばかくは照らさじ。錦ならばかくはにほはじ。坂本のもみぢよしとは聞きつれど。これほどまでとはいかでかおもはん。瓢を提げて行く人歸る人の。こゝにのみ集まるも理りなり。本社は丹塗の門より内に神さびたてるこそ尊けれ。金燈籠の色こけらの色。れのづから參拜者をして信心肝に銘せしむ。拜しめぐりて二の鳥居に歸れば。川水清く流れて石橋あり。床几をならべて人の休むを待つ。こゝより見れば上なるもよし下なるもよし。水さへ岩さへ染めつくして酔へるもの人のみならず。林を隔て、紅葉

狩うたふ聲するは。西京などの客にやあらん。げにも顔まで鬼のやうになりたる人の多きを見る。

こゝまで來つるに入王子殘さんやと。車夫もすゝめ余も應ぜしは。途中にて高く仰ぎ見たるけしきの忘れがたければなり。道急なりといへば。靴をぬぎて草履にかへ。外套を車夫にもたせてのぼりにかゝる。七八町なりといへど。馴れぬ山路なれば頗る遠し。二棟の社は最も高き處にありて。幾星霜とも知られぬ建築。神々しさ限なきに。風の掃き集めたる紅葉は。自然の錦を敷きて拜殿をかざれり。こゝの紅葉は最早人間界とも思はれぬほどにて。火の如く入日の雲の如きが。天をおほひ宮をまもりて立ちつゞけるさま。目も及ばず。况んや書をや歌をや。

山いよ／＼高くして琵琶湖いよ／＼廣く。今は大津唐崎坂本堅田の里々まで。一幅の彩色畫に入り來れり。水を隔てゝうづ高きは鏡山。其右手に人家の見ゆるが山田矢走の村々。又あの煙のたつ方に遠く霞めるは伊吹山にて。伊勢の鈴鹿は其左に少し顔を出したりなど。教へらるゝまゝに興味添ひ來りて。疲れし足も忘れはてぬ。あゝ人事は轉變の急なる世に。千古の色を改めざるは。此湖水と叡山とのみ。かへりは道いと早く。すべるが如くに日吉二の鳥居をも出でぬ。一の鳥居をも出でぬ。馬場に歸り來れば五時に少し遅し。かねて六時の漁車に乗らんと思ひしが。足も疲れたり。今日の日記も書かざるべからず。かた／＼にて一泊する事に定め風呂に入る。下婢に背中流させつゝ窓より近江八景を見渡す事を語らば。家なる人はまことなりとも信

ずまじ。

暮色水を襲ひて黒くなりゆく山かげ名残をしきに。少女酒もちきたりて。今に月がのぼるべしといふ。盃を取りつゝ待つも樂しみの一つなり。赤き鏡は漸くあらはれたれど。水の上なほくらし。少女は膳を下げ茶を入れなどするほどに。やゝ高く昇りて。銀をながし金をちらす影。今夕波路にひろがりゆく。あはれ何の幸ぞ。晝は終日名所の紅葉を見。夜また寝ながら名所の月に吟ずるとは。枕も運ばれて側に在り。鐵瓶の湯も笙を鳴らしつゝ坐右に侍せり。十六日は午前三時五十四分の漁車にて大坂に行かんとす。満室の乗客眠まさにこまやかにてほの暗き燈火のかけ。何となく陰氣なり。市に利を争ふ商人。戀に身をこがす處女。未來の空想をや夢むらん。寂と

して聲もなし。

京都々々と呼びたつるに。時計を見れば四時三十分なり。窓を開けば四面たゞ白糶糊の中にありて。人もなく家もなく京都もなく東山もなし。たゞステーションの火影の霧を破りてまたくのみ。

五時五十分梅田につきぬ。夜は全くあけて車夫の提灯も消えたり。しいかな大坂の紅葉も見ただけれど。けふは終日俗務界中の人とならざるを得ず。残月なほ高く。大江橋は霜すでに白し。

十七日の三番漁車は神戸より來りて梅田にとまれり。戸をおして出でくる人。潮のわくが如く。まだ出ではてぬに外より入る人。堤の切れたるが如し。われも其一人にて。やうく一席をしめたり。左には神戸商人。右には鼠の頭巾をかぶりたる京都の女隠居あり。女隠居は菓

子を紙袋よりいだし。我にも分ちて道々京のもみぢなど説く。赤切符の氣さんじさは此にあるよと。打笑みつゝあたりをみれば。書生連は窓の方にねしよせられて。中等に乗らざりし事をかたつ。

京都につけば。車をはしらせて廣小路に友人をとふ。折あしく家に在らず。かねてこゝに枕をかる約束なれば。カバンなどあづけおき。今日は先づ東山のもみぢ見てこんどて。更に達者なる車夫をやとふ。いづくを見ても京都の秋はさびしきに。枝まばらなるつゝみの柳こそ何となく昔を思はせられ。葵橋をわたりて下加茂にむかふ。河合の社は。いてふかへでの間に色さめたる赤鳥居を見せたるも。却りて美し。糶の森にはもみぢなけれど。ときは木のいろも何となく暮秋の色をみせ。御手洗は水たれて沙のみなるに。太鼓橋をうづめて今を盛といてふ。

落葉かさなりたり。さはいへ。杉の緑に映じあひたる赤鳥居もすつべからず。

吉田神社をすぎ。陽成天皇の陵を拜して。眞如堂の山門に入る。境内は一面のもみぢなり。千体地藏十一面観音など賽しめぐりて。あと見かへれば。木陰に鉛筆ひかへて寫生し居る書生も。既に畫中の人なり。梢の色は紙を照らし。更に佛の顔に反射す。

黒谷をすぐるに。黒門の内に二三本みわたる亦よきほどなり。箒目の新らしきは美を解せざる童のしわざならん。されど秋風は再び來りて更に俗地を破る。

若王寺はすゞみにしばく來りつる地なり。小さき池を中にして。石がちなる坂はうねりく上へ下へと客を導く。其間左右前後すべても

みぢならざるはなし。林間に酒あたくめさせんと待つ女。こゝにもかしこにも掛けよくと呼ぶ。朝まだ早きためか。顔まで染めたる詩人を見ず。寺のうしろに瀧あり。石段を下りて之をとへば。今は浮世をもみぢにゆづりて夢しづかなり。おとづるゝもの。我より外に枯葉ふく北風のみ。

永觀堂の門前に車をすてし。車夫は辨當提げつゝ案内す。こゝはもみぢがはいから永觀堂と申しますなど戯むるれば。茶店女は早くもきしとりて。ごしゆのはい爛堂はいかゞでねすなどすゝむ。池の廻りには汀より山にかけて染めつくすいろ。さながら黄絹に燕脂のもみぢをえがきたるが如く。又もみのきれにくちなしの汁をこぼしたるにも似たり。石段を一つのぼれば上は大かた黄なり。又一つのぼりて觀音堂

の前より見れば。低きは赤く高きは黄にて。かさなりく見おろさるゝこそうつくしけれ。遂に一つの床几を領して。辨當ひらきつゝ遠く近く見渡したる。又更なり。風ときくしぐれ來りて。もみぢは雨の如く降り。或は巴の如くに舞ふ。豆腐賣る男來りて木のものどに荷をれろせば。客は之を呼び取りて茶店に煮さするもあり。東京人のしらぬたのしみはこゝらにあらん。

南禪寺の梢をみすて、智恩院にのぼる。楓は少なし。雜木の極めて黄なるが。青木の間々にほひあひたるも猶色あり。木かげにどんぐり拾ふ子を外にして。本堂の方には木魚のねとしづかに響く。

例の皿や猪口やと土産かひあつめつゝ。清水の坂をのぼる。佛前には繪馬を見る人お札をかふ人。うちつどひて世の不景氣もしらずがほな

り。舞臺にたちて見れろせば。火をたばねてつみあげたるが如き梢。

近くも遠くも照りあひたり。風吹く毎に火の粉は空にちり谷にしづむ。

我常に好む東寺の塔は煙の中にたちて。かの西山の遠景と共に四條畫の筆法を見せたり。

終りに洛東第一の名ある通天に遊ぶ。虚空に架したる橋を渡りつゝみれば。眼前眼下悉く紅にて。河の底より兩岸にそひて高く低くかけわたしたる茶屋。木の間く〜にちら〜とみゆ。茶屋は竹を組みて柱とし欄干とし。半紅の玉子提灯をかけたしたるが。いくつともしらず立ちならべり。余もめぐり〜て岸の中ほどの床几に腰を掛くれば。女煙草盆持ち來りて。酒はいかどとすゝむ。一銚子もてこさせて見おろせば。ひまなき床几は見るまに充たされてあきまもなし。花の如き娘をつれ

て蒔書の提重を開くもあれば。こんろをあふぎつゝ瓢箪の酒をうつすもあり。かの橋わたるれとは。此京都詞と相和して。紅雲深き處にこだまを打ちかへす。寫眞師は美人を寫さんとして橋上に器械をすゑ。美人は寫眞師を見あげつゝ床几の欄干による。夕陽既に低し。もみぢはぬぎすてられたる女下駄をうづめて。歸路を斷たしむるに似たり。今夜は友人の家にありて。過去のもみぢを評し未來のもみぢを想像しつゝ。燈下に頼まれたる短冊などしたゝむ。高尾行の約はいよ／＼明日なり。時々いでゝは是を數へ。風のおとに耳をそばだつるも。子供じみたり。

希望と満足とに迎へられて十九日は來れり。同行は主人はじめ余と五人。草鞋に足をかためて杖つきならしつゝ先づ嵐山へと向ふ。太秦な

どすぎゆくに。霧いと深くして里も見えず山も見えず。獨り廣隆寺の水彩色にて畫がゝるゝあるのみ。漸く近くして馬の鬣の如く目の前にあらはれたるは嵐山なり。猶行けば渡月橋は既に霧の外に立ちて。満山の秋色半ば朝日をうけたり。昨日は猶人間界中の美をこそ見たれ。此は是れ造化美中の美。歌一つと思へど何處よりかいでこん。人は茶碗を取りて頻に光線の妙を説き。我は河を上へ下へと歩いて覺はず謠の文句を口ずさむ。余は一昨年花見にとてこの樓にのぼりしが。子女の客夥しさに僅に半疊の席を得たりしに。今は我が外に二人の雅客を二階に見あぐるのみ。耳には澄みわたる秋の水を聞きつゝ。花にも勝る美景を獨り占領して。此名地を賞す。愉快何物か之に勝らん。

是より嵯峨の釋加堂を過ぎて。高尾道にかゝるに。其惡しきこと言語

につくされず。新聞は筆を極めてもみぢの時節の工事を罵れど。來春の博覽會の間に合はすべき準備ときけば。せんかたなし。車を捨てて女連は衣高く褰げ。男づれは草鞋引きしめなどして。先になり後になり。規約を定めて。向よりくる人にあふ毎に辨當をもちかふる事となし。笑ひ興じゆく。來るかど待ちつる百姓は横道にされて。思はぬ坊主のふと出で來るをりもあり。二三人づうちつれ來る畑のをばし。前掛脚半のいでたちにて。手拭をかぶり薪をいたぎきては。足早にぎゆく。わもしろきこと限りなし。道の傍に筵を敷き。白地の手拭をひろげては。槌をもち紅葉の葉を打ちつけつゝ賣るもの所々にあり。黄なる紅なる緑なる。色さへ莖さへ鮮かに顯はれたり。我も二三枚求めていづれば。之を買へあれを買へとこゝにもかしこにも又すしむ。喉

かわけば柿をかみ。足疲るれば床几に休みて。一里餘りも來にけらし。先なる人は見わたと呼ぶ。もみぢやといふ茶屋の看板のあらはれたるなり。

これを左にして坂をねりゆけば。山皆もみぢ。もみぢ皆山。天を照らし地を焼きて。行く人歸る人。悉く火焰のうちに入れり。見あぐる少女に反射しては顔を桃色に染め。我取りいだしたる手帳は忽ち紅に光りあふ。下りはつれば橋ありて。高尾川其下に流れたり。橋を渡らずして我も人も多くは辨當を開くことなるが。この打ちつゞく晴天は我を助けて。滿紅の木のもとに盃をあげしむ。天のめぐみ友の情。謝せざるべけんや。見かへれば。坂行く人は更に赤く。見おろせば水はべにを流したる短冊の如く。岩にふれて濃く淡く色どられゆく。

橋のむかふに急なる坂あり。之をのぼりつむれば地藏院なり。寺の後の岸より眺めおろすところ。ことに天下第一と稱せらる。茶を呼ばんとして床几によれば。畑のをばと菓子箱もて来て一つ買うてといふ。島田の如き髪に束ねて赤き襷をかけ。長き煙管を矢の如くうしろにさしたるは。客にも貸さんとにや。かひくしく茶やを助けて茶を運び酒の給仕などす。

絶壁の下は千尋の谷底にて。遠く見おろしたるもみぢ又更に趣を異にす。間を縫ふに松杉の緑を以てし。中には高尾川の裾白く流れて布の如し。美術家をして之を評せしめば。前のは一致の美にして。之は配合の妙とやいふらん。うべなるかな吉野の花とならべて天下一双の絶景といはるゝこと。たゞ日影山のあなたに隠れたるのみこそをしけ

れ。

もとの茶店を別れて川上へ五六町も行けば。又橋あり。兩岸のもみぢにわくりむかへられて。坂を登り寺に入る。槇尾これなり。岸に立ちて見れば。橋行く人豆の如く。水音を残して紅ならざるものもなし。京都の人は語れり。高尾は壯大。槇尾は幽邃。梅尾は精細と。今にして真に其然るを見る。

猶上へく〜と行きて橋を渡り。高き處に達すれば梅尾寺あり。こゝもうしろの岸より見るところにて。床几あり客を待つ。廣き谷間を埋めたるもみぢは。高低の梢をならべて。奥より奥の秋にほこり。夜より夜の霜を見せたり。彼の高尾槇尾にくらべて遠景を獨りしめたるは。梅尾なるべし。こゝに來る客は土器を投げて慰みとす。我も人もすゝ

められて之を試むるに。或は轉びて近くくだけ。或はぬらひはづれて横に飛ぶ。賣る男笑ひて一投げ投ぐれば。ひうと聲して空に舞ひ。谷深く落ちて行くへを失なひたり。さればこそ専門家には及ばぬよといふかたへより。心なき少女が投げたるは。もみちと共にひらくと面白く漂ひゆく。

里の子が賣る楓の大枝をおのく肩にしつゝ。歌をうたひ詩を吟じ。山彦と唱和しつゝ下りに向ふ。双が岡とね室の塔とを左右に見つゝ行く頃。暮れそめたり。叡山の頂は夕日の影を僅に残して。薄桃色に霞みわたる。

十九日も晴れわたれり。土産物など買はんとて京極邊を散歩し。四條大橋に立ちて京の風俗をながめわたす。亦たのし。八つ口あけたる二

布の前掛をしめたる女。頭の頂上に小さき島田ゆひたる娘。など來りては行きちがふ。男はさもあらぬど。女のなりの替りたるこそ先づ目につくなれ。八瀬の山路の月踏みいでたる大原女は。白の脚半に白の手拭前掛して。はや川向ふよりさゝめきつれつゝ來る。

午後二時五十分の瀛車は我を載せて。稻荷を過ぎ山科を過ぎ。琵琶湖の南岸を走り行く。なつかしき東寺の塔も消ぬ。名残りをしき東山の紫もうせぬ。たゞれくられたる京人の聲と。高尾の影とをみねむりの夢に残すのみ。

十一時すぎ濱松につきて朝陽館にやどる。いつも泊る處なれば。下婢は心得て懇にするもさすが東海道なり。夜ふけて風寒し。例により一鍋の鳥肉にえくられつゝ暖なる夢路に入りて後を知らず。

おひんなれといふに目を覺せば五時過なり。雨はそぼ／＼と降りてきのふに似ず。もはや山路をふむ用なし。車の窓に雨をながむるも亦可ならん。一番瀛車はまだ早ければ。乗客一室に五六人を入れたり。余は手帳を出だし紀行二三日分書き居たるまに。金谷は來れり。大井川の雨景を見つゝ鐵橋を渡る。

足柄の山路秋いまだ老いず。然れども先には日影に競ひて行く我を送り。今は雨に姿をかへて歸る我を迎ふ。また京都にて見ざりし妙趣あり。窓外の雨は霧となりて散り。忽ち暮となりて彼を覆ふこそにくけれ。人毎に時間表を擴げては。もういくつなど數ふ。山北の鮓飯もつくせり。國府津にて買ひたる新聞も終へたり。心は矢の如く。車のあゆみ豚よりもれそし。

新橋には時間表より五十分もねくれてつきたり。迎の車は待ちわびて馴れたる家路に誘なひ。家人は酒あたゝめつゝ高尾や如何なりしと問ふ。いでまづ子供の土産を分たん。京べには姉に。おしろいは妹に。

枯野見んとて

枯野見んとて牛込停車場より瀛車に乗る。例の家族六人づれなり。時は十一月第二日曜。うつくしき晴天なれば。乗客室にこぼるゝほどにて。いとにぎはし。常に見なれし市谷四谷の里々も瀛車より望めば。又目あたらしくて。青葉の中においてふ楓の交りてたてるなど。晝に似たり。

信濃町すぐれば眼界やうく開けて。身は東京にある心地もせず。刈りほしたる稲穂のかげに煙草くゆらすあり。かきあつめたる落葉を焼きてあたりをるもあり。人遠く家まばらなる處。小兒は興に乗じてあれよくと指さすうちに。前にみわたつる松原は。はやうしろになりぬ。

新宿より乗りかへたる瀛車は。思のほか人少なくして。瀛鐘車に近き一室は我一行もて占領せり。彼是する間に正午も過ぎしかば。携へ來つる辨當を開きて。枯野の景色を見つゝ行く。父よりも母よりも。少女幼兒のねもうちこそいとたのしげなれ。寒からぬ秋風は來りて海苔巻ずしを包みたる新聞紙を吹く。

目白板橋をすぎ赤羽にて下る。是より又のりかへて王子に行くぞとい

へば。勇まざるものなし。勳章をかぐやかしたる兵士來り。獵銃を肩にせる壯夫來り。田舎娘來り。學校生徒來り。乗る人山の如し。王子までは押されつゝ立つ事なれば。又窓の外もみみせず。停車場を出で、町をすぎ。稻荷の社をぬけて瀧の川に向ふ。柿蜜柑などならべて客待つ店の。こゝかしこに出でたるも。旅おもはしむるさまなり。

紅葉はまだ五六日も早かるべし。されど青葉が中のうすくれなゐも中々に興あり。仰ぎつゝ橋をわたる人。見ねろしつゝ坂をくだる人。歌おもふもあらん。下書つくるもあらん。此にぎはしき中を向へわたりて。寺の岸なる茶店に坐をしむれば。老婆はきぬかづきの芋などもてきてすゝむ。子どもよ。心のまゝに落ちたるもみぢひろひて來れ。かへりにはあるかんと約束なれば。畑の野菜の品評しつゝ。ぶらぶ

らとゆくきさんじさよ。此さびしき中を色どりたるは茶山花と茶の花
とのみ。老いのこれる蝶の。一つとびかふもあはれなり。寒き流に手
足をひたして大根を洗ひをる男。あすの市の價はいくばくぞ。夕日か
げちちて薄霧かゝる遠近の森。たがためにか錦をねるらん。すときがく
れの藁屋には。煙ほのかにあがりて。夕飯すゝむる妻ひとり待てり。
世はさまざまなり。肥馬に鞭うちつゝかへる洋客。今ぞ五六騎村をひ
いかして馳せすぐる。
子どもはつかれし足をひきつゝ我家の門を入りぬ。げに秋の日の短さ
よ。五時なれど火は家にあり。

ある人の賀に寄竹祝

夏の日のすゝしきかげと

茂りあふ窓の吳竹

冬がれの色かへぬ友を

さかへゆく窓の吳竹

うらべは笛につくりて

千代のことゑ君ぞしらべん

もとべは杖につくりて

千代の坂君ぞこゆるらん

その笛に切られんものと

その杖につかれんものと

春ごとにみどりそふらん

窓の吳竹

あはれその竹

秋のなごり

一

秋のなごりやをしむらん

野邊にたこずむ少女子の

歌はこだまにかへしつゝ

もみぢのかげに聞はたり

萩よすゝきよ明日よりは

只ねもかげに忍ばまし

二

くちびるあげて茶山花の

花は少女をむかへたり

ゑがほさゝげて白菊の

花は少女をむかへたり

秋あはれなる野の末に

まねくは冬か木がらしか

三

少女は歌をつとけたり

ながれは聲をあはせたり

あはれ小鳥よひよどりよ

木の實たはなんあすよりは

へだてぬ友と来てあそべ

川のあなたのおが窓に

四

いさゝ小川の飛石を

わたる少女のうしろかけ

あくりて松に照りかへす

夕日さびしく風さむし

なごり聞ゆる歌聲は

鳥かながれか少女子か

氷豆腐

月は空にわかれて。雪の上ふく朝風劍の如し。妻がはじめて試みたる
氷豆腐は。軒なる籠に好結果を見せられた。蕾を見せそめたる梅は。
ふたゝびしぼみて薺鶯をも待つに至らず。

雪よりは霜

我は梅よりも櫻を愛す。散るさまのいさぎよければなり。我は雪よりも
霜を愛す。消ゆる時の美しければなり。落葉の上にうすくかけれる
も。満目一白なるにねとるべしやは。

君のめぐみ (唱歌)

のどけき朝の春雨に

もにいでぬ草もなし

君のめぐみは雨の如く

民のさかた草の如し

洋行する人に

君がゆく舟路むかへて

來る海もめづらしき海

たつ山もあたらしき山

その山のはてこそしらぬ

その山のたかくこそしらぬ

のぼりゆかば花も折るべし

わけ入らば玉も得つべし

君ならでたれにかたのまん

その花その玉

冬の野

冬のはじめこそ野べのけしきはあはれなれ。木の葉大かたねちかけた
る林に。赤き實を三つ四つのかすは。何とかいふらん。ばらもちたる
かづらなり。紫の小さき粒も。かれぐの蔦にまじりて見いだされぬ。
龍膽のるりいろに咲きたるが。霜にかれずたふれふしつゝ。尾花のもと
にたてるなど。春秋の色にいかでかあとらん。道つきて茶畑にいであ
るは。里の近きなるべし。雪の如き花は今さかりに蕾をふくらませ。
黄なる葉をあらはす。

栗の枯葉

月清し。出で庭を漫歩すれば。絶えず散る栗の枯葉は雨の如く。顔

を打ち足を埋む。雪と散り霞とくだけて竹の葉風に翫ばるゝ光もねも
しろきに。あはれ柴の戸おとづれん友もがな。二もと三もと切りのこ
されたる白菊は。なほ幸に垣のかけにあり。

妙義山の石門

雲の上に神のかけたる

橋こそは奇しと聞け

大そらに神のうかべし

舟こそはあやしといへ

目にみるはけふ始めて

鑿とりて誰かうがちし

削りけんあとも知られず

これやこの山守る神の

神代よりいでいり遊ぶ

天の岩門

鶴

かきくもる雪げのそらに

たねつとき田鶴が音すなり

芦邊まで夜沙みつらし

雲井まで風すさぶらし

親は子をともなひかねて

遠近によびかはすらん

妹は春をたづねわびつゝ

いづくにかこがれゆくらん

雲にとひ水にあさりて

おもふ事なげなる鳥も

かくばかりうきねはあるを

人の世として

銀色の粉

少女戸をあけて雪よ〜と呼ぶ。いつ降りにけん。夜半までは月さやかなりしを。あはれ朝のけしきは。目白のあたりこそよからめ。門をいづれば。引きわたしたる白絹の上に。二の字のあといまだ見えず。

隣の犬ひとり梅の花をちらして狂ひ遊ぶ。

風なき雪のうつくしさ。不動の山。早稻田の里。關口の堤。八幡の森。いづれをみても花ならぬ方なし。たれか冬をみるものなしといふ。神はなほも雲の篩もて。銀色の粉をこゝにちらしかしこにこぼす。

學ぶべく捨つべからず

車に乗りて行くに。強き車夫は坂一つ越すとも道の近からんを欲し。弱き車夫は道とほくとも坂のなからんを望む。文學家の文をつくるは前なる車夫をも學ぶべく。後なる車夫をも捨つべからず。

久米幹文翁新室祝の宴に

みつくし久米の翁が

しきたへの家づくりすと

あしたには石きりすゑ

夕べには柱つきたてゝ

夜のいそぎ日のいそしみに

たくみらが立てし新室

きのふかも事をへぬとふ

その石ずゑ堅く強く

千代かけてゆるがんものか

その柱ふとくいかしく

八千代へて傾くべしや

うまし屋のねむかし殿と

山神もこゝろよすらん

二並の筑波のやまは

しりつとに遠くたゝせり

白たへの富士のたかねは

軒ちかく影をうつせり

岡づたひ出でたちゆけば

草津の湯もあみつべし

上野の花もとふべし

かくばかりめでたきやどに

すむをぢの榮は知らじ

ことしおひの松の葉のごとや

春花のごとや

乳兒の食初の祝に

朝月夜かすめる野邊の

露にこそ胡蝶はそだて

木のもとに風のこぼし

實をはみて鳥やあひたつ

ありがたの神のめぐみや

あはれこのめぐみにもれぬ

家やたのしき

あするなよ身を養ふもそこのふも

けふにはじまるちごのゆくへを

霜ころなほ

雪もあれど霞もあれど。霜こそなほれもしろけれ。散りかさなりたる紅葉いてふなどの上にうすくおきわたしたるが。かたへよりきにて玉の如き露をのこすもいとうつくし。板橋を厚く埋めたるはいふもさらなるに。學校にゆくとして石盤かた手にかゝへたる子の。欄干の上にいるはにほへとなど書き試むるもあり。朝日やうくさして。いづくよりも煙のたちのぼるなど。春秋のけしきにおとらんやは。道にぬぎすてたる馬のわらぐつを。ふりかくしたるも初雪めきて。いと興あり。庭の芝生たゞ白妙なるに。紅葉をさらしたるやうなるは。おりぬし鳥のあとならん。二つ三つ茶山花のこぼれたるこそほもいはれぬ。畑の青菜にかゝりたるは。ことにうるはしきを。いづれよりか摘まんどすらん。両手を息してあたゝめつゝ。あたりに立ち居る少女も見ゆ。寺

はらづく。常よりさゆる鐘の響は。氷れる耳にぞしみわたる。

しづけき水

(英詩反譯)

一

しづけき水の上を

夕影ぞおほふ

鳥はぬぐらしめて

休むもたゝ時

夜はすべて夢に

二

しづけき水の上を

夕かげろおほふ

花はくびをたれて

祈るもたゝ時

春風のまへに

三

しづけき水の上を

夕影ぞおほふ

星は光見せて

まもるもこの時

いざ樂し夢に

れくつき

夕月夜かすむ芝生の

をちこちにたちくる雲雀

なれも子をよもふとならし

なれも親をよばふとならし

おくつきの松みかへれば

たははるの風

もゆる火

もゆる火の光はうつくしきものなり。春のゆふべ。のどかに霞みわたれるに。野を焼くけむりのやうく赤くなりゆきて。暮るまゝに天をこがすばかりに見ゆるこそ。おもしろけれ。蕨のもゆらんおもかげさへみにて。

花のこずゑにたちのぼる篝火の煙はいふべくもあらず。京都にてしば

くみつる祇園の夜櫻。ねもひいづるごとに身にしむものは。此煙のおもかげがかし。平野はいつも日高く遊びて夜のさまをしらず。

夏あつき頃。夜に入りて田舎道などゆくに。行水の湯を湧かすにやあらん。茂りたる垣のひまより紅の煙なびきて。夕飯の箸とる娘の顔など。たははるに見せたるもあはれふかし。

盆祭する家にては。送火迎火などて焚く事あり。夜露にしめりて消へんとしつゝ。煙ほそくなりたるこそあはれなれ。一とせ江の島に遊びし時。日やうくくれて海の上しづかになれるに。腰越のあたりにやあらん。紅にもいである一筋のほのほは。山さへ海さへてらして。いかに美しかりしよ。

田の虫あふとて。手にく松明てらしつゝ田にたてるさまは。うらやま

しきものなり。甲斐の御嶽にあそびて甲府にかへり來ぬる道にて。頻に眠けをもよほしたれば。ゆめ獨り車にのりあたるをりしも。天をこがす火かげにふとおどろきつゝ見れば。一面の虫おひなりき。かゝる見ものは又やあらむとおもはれたるが。のちまたつひに盛なる虫おひにいであはず。

霜白きあした。稻村の陰などにて焼火しつゝ二三人あたりあるを。涼車の窓よりみつゝゆくこそ羨ましけれ。枯葉ひろひあつめて持ち來る子供もいとたのしげなり。日たけて小春の空あたゝかくかすめるに。掃きよせたる落葉などたくにやあらん。煙の下より火時々まじりて。山寺の門などより墓庭とほく見いれらる。くれはてゝは嵐いと寒きに。戸のひまもれてあろりの火かげむつましげにみゆるも。旅人の身には

ことらうらやまし。翁はほりてかへりし芋などやきつゝ。孫をあつめて學校のものがたりや聞くらん。

機 の れ と

一

すゝきのねくの 一つ屋に
ひまなくひしく 機のおと
しぐれがちなる 冬の日の
暮れぬ内にといそぐらん

二

とく織りはてゝとく裁ちて
春着にぬはんあなうれし

桃の花さく山こぼて

叔母うへ訪はんあなたなし

三

小川づたひのほそ道に

れんげの花もさきいでぬ

つみてかへりて叔母上の

はなし聞かんも遠からじ

四

わたる小橋のうしろより

わが名をよぶは誰ならん

をさなごゝろに慕ひつる

友こそひとり立ちゐたれ

五

どいろく胸にひいきくる

聲は天使か叔母上加

『おん身が聳はあれなり』と

燃ゆる望みに圍まれて

六

おもはずそらす梭の道

糸は切れたりいかにせん

月かげさむく身にしみて

まだこぬ春はいづかた予

初雪

ふじのねは眞白になりぬ
 秩父嶺はまだらにふりぬ
 庭のおもにいつかは見んと
 とほくゝにわが思へりし
 初雪をひとよのあらし
 いづくよりさそひきにけん
 冬がれの森の草木も
 たちかへり春こそきぬれ
 時しらぬ花こそさけれ
 おもしろの朝けにもあるか
 あたらしの花にもあるか
 けふ一日朝日かくさん
 山のはもがな

八島 (唱歌)

山を崩す関の聲
 海を焦す旗の影
 入りちがふ太刀の光
 打ちあふ其ひゞき
 松の風波にわたちて
 月のかげくらく寒し
 昔とふ人は誰ぞ
 春の夜の夢はしづか
 ほまれは波に消ぬ
 骨は此つちに朽つ
 敵の聲か嵐か
 八島の山影青し
 うらみは今波のいづこ

雪の朝

きのふの夕ぐれより降りいでたる雪。夜すがらしづかに降りあかして。朝になりては六七寸にも及びぬ。風すこしもまじらぬば。土も屋根も。同じやうの白さなるに。立てならべたる垣の竹など。筆のさきの如きさまして堆く雪をいたゞけるもうつくし。梅はいづこぞ。松はいづこぞ。今はたゞ花ならぬ木々こそなけれ。

番町にゆく事ある日なれば。八時車にて家を出づ。なほちら／＼と散りくる雪。顔につめたくあたれど。母衣をのけさせて四方のけしきを見つゝゆくも。いと興あり。天白く地白く家白く人白きに。松の下枝のうづみのこされたるなど。天も晝ごゝろあるに似たり。

手に／＼雪かきもちいでゝ道をつけんとするもあり。あづかに草箒をのばして軒の雪をねとさんとするもあり。一人が山の如く積み集むる雪を。二人して庭にのせ家のうしろに運び去るもあり。折しも一人の士官馬をはしらせて來れるが。あないさまし。帽も外套も胡粉をちらしたるやうなるは。何となく外征の晝のねもかげも見ゆ。

門のかけに二三人あまつりて。笑ひ興ずる聲のするは。大きな達磨をつくれるなり。板もて敲き固むるもあれば。炭もて眼を入るゝもあり。學校にゆく子供まで雪をまろめて持ち來るは。一擘の力をそへんとてなるべし。一にざり口に入れては。海老の如き手を息もてあたゝむ。

車輪を雪に塗らせつゝ神樂坂を下る。眼界にはかに開けて。堤の草木。遠近の町里。みるもの錦もおほはれぬはなし。あはれ旅にて此雪見

るは誰ならん。薄墨色なる瀛車の烟は。八王子さしつ市谷にむかふ。

竈の前

家に女は三人あれど。病まざるは小兒に乳を乞はれて我ならでは起き
いでかたき朝あり。是も人生一つの経験なれば。竈の前に座し飯の下
をたきつけみんとて。まづ薪を組み合はせ。間に枯柴をさし入れつゝ。
附木より火をうつすに。しばしこそあれ。薪につかんとしては消ゆる
こといくたびなるを知らず。困じはてし。或は薪に枕をさせ。又は薪
を片手にもちめて燃やしこゝろむるなど。その策のつたなきには。閨
なる人よりわらはるゝ事もしばしくなり。薪もし心あらば。我にや問

ふらん。書きては直し直しては書く御身の文章と。その困しさいづれ
ぢやと。

寒梅

天ざらひふりくる雪に

冬がれの老木もみゆず

ときはなる松もわかれす

おしなべて花こそさけれ

花と見て雪にやぬれん

雪と見て花やはらはむ

をりもかぬ拂ひもかぬて

たゆたへば北山あろし

末かをるなり

波の入日 (唱歌)

一

秋風さむき夕のそらに

みだれてゆくは木の葉か雁か

おもへば遠き海ぢのあなた

舟はかへれど我子はかへらず

さびしや波の入日

二

虫の音かれて夕霜白く

すゝきはくちて月影すこし

おもへば秋もわかれになりぬ

冬はくれども我子はきたらず

かなしや風のひらき

霜

松がねにぬぎてかけたる旅人の

葉沓しろく霜ふりにけり

行路氷

小車のわだちのあとの溜水

ふめばおとあるうす氷かな

うなみ子が朝ゆく道の初氷

つぶてせよとはたれかをしへし

森風

枝ながら森の木の葉をふきつけて

土に聲ある木がらしのかぜ

鳶

海士の子が魚ほす磯の岩の上に

人間うかゝふ鳶もありけり

苔

いつのよに神の削りしおどならん
苔はいはほのはだものこさず

富士

さくや姫神のひたひの面影を
八千代にゑがくふじのたかやま

古戦場

古のまつ嵐は音たにて
やはたが原にあられふるなり

征清軍の事など思ふ夜雁の過ぐるを聞く

たが閨の涙なるらんかすむ夜の

月になき行く天つかりがね

一月ばかり京都の吉田神社にて

人音もきこぬ森の梢より

あられこぼれてひねどりのなく

稻荷山にのぼりて

神杉のひまより見れば稻荷山

のぼる少女のそでもありけり

いなり山たつる鳥居の八千柱

八千代にまもれみよのさかねを

相州三浦郡にあそびて

魚つりし舟はかへりて冬がれの

けしきは海のうへものこさず

相摸の海春日おぼにてあたゝかに

かすめる空のふじを見るかな

あまの子が海苔ほす里の垣根には

雪よりさきに梅もふゝり

京都

京都こそなつかしけれ。三條。四條。堀川。今出川など。何となき名
 さへ昔れもはれてなつかしからぬものなし。山は東山。北山。西山。と
 りくくなる中に。春清水より霞める嵐山をみたる姿と。秋嵯峨のあたり
 にて夕日ののこる比叡山をみたる面影とは。忘れんとしても忘られず。
 社は下賀茂。いつも神さびわたりていと尊し。つぎては上加茂。松尾。
 北野。吉田。いづれたふとからずといはんや。寺はねむろこそあれ。
 花のころつとむのころは更にもいはず。夏も秋も冬もすべてよし。太
 秦の廣隆寺また數へもらすべからず。清水は俗地なり人はいへど。
 れのれは何となく古人と遊ぶこちせられて。京都にゆくたびいつも
 まうでぬ事のなきは。しらずく心のひかるればなるべし。牛若の誦

經せしも。熊野のうたよみしもこころとねもへば。ことになつかしき
 なり。花は嵐山につぎてねむろ。清水。とりくくなり。一日そぞろあ
 りきして。ねもはぬ鹿谷安樂寺の花みいでたるこそうれしかりしか。
 祇園の夜ざくらまた東京にてみられぬねもむきあり。平野のはいまだ
 ぬみざるこそくちをしけれ。紅葉はすべて色のうつくしさ。關東のが
 及ぶべくもあらぬは。しぐれなどのわざなるべし。高雄どがのを楨の
 をはねもひしよりもすぐれ。通天。永觀堂。眞如堂。なにともいはれぬ
 けしきあり。すべて京都は雨の日ともいはず。雪の日ともいはず。大
 原女の三條橋うちわたりくるなど見つとをれば。命ものびなん心地ぞ
 せらるる。

下加茂

余は京都に来る毎に先づ下加茂に遊ぶ。縁久しき杉の木の間まに朱の鳥居を見入れたる景色たどへんに物なし。御手洗の水清きく流れて注連引しきわたしたる橋のさまこそ。神さびたれ。あはれいてふをこぼして秋風かぜのわたりつるは此橋なりしを。夕日すゞしき夏陰かげに日ぐらし聞きしはあの森もりなりしを。雪白く土を埋めて。今は社頭に手を拍たたつ聲こゑも響こかず。

上加茂

北山きたやまねろし寒く吹ふきて鴨川かみ堤つゆく人もなし。されども上加茂かみかみに詣まではやの志こころあれば。風に向むかひつゝ遂ついにに橋はしのこなたこゝろに來きにけり。打ち渡わたるほ

山陽先生の墓

ど。風は俄たちに力を加くへて。外套がいとうの頭巾かぶとをさへ奪さらはんとす。鳥居とりいを入れいば。風かぜなほ梢すゝみに吼こゑに狂くるひて。雪ゆきちらつき出でたり。枯葉こはひろひて歸かへる少女せうじよよ。落花らくわの頃ころならば。汝なんぢが歌うたをも聞きくべきに。春待はるまちつ木々きぎの中にはは蒼持あゐもちつ梅うめも交まじり。

余が友は曰いへり。圓山えんざんに遊あそばば山陽先生さんやうせんせいの墓はかを訪まふべしと。長樂寺ちやうらくじ事務所じむしょの前まへを過すぎて。霜しもを踏ふみつゝ險あやしき坂路さかぢのぼりゆけば。玉垣たまがきめぐらしたる一圍ひとまわりの地ちあり。先生せんせいの碑いしは西にしに向むかきて北きたの端はしに立たちたる。誰たれかさしけん。二枝ふたえだの櫛くしの半かたしをれたるもあはれなるに。水鉢みづはちの水みづは

こほりて雪よりも白し。世には苟くも讀書を習ふ少年にして。日本外史を手にせざるもの幾人かある。鞭聲肅々を吟せざるもの幾人かある。而して來り此筒に花立つるもの果して幾ばくぞ。三十六峯ひとり碧を留めて。先生の幽魂を慰むるに似たり。

嵐山

花に紅葉に納涼に。余はしばしば嵐山に遊べり。然れども氷を踏んで渡月橋を渡るは。今日を始とす。骨の如き岩。劔の如き林。眼に遮るもの松の外には又色も無し。日傘挿しつゝけて花見に集ひし少女は何くぞ。小舟浮け並べて紅葉を賞せし雅客は何くぞ。川邊の茶店寂として餅賣り歩く畑の姥の影だに見えず。

行くとはなしに法輪寺に詣づ。梅すこしありて七八分の盛なるこそうれしけれ。折しも子守をしつゝ來りたるは里の娘の。何ごころなく梢を見あげたるさま。畫にやかまじし。脊なる小兒は手をさしのばして。あれをくゞと最も高き枝を指さす。

寺を下りて。此處彼處逍遙しつゝ又渡月橋をわたる。かなたの岸には里人ども集まりあて。木を切り挽くもあり。焼火してあたり居るもあり。汀の筏ひとりさし捨てられて。北風に吹かるゝもあはれなり。雪降らば又も來ん。西山の冬また見どころなからずやは。

野宮

車を野宮に遣れといへど。車夫は知らずと答ふ。余は先年ものしたる事あれば。却りて車夫を案内しつゝ連れゆきたるこそいと興あれ。藪の中道分け入れば。奥深く御社は立たしたり。小柴垣あたらしく結びめぐらして。黒木の烏居ふるからぬは。物足らぬ心地すれど。さすがに昔の跡と思へば。たいなる心地はせず。かの紫式部の筆に入りたるやあのあたり。光源氏の袂を吹きたるや此風など思ひつゝ立てば。松の聲なほ千年の山彦を反すに似たり。朝日影寒し。我と車夫との外に霜柱を碎く旅人いまだ來らず。

仁和寺

車は仁和寺につきぬ。總門晝さびしく鎖して木がらしひとり空に聲あり。くぐり戸より入りてこゝかしこ見めぐるに。枯枝ながら立ちなみたる幾もとのさくらつゝじは。何となく春の面かげを忍ばせ。松林のれくに仰がるゝ五重の塔は。知らぬ古の姿を見せたり。田樂あぶりて休めくゝとすすめし老女は。いづくの埋火のあたりにか眠る。今は木かげに詩を口ずさむ僧さへみえず。忽にして四五十人の生徒。運動會に來れるあり。教師指揮して進めといへば。猿の如く石階を走り上りて。御堂さしつゝ群がりゆく。佛もつれづれや慰みますらん。罪なき競走の勝鬨は山彦に答へたり。あはれ寛平法皇の大内山。兼好法師の雙が岡。ながめは近けれど。松ものいはず雲かたらず。

稻荷山

稻荷より上り瀛車に乗らんとして。時刻待つまに稻荷山にのぼる。ト
 ンテルの如く橋杭の如く數百の鳥居の立ちつゞける中をくゞりぬけ
 て。山路にかゝれば。日影とゞかぬ熊笹のかげなどには。散りかゝる
 花の心地してのこれる霜。むら／＼みはたり。あはれいにし春はこの
 あたりにて驚きとゞしを。あの岩の上にはつゞじもありしを。今は常盤
 木ならで又色もなきさびしさよ。さはいへ冬日あたゝかに霞みて。あ
 とよりのぼりくるをとめの袖も木のまに見ゆ。
 高きところに立ちて見わたせば。淀鳥羽のあたりたゞ目の前なり。た
 れかこの一幅の山水を畫がきいだせるものぞ。神代の事をとほんどす
 れば。男山も答へず淀川もかたらず。山一めぐりして社にかへれば。

今しも笛の音ひゞきて神樂殿には神子の舞はじまれり。白き衣。紅の
 袴。今やうの手ぶりながらも。處から神さびてみゆ。契あらば菜たねの
 ころかさねて詣でん。稻荷人形の姿さへ昔戀しきこゝちするを。

名残の御輿

(明治三十年二月二日青山にて)

一

青山の松のあらしに
 ねくらるゝ笛のしらべも
 今日といへば哀しき響き
 捧げ持つ御旗のいろも
 今日といへば哀しき靡き

天の下大みたからの
泣く涙あめと降りきて

照れる日の影こそ霧らへ
時雨せぬ空こそ曇れ

夢ならば覺めもやせんと
祈りつゝ有りしあひだに

かしこきや名残の御輿
今ぞ立たせる

二

誰が爲めに咽ぶ叫びろ

弔らひの筒のひときは

誰が爲めに起れる歌ろ

かなしみの喇叭の聲は

立ちなみて御供つかふる

つはものゝ花のよそひも
墨染に今日はかはりぬ

あはれ世は常なきものか

春立たば京都の御幸

拜まんと千萬民の

仰ぎつゝ待ちつるものを

遠き世の別れの御輿

今ぞ立たせる

斧の音

(同五日泉山御陵にて)

月の輪の御山さむけく

ふる雪の中もいとほはで

執る斧のねとこそ響け

打つ槌のねとこそ響け

たがために建つる柱ぞ

たがために切り置く石ぞ

牛に載せ車に積みて

土はこびゆきかふ賤の

ねのがどち嘆きかたらく

千代かけて仰ぎし君の

宮づくり今日この山に

泣くくも仕へんものと

なもひかけきや

夢の浮橋 (同七日京都にて)

比叡の山如意の嶽。いつしか夕暮の色に包まれてまた聲立つる嵐もなし。京都七萬の民家に唯墨布旗の力なく翻へるを見るのみ。

英照皇太后陛下なごりの御車は二月七日の午後六時をもて大宮御所を出で立たせ給ふ。その御道筋にあたる町々は。家毎に黒幕引きわたし。軒には白張の高提灯を燭して。静肅に送り奉るさま。見るも涙のたねなり。余は境町御門の筋に立ちて恐多くも拜觀し奉りぬ。少しづつちらつき出でたる雪も。御發棺の頃には晴れわたりたるこそ心ありげなれ。

喇叭の聲。軍樂の聲。遠くより起りて近くに來りぬ。花の如く装ひなしたる儀伏兵も。色なき心地して。今日は勳章の光に目もとまらず。

哀しき調べもて満たされたる樂曲は。咽ぶが如く泣くが如く。遂に山彦さへ聞はずなりぬ。

松明の煙赤くなびきて。立烏帽子に鈍色雜色着たる官人の進み來るは。御車の進ませ給ふに程もあらじ。五色の絹取り垂でたる大眞榊。白地錦の御旗二十流れ。つゞきて諸陵頭齋官れのく墨色の袍に垂纓の冠して従ひ奉れり。をりしも北山ねろし靜に來りて。松の火を横に吹き又下に吹く。

伶人は雅樂を奏しつゝ早や前に來りぬ。昨日はあなれもしろと聞しめしけん笙笛箏の音も。今宵の御幸には御心を慰め奉るよしなきこそ哀しけれ。榊を執る人。鉾を捧ぐる人。伏目になりて涙ぐみゆく。

皇太后宮亮につゞきて皇太后宮太夫は御車の前に歩まれたり。年月な

がく御蔭にかくれし事ども思ひ出でしは。今なほ夢の心地やすらん。喪服の袖も力なげなり。

御車は四頭の牛もて牽きまゐらせたり。牛の脊には鈍色の布を掛け。白き綱を附けて牛飼に導かれつゝ進みゆく。牛もし心あらば。身にあまる譽のうれしさにや泣くらん。頸より胸より隙なく垂れたる總の美しさは。軍人の飾に優るとも劣らじ。

あな哀し。歸らぬ道に出で立たす陛下の御柩は。今夕涙もて迎へ奉る國民の中を南の方へと向はせ給ふ。道の左右に立ちならびて拜み奉る人々。かねては御車のさまをも仰ぎ見んと思ひあたるに。俄に胸せまり目ふさがりて。頭を得もたげぬもことわりなり。御簾の光。御下簾の色。何とかあはしけん。遂に心にもとどめずなりぬ。車のきしめく

音のみ忘れがたきもいと哀し。駕輿丁七十人。黒色の闕腋に細纓の冠してぞ従ひ奉れる。

黒の御喪服に素服して藁沓をめし。竹杖つきつつ進ませ給ふは喪主の宮におはします。宮は陛下の御事あらせ給ひしこのかた。大喪使の長として喪主の御つとめとして。夜もまどろませ給はぬばかりと承るさへ恐多きに。嵐も氷る泉山の奥に。今宵を明かさせ給ふと思へば。かく立ちながら家の陰などにて送りまゐらす事の勿躰なさと。一人がいへば。皆々げにもとて又ひそかに袖ぬらす。夢心地のうちに長く列をなしたる供奉の方々も行き過ぎぬ。陸海軍喇叭の聲は再び起りて。是もやう／＼に遠ざかりぬ。あとにのこさるゝ人々。なみだと共に去りもやらず。物も得言はず。

月細く霞みて。薄墨ながしたる雲のちぎれ／＼棚引くも物すごきに。高臺寺の山より打ち出だす弔砲の聲ひまなく響きて。夜は更け初めぬ。あはれ御車は四條わたりをやいでますらん。五條の橋をや渡りますらん。ながめやれど松明の光も見えず。筆簾の音も聞えず。

夜はいよ／＼更けたり。夢の浮橋に着かせ給ひしは今頃にやあらん。天を焦がす篝火の影に迎へ奉る方々。送り奉る人々。松の下露ならぬ涙にひとしく袂やしぼるらん。いかに今夜の盛大なる御式よ。あはれ歡びの御幸ならましかば。

今はの御車 (同上)

一

ひなの山日かげはきにて

時は來ぬ六時はなりぬ

かなしきやけふをなむりの

御車は今たゝすらし

大御門いで給ふらし

松の煙そらになびきて

車の聲とほくろひしく

いかにせんふきなす笛も

天がけるみたまどいめん

よしのなければ

二

宮人がさこげつらぬて

すこみ行く御旗なびきて

かなしきや今を限の

みくるまは三條すぎて

四條にぞかこらせ給ふ

墨染のたもとしぼりて

御ともする司人あはれ

きのふまでつかへし君の

御送をこよひせんとは

おもひかけきや

三

御車はいづこゆくらん

松の火のひかりもみはす

笙のぬも早きこほこず

久方のそらにかくれし
月の輪の御山はいづこ
うば玉の夢のうきはし
今頃はわたりますらん
ひがし山々風あちて
かも川の水おどかなし
泣くはたが聲

松の風 (同十日泉山にて)

月の輪のみさいき深く
雲がくれいでます君を
此山に送りまつると

昨日かも大宮人は
墨染の麻衣きて
青竹の杖つきならし
大御供つかへしものを
海陸の兵の諸隊は
目かトやく装しつと
御後前を衛りしものを
烏羽玉の夢の浮橋
うちわたり今日来て見れば
玉すだれ懸けたるまゝの
御車はこゝにませども
御車を牽きけん牛は
白妙の綱取りかけて
さながらにこゝにあれども

吹く笛も今は聞えず
松風の聲より外に

集ひたる人は歸りぬ

天翔る御靈は何處

岩床の御座は何處

焚き捨てし御庭の篝

灰ぞ残れる

冬の京都 (大葬の年)

花みにと來つるは夢か

月みにと來つるはゆめか

東山おろすあらしの

橋わたる車もみはず
寒けさに人もかよはず

天ぎらひふりくる雪の

常ならば花とやみまし

常ならば玉とやみまし

その花のちりぬる如く

その玉のくだけし如く

くもがくれかくれし君の

大みこしかへらぬ道に

いでたゝすけふすとおもへは

かも川の水のおとこそ

かなしかりけれ

磯づたひ

逗子のあたりに土地をもとめれば。見る事ありて一月の末ものしぬ。枯れて立てる入江の蘆。のりすてたる汀の舟など。ながめものさびしき中に。雪しろたへの富士のぬの。海をへだてし望まれたる。さすがにうつくし。なほ磯づたひして一夜を長者園にあかさばやと思ひなりて。森戸神社を右にしつゝ砂ふかき道をふみゆくは。夕日かくれて。なごり紅なる横雲の。富士を紫に惹がきいだせる頃なりけり。やうくうしろになりゆく江の島。一步々とかたちかはりて。緑なりしも藍となり。又うすいみとなる。

暮色沖より來りて。舟を襲ひ島を襲ひ。遂に漁村を襲ふ。然れども墨畫の富士は。依然として天の一方にたてり。水の如き空は金剛石の如きをきくのみ。星をちりばめて之を守れり。天地聲なく。獨り巖を噛み去る波のおと

里の火影はあたゝかげに戸のひまをもれたり。摘みたる磯菜を羹にして。今しも夕飯の箸やとるらん。夏のにぎはしさに引きかへて。すこきまで人げなきは。冬の夜のさまなり。色もなき軒端の草を風ひとりもてあそぶ。

長者園は長者が崎といふにありて。相摸洋を盆とし。富士江の島を盆石としつゝ弄ばしむる一旅館なり。門を入れども人むかへず。玄關にあとなへども人こたへず。汐風にふかれつゝ立つ事しばらくにして。ランプを手にしたる下婢の出で來るにあふ。案内せられて一室をしめ。あたゝかなる汐風呂に入り。あざらかなる魚肉を味ふを得たるこそう

れしけれ。

とまりをる客の數をとへば。現在七名といふ。されど四隣寂として。また語るものもなく。うたふものもなし。たゞ時々遙の室をへだて。片言まじりの唱歌をきくは。あるじの子なりと下婢かたる。夜ふけて床に入るに。夢あたくかにして春の如し。

寝すごしたる枕もとに下婢は火をはこび來れり。何時ぞととへば。八時なりといふ。仙郷に入りて日の短きを覺ゆしは。げにさる事ぞかし。起きて磯邊にいづれば。群青の海に胡粉の帆かけ三つ四つならびて。古代の油繪にむかふ心地す。霞の上にあらはれたる富士。旭を半うけたる江のしま。又筆もて寫すとも及ぶまじき朝なぎの空なり。潮低くして春をいだしたる岩のうへには。烏の來りて啄むも見ゆ。

いたる處の浦里。梅あり椿ありて。花は大かた咲きたり。日あたりよき苦屋の庭には。網すきをる老翁もあり。切干大根づくりをる老婆もあり。罪もなき鶏は。麥ひろげたる庭の上にて時をつくる。

一日磯づたひしあそびて。夕ぐれ漁車に乗る。鎌倉に近づく頃。少女三人籠おひつれて松ある細道をかへるあり。一人は梅の折枝を持ちたるが。あとなる友とふりむきくかたりゆく。あはれ家に待ち居る愛の神の心やいかに。西の空はなほ光をのこして。少女の顔半面は赤く半面は黒し。

歌聲ひびくが如くこたふるが如く。影ははや消ゆるせたり。誰が里の焼火ぞ。一筋山際をてらして。烟うつくしく空にのぼる。野はしづかなり。村はしづかなり。唯わが車聲のみ雷雨に似たり。

利根川舟

明治二十八年一月

凧のうなり羽子のひびき。都の正月をあとにして總武鐵道の乗初せしは六日の午前十一時三十分なり。窓の内には佐倉營所にかへる兵士。成田參詣に出で立つ老人。肩を連ねて煙草の烟横になびき又堅にのぼる。

佐倉に着けば一時も過ぎたり。日はよく晴れたれども。寒さとどふべからず。一の茶店に入りたれど。奥の間は北向なれば。入口の椽臺に日のあたるを幸にして座を占めつゝ。集まりあたる車夫と共に。土間の焚火に手をさしかざす。先づ旅めきたり。數碗の冷飯一鍋の赤貝。これを珍味とする旅人の心は。玉樓の葡萄酒に飽く公子の口と何れぞや。

車をやどひて佐倉の町を過ぎ。村より村を送られゆくほどに。印幡沼も左の方に見やられたり。眠れる水。死したる森。冬枯の景色は人なき舟を残して遙に筑波の雲に及ぶ。

娘は落葉籠を背ちひつゝ森より歸り。母は大根を洗はんとして流れに下る。田舎はまだ正月ならぬば。家に機織る嫁あり。脊戸に藁打つ聲あり。到るところの寒村。畫ならざるはなく詩ならざるはなし。夕日はやう／＼力を弱めて梢を辭し屋根の瓦を退く。

石を敷きつめたる坂を下れば。道の兩側みな宿屋にて。目のとどまる處に壯嚴なる佛閣あふがれたり。車夫いふ。あれが不動様なりと。

案内せらるゝところは大野屋にて。樓上四疊半の座敷。床には文人畫の懸物あり。柱には水仙さしたる花瓶あり。窓を開けば。一株の寒梅龍

の如く軒に繙まはりて。はや四五輪の春を見せたり。一夜の城郭は占領しおきつ。先づ參詣をしてこんどて宿を出づれば。番頭は東道主人となりて我を導く。

寺内に入らんとして見あぐれば。雲に聳ゆる寒林は堂を守りて劔の如く立てり。左右の商店は半ば荷をしまひたれど。猶菓子に小間物にならびたてるもありて。終日繁榮のなごりつれくならず。高き石段をのぼり堂に入れば。燦爛たる金碧眼をうばひて。威ある佛体を垂れたる御帳の内に想像せしむ。

うしろの山上に大日堂あり。之につゞける數町の地は公園にて。一區を梅とし一區を櫻とす。梅は數十株もあるべし。其數櫻に及ばぬど皆古木にて。苔むしたる梢に半輪の月はやうく光をおとせり。暗香浮

動するは今より幾日の後ぞ。

ふたゝび堂の前に出で。あちへこちへと見めぐるに。今は全く豆賣る店もなく。たゞ山鳩のさびしげに飛びおり飛びのぼるあるのみ。

繪圖などもとめて宿にかへり。湯に入り酒を命じて。少女を教師に地理の學問をなす。梅はかたはらより微香を放ちてものいふに似たり。あくれば七日。五時半に呼びさまされて顔を洗ひ。食事をすまして再び不動に參詣す。佛前に至ればこちらへと案内するものあり。言はるゝ方に座を占むれば。十人あまりの參拜者は勤めの僧のうしろにうづくまりて。手にくき數珠を取り口ごとに誦文をなす。我ひとり此間に挟まりて漏るべきならぬば。手を合せて人まねに誦文をなすも我ながらをかし。

六時車にて成田を立ち。源太河岸さしてゆく。四里に少し飲くる道なり。日はやうやく出でたれど。道の霜。田の氷。すこしもめぐみに觸れざる如く。足の指は切るゝばかりにて。鼻のさき既に感じを失へり。唯枯草のうへに畫がゝれたる人馬の影と。焚火の煙とのみ。少し暖げなる心地す。

目ざす處には九時前つきたり。されど漁船は十一時ならではといふ。あまりの寒さに何かいませといへば。ふつゝかなる徳利に飲けたる猪口そへて持ち來れり。酢の如き酒。紙の如き海苔。いなむべしやは。旅は物足らぬこそ面白けれ。

待てどもく船は見えずして十一時も過ぎぬ。十二時も過ぎぬ。漸く待ちつけたるは一時なりき。下等室の口をくぐれば。足を入れるべき地

もなきほどの込合なり。されど立ちても居られず。縦横なる足をまたぎこねつゝ。からうじて蜜柑の皮など散り亂れたるを打ち拂ひつゝ一隅に座をしめたり。右も左も日清戦争の話にて。孫のうへを氣づかふあり。甥の功をときほこるあり。銚港丸は一喜一憂人さまぐの社會を載せて。今や坂東太郎を下り行く。

波なく風なく。日はあたゝかに照らして船中あつきほどなるに。枯芦のいろ水鳥の聲。たけず旅客をおくりむかへて窓にあたる。

松岸に着く頃は暮れはてたり。家の影。木の影。舟の影。人の影。みな墨繪となりたるに。客を迎ふる提灯の光ひとり水をこがして。紅なるもいと美し。

六時すぎ銚子に着きぬ。夜ふけ酒さめて枕をそばだつれば。波の聲と

ほく聞て。あたゝかなる事は東京に似す。

八日は宿りし家のあるじに伴はれて銚子の名所を見あるく。日は心よく晴れて。磯邊に魚ほす漁夫のなりはひなど。繪のやうなり。

利根川の流つきて海にいづる處を川口といふ。向ひは煙水渺茫たる鹿島洋にて。入りくる舟。出でゆく舟。あたかも白鷺の列をなしたるが如し。千人塚といふにのぼりて打ち望めば。雪と散る波のいろ霧と立つ潮のさま。何ものか歌おもふ人の心を惱まさざらん。

松多く群がりおひたる岡の上に鳥居の立てるを問へば。白紙明神といふ。こゝよりは銚子の町々一望の下にあり。家毎に牡蠣もて屋根を葺けるは。晴れたる雪をいたゞける如く。また落梅にうづもるゝに似たり。

銚子の最も東の端なるを犬吠崎といふ。燈臺あり。水面を抜く事十六丈餘。海には鰯捕る舟五六十艘もつらなりゐて。勇みつゝ網もて海を圍み陸をとりまく。

南へ〜と戸川などいふ村をすぎて。磯づたひするに。手ん手に籠さげつれて岩間に立ちたるは。銚子海苔とる少女なり。知らず明朝おくられていづれの市にかいづらん。

犬若の入日は人の見にくるものなりとて。岩の上にケツト敷き瓢どりいだしなどしつゝ休む。日は波をはなるゝこと三四尺のところに来りぬ。あれよ〜といふほどに。海に引きたる光線も絶えて。桃色なる毳は半ば波に身をひたしぬ。沖ゆく帆影は大かた黒きに。空の紅はいまだ消ゆるやらず。あはれ英雄の死か。美人の眠か。姿は全く地球と

あかれて天に餘光をのこすのみ。俄にもものすどくなれるものは。かの波の聲とこの松風と。

九日は雨の内に送れり。詠歌の添削短冊の筆耕。これにも疲れたれば。近きあたりの山に登りて銚子の全圖をながめ。観音にまうでこはいてふの枯木に秋を忍ぶ。

十日のひるすぎてより。別を告げ舟に乗るに。雨ちら／＼とふりて風寒し。芦原また芦原。けふは見いだすもものうくて。獨り窓の内に夢をむさぼる。源太河岸に着きたるは初夜の頃にて。雲少し破れ月おぼろにいでたり。こゝより車をやとひて成田まで行く。夜は漸くふけたり。四隣寂寞。山彦にこたふるものは寒村の撃拆と遠吠する犬の聲とのみ。つごかぬ夢は車輪のおとにおくられて。橋をわたり又田圃を過ぐ。

成田にては不動前まで行かずして。街道筋の吉田屋にとまる。あすは曉をわがして佐倉まで立たんとおもへば。時計は頻りに聲たてゝ寝よ／＼とすすむ。飲みかけたる酒よみかけたる歌。さらばしばらく別を告げん。

待つ舟

一

もねたつばかり紅に

そめわたしたる夕空を

よこぎる鳥の三つ五つ

ゆくへは波のをちならん

わがまつ舟わがまつ人
帆も見えず影も見えず

二

黄ばめる雲もきほうせて
水いろになる天つ空
みにゆく星のかげならで

わがまつ舟わがまつ人
あそぶ鷗のあともなし
艦もきこえず影も見えず

三

山も林も暮れはてぬ
たき火の色も夜に入りぬ
苦屋にかへり磯にたつ

ながむる海みわたす空
かげは我のみ嵐のみ
舟はいづこ人はいづこ

書

雲なくて龍こそかけれ
風なくて虎こそ吼ゆれ
たてざまに巖きりおとし
横ざまに泉はしらせ
こゝちよくやりつる筆か
おもしろくふるへる筆か
一たびは眼をあらひ

二たびは心うばひて
見るまゝに飛びも立つべく

雲をさへおこしいづへし

あはれ誰が書きつるあどろ

袖をまくり髯かきなでと

執る筆のおもかげさへに

うかびいでと起臥見れど

あくよしもあらず

安房めぐり

安房めぐりは二度せしが。初めの度は明治十六年の八月なりき。靈岸島より小蒸氣にのりて館山につきぬ。こよひは夕月のけしきよからん

とて。柏崎といふ處までゆきてやどる。二里あまりもあるべし。欄干

によりて見渡せば。館山の灣は鏡の浦とて名にもたがはずすみわたるに。かげを浮べてたてるをとへば。高島とぞいふ。那古舟形のうらう

らも目の前なるに。鯉舟漕ぎつれて聲々にこぎかへるも。興そへたり。紅の色きにて月高く空にかゝれるは更にたどへんものもなし。

またの日は。浦づたひしていそぎもせずゆくに。ひろくとはてなき海は身をはなれず。白龍の頭うちそろへつゝ巖をこねて。瀧となりあられどちる。心地よしとやいはん。ものすこしとやいはん。濱木綿の風におきふすさまは。波のよせかへるにも似たるかな。あまの子らは。波のひくまをぬらひてあらしひ出づるを見れば。流るゝあらめをかきあつむるなり。なれたる業こそ見物なれ。洲の崎明神に詣でなどして。

日はたかけれど相濱にやどる。こよひ雨ふる。旅の枕いとすぞし。
 明くれば安房の神社に詣づ。式内の社にて神さびたる森の中にあり。
 それより秋草のつぼみ見せたる山ぶみして錦山にかへり。また小蒸氣
 にのる。相摸路に渡らんとするなり。波おだやかにて。我舟のけむり
 のなびきわたるもおもしろきに。伊豆の島山もまぢかく見ゆ。磯ぢか
 くゆく時は。白き岩の上に黒き鳥のいくつもむれあて。水にいり空に
 たつなど。心うちはるゝ限りなり。鋸山のすがたはまだきゆるやらぬ
 に。浦賀の港こそ迎へたちたれ。

其後は二十一年の三月なりき。これは前に見のこしたる方があるかん
 とて。千葉より木更津を経てまづ鹿野山に登る。見下すけしきいとう
 つくしくて。疊みなしたる山々の末に。海あり又山ありて。呼ばし。

答へつべし。九十九谷といふは當地第一の絶景にて。日の出にのぐめ
 ば霞の散り集まるに。光の映じて五色にも七色にも變る。其景色の千
 態萬狀なるは。名づけもはがたしと。見てこし人のはなしに聞きあた
 れば。曉とく起きて提灯ひきさげつゝ出づるに。まだくらき森の木の
 間にまたこく星の少しづゝうすらぎゆく空。まづ何となくこゝちよ
 し。

草折りしきて待ちわぶる程に。やう／＼かなたの山ぎはあからみて紅
 の鏡もあらはれたり。されど谷間にはうすき靄のたなびきたるのみに
 て。別にかはれるさまもなし。唯ひばりのをちこちに聞ゆ。鋸山富山
 清澄山などの遠くかすみてたてるなどは。さすがなり。それよりやど
 りにかへりて出でたつ。道に鳥居崎といふあり。こゝよりのぐめば。

近くは富津。木更津。観音崎。猿島。三崎。遠くは海のあなたの富士大島など。手にとる如し。かれを失ひてこれを得たるは。なほ造化のふかき心ありげに予覺にし。

其夜は天津にやどる。前は渺茫たる大洋にて。ながめにはかにはれわたれり。紫だちたる沖のかたはやうくくらくなりて。二つ三つ漁火のほのめきたるに。世をわたる舟の。おくれさきだち。こなたをさして歸るなど。あはれにて。波の音一夜吟情をなやます。

次の日は清澄山にのぼり。又小湊鯛の浦に遊ぶ。山は一里半のみちなりといふ。天富命をまつれる社いと高き處に見えて。其奥に寺あり。日蓮上人の出家せし處とすいふなる。菜の花はや盛りにて。鶯のたけず聞ゆる山ぶみに。われをしるべせしはたゞ春風よ。

鯛の浦といふは。日蓮上人誕生の地なるが。その遺戒とて。昔より漁夫も鯛をとることを禁じたれば。おほくむれすみて。大きなは五六尺にもいたれり。いと見ものぞと。處のものほこりかたれば。舟をやとひてゆく。いつも舟より小魚をなげ與ふれば。浮みいでゝあらしひくふといふに。今日はあやにくいわしのむれよる故とて。投げてもく二つ三つの外は舟のあたりにかげも見せず。まことあやにくの日に來つるにや。さては傳聞の大きすぎたるにや。舟をすてゝ誕生寺をとふ。本堂におきならべたる經箱のきら／＼しさなど。かの殺生禁斷の功德おもはれて尊し。やどりに歸れば。月きよく潮白く。清風面を吹いて枕をゆるさぬに似たり。

北條につきては。まづ本織村の延命寺をとふ。こゝは里見四世以來の誓

提所にて。寺も昔のまゝなれば。廊かたむき床おちいりなどしたれど。杉戸らんまの畫など。きねく／＼ながら見るべきおほし。木像を拜してうしろの山にのぼれば。麥畑につゞきて。かこひもなく一坪ばかりの地に。二三尺の五りんめきたるもの。又は土まんぢゆうをつみ重ねたる如きもの。なみたてり。村人などやまうでけん。花筒に赤くかれたる松をのこせり。春雨のめぐみにももれぬべき古跡こそあはれなれ。

又の日は。馬琴の筆にて名高くなれる富山にのぼらんと思ひたつ。八犬傳には『とやま』と稱ふれど。處にては『とみやま』又は『とみさん』とよぶなり。ふもとまで北條より四里もやあるらん。小雨しづかにて道すから小田の蛙の聲きくも。晴れたるよりかへりて興あり。見あぐれば峰は雲にかくれぬ。のぼるまゝに道やう／＼急にます／＼細くな

りて。つひに失はれたるは迷へるならん。さりとしてしるべの草刈童をまつべきならねば。竹の根にすがり枯草のかつらをよぢつゝ。遂に絶頂に達しぬ。裾より七八合めまでは目にたつ木々もなけれど。其上は梢さしかはしてもものすむし。高き處にいどものふりたる堂あり。戸びらと佛のきらめきたるのみに暗をてらして。身にしむこゝちす。少し雨まになりて伊豆の海まで見おろさるゝ。また別世界なり。下りは道をかへてゆくに。櫻つゝじなど咲きみだれ。すみれは芝生をよそほひたり。都はやう／＼梅ちるころなるべきを。

あはれ母上の八犬傳かたりきかせ給ひしは。昔になりぬ。其時すのゆきに詣で。富山にのぼらんなどと思ふべしや。思はざりしことをとげつるも。讀書の道びきなり。讀書のしるべこそやがて母上の恩なりけ

雪の雲

(英詩反譯)

うつくしの雪の雲よ

空をいまかくしゆく

ふれや雪散れや花

つちしろくなるまで

れ。

母上は

一

ひとりの父ふたりの子

うちつれ墓に立ち居たり

手桶の水を花づとに

うつすもあはれたがためぞ

二

人を見まねに手をあはせ

をがむ少女のあはれさよ

妹は問ひぬ『姉上よ

母さまいづくにおはすぞ』と

三

父はふたりをかへりみて

いざ歸らんといそがせば

妹は問ひぬ『母さまは

わがやに待ちておはすか』と

うつくしの雪の花よ
 つちをいまかくしゆく
 うちつれてふりきつゝ
 なほ積れあすまで

二

ブルベッキ博士

わがはじめてブルベッキ博士を訪ひたるは。ことし三月のはじめとせば
 ゆ。博士は亞米利加の人。我國に渡りしは安政のはじめ。今より四十
 餘年前の事とぞきゝし。

家は葵坂にて。眺望うちひらけ。品川の海吹く風は愛宕山をこけて書

樓の窓にあたる。

ストーヴのそばに待つ事分時にして。温和なる嚴格なる靴音は。口吟
 しつゝ來る詩の文句と共に。椽側に響きぬ。硝子戸を明けて現はれた
 るは。頭に霜をいたぎきたる老翁。『先生今日は』とて。兩手を膝にし
 頭を垂れたり。下婢紅茶を持ち來れば。受取りて。自ら牛乳をさしつ
 ぐ。紅茶は近來支那よりも日本の方が上手になれり。殊に農商務省の傍
 なる中村屋のを優等とすなど。いとむつましく打ちかたなる。心にあま
 る眞實と顔に溢るゝ深切とは。早くも人の腹中に敬慕の念を生ぜしめ
 たり。

此日は語學文學の話などして別れしが。其のちしばし訪ふべき事な
 こりしかば。およそ十日に一二度づゝはものせしに。翁は書齋があたゝ

かきとて。親しく余を導き入ると事となりぬ。書齋は椽側につときて。同じく南に向ひたる狭き一室なり。ストーヴを中央にして。一方には寢臺あり。枕と共に新聞紙雑誌やうのもの二つ三つ積みおかれ。他の壁にそひては。和譯の聖書を初めとして。日本文法問答。いろは文庫など。和洋數十冊の書類。縦になり横になりつと主人のぬきよみしたるめどを見せたり。其中より『私が文章の手本に讀むはこれです』とて。取りいだし示すを見れば。貝原益軒の文武訓なり。開きみれば。赤き青き紫なる鉛筆もて。漢字には悉く假名をつけ。或は文法の心覺をしるし。又はくりいだすために爪じるしつけたるなど。餘白は埋められて色もなし。あはれ翁は宗教家とて名高き人なり。神學博士とて敬はるゝ人なり。我國の文學にさへかくばかり明るき人ならんとは。思

ひもかけざりしに。

翁曰く。余はことに貝原氏の文章を愛す。『石を割りて玉を取る人あり。これよく玉を知ればなり。寶の山に入りても。手を空しくして歸る人あり。これ玉を知らざればなり。書を見る人。益あると益なきとも。またかくのごとし』あまりのおもしろさにいつも忘れずとて。くりかへし／＼そらんじて打ち興ず。さても翁が文章の深切にして誰にも解し易く。人物の篤實にして世に欽慕せらるゝところは。いづこか貝原氏に面影似たる處なからずや。古今和洋の違こそあれ。二人意氣相投ずるも宜なるかな。

暇をつげて玄關に出づれば。翁鉢植の草を指して曰く。是は英語にてメイデン、ヘア、フリンといふもの。譯して『をとめの髪』とせば如

何とて微笑す。

聯隊旗の歌

(第五師團凱旋の時)

一

黒煙波を蹴破りて

向ふところはいづかたろ

雞林八道雲くらし

わが旗風に掃はんと

宇品の港あとに見て

出でたる時の愉快さよ

二十七年六月の

二十三日のあさぼらけ

二

敵を千里に掃はずは

死すとも引くな退くな

男兒の決心あらはして

進めや進め我兵よ

成歡牙山の劇戦に

敗るゝ敵兵ねひちらし

ますく振ふ我士氣の

聲は天地も崩るまで

三

かさねて開く激戦の

どころはいづく船橋里

むらがる敵を引きうけて

十二時間のたゝかひに

屍は山をきづきたり

血は瀧つせをたゝへたり

忘るな軍旗の竿頭に

彈丸うけしも此時ぞ

四

向ふに破れぬどころなく

たやすく敵陣せめたとし

平壤城の城頭に

建てしも是ぞ此旗ぞ

九連城の壁上に

たてしも是ぞ此旗ぞ

乏しかりつる糧食の

苦辛もものか我かちぬ

五

寒氣は襲ふ義州の地

雪は取り巻く九連城

指きれ耳はくさるとも

勇氣はいかでか挫くべき

すべる氷をふみしだき

打ち立つ二月の末つかた

烏合の兵を掃ひつゝ

向ふ牛莊田庄臺

六

いたる處に折り得たる

名譽の花はたがものぞ

それより四箇月百餘日

守る海城鞍山店

敵と對峙の陣中に

わが君が代の春風に
かどやく軍旗の光こそ
長く吹かるゝ花よ花

七

のぼる朝日ともろともに
あまねき世界を照らさせて
萬歳歡呼の聲のうち

凱旋門をくゞりたり
我聯隊を忘るなよ

ちりくる彈丸身にうけて

去年の九月の十五日

てれひし軍旗はこれなるぞ

八

あゝ東洋の海原は

嵐と共に静まりぬ

されど未來は雲ふかし

又波風の立ちやせん

わが神聖の聯隊旗

たゝかひ勝ちてほこりなば

汝が譽をきざつけん

忘るな苦戦の過去の日を

一重山

(長野縣屋代學校のために)

一

里の東にそびわたつ

みどり久しきひとへ山

こだまかへして諸共に

開校いはへ君がようたへ

けふこそ千代のはじめ

二

里のさかひをめぐりゆく

流久しき千曲川

拍手の聲をくりかへし

君がようたへ開校いはへ

さかには千代に入千代

三

風にひらめく日のみはた

空にとどろく歌の聲

開校式は今なるぞ

屋代の里よ屋代の森よ

わするなけふのよき日

冬の信濃

明治二十九年一月

旅はいつとでもにくからず。夏の信濃路はしばくしたれど。冬は始
めてなれば更に樂し。

埴科郡の講習會に臨まんとして。一月三日の二番瀛車にて上野を發
し。夜に入りて屋代に着く。昨日の雨天に引きかへ。思ひもよらぬ快
晴にて。遠近の空かすみたり。山々の雪花の如し。

田舎も正月とて藁屋の門に松を立て。霜どけの畔道に少女の羽子つき
あそぶも處々に見ゆ。瀛車の向ふ方に一峰すぐれて白きは。淺間なる

べし。妙義ひとり影を黒くして冬の装ひを忘れたるに似たり。
碓氷の半より岩根木のもとやうく白うなりて。輕井澤に至れば滿地
一白。寂寞人なきところ日かげいとまばゆし。之を我目の初雪なりと
いはど。土地の子供にや笑はれなん。

屋代に着けば高等小學としるせる提灯三つ四つ燈しつらぬて待ち迎へ
たり。やがて若林熊吉氏の家草の枕を結ぶ事となる。一椀の羹。數
盃の酒。かれよりもこれよりも。なほあたゝかなるは。里人たちの情
ぞかし。眞木、西澤、宮澤、宮原の四氏。夜ふくるまで在りて。巨燧
よ夜具よと旅人のために心を盡さる。宮原氏歌あり。

名に立ちし飯綱おろしも今宵より
君が枕をよそにして吹け

かへしす。

里人のふかきなさけにくらべては
いづなの峰の雪もものかは
今日みちにてよみたるは。

淺間山夜風やいかに寒からし

雪のはだぎぬ幾かさぬしつ

夏に見し淺間の嶽を來て見れば

ゆきの上より煙たつなり

雪のうへにありある鳥の跡もなし

冬枯ひろき追分のはら

宿りには僕一人わがために居て。明暮の世話を爲しくれんとす。

四日。ねきいでと見れば雪になりぬ。今もちらくと降るさま。風なき空の落花に似たり。八木、宮原、眞木、坂田などの諸氏来る。十時案内せられて尋常小學校なる講習會場に至り講義を爲す。是より日々五時間の課業と定まれり。教場の窓よりは田づら村里をへだてて月に名高き姥捨まで見わたさるゝに。雪さへ一入のけしきを添へたれば。天は先生をもてなさんとして。時ならぬ田毎の月を畫がけりなど笑ふもあり。

寒さはやう／＼強くなりて。午後に至れば骨をも徹すやうなり。小使は半疊敷ほどの火鉢を擔ひ來りて講座の兩側にする火赤くねこしたつ。寒中の講習會も事かはりて中々ねもしろし。

五日。けふも雪なり。道は氷りて鏡の如き上を足駄にてゆく。一步は

一步より危くて唯すべらじと氣を附くるに。土地の子供は軍歌うたひつゝすたく／＼と駈けゆくさま。さながら疊の上の如し。馴るれば何事も安きものかな。

會場の窓より例のながめいださるゝ遠近の雪。或は鹿の子まだらに。或は段だらに。さながら胡粉を蒔き散らせるやうなり。

姥捨の山寺ちかく雪はれて

田毎に月のかげぎのこれる

寒氣は下より襲ひ上より刺す。はやくも小使は心を添へて火鉢を机の上に載せ。又机の下にも置く。

午後は晴れたり。歸りてのち。宮原、眞木、宮澤三氏に導かれて町の南なる一重山にのぼる。雪を踏みて小高き處に立てば。壁立てる四面の

山は白衣をかさねて呼び應ふる如く興ふかきに。眞木氏は北の方を指さして曰ふ。あれなる煙が長野にて。後ろに聳ゆるが飯綱うと。

夜は宿りの主人と八木氏と共に來りて。夜ふくるまで炬燵を取りまきつゝ語る。

六日。また雪ふる。夕方唐木宮澤二氏來る。唐木氏は今年六十四の齡なるに。日々出で若年の人々と共に講義を聽く熱心の老人なり。其撰なる言葉の幣帛といふを贈らる。一重山神社奉納の歌集なり。

夜は八木、西澤、眞木三氏來る。講習會よりとて酒のわくりものあり。七日。昨夜また雪。けさは晴れたり。吉田郡長はじめて會場に臨み。與良熊太郎君長野より尋ね來る。

かねて約あり。宮澤甚三郎氏二時四十五分の瀛車にて雪見に案内せん

とす。寒さ殊に烈し。今日は十分用意して行けどの事なれば。シャツ二枚、襦袢一枚、胴着二枚、上着二枚、綿入羽織一枚。あはせて八枚の上に大外套を重ねたれば。もとより二十三貫目大の男が身動きもならぬ位のいでたち。いかに雪國人の目にも可笑しかりけん。千曲川犀川など渡りつゝ過ぎゆくに。冬枯のけしきたぐならず。

血に染みし秋の草葉は色もなし

川中島のゆきのむらぎね

茶臼山も近く見ゆ。

長野豊野など打ち過ぎゆくに。雪やう／＼深く。牟禮より後は地上一面の鏡の如し。

信濃路は雪あもしろし一すぢの

鳥居小川を中にへだてて

宮澤氏は天の一方を指して。班尾山はあれなりなど語る。

夕日さすまだらをやまを見渡せば

うすくれなゐの雪を積れる

さして來つる柏原にも着きぬ。雪は二尺もあるべし。はてもなき白妙の原を過ぎゆく旅人ただ二人のみ。

そりひきて家路にいそぐ里人の

ゆくへも白き雪の夕ぐれ

村に入れば。二三尺の氷柱あたかも劍を逆にせる如く。藤の花房などのやうに家々の軒より透間もなく垂れ下る。見るものごとくに北越雪譜めきたるもおもしろし。中村屋といふに宿る。さてもかゝる雪中の旅行

して越後境の近くまで來らんとは。東京を出づる時おもひもかけざりしを。先導のなさけこそいとふかけれ。

風呂より出づればやがて膳來る。かねては隣村の交通も絶ゆると聞きつる雪國にして。鳥肉を得。魚肉を得。ことに都はづかしからぬ酒にさへ逢へり。聖世の恩澤そも何くまでぞ。酒は玉井とて當地有名のものなりとす。

北國のゆきふみわけてもろとも

酒のむことも契なりけり

宮澤氏ことに心を用ひて土地の名物を命じたれば。是もやがて持ち來る。茶碗に盛れるは蕎麥にて。赤き椀のはしたぢなり。かれは冷かにしてこれはあつし。味いふべくもあらず。去年の夏は戸隠にて之によ

り暑さを忘れ。今年の冬は柏原にて之により寒さを凌ぐ。さても我身
と信濃の蕎麥とは宿縁深きに似たり。

八日。晴れたり。宿りを出で、停車場に向ふに。話にのみ聞きつる木
花は今夕木毎に咲きつづけて。美しさいはんかたなし。

木花さくかたやまざとを朝だちて

神のたくみの奥を見るかな

木を伐りに山へゆくなるべし。からそり挽きたる男あまた雪の上をゆ
きかふ。

停車場の役人。いづれも膝まである草鞋はきたるもいとめづらし。見
わたすかたは黒姫を右にし飯綱を左にし。朝日にかざやく裾野の白
妙。人をして時間の近づくを惜ましむるさまなり。

黒姫はありともわかずかきくれて

すそのく雪に朝日さすなり

黒姫の名もうづもれて信濃路は

雪にぞつとく飯綱戸がくし

八時十三分の瀛車に乗る。窓の硝子に映じ来るは花か玉か水晶か。誰
か想はん造化の工はかくまで北地の冬に私せんとは。

夜真木氏と打ちつれて小松屋に行く。こゝは講習員十餘名泊り居ると
ころなり。明日焼捨行を催さんとの話おこりたるに。松代の人ありて
「筒弓」持ちゆかば更に妙ならんといふ。如何なるものぞと問へば。象
山先生かつて歌あり。

梓弓まゆみつきゆみ弓はあれど

此筒弓にしくものあらめや
と。されば鐵砲もて雉子狩せばやの心なりといふに。我も一つよまん
として。

筒弓を肩に取りかけ姥捨の
雪の山鳥かるひとやたれ
などかたりふかして歸る。

九日。晴れたれど風さむし。正午より同行二十七人にて姥捨に遊ぶ。
唐木氏寒を冒してはるく案内の勞を取らるゝは殊に謝すべし。やは
一里半もあるべきか。先づ八幡神社に詣で。それより雪どけのいとあ
しき山みちにかゝる。我は二度まで下駄を泥に取られたるを。老人た
どちに取りて得させしかは。

君なくは雪の山路にいくたびか
靴をとられてからき悔せん

長樂寺に着けば。跡もなき雪は庭を埋めて興ふかし。門に松かざりの
あるを見て。誰やらん姥捨も開けたりといひしかば。

月のみと思ひしものを更科や
をばすて山を春も訪ひけり

姥石といふ石山にのぼりて見れば。屋代町を中にして左にも右にも幾
村の人家散在し。千曲川よりたどりて川中島のあたり。長野までも唯
一目なり。向には一重山を越してうしろの山々鏡臺山など稱ふる峰た
ゞ白く見ゆ。又近頃新姥捨と名づけたる冠着山は。南のかたに一きは
高く眞白に聳わて。頂に雲をかぶりたるも面白し。下りて寺の本堂に

休む。これぞ秋には賑はふ月見堂よと口々に教ふ。

酒いでゝ人々歌よむもあり。詩を書くもあり。我も僧の請ふまゝに二つ二つかきてあたへ。又人々には。

をばすての雪ふみわけてしるべせし

人のなさを何にたとへん

寺を出でゝかたりゆく。

かゝりみる雪のふるてら來ん秋の

月のちぎりもかけんとぞ思ふ

八幡の社家松田氏によりて古器物などを見。車におくられて歸り來れば。今夕時計は七時を打つ處なりし。

十日。はれたり。講義をへて後。かねて約あり。眞木氏に誘はれて

當地の養蠶家石黒氏を訪ふ。主人は今年五十九の齡にて其すこやかなる。若いもの耻づかしきさへあるに。其父翁の八十七なるこそめでたけれ。いささかも衰へたるさまなく。殊に歌好まるゝとて。物がたりなつかしく打ちするを。聽く我さへにいとたのもし。唐木、眞木、新村の三氏もかたへにあり。一つ巨燧を取り圍みて六人團樂の圍居をなす。そもく何の奇縁ぞや。主人はまづ蠶室を見せんとて。別棟の二階三階へ案内す。殊に心をこめ作りたるものとして。南室は南東北の三方より日光を受くるがため狭く。北室は東西の二方よりなれば殊に廣く。中央は其間にあたるとして之にかなへ作れるを始とし。空氣の貫通。濕氣の豫防。何として備はらざるはなく。素人の我等をして一見その用意の周到なるに驚かしむ。

席にかへれば歌がたり更に鬨なり。

しなのちの雪ふみわけて千曲川

千代へん君をけふ見つるかな

酒出でくやがて日も暮れぬ。いざとて暇を告げんとするに。餅を一つとすゝめらる。雑煮なるもうれし。我は東京の正月をよそにして。旅にてめぐりあひぬるよなどいふく。

屋代にてもちくふことも千早振

神のめぐみう人のなさけり

といへば人々笑ふ。

立ちかへり千たび八千たび又とはん

千代の千代まで幸くてありまて

いたく酔ひたり。かゝに小松屋など訪ひたるやうなれど。いかに人々に失禮をか言ひけん。

十一日。終日雪ふる。

おもひいづる日はいかならん朝夕に

むかひなれたる冠着の山

別るゝ日の近くなりぬる名残たゞならず。

薄暮八木真木兩氏來りていざ柏屋にといはる。あなうれし。會員一同我爲に慰勞會の宴を開くとの事なるよ。郡長も郡書記も既に座に着き居られたり。

酒いよくめぐりて興いよく深く。談ますく盛にして交ますくこまやかなり。をどる人。うたふ人。劍舞する人。軍歌する人。ことに

わが作の『風と波と』を會員とぞりて歌ひしこそうれしかりしか。あはれ冠着の山よろづよに高く。千曲の川ちよに長し。埴科里人のなさけ。彼にやたとへん此にやくらべん。

十二日。けふも日よし。講義をはりてのちは。來客を謝絶して會員諸氏より依頼のものを書きくらす。短冊あり扇あり懸物あり額面ありて百の上に出づ。いと忙がし。例の眞木宮原兩氏は晝夜かたはらにありて。墨磨り紙おさへなど萬事の手傳をなしくれらるゝ。うれしからじやは。夜は西澤氏も訪ひ來て。上の二氏と共に酒肉などすゝめらる。宮原氏は殊更に蕎麥を打たせて贈りたり。おもへば隔てぬ巨燧の圓居も。今宵かぎりになりたるよ。心なき山寺の鐘は頻りに夜の更けゆくを告ぐ。

宮原氏に。

戀しさは霞と共に立ちそはん

君がなさけの春に似たれは

『そばむぎ』の文字を隠し入れたりとは聞ゆべしや。

眞木氏に。

かむりきの山の白雪それよりも

ふかきは君がこゝろなりけり

西澤氏に。

おもひいでよ我も忘れじ一重山

ひとつこゝろのけふの圓居を

また八木氏は。

君が住むその松代の松の葉の
かはらぬちぎり君とかためん

十三日。はれぬ。朝眞木氏來りて荷づくりなどの勞を與へらる。若林氏に暇を告げて宿りを出でしは九時前なり。

午後閉會式ありて。八木會長いとねんどろなる謝辭を述べ。會員送別和歌の朗讀を爲し。終りて茶菓の饗應あり。かへりみれば十日の日數夢の如く。今一時間の後は互に語りあふ能はじと思へば。別れぬきさより心細し。

三時四十五分に立たんとするを送りて。郡長はじめ三十餘人の會員停車場に集る。唐木翁その中にありて口ずさみけらく。

雪さむし旅の衣のうすひ山

あつくかさねて君はこけなん

かへしす。

旅衣うすひの山とたれかいふ
人の心のふかき山ぢを

漁笛は鳴れり。『大和田先生萬歳』の聲は起れり。石殘惜くも屋代學校は忽に影を隠しぬ。

同車にては宮原、坂田、西澤、鹽野入諸氏の坂城まで。八木會長、岩崎郡書記の上田まで。眞木、野村二氏の小諸まで送らるゝあり。賑はしきやうなれど。停車場ごとに奪ひ去られて遂には一人になりぬ。夜に入りて輕井澤に着く。今なほ冠着山は目の前に立てり。

かねては退分の原あたりより雪いと深からんと思ひしに。降りてもあ

らず。寒さは信州第一の土地なれば用心せよと。眞木氏など言はれしかば。其覺悟して來たるに。さほどならざりしはいと幸なり。されど更けゆくまゝに寒威枕を襲ひ。時間毎に柏子木ならして廊下を過ぐるものありて夢もつゞかず。

音づれのたにし笥の水ならで

なに旅人をおどろかすらん

からうじて夜も明けなんとす。一番瀛車に乗らんとて宿りを出づれば。地上霜満ちて星の光り劔よりも鋭し。

例のトンネルに入りトンネルを出で碓氷も半は過ぎたり。道すがら見るものとは色なき林なるが。さびしき枝を朝日のうつくしく染めなしたる。中々の風情あり。

枯木原あさひにはへり冬の野に

見る花なしと誰かいふらん

横川にも着きぬ。松井田にも來りぬ。見かへれば雪の淺間は煙をわけて猶も招くやうなり。

碓氷川々風さひし信濃人

わかれし空や今朝ながひらん

名残は盡きぬに。車の歩みしばらくもとまらず。

雪 月 花 終

明治三十年九月廿七日印
明治三十年九月三十日發行
明治三十四年三月十九日十版發行

雪月花

定價金參拾五錢

著者 大和田建樹

發行者 大橋新太郎

東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長

東京本郷區丸山福山町六番地

印刷所 會社博進社工場

東京小石川區久堅町百八番地

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

博文館發兌袖珍本書目

文學士大町桂月君著

第六版

美文韻文 黃菊白菊

全壹冊洋裝 袖珍上製美本 紙數四百十餘頁

正價金貳拾五錢 郵稅六錢

桂月先生の文は、蠻猫を動かすこと己に久し。悲愴の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐き、孤猿の幽淵に叫ぶが如く。句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし感憐の冊子なかるべからず。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る。讀書家の燈下、この絶好可

文學士土井晚翠君著

第三版

天地有情

全壹冊洋裝 正價金貳拾五錢 郵稅四錢

峨々の山、洋々の水、以て晚翠君の詩を評すべし。此集新體詩中別に一旗幟を樹立す。君が今日迄の吟哦を録して、こゝに美麗の冊子を成す。請ふ愛讀を賜へ。明治詩壇の新光輝たるに背かず。

紫山川崎三郎君著

古人今人、孰是孰非
風雲月露、大珠小珠
小文章

全壹冊洋裝
袖珍金文字入
紙數三百廿餘頁

正價金貳拾五錢 郵稅四錢

健筆を以て知られたる川崎紫山君の小品を集めたるものにて、古人今人、孰是孰非、風雲月露、大珠小珠の四編に分ち人物論あり政治論あり隨筆漫録あり文學談あり、讀來讀去、快味の津々たる者あるべし。

大和田建樹君著

三
散文
韻文
深
山
櫻

全壹冊洋裝
袖珍金字入
正價金四拾錢
郵稅六錢

著者大和田先生の文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり。今此書は、先生の散文韻文貳百貳拾餘篇を輯めたる者、一たび繙かば櫻の山に分入るが如く、手を放つ能はざるの妙ある可し。

文學士大町桂月君

大絃小絃

水田榮雄君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

北京籠城

江見水蔭君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金貳拾五錢
郵稅金四錢

突

尾上新兵衛君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

戰

江見水蔭君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

戀

江見水蔭君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁
正價金三拾錢
郵稅金六錢

星

巖谷漣山人君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數六百八十頁
正價金五拾錢
郵稅金八錢

笑

巖谷漣山人君著

全壹冊洋裝袖珍
紙數五百五十頁
正價金四拾錢
郵稅金八錢

鶯亭金升君著



福

巖谷漣山人君著



女

大橋乙羽君著

波

男

波



初

文學士笹川種郎君著

子

集

集



雨

國府犀東君著

絲

風

片



龍

文學士高山林次郎君著

吹

鶴

語



時

齊藤綠雨君著

代

管

見



あ

ら

れ

酒

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁

正價金三十拾錢
郵税金四錢

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁

正價金四十拾五錢
郵税金八錢

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁

正價金四十拾錢
郵税金八錢

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁

正價金貳拾五錢
郵税金四錢

全壹冊洋裝袖珍
紙數三百餘頁

正價金貳拾五錢
郵税金四錢

全壹冊洋裝袖珍
紙數五百餘頁

正價金三十拾錢
郵税金六錢

全壹冊洋裝袖珍
紙數四百餘頁

正價金貳拾五錢
郵税金六錢

